
混沌たる太平洋 帝國存続への道

鯨大根

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

混沌たる太平洋 帝國存続への道

【Nコード】

N1220M

【作者名】

鰐大根

【あらすじ】

一九四四年、日米最終決戦を迎える太平洋。そこに至るには、紆余曲折の道程が存在していた。

山本五十六が身命を賭けたハワイ、米本土奇襲作戦は終幕。そんな中、欧州戦は佳境を迎え、帰還した連合艦隊。

しかし、日米交渉決裂。複雑な意図の下、海軍は最大の悪弊、統帥権と言う最強の剣を引き抜く。そして、海軍三頭職更迭問題（海

軍甲事件）を経て、切り札とも言つべき人物が歴史の表舞台に立つ。
その裏では、変革をもたらす陰謀が蠢いていた。
帝都は闇に沈み、陸軍と海軍の衝突が間近に迫っていた。

戦火未だ止まず……

序章 1 始まりの愚将、終わりの名将

一九四一年一月八日

日本時間午前一時半

現地時間七日午前六時半

運命の日。全てはここから始まった……

海上に六隻の空母が飛行甲板に航空機を並べ、それらは発動機を
温め出撃の時を待っていた。

内五隻が、先頭の空母に向けて盛んに投光機の明かりを明滅させ、
自艦の状況を伝えようとしていた。

海原は波高く風は強く、厚い雲が垂れ込めており、些か発艦作業
には向かないあいにくな天候だった。

「南雲長官。加賀、蒼龍、飛龍、翔鶴、瑞鶴、全艦発艦準備完了
せり」

旗艦空母赤城の島型艦橋に、見張り員から他の五空母からの報告
が入る。

「通信参謀、大本営よりツクバヤマハハレの打電は入っております
のか？」

報告を聞いた空母機動部隊、正式名は第一航空艦隊司令官、南雲
忠一海軍中將は作戦発動前の最終確認を行った。

現在、艦隊は米国太平洋艦隊司令部が置かれる、太平洋最大の要
衝ハワイ、オアフ島の真珠湾を奇襲するべく南下を続けており、ツ
クバヤマハハレは作戦中止の暗号であり、南雲はこの電文が届く事
を切望していた。しかし……

「は、現在入電はありません」

南雲は内心、大きなため息を吐きたくなった。中止であればそれほどよかったであろうか？

「長官、いよいよ決行……、ですな。この攻撃によって我が帝國の覚悟を、米国は思い知るでしょう」

一航艦（第一航空艦隊の略）参謀長草鹿龍之介海軍少将が、そう進言した。

しかし、ハワイには一航艦の搭載機数三六 機を上回る航空機四機以上と、戦艦が最低でも八隻がいる事が明らかになっている。

完全なる奇襲で無ければ、我が方の敗色濃厚な作戦であり、しかも航空機による戦艦の撃沈が不可能と言う、当時を試みたら無謀極まりない博打的作戦で、航空に関する知識を持たない南雲にとつては、とち狂ったとしか思えないものであったが、命令は命令である。南雲は覚悟を決めた。

「全艦、発艦を許可する。目標真珠湾に停泊する米国太平洋艦隊主力艦艇群。各員の奮闘に期待する」

直ちに各空母より攻撃隊が発艦し、艦隊上で編隊を組み、一八三機に上る第一次攻撃隊が真珠湾を目指し、南の空に消えた。

……

しかし、舞い込んだ報告は奇襲成功ではなく、米軍基地航空隊に捕捉され迎撃を受けたと言うものである、南雲は即座に撤退する決断を下す事となる……

最悪の開戦日から約三年の月日が流れ……

周囲は漆黒の闇が支配し、月の光りは輝くことなく、なりを潜めている。

そんな闇が支配する洋上を、ひたすらに疾駆する艦隊の姿があった。

大日本帝國海軍が誇る連合艦隊揮下の主力部隊、第二艦隊。つい先頃竣工した新型戦艦（尾張）、金剛級高速戦艦二隻（金剛、榛名）を中核とする第四戦隊が主軸であり、総計二十隻余り……。連合艦隊主力とは行動を異とする、別の目的の為に進軍を続けていた。

高速打撃を主任務とする、第二艦隊司令長官には海軍大将となつた南雲忠一が旗艦尾張に腰を据えていた。

史実において、ミッドウェー海戦の敗北を招いた人物として、悪評が付き纏う人物であり、この世界では真珠湾奇襲敗退の不名誉に甘んじたが、その評価は悪い一面であり正しくない。

むしろ、今では海軍きつての猛将の一人に数えられている。

第二艦隊 旗艦戦艦尾張

「さすがは新型戦艦だけの事はある……」

南雲は乗艦となった尾張の第一艦橋（前部構造物の最上部に位置する）で、周囲を見渡した。

大和級四番艦として計画されながら、第二次ハワイ沖海戦において、高速戦艦比叡、霧島が撃沈された事により、三ノット発揮可能な戦艦の急遽代用が必要であることから、設計を変更（名称も紀伊から尾張に変更されている）、主砲を四六センチから四一センチに換装、装甲も舷側四一ミリから三九ミリに削り、独立した機関も速力を重視した結果、廃止され、高温高圧式機関を導入した事により、速度は大幅に向上。

大和級が攻撃、防御の最高到達点とするならば、尾張は高いバランスを兼ね備えた、別の意味での日本戦艦の傑作であった。

公試においては、最高速力は金剛級を上回る、三ノットを記録。非公式ではあったが、さらに高速の三二・五ノットを叩き出していた。

この速度はアメリカが誇る高速戦艦、アイオワ級に匹敵するものだった。

しかし、実験的要素を多分に含む上、日米の最終決戦を前に完成を急いだ事が、信頼性の低下という致命的な欠点を生み出していた。外観は大和級そのものであり、主砲塔が一回り小さくなっているだけで、差異はほとんどない。

対空兵装は、味方制空権内における行動を主とするため、さほど重視してはならず、両舷には十五・五センチ三連装副砲が装備されている。

あくまでも艦隊決戦用の兵装だった。

航空機の有効性は実証されつつはあるが、戦闘航行中で無傷の戦艦を撃沈した事例は皆無である。

唯一、航行中の戦艦を撃沈したのは、第二次ハワイ沖海戦において損傷し、米本土に避退中の戦艦サウス・ダコタ、インディアナを、第一航空艦隊が捕捉、撃沈した東ハワイ沖海戦のみである。

この事例も、大破した戦艦を撃沈したものに過ぎず、航空機は条件が揃わねば戦艦を沈める事は不可能である、との認識が海軍関係者の大半を占めていた。

航空機の絶対的優位を立証した、真珠湾奇襲攻撃は、暗号を解読されたあげく迎撃を受け失敗、マレー沖海戦も英空母インドミタブルの護衛により、プリンス・オブ・ウェールズ、レパルス両戦艦は撃沈できずに終わっている。

「これが最後となるか？ 疾き事風の如く、南雲忠一推して参る」
戦いの終焉を予期するかのように、ただ武人である事を願いつつ
ひた走る。

南雲忠一、五十七歳。

未だ熱き血潮のたぎる、土であった……

史実通り、一九四一年十二月八日に真珠湾奇襲により日米開戦を迎えながら、史実とはまるで違う結末へと向かう。

時は一九四四年十月二十五日……。
太平洋の覇権を巡る最終決戦が、日本の最終防衛線であるマリアナを舞台に繰り広げられる……。

序章 2 史上最大の海戦開幕

一九四四年十月二十四日

中部太平洋マリアナ諸島

日本側の最終防衛線であり、絶対国防圏の要である。

この地は、二年半前の二月十四日に日米開戦後、最初の一大決戦が行われた海域だった。

真珠湾奇襲を撃退した米太平洋艦隊は、当初の計画通り反抗作戦を展開し、早期に日本艦隊の撃滅を企図してマリアナ沖へと進攻。

戦艦十二隻、空母五隻からなる総計三百隻の大艦隊を、帝國海軍連合艦隊が迎撃した、世に名高いマリアナ沖海戦である。

この海戦において、連合艦隊は空母五隻と戦艦八隻を撃沈すると言う、日本海海戦に匹敵する奇跡的大勝をものにする。

日本恐るるに足らずと言う驕りと戦力の軽視、イギリスからの要請とは言え、早急に過ぎた太平洋方面への進攻が、追い詰められた日本に逆転のチャンスを与えたのであった。

日本は太平洋に置ける優勢を保持、戦力を温存したまま、戦線の不拡大方針を貫く。一度を除き……である。

そしてこの日、米艦隊がマリアナへと再び来襲した……。

現地時間 0600

サイパン島東南東二百四十海里洋上。

そこには、数百隻に及ぶ艦艇が展開していた。

数度の日本艦隊との交戦により、一時は壊滅状態に陥った太平洋艦隊ではあったが、アメリカが持つ底知れぬ工業力が、この短期間で
の再建を可能とっていた。

他国であれば五年…、いや十年はかかってしまつてあることは、想像に難くない。

しかし、事態はそれ以上に深刻であつた。

その理由は、ただ一度の日本軍の攻勢によるものである……。

とにもかくにも、来襲した米太平洋艦隊の陣容は、戦力を温存してきた連合艦隊に匹敵する。

新鋭戦艦モンタナ級を筆頭とする、新型艦を多数揃えている。

モンタナ級戦艦モンタナ、オハイオ
アイオワ級戦艦アイオワ、ニュージャージー、ウィスコンシン、ミ
ズーリ、ケンタッキー
サウス・ダコタ級戦艦、アラバマ

モンタナ級は史実において、エセックス級空母の建造を優先させたため、全艦建造が中止されている。

しかし、相次ぐ敗退による戦艦の喪失と、大和級が存在がモンタナ級の必要性を生み出す事となる。

余談ではあるが、大西洋方面には、戦艦イリノイ、マサチューセツツ、コロラドが配備されているのだが、欧州戦線における連合国側の大規模な攻勢は無く、東部戦線において、ソ連軍とドイツ軍の一進一退の攻防が繰り返られており、西部戦線は不気味な沈黙を保っている。モンタナ級概要

全長 281メートル

全幅 37メートル

最高速力 28ノット

排水量 60500トン

兵装 40・6センチ50口径三連装主砲塔四基十二門

12・7センチ38口径連装両用砲十基二十門

40ミリ四連装机銃17基68門

20ミリ単装機銃36門

防御装甲は舷側400ミリで、大和級に匹敵している。

現時点の艦隊決戦用としては、大和級と並び世界最高水準である。

モンタナ級より砲撃能力は劣るが、アイオワ級戦艦も相当強力な戦艦と言える。

長砲身の16インチ砲を九門備え、対空兵装はモンタナ級を上回る強力な物であり、何より33ノットに達する速力が、最大の売りであった。

戦艦戦力は大和級を擁する連合艦隊に、数ではわずかに劣っていたが、旧式艦多数を含む状態に対し、質的に新鋭戦艦で固められた、米海軍が圧倒的に有利だった。

戦前に策定された、両洋艦隊法、第三次ヴィンソン案、スタークスプランの前倒しによって、戦力化を無理矢理この時期に間に合わせていた。

戦艦戦力を揃えるだけに留まらず、エセックス級空母も計画11隻に対して、既に9隻が就役し本海戦に参加している。

インディペンデンス級空母も5隻投入と、かなりの航空戦力も有している。

この海戦はアメリカの威信を賭けた、両洋艦隊のほぼ全てを出し切る形となるのではあるが、これで終わるようなアメリカではない。さらに恐るべき計画が、着実に進められていたのである……。

太平洋第三艦隊

旗艦戦艦モンタナ

「時間です、長官」

静かに艦橋内に声が響く。ピリピリとした緊張感に包まれる中、そ

れを吹き飛ばすように

「ああ、言われんでもわかつとる！」

第一次攻撃隊は発艦開始！ジャップ共を叩き潰せ！」

怒鳴り声を上げていたのは、猛将ウィリアム・フレデリック・ハルゼー海軍大将。

この台詞も決まり文句となっている。

度重なる敗戦で厭戦気分には陥った米海軍内を、鼓舞し続けてきたのも彼である。

今進攻作戦最高指揮官にハルゼーが抜擢されたのも、ルーズベルト大統領に、その手腕を高く評価されたからに他ならない。

（何度も偶然は起こらんのだ……、起こってたまるものか……。）
第一次マリアナ沖海戦において、自らが指揮する機動部隊が、日本海軍航空部隊に完膚無きまでに叩き潰された、最悪の敗戦（屈辱のバレンタイン）を身を持って味わっている。

表面では強気を装ってはいるが、今回の作戦が無謀極まりない事は、予測の範囲内ではあるのだが。

しかし、軍人である以上命令は絶対である。無謀であろうがやらなければならぬ。

ハルゼーにとって、以前の敗北が偶然であつたと信じなければ、恐れと不安のジレンマに陥る事となる。

それを払拭するために、猪突猛進をひたすらに演じ続けて来た苦悩は、推して知るべしである。

（オペレーション・ダウンフォール……、堕ちるのは日本か、それとも……我々なのか？）

米統合参謀本部が立案した対日反抗作戦の根幹が、ダウンフォールであり、いまだ強大な戦力を保持する日本軍を、一撃の元に粉砕することを主眼とする、一大進攻作戦。

最前線で指揮を執るハルゼーには、皮肉に過ぎない内容だった。

これほど作戦を急いだ原因は、ルーズベルトの大統領選挙を前にした焦りと、威信低下を恐れる海軍の意思が結びついたからに外ならない。

重責が、ハルゼーの肩にのしかかっていた。

第三艦隊

第36任務群

旗艦空母エンタープライズ

「旗艦モンタナより入電！攻撃隊は直ちに発艦、第一目標はサイパン島航空基地！」

日本艦隊発見の際は、艦隊の撃滅を最優先とせよ！」
通信参謀の報告が入る。

「了解した。直ちに発艦を開始。続けて直掩機を上げて護りを固める！」

生温い相手ではないぞ！

腹を括ってかれッ！」

指示と激を飛ばすのは、マーク・アンドリュース・ミッチャー海軍中将。

彼もまた、ハルゼーと同じく乗艦ホーネットも、日本海軍基地航空隊並びに空母艦載機による猛烈な攻撃に曝され、爆弾六発、魚雷四発を浴びせられ轟沈。

自身も右顔面と右腕に重度の火傷を負ったが、奇跡的生還を果たしていた。

太平洋艦隊の再建に伴い、ミッチャーは空母機動部隊を率いて、日本軍に占領された中部太平洋地域、ミッドウェー、ウェーク、マーシャルの各基地に攻撃を加えたが、日本軍はすでに撤収していたため、打撃を与えるには至っていない。結果として、中部太平洋を苦

もなく奪回する事には成功したのではあるが、弾薬を消耗するだけの徒労に終わっている。

（今度失敗すれば、我々には後がない。

困難な役目だが、やるしかない……）

空母エンタープライズの艦橋から、今飛び立たんとする攻撃隊に、ゆっくりとミツチャーは敬礼する。

発艦の合図と共に、一番機がゆっくりと滑走を始める。

時を同じくして、周囲に展開するイントレピッド、ワスプ、バンカーヒル、レンジャーからも多数の航空機が発艦し、サイパン、テニアン両島を叩くべく西へと向かって行った……。

帝都東京

「中部太平洋方面艦隊より報告があり、マリアナ近海に米艦隊が来襲、現地部隊と交戦状態に入りました。

我が海軍は陸軍と協力の上で迎撃、全力を持ってこれを撃退致します」

荘厳な空気を放つ一室、第一種軍装を纏った人物が報告をしている。海軍大臣、元帥海軍大将山本五十六。

つい先頃、戦功甚だ大なるを持って元帥拜命となる。

通常、海軍大將任官より八年程経過して元帥となるのが、通例となっているが、これは異例の事であり、国民の圧倒的人気を使わぬ手は無いとの意見があつての事である。

もちろん、それ相応の後押しが無ければ無理な話ではあつたが、対米戦争を終結させるには今を置いて無いと、これを強引に認めさせた人物がいたからに他ならない。

海軍内も決して一枚岩では無く、様々な思惑が渦巻いていた訳ではあったが、戦争終結を目指す以上、意思の統一は不可欠だった。その為の元帥拝命だったが、本人としては過ぎたる物であり、軍神として扱われる弊害を最も嫌っていたが、時勢はそれを許さなかった。

山本が報告する相手は言うまでもなく、聖上、昭和天皇である。

「来るべき時が来たと言う事か。この戦に我が軍は勝てるか？」

静かに発せられたこの問いに、

「我が方の陣容は万全、米艦隊の殲滅も容易である、と軍令部は分析しております」

と答えたが、

「卿の意見を聞きたい」

これに、山本は視線を落とし一考の後、正面に座る聖上に視線を戻す。

「圧倒的勝利を収めるのは不可能、良くて五分五分と考察しております」

海軍内における最高実力者たりえぬ答えだった……。

同時刻

アメリカ合衆国

首都ワシントン

「報告いたします。」

我が太平洋第3艦隊は、マリアナ諸島への攻撃を開始しました」

ホワイトハウス、大統領執務室でも同じ光景が見られていた。

「…キング、失敗は許されんぞ。」

今回敗北すれば、君も私も破滅だ。アメリカをおとしめた史上最も

愚かな大統領として、名前を歴史に刻み付けられる事になるだろう。ジャップや、奴らの肩を持つ忌ま忌ましい連中に、主導権を渡す訳にはいかん」

これを聞いていたアーネスト・ジョゼフ・キング海軍大將は露骨に不快な表情を浮かべる。

「大統領、作戦は万全を期しておりますが、戦力の不足は否めません。

第3艦隊のみならず、第7艦隊も投入せねば、マリアナ攻略は至難の業であると申し上げます」

「それは分かっているが、ジャップの目がマリアナに向いている以上、第7艦隊はマッカーサーの元から動かす訳にはいかん。

時間も戦力も余裕は無い。第3艦隊だけでやってもらう。

ダウンフォールは既に発動された。放たれた矢は、もう手元には戻らん……」

（確かに日本に一撃で致命傷を与えるには、現時点ではこれが最良ではあるが、些か性急に過ぎる……！）

苛烈な性格から、ニトログリセリンの渾名で呼ばれるキングからしても、不安をきんじえなかった。

しかし、戦力の増強を待つ余裕もないのである。

国内世論は大きく対日講話に傾いており、次の大統領選挙は軍事的成果を太平洋方面で挙げねば、世論に乗った共和党が勝利を収め、米海軍は戦わずして日本海軍に敗北する事となる。

これは、アメリカ合衆国が、世界の覇者たらしめる事を目標とするルーズベルトにとって、容認できぬ事態だった……。

海軍のマリアナ進攻開始の報告が、ルーズベルトの元に届くのとほ

ば同時に、連邦議事堂の一室にいた、ある人物の元にも、この報告は届けられていた。

「相当焦っているな、大統領は。」

しかし、例え今回敗北したとしても、この国は問題無く立ち直れる。これで今、国民が必要としているのは、あなたではなく私であると証明できる。

舞台の脚本を誤りましたな、大統領」

もう一人、新たな時代を見据えた人物がここにいた。

共和党代表、ロバート・アルフォンス・タフト。

ルーズベルト批判の急先鋒にして、講和派として有名であり、覇権主義とは異なる独自の路線を確立しようと奔走していた。

余談ではあるが、彼の父は第27第大統領、ウィリアム・ハワード・タフト。

歴代一巨漢の大統領として知られている。

史実において、ロバートは大統領たる資格を十分に有しながらも、時と運に恵まれず、大統領になれなかったが、後に偉大な上院議員五人の内に数えられる優秀な人物であった。

そして、もう一人……

「開戦の日、我々の掲げた理想は潰えたかに見えたが、やはり今まで経過から、海外に対して積極的介入に同意したのは、誤りだった……」

と嘆いていたのは、アーサー・ヘンドリック・ヴァンデンバーグ。

第二次大戦中も、この戦争にアメリカが加わる事に、疑問を投げかけ続けた、孤立主義を標榜とする上院議員の一人であった。

こうして、日米両国のみならず、世界の命運を分ける、互いに死力を尽くし、それぞれの思いが交錯しながら、決戦の幕が上がるうと

していた。来襲した米艦隊を撃退するべく大本営は、捷一号作戦を発令。

この捷号作戦は、各方面に対し一号から三号まで立案されていた。第一号は、絶対国防圏の最重要目標であるマリアナ諸島の防衛を、目的としている。

海軍の眼はその一点に向けられている。

マリアナを中核に、トラックを前線拠点として航空基地を増設していたが、ラバウルに展開する米陸軍航空軍からの、度重なる執拗な攻撃に晒され、なんとか基地としての体を保っている状況だった。

捷二号作戦は、ニューギニア、ビアク島までを手中に納める米陸軍南西方面軍、及び南西方面艦隊（第7艦隊）の進攻に対応するものであり、史実以上の戦力を配備し、激烈な抵抗を示した米極東軍に陸軍は大苦戦し、支那派遣軍より第六師団、関東軍より第九師団といった最精鋭師団を多数投入したが、総計で二個師団に匹敵する戦力が壊滅に追い込まれる、甚大な被害を被りながらも、在比米軍の殲滅に成功する。

その事情から、米軍によるフィリピン奪回は、避けえぬ選択であると、陸軍参謀本部は推測し、海軍もやむなくこれに対応するべく、パラオにて新設された第二航空艦隊を、フィリピン防衛に当たる第一四方面軍列びに、第三、第五航空師団の支援に振り向ける事となる。

不思議な事に、最前線拠点トラックは猛烈な航空攻撃並びに、海上封鎖により完全に孤立化しているのとは裏腹に、この方面は異様な程の静けさに包まれており、事前の偵察も、航空機が全て未帰還であることから、詳細は全くわからないままだった。

第三号は、本土東正面並びに、北方方面から進攻する可能性を考慮したものであるが、時期的地理的要因からこちらからの進攻はありえないとの意見が大半で、半ば放置状態だった。

本土を直接狙うのは余りにも、無謀であるし、単発の奇襲爆撃であ

れば、アリューションからも可能であるが効果は薄く、何よりソ連にいらぬ刺激を与えるのは、避けるであろうとの読みであり、北方方面を管轄とする第五艦隊の戦力は、旧式駆逐艦及び哨戒艇からなる、非常に貧弱なものであった。

しかし、捷一号作戦が主軸である以上、仕方がないことだった。

これが、一号から三号までの捷号作戦の概要である。

戦術的には、真つ正面からの迎撃であったが、配備された戦力は、前回のマリアナ沖海戦を遥かに凌駕する。

帝國海軍

連合艦隊

司令長官

豊田副武海軍大将

旗艦 戦艦信濃

第一戦隊

戦艦武蔵、大和

連合艦隊司令長官直卒

第一艦隊

司令長官

近藤信竹海軍大将

第二戦隊

戦艦常陸、長門、陸奥

第三戦隊

戦艦伊勢、日向、山城

第九戦隊

重巡洋艦古鷹、加古、衣笠

第十戦隊

軽巡洋艦北上、大井

第一水雷戦隊

軽巡洋艦阿賀野

第一二駆逐隊

駆逐艦吹雪、白雪、東雲、白雲

第一三駆逐隊

駆逐艦初春、初霜、若葉

第一八駆逐隊

駆逐艦有明、夕暮、五月雨、夕立

第三水雷戦隊

軽巡洋艦酒匂

第一七駆逐隊

駆逐艦浦風、磯風、谷風、浜風

第一九駆逐隊

駆逐艦天霧、狭霧、磯波、綾波

第二 駆逐隊

駆逐艦菊月、三日月、望月

第二艦隊

司令長官

南雲忠一海軍大將

第四戰隊

戰艦尾張、金剛、榛名

第五戰隊

重巡洋艦摩耶、鳥海、高雄

第六戰隊

重巡洋艦妙高、羽黑

第七戰隊

重巡洋艦最上、熊野、鈴谷

第二水雷戰隊

輕巡洋艦能代

第一五驅逐隊

驅逐艦黑潮、親潮、夏潮

第一六驅逐隊

驅逐艦初風、雪風、天津風、時津風

第一 驅逐隊

驅逐艦秋雲、夕雲、卷雲、風雲

第三一驅逐隊

驅逐艦清波、玉波、涼波、藤波

第四水雷戰隊

輕巡洋艦矢矧

第二驅逐隊

駆逐艦朝霜、早霜、秋霜、清霜

第三駆逐隊

駆逐艦萩、嵐、野分、舞風

第一八駆逐隊

駆逐艦霞、霞、陽炎、不知火

第三二駆逐隊

駆逐艦長波、巻波、高波、大波

第一機動艦隊

司令長官

小沢治三郎海軍大将

第一航空戦隊

空母赤城、加賀

第五航空戦隊

空母瑞鶴、大鳳、雲龍

第八戦隊

重巡洋艦利根、筑摩

第一一戦隊

軽巡洋艦阿武隈

第七駆逐隊

駆逐艦曙、潮、漣

第九駆逐隊

駆逐艦朝雲、山雲、夏雲

第二四駆逐隊

駆逐艦海風、山風、江風、涼風

第三六駆逐隊

駆逐艦秋月、照月、涼月

第二機動艦隊

司令長官

山口多聞海軍中将

第二航空戦隊

空母蒼龍、飛龍

第三航空戦隊

空母龍驤、鳳翔

第四航空戦隊

空母隼鷹、飛鷹

第一二戦隊

軽巡洋艦長良

第六駆逐隊

駆逐艦雷、電、暁

第八駆逐隊

駆逐艦朝潮、満潮、大潮、荒潮

第二九駆逐隊

駆逐艦追風、疾風、朝風、夕風

第三七駆逐隊

駆逐艦初月、新月、若月

第三艦隊

司令長官

栗田健男海軍中将

第六航空戦隊

空母龍鳳、祥鳳

第一一航空戦隊

水上機母艦千歳、千代田

第一八戦隊

軽巡洋艦五十鈴、名取

第一三戦隊

軽巡洋艦神通

第五駆逐隊

駆逐艦睦月、如月、弥生、卯月

第二二駆逐隊

駆逐艦皐月、水無月、文月、長月

第三八駆逐隊

駆逐艦霜月、冬月、春月

主力部隊

戦艦十二、空母十三、重巡十三、軽巡十一、駆逐艦九十二。

帝國海軍が保有する戦力のほぼ全てである。

哨戒艇、補給艦等の各種支援艦艇を含めれば、五百隻をゆうに上回る。

各空母に搭載されている艦載機も、戦局悪化が史実程ではないため、

新鋭機の配備が進められている。

各空母搭載機

赤城

戦闘機	烈風	一	×	二	四
攻撃機	流星	二	×	二	三
爆撃機	彗星	三	二	×	一
偵察機	彩雲	×	三		

加賀

戦闘機	烈風	一	×	二	四
攻撃機	流星	二	×	二	三
爆撃機	彗星	三	二	×	一
偵察機	彩雲	×	三		

翔鶴

戦闘機	烈風	一	×	二	三
攻撃機	流星	二	×	二	
爆撃機	彗星	三	二	×	一
偵察機	彩雲	×	二		

大鳳

戦闘機	烈風	一	×	二	三
攻撃機	流星	二	×	二	八
爆撃機	彗星	三	二	×	一
偵察機	彩雲	×	二		

雲龍

戦闘機	零戦	五	二	×	三
攻撃機	天山	二	二	×	二

蒼龍

戦闘機 零戦五二×二八

攻撃機 天山一二×二八

飛龍

戦闘機 零戦五二×二八

攻撃機 天山一二×二八

隼鷹

戦闘機 零戦五二×二八

攻撃機 天山一二×二五

飛鷹

戦闘機 零戦五二×二八

攻撃機 天山一二×二五

龍驤

戦闘機 零戦五二×一五

攻撃機 天山一二×一

鳳翔

戦闘機 零戦五二×一四

以下割愛

烈風、流星の開発の成功は、戦局の推移が大きく影響している。
烈風は海軍内の事情が色濃く反映されており、本土及びマリアナ防
空の任務に当たっている。

対する米艦隊の戦力

米第3太平洋艦隊

司令長官

ウィリアム・F・ハルゼー海軍大将

第31任務群

第1戦隊

戦艦モンタナ、オハイオ、アラバマ

第12戦隊

重巡洋艦ボストン、キャンベラ

第17戦隊

軽巡洋艦マイアミ、ヴィックスバーグ

第21駆逐隊

第27駆逐隊

第36駆逐隊

第43駆逐隊

フレッチャー級駆逐艦16隻

第32任務群

司令官レイモンド・A・スプルーアンス海軍大将

第2戦隊

戦艦ニュージャージー、ウィスコンシン、ケンタッキー

第15戦隊

重巡洋艦ピッツバーグ、セントルイス

第19戦隊

軽巡洋艦デンバー、サンタフェ

第22駆逐隊

第29駆逐隊

第33駆逐隊

第46駆逐隊

同上

第33任務群

司令官ウィリス・A・リー海軍中将

第3戦隊

戦艦アイオワ、ミズーリ

第14戦隊

重巡洋艦コロンバス、ヘレナ

第19戦隊

軽巡洋艦モービル、パサディナ

第24駆逐隊

第30駆逐隊

第36駆逐隊

第48駆逐隊

同上

第34任務群

司令官ウィリアム・W・スミス海軍中将

第15戦隊

重巡洋艦ブレマートン、フォールリバー、トレド

第20戦隊

軽巡洋艦ヴィンセンス、アストリア、トピカ、ダルース

第25駆逐隊

第31駆逐隊

第49駆逐隊

第50駆逐隊

同上

第35任務群

司令官フランク・J・フレッチャー海軍中将

第1航空戦隊

空母エセックス、ヨークタウン、ホーネット、レキシントン

第3航空戦隊

空母プリンストン、カウペンス、ラングレー

第21戦隊

軽巡洋艦サンファン、リノ、ツーソン

第17駆逐隊

第27駆逐隊

第39駆逐隊

第46駆逐隊

同上

第36任務群

司令官マーク・A・ミッチャー海軍中将

第2航空戦隊

空母エンタープライズ、イントレピッド、ワスプ、バンカーヒル、レンジャー

第4航空戦隊

空母インディペンデンス、ベローウッド

第22戦隊

軽巡洋艦サンディエゴ、オークランド、フリント

第26駆逐隊

第37駆逐隊

第44駆逐隊

第47駆逐隊

同上

主力部隊

戦艦8、空母14、重巡9、軽巡15、駆逐艦96

後方に控える、マリアナ諸島攻略の為の部隊である、米陸軍第7、第8師団及び第1、第3海兵師団からなる統合遠征軍揚陸艦隊を含めれば、艦艇は一千隻を超える。

戦力の上では甲乙つけがたい状況であり、それぞれに強みと弱みを内包していた。

空母搭載機は、当然ながら戦闘機はF6Fヘルキャットへと変更されており、マリアナ諸島基地航空戦力と、日本機動部隊を同時に相手をする必要があるため、直援機の数が多めに取られている。攻撃機はアベンジャーが主力となっている。

十月二十四日

現地時間 五四七

マリアナ諸島

サイパン島

南西部アスリート飛行場

東の空が赤みを増し、夜が明けようとしていた。

その光りを浴びながら、同じ輝きを放つ機体が、滑走路で発動機を温めていた。艦上偵察機

C6M1彩雲一一型

時速610キロを誇る高性能な偵察機であり、空母搭載機のみならず陸上基地にも若干数ではあったが、配備されていた。

高性能であるがゆえに、数は少なく、まさに虎の児の機体だった。

三座偵察機としては、海軍最高速度であり、敵戦闘機を振り切つての強行偵察に期待がかけられていた。いつもであれば、通常の偵察があるだけの退屈な任務だったはずなのだが、昨日の夕刻から、対潜哨戒に出ていた九一空所属の哨戒機東海が一機、消息を絶ったことから事態は急変した。

事故の可能性も否定できないが、米軍はトラックの東ポナペまでも占領下に置いている以上、米機動部隊が接近している公算が、大であると司令部は判断。

最近は偵察に飛来するB24リベレーターも機数を増やしていたが、多数配備した戦闘機と対空砲で散々に追い散らしていた。

これらの状況から、払暁の偵察飛行となった。

米艦隊来襲の一時間前

「通信機、異常なし」

榎本、前の方はどうだ？」一二一空所属、彩雲一番機に搭乗する飛行隊長千早猛彦少佐は、操縦席の榎本一等航空兵曹に問い掛けた。

「こちらにも異常ありません。大丈夫そうです」

榎本は、操縦席の各機器をいじりながら、そう答える。

「よし、それじゃあ行くとするか」

「少佐、お気を付けて」

それを聞いた整備員が、そう声をかける。

「ああ、心配はいらんよ。例えば敵機に出くわしても、この彩雲なら余裕さ。

入念な手入れ、感謝する」

「いえ、そんな」

「それじゃあ、後でな。他の機体の整備も頼む」

そう言くと、千早少佐は、機体から離れるように指示をして、風防を閉める。

「一番機、発進する！」

巨大なプロペラと長い主脚とスマートなラインが特徴の機体が、ゆっくりと前に進み出して、徐々に加速していく。

それに続いて、同じ一二一空所属の彩雲八機と、陸軍より供与されている百式司令部偵察機（百式司偵）も加わっていた。この機体も彩雲と並ぶ高速性能を発揮しており、連合国軍より（空の通り魔）の異名で呼ばれていた。

こうして、一二一空より九機、一五七空より五機の、計十四機がアスリート飛行場より、東の海域へと飛び立っていった。

時刻 六 五

サイパン島中央部

タポチヨ山南東部

この場所には、マリアナ諸島全域の防備を担当する、中部太平洋方面艦隊司令部が置かれている。

太平洋に置ける最重要拠点として、一九四二年十月より方針の大転換により、サイパン島を中核とする周辺の各島群を要塞化、東のハワイ、西のマリアナとまで呼ばれる、世界最大級の要塞にまで強化されていた。

司令部施設も空襲から守れるように、山間をくり抜きコンクリートで固められた、防空壕内に置かれている。

平時の場合には、アスリート飛行場の側に司令部は置かれている。

白熱球のオレンジ色の光りに照らされている、司令部内。

薄暗い室内に置かれた重厚な造りの机を挟んで、二人の人物が相對していた。

「つい先程、偵察機を出しました。二時間以内には報告が入るはずですよ」

立っている人物が報告する。

「ウ、ム…、何事もなければな、それに越した事はないが……
いよいよと見るべきか」

椅子に座る隻腕の人物が、呟くようにして答える。

「確証はありませんが、恐らくは。すでに、各隊には警戒態勢で待機させております。万事抜かり無く。」

「偵察機から連絡がなければ、攻撃隊が出せんのは歯痒いが、やむを得まい……」

戦力をいたずらには損耗できん」

航空戦においては、先手必勝。先に位置を特定し、攻撃を加えた方が圧倒的優位に立つ。

至極当然ではあるが、広大な海上を移動できる機動部隊と、移動不可能な基地航空部隊では、索敵時間の差は、如何んともしがたいものであった。

長らく基地航空部隊の指揮を執り続けた、この提督にも理解できていた。

もつとも、数々の前例により、その対応も用意されているのではある。

時刻 六二五

サイパン島東

百五十哩洋上

「榎本、前に機影か艦影はないか？」

高度三千を巡航速度で飛行中の彩雲の偵察席から、操縦席と後部座席で周囲を確認している二人に、千早少佐は問い掛ける。

「雲が厚くて…、確認できません。洋上にも艦影は認められず……」
そう答えが返ってきた。

「そうか…。なんだか嫌な感じがするな」
ボソッと呟く千早少佐に、

「隊長、縁起でもない事を言わんで下さい」と榎本。

「いやな、簡単に計算してみたんだが、サイパンを叩くのに、夜明けに母艦を発進したなら、そろそろ敵編隊に接触してもおかしくない……」

「左下方、断雲に光り！敵編隊では！？」

話している途中、最後部に座る旋回機銃要員、橋本二等航空兵曹が大声で叫んだ。

「来たか！確認する！」

榎本、下降しろ！」

「了解！」

千早機は詳細を確認するべく、左降下を開始。

そして、近づくにつれて米攻撃隊の全容が分かってきた。

「かなり多いな…、戦爆連合百機以上。新型か？見た事ない機体も混じってる」

この時遭遇した編隊は、F6Fヘルキャット一五二機、SB2Cヘルダイバー七二機、SBDドーントレス六四機の計二八四機中、第六任務群から飛び立った半数だった。

「この編隊の逆進路上に、米艦隊はいる」

千早少佐は無電のキーを叩き始める。

「了解です！」

榎本は敵編隊を避けるべく操縦桿を右へと倒す。

一方、米攻撃隊も彩雲の姿を見つけ、自らを発見したこの機体を叩き墜とそうと、数機のヘルキヤットが千早機に襲い掛かった。

「やべえ、来やがった。」

一、二、三…、四機か。

ワイルドキヤット
野良猫じゃあねえな……」

千早少佐はチツと舌打ちし、敵の接近を知った榎本は大声で、

「マクります！舌を噛み切らんよう願います！」

「了解だ！敵を振り切ってやれ！」

威勢のいい返事を聞いて榎本はスロットルレバーを押し込み、一気に加速する。

（この彩雲に、着いて来れるか、新型！）

千早少佐は自機の性能に、絶対の信頼を寄せていた。

戦闘機烈風の登場によって、海軍最高速機の座は明け渡したが、今だに彩雲に追隨できる機体は、他には無かった。

（速度では米陸軍機双発戦闘機P38ライトニングが優速ではあった）

追い掛けるヘルキヤットにしてみれば、たかが偵察機すぐに墜とせる、とたかを括っていたのだが、それが相手を舐め切った考えだったと思い知らされる事となった。

「敵機、徐々に離れて行きます！」

後ろを振り向きながら、橋本が報告してくる。

「さすが、オクタン価の高い燃料は違うな…、いつも以上の速さだ」

この様子を伝えるべく、千早少佐は無電のキーを叩き続ける。

戦闘機、しかも新型を振り切ったのは、この機体の設計がいかに優秀であったかを物語っていた。この時の速度は実に619キロと言う記録だった。

史実の戦後、米軍の調査では、日本軍の公試記録を大きく上回る結果が示されたのは、また別の話だった。

「さて、敵さんの顔を拝ませて貰おうか」

ヘルキヤットを振り切った彩雲は、米機動部隊の姿を求めて東へと悠々と飛行していった。

時刻 六三

中部太平洋方面艦隊司令部

「電信より報告。偵察機が、方位一五より、サイパン島に向かう米攻撃隊を発見。戦爆連合百五十機を視認」

よほど慌てて来たのであろう、この参謀は息を荒げながら報告する。

「やはり来たな。直ちに迎撃機を上げるよう全部隊に通達。」

大本営並びに連合艦隊司令部へ打電。急げ」

落ち着いた様子で指示を出していたのは、塚原二四三海軍大将。

かつて、支那戦線において負傷し片腕を失っている。それがために日米開戦時は艦隊司令としてではなく、基地航空部隊指揮官として、その任に当たっている。

攻撃隊接近の報に際して、全く慌てた様子が見られないのも、理由があった。

「ハッ！」

急いで出て行こうとした参謀は、はたと足を止め、

「偵察機からの報告に続きがありまして、（我偵察を継続す）とともに、（我に追い付く敵機無し）」と……」

これを聞いた塚原は、苦笑いを浮かべ、

「頼もしい事だが、今のは余計だったな」と呟く。

「では、失礼します」

部屋を後にすると参謀は各方面に連絡のために、電信室へと急いだ。

日本時間 五三七

帝都東京

霞ヶ関海軍省

（米太平洋艦隊、マリアナに進攻）

この報告は直ちに、帝國海軍の全てを統括するこの場所にも、届けられていた。

夜明け前にも関わらず、海軍省三階にある軍令部には多数の参謀が詰めていた。

近日中に米艦隊が来るのは明白であるとの、分析によるものだった。何かと批判が殺到する場所ではあるのだが、戦線が一気に引き下げられているこの世界での予測は、かなりの確なものとなっている。

まあ、そんなこんなで大騒ぎしている海軍省の中で、やたらと落ち着き払った人物が一人。

（ここまでは予定通り…。やるべき事は全てやった。後は運を天に任せるのみか）

開戦後から約一年間に渡り、連合艦隊司令長官として、実戦部隊を率いて太平洋を縦横に駆け巡った、山本五十六は、現在、海軍大臣としてここにいた。

一時、強引過ぎる手法が裏目に出て、表舞台から姿を消したのだが、対米戦終結を目前とした状況が、もう一人の人物とともに、海軍指導者として引き戻したのであった。

自らの思惑からはやや外れてしまっていたのだが、贅沢は言っていない。

「軍令部総長名において、捷一号作戦発令。
連合艦隊、第一航空艦隊、並びに陸軍第三一軍、戦闘態勢に入りました」

副官の報告を聞きながら、山本は椅子から立ち上がり、背後にある窓から、明るくなりつつある空を見上げる。

（あれから二年、これで三度目の艦隊決戦か……）

二度あることは三度あるのか、はたまた三度目の正直か、いずれにせよこれで決着がつく。

絶対にマリアナを陥とさせる訳にはいかんしな……）

マリアナ沖、ハワイ沖の二度の海戦に勝利を収め、（これで早期講和成れり）と期待した山本だったが、その期待が脆くも潰えた時の衝撃は、実に大きいものだった。

この時、山本の胸中には、複雑なる思いが支配していた。それは真珠湾奇襲攻撃に始まる、一連の出来事の反芻だった。

「参内する。車の用意を」

「ハッ」

副官は大臣室を出て行く。

それを待つ間、洋上にて指揮を執っていた時の事を思い出していた。
それは二年前……

短期決戦を目的とした、連合艦隊司令長官としての最後の作戦である、陽炎と天一号作戦のことであった。

早期講和への一手

時は遡り、二年二ヶ月前：

一九四二年

八月二十六日

ハワイ南西沖

「ハワイ、オアフ島より方位二五、距離二百。

雲量二、視界極めて良好」

「間もなく日没を迎えます。第五艦隊から入電ありません」

「米太平洋艦隊、オアフ島真珠湾南二十哩付近から動き無し。空母は確認できず」

矢継ぎ早に報告が入って来る。

「ここは連合艦隊旗艦大和の第一艦橋。艦橋内には連合艦隊司令部の参謀達が居並ぶ。

山本は何も言わずに、ただ時計を気にしていた。

「やはり敵は動きませんでしたな。長官の読みが当たりましたな」
山本の後ろから話しかけたのは、連合艦隊首席参謀黒島亀人海軍大佐。

「嚴重な対空警戒が功を奏したか。こちらの正確な居場所がわからなければ、仕掛けようもないし、何より敵は在ハワイ航空戦力を、一気にぶつける算段なのだろう。

「實際あれだけの航空機に襲われれば、こちらの息が切れる」

参謀長宇垣纏海軍少将も表情を変えずに、淡々と話す。

「先程撃破した敵編隊も、五十機に満たない小規模な部隊でしたからな。

時間的に、我々のおおよその位置を知るための、索敵攻撃なのでしょう。

明日の夜が明ければ、怒濤の攻撃を仕掛けてくるのは必定……」

垢まみれの顔を強張らせる黒島であったが、

「それを封じねば、この海戦には勝てぬ」

とその不安を打ち払うように山本は言った。

太陽が水平線の下に沈み、辺りは急激に夜の色に染まっていく。

茜色の艦橋は闇に沈み、一時の沈黙の後

「……時間だ」

山本は静かに、腕時計に向けられた視線を正面に向け、一呼吸おいた後、後ろを振り返り艦長高柳儀八少将、宇垣少将以下連合艦隊司令部要員を見渡した後、意を決して命令を下す。

「現時刻を持って、作戦は第二段階に移行！

天一号作戦発令！

大本営列びに第五艦隊に（ニイタカヤマノボレ）を打電！
各員の奮闘に期待する！」

（この時の昂揚は、生涯忘れる事はできないであろうと感じていた。

幸運にも自分は、栄光の舞台の、真っ只中に立っていたのだから……

……）

大和艦長手記より

作戦第一段階は陽炎の名称で呼ばれた、開戦直後に制圧予定でありながら、真珠湾奇襲失敗から放置中の、中部太平洋米国領ウェーク島、並びに、ハワイの前哨線となるミッドウェー島を占領したのち、ハワイを強襲すると言つ、連合艦隊の総力を上げた一大進攻作戦であつた。

北方からはハワイ強襲の別働隊として、第五艦隊が進攻中となっている。

今作戦は、短期決戦講和を切望して止まない、山本五十六が主導していたものである。開戦初頭のマリアナにおける米太平洋艦隊の主戦力喪失と、インド洋での英東洋艦隊の壊滅、そして、ドゥーリットル日本本土、帝都奇襲攻撃が、山本に作戦の強行を決断させた。多数の損傷艦の修理と、戦艦武蔵を始めとした新戦力の配備が重なる、八月十二日を持つて陽炎作戦は発動され、ウェーク、ミッドウェーはさしたる抵抗もなく、攻略を完了し、ハワイ近海へと連合艦隊は到達する。

対して米太平洋艦隊は、圧倒的劣勢を挽回するために、本拠地ハワイに全戦力を集結、海上戦力の不足を、一千機もの航空機で迎撃しようとは画策していたのであつた。

決戦の地へ

第一航空艦隊
旗艦空母赤城

「大和より（ニイタカヤマノボレ）を受信、作戦発動です」
赤城の艦橋に通信参謀の報告が入る。

「大和より発光信号、（無電の使用は厳禁とす、第一航空艦隊は直ちに集結し、移動を開始せよ）
以上です」

今度は見張りからの報告。無線封鎖の徹底である。

報告を聞き終えた小沢中将は、左前方を進む大和を仰ぎみながら、鬼瓦と呼ばれるその顔の表情を変えずに指示を出した。

「艦長、輪形陣を解除する。我が一航艦は主力部隊から離脱。艦隊針路は北だ」

さてさて、鬼が出るか、蛇が出るか。どちらにしても危険な事に変わりはないか。

「ハッ、機関両舷原速、取舵二十、針路〇一〇。僚艦に発光信号（我に続け）」

艦長青木泰二郎海軍大佐が指示を出す。その指示に従い、操舵員が舵を左に切る。

この時連合艦隊は、ハワイの航空部隊の襲撃を警戒して、小沢中将発案の防空輪形陣を採用、一個の巨大な輪形陣を形成。

中心に第一航空艦隊赤城、加賀、蒼龍、飛龍、隼鷹、飛鷹、龍驤、鳳翔、龍鳳、祥鳳、瑞鳳の計十一隻の空母と、水上機母艦千歳、千代田、瑞穂も随伴し、厳重な対潜警戒を行っていた。

作戦開始直後に大々的に連合艦隊の出撃を、アメリカに伝わるように打電を連発した事により、本来発見が難しいはずの潜水艦を、トラック近海に意図的に引き寄せる事に成功し、ハワイ近海の潜水艦は十隻にも満たない数に過ぎなかった。

トラックからの出撃に合わせ、作戦目標がウェーク、ミッドウェー、ハワイであることも、あえて敵に知らせたのであった。

山本にしてみれば、優勢な戦力を背景にして、敵勢力を一力所に集めて一挙に殲滅したい思惑があった。

連合艦隊の総戦力に対抗できるのは（ハワイ以外には存在しえない）と言うのが、軍令部、連合艦隊司令部共通の認識であった。

実際、戦艦は十一対六、空母に到っては十三対二と言う、絶望的な開きがあった。

いくら奇襲が成功したとしても、この戦力差を覆す事は不可能であり、なおかつ奇襲を相手が目論むならば、それに合わせて警戒していれば、米艦隊をその戦力を持って容易に殲滅できるのである。

この考えは敵である米太平洋艦隊司令長官、チエスター・W・ニミッツ海軍大将も、奇襲迎撃成功の可能性を否定し、連合艦隊の出撃を知るや否や、ウェーク、ミッドウェーの放棄を指示し、ハワイへと撤収させたのである。海軍作戦本部もこれは了承済みであり、問題はない。

ルーズベルトも現状を考えれば、ウェーク、ミッドウェーの両島では、時間稼ぎにすらならないと判断し、B17フライングフォートレス、新鋭機B24リベレーター、B25ミッチェルを多数含む陸軍二個航空軍をハワイ防衛の為に派遣、ニミッツの指揮下に組み入れた。指揮官はカール・スパーツ陸軍少将。

これによりハワイの航空戦力は一気に倍増し、連合艦隊に対抗できるほどの戦力が、どうにか確保されていたのであった。

ルーズベルトにしてみても、真珠湾奇襲撃退とシンガポールの陥落、そしてイギリスからの依頼があったとは言え、大西洋からまで艦艇を引き抜いて、一気に日本の南方への道を遮断し、息の根を止める計画にGOサインを出したのは、他ならぬ自分自身であつたし、もし敗北しても日本艦隊も行動不能な程の打撃を与えられるはずと、楽観的と言つべきなのか、投機的と言うのか、その様な考えであつたのだが、結果は日本軍を甘く見積もつたツケを支払わされる予想を超える事態に発展しており、その間に英東洋艦隊は、連合艦隊による奇襲攻撃を受ける形で、成す術も無く壊滅し、武器供与が滞りなく行われたはずの在フィリピン極東軍及びフィリピン現地軍は孤立しながらも奮戦し、いまだに激闘が続いていたが、島嶼防衛にまで戦力を割く余裕もないし、下手に戦力を割いてハワイの守りを疎かにはできない事情があつた。各個撃破され犠牲が増えるよりは、一極集中による殲滅をルーズベルトも意図していたのである。

そして、その間にイギリスにとつても、最大の植民地であり、物資と兵力供給の要であるインドが、連合艦隊の進出に伴う現地住民のサボタージユによつて、失われる事を危惧した英首相ウィンストン・チャーチルは、再びルーズベルトに助けを求め、友邦の脱落を恐れたアメリカは反撃の一手として、連合艦隊の留守を狙い、大西洋より虎の子の空母レンジャー、ワスプを使用して帝都空襲を実行したのであつた。この二隻の空母を仕留めなければ、また本土を空襲される恐れがあるため、なんとしても位置を捕捉せねばならないのだが……。

「主力部隊、単縦陣へと遷移中。第二艦隊、先行します」

おうおう、勢いのいいことだ。山城の全速航行での艦隊運動は圧巻だな。などと小沢は考えながら月明かりに照らされる主力戦艦部隊をみている。

「第十戦隊、第五、第六水雷戦隊、護衛に付きます。現在速度十五ノット、各艦距離二千を維持。

三列縦隊へ移行中」

現在の艦隊運動が、赤城の艦橋に伝えられてくる。

艦艇数が膨大であるため、陣形の変更は相当な時間を要するのだが、今作戦に全てを賭ける山本は、連合艦隊司令長官と言う職権とマリアナとインド洋の勝利を盾にとって、貴重な重油を訓練に惜し気もなく使用し、航空機搭乗員と艦艇の乗組員の錬度を、極限まで高めていた事が功を奏し、スムーズな艦隊運動を実現させていた。ちなみに作戦前の訓練と、作戦発動後を合わせた重油使用量は、連合艦隊が平時に使用する重油量の、およそ二年分に相当し、以後の艦隊行動が制限されてしまうのは、明白であった。

とにかく、陣形を整えた空母十一隻を主力とする第一航空艦隊は、自らの位置を知られぬように北上を開始した。

一方の戦艦十一隻を基幹とする主力部隊も、遅れる事無く行動を開始。

オアフ島真珠湾を目指し、出しうる最高速力の二十二ノットで、北東へと針路を向けた。

連合艦隊
旗艦大和

「全周の索敵を厳に、潜水艦の行動に留意せよ」

「電信より艦橋へ、オアフ島及び米艦隊からと思われる、多数の発信を傍受」

「大本営並びに第五艦隊からの返電ありません」

報告と命令が飛び交う中で、参謀長宇垣少将が相変わらずの仏頂面で、

「さて、敵はどうであるか。先程の打電で、こちらのある程度の位置は、掴んでいるはず」

これに艦長高柳少将が間を置かずに、

「やはり、夜襲を仕掛けてくるのでは？ 敵は相当慌てふためいていると見受けられる」

そう言ったのに、先任（仙人）参謀黒島大佐が反応し、

「いやいや、やはり我々を懐深くまで引き込む算段で、待ち構えているのでは？ 今度の太平洋艦隊司令と参謀長は、なかなか頭が切れる連中と聞いていますしな」と答える。

「どちらであろうと、米艦隊は殲滅する。大勢に差は無い。米軍が地の利に頼るならば、こちらには天の利がある。決して負けはせんよ」

予想談議に山本は、自信ありげにぴしゃりと言ったのだが、正面を見据えままの表情は、どこか切羽詰まった感があった。

後方の三人にその表情を窺い知る事はできなかった。

だが、山本の覚悟がそうさせるのか、闇夜を照らす煌々と輝く月が、静かに天空へと昇ろうとしていた……

攻守立場は違えど

連合艦隊がハワイ近海で発した、（ニイタカヤマノボレ）の無電は、各方面に多大な混乱を生み出す事となる。

ニイタカヤマノボレは、日米開戦日時を、真珠湾へと向かう南雲機動部隊に伝えた歴史的電文。

すなわち、一度すでに発信された内容であり、それは日米両陣営にとって、忘れがたい事だった。

開戦時は、本土から南雲艦隊へと向けられた発信だったが、今度は連合艦隊から本土へと発信されると言う、全く逆の状況となっている。

この発信に慌てたのは、事態がまるで理解できていない、大本営海軍部、軍令部だった。

連合艦隊、否、山本五十六が、米艦隊戦力が壊滅状態の今こそがハワイを叩く好機、と強硬に主張し、それに確たる反論をできぬまま海軍首脳陣は、危険を承知しながら、ハワイ進攻作戦を承認する事となるのだが、作戦は連合艦隊司令部が立案しており、詳細が意図的に隠されていた為、このような行動に出る事など予想の範疇外であった。

一方の米太平洋艦隊司令部にしてみても、全く理解に苦しむ状況だった。

まるで強盗が「今からお前の家に押し込む」と言っているようなものだ。

わざわざ敵前で、しかも目の前でこのような行動に出る必要性は全く無いのである。

正に前代未聞の状況だった。

ハワイ、オアフ島
太平洋艦隊司令部

時計の針は9時を回っている。いつもであれば、パールハーバーの工廠の明かりで、湾内が照らし出されているはずであるが、連合艦隊が接近中であることから、灯火管制が敷かれ一帯は暗く沈んでいるが、月明かりのせいで周囲は見渡す事ができる。

司令部施設の中では、数時間前の発信の目的について、司令長官ニミッツは頭を悩ましていた。

地下に設けられた作戦室には、十数人の参謀達が、巨大なハワイ諸島周辺が描かれた地図の広げられた、机の回りに立っていた。地図上のオアフ島南には、味方を示す青い凸の駒が大小多数置かれている。

連合艦隊の進攻に備えかき集められた、太平洋艦隊の空母機動部隊以外の、サウス・ダコタ級戦艦を始めとした主力部隊であった。

オアフ島の北東海域には、レンジャーとワスプを基幹とした、機動部隊が展開している。

ニミッツの目を細めたまま、南西方向へと向けられる。

その先には、味方の倍以上の赤色の駒の固まりが、これみよがしに広げられている。

「……エド、この日本艦隊の動き、どう読む？」

ニミッツが問い掛けたのは、情報参謀エドウィン・T・レントン海軍中佐。

日本海軍による開戦時に奇襲を仕掛けてくる可能性を、早期に見ていた人物の一人である。

「やはり、奇襲の公算が大きいのではないでしょうか？ 明らかな陽動の動きが見られます。加えて一度発せられた内容と言うのが、非常に気になる場所ですが……」

と少し下がりぎみの眼鏡を人差し指で直しながら、レントンは答える。

それを聞きながら腕を組んだまま、地図上の敵味方の駒を交互に見つめ、ニミッツは口を尖らせる。

「やはり別働隊がいるのは間違いないな。問題はその部隊がどこにいるのか、だが……」

「私も同意見ではありますが、我々の混乱を狙った謀略電の可能性もありえます。別方向からの奇襲を臭わせ、警戒を分散させるつもりかもしれません」

次に口を開いたのは、無線傍受解析班（通称ハイポ）局長ジョゼフ・J・ロシュフォート海軍中佐だった。

「我々の分析では、帝都空襲直前、日本艦隊のインド洋進攻の辺りから、暗号通信に微妙な変化が見られます。英国は日本艦隊の動きを、暗号解読によりかなり正確に予測し、東洋艦隊は避退行動に入りましたが、出港直後に襲われました。内容自体は変わっていないようですが、日時の変更は確実かと。」

しかし、今回の暗号は作戦目標、行動も掴みやすいものでした。こちらの動きを読み切った上で、あえて正面から戦いを挑むのも考えるの一つではありますが」

「謀略電の可能性は否定できんが、ここに敵は全力で仕掛けて来るはずだ。ならば他の意図があつたにせよ、その主力部隊を血祭りに上げれば、以後日本艦隊は二度と行動できん。翌朝、第6任務群、第8、第11航空軍を全て投入し、決着を着ける。各部隊は、日の出と共に空中避退を開始し、敵の攻撃をかわし、直ちに反撃を行う。第1任務群は敵艦隊の突入に備え待機、可能な限り日本艦隊を、オ

アフ島近海域に留め置くように、パイ中将に通達せよ」

「サー、全部隊に連絡いたします」

レントンがすぐに席を立ち、続けて

「私も情報の収集に全力を尽くします」

とロシユフォートも席を立ち、足早に作戦室を出て行った。

「何か他に良案があれば、言ってほしい」

ニミッツは残った作戦、航海、航空を主とした参謀達に問い掛けたが、意見や反論と言ったものは無かった。

陸軍からも航空軍参謀が参加していたが、反対する理由もない。

「では明朝、日本艦隊の位置が特定されていれば、直ちに攻撃を開始していただきたい」

「了解いたしました。攻撃手段は例の方法を採用しますが、よろしいでしょうか？」

陸軍航空参謀がニミッツに聞いて来たが、

「あれが、最もベストな方法であると私は考えている」とだけ答える。

「では、明日の戦果にご期待下さい」

そう言くと、陸軍の制服に身を包んだ参謀達が席を立ち、退出していった。

海軍の参謀達にしてみれば、おもしろい話ではないが、ニミッツの指揮下に置かれているとは言え、陸軍航空隊の独立色はそれに強い。日本陸海軍程の軋轢は無いが、やはりそういった物は存在していた。

海軍の立場は非常に弱く、艦隊が再建されるまでこの状況は続く事となる。

同時刻

オアフ島南西百二十哩

連合艦隊の前衛として突出している第二艦隊。

作戦方針は戦艦を主力とする第一艦隊の露払いであるのだが、陣形の整っている、ましてや戦艦多数を含む敵勢力に対しての接近は、セイロン島東沖海戦で、南雲中将揮下の南方艦隊（元南遣艦隊）が、英東洋艦隊に対して行っているが、非常に危険な行動だった。

南雲中将はこの海戦で、距離四千まで接近して雷撃戦を挑むと言う離れ業をやったのけ、航空攻撃があつたとは言え、英戦艦ウオースパイト、リベンジ級戦艦四隻を航行不能に追い込む戦果を上げている。

この時、英東洋艦隊は鹵獲を恐れ全て自沈させているのだが、味方は南雲中将が戦艦五隻を撃沈したものとして、その声望は高まっていた。

同じく重巡洋艦を主力とする第二艦隊を率いる近藤中将にしても、見過ごす事のできない事例ではあつたが、いくら衰えたりとは言え第二艦隊だけで、太平洋艦隊の主力部隊を撃破はどだい無理である事は承知していた。

「戦功を焦って、無理をする必要はあるまい……」

第二艦隊旗艦、重巡愛宕の艦橋で呟くのは、第二艦隊司令長官近藤信竹海軍中将だった。

「長官……？」

その呟きが隣に立つ参謀長、白石万隆海軍少将に聞かれたらしく、聞かれた近藤は一瞬慌てた表情を見せたが、平生を装い「なんでも

ない」とだけ答える。

「それより問題は起こっていないかね？」

兵学校後輩の活躍に対しての淡い嫉妬を振り払うように、白石少将に問い掛けた。

「今のところは特にありません。潜水艦の接触もなし、至って順調です」

これに近藤は安堵の表情を見せ、

「このまま何事も無く敵艦隊まで辿りつければ、インド洋の汚名も返上できるんだがな。潜水艦ごときに邪魔をされてはかなわん」と言つと視線を前に戻し、前に行く第二水雷戦隊の姿を見つめる。

「はあ、そうですね。第一撃は我が艦隊が放ちたいものです」

白石少将もこれに同意する。第二艦隊はインド洋では全く活躍することなく撤退し、齒痒い思いを味わっていたのである。

もっともそれは編成の問題であり、空母を前衛にして後方から主力部隊が続くと言う、古い艦隊運用思想によるものであり、そのせいもあって活躍を小沢機動部隊と、真珠湾奇襲失敗の雪辱を晴らさんと、躍起になって最前衛を希望した南雲艦隊に持っていかれたのである。

これに、わざわざ戦艦が出て行ったのに、活躍できないとはどういう訳なのか、と主力部隊指揮官達から艦隊運用を見直すべきだとの不満の声が上がり、一悶着が起きていた。この世界では航空機は海戦の補助兵器であって、主力ではないのである。

戦艦の撃沈（実際は自沈）は重巡でも可能ではあるが、南雲艦隊のような無茶をせねばならず、航空機との共同であった。

後にこれは艦艇と航空機の同時攻撃手段という、別の道を開く事となる。

話を戻し、現在第二艦隊は第三戦隊第二小隊の戦艦比叡、霧島を伴って、三十ノットの高速で突き進んでいた。

第一小隊金剛、榛名は小沢機動部隊の護衛として配備されている。最前衛には、最強の雷撃部隊と呼ばれる第二水雷戦隊、軽巡洋艦神通以下、駆逐艦十二隻が配置され、それに第三戦隊戦艦比叡、霧島、第四戦隊重巡愛宕、鳥海、高雄と続いていた。

そして四時間後、一度も潜水艦と接触することなく、オアフ島近海に達した近藤艦隊は、米太平洋艦隊の前衛である駆逐艦部隊と戦闘を開始したのであった。

ハワイ沖、月下の咆哮

八月二十七日

午前一時

オアフ島南沖

ニミッツの指示により、敵艦隊の誘引と、真珠湾への突入を絶対に阻止する目的で展開する、米太平洋艦隊第1任務群。

その陣容は新鋭戦艦3隻、旧式戦艦3隻を基幹とする艦隊であり、他国に比して決して貧弱な戦力な訳ではないのだが、世界三大海軍の第一位と目されるようになった、帝國海軍には大きく差を付けられおり、合衆国本土においてはそれを挽回するために、各種新造艦艇が行程を繰り上げて、続々とドックから吐き出されている。

サウス・ダコタ級戦艦は、どうにかハワイ防衛作戦に間に合ったが、残念ながらエセックス級空母の就役までは、間に合わなかった。

護衛空母ボーグやサンガモン級護衛空母の四隻は、ハワイと本土の間を往復し、B26マローダーやP38ライトニングと言った陸上機の輸送任務に従事していたため、本海戦には参加していない。

第一任務群

旗艦戦艦サウス・ダコタ

艦橋の左後方にある露天監視所の手摺りに肘をつき、煙草を燻らせているのは、第一任務群司令官ウィリアム・E・パイ海軍中将である。

彼はマリアナ沖海戦時、第二戦艦戦隊（コロラド、ウェスト・バー

ジニア基幹）を率いて、連合艦隊主力部隊と激しい砲撃戦を展開したが、敵新型戦艦（大和）に気を取られ過ぎて、長門と陸奥による苛烈な砲撃を浴びせられ、陸奥を大破、戦闘不能とする損害を与えるも、昼間航空攻撃の被害もあつた為、コロラドは大破後退、ウェスト・バージニアは撃沈の憂き目にあっている。

……完敗

これが、先の海戦に参加した全ての米海軍関係者が、共通に認識した事実だった。

最大の失敗は敵を侮つた自らの驕慢であることを、嫌と言う程思い知らされた。ゆえに、現段階における持ち得る少ない戦力を、最大限に活かすための努力を怠つてはいなかった。

（来るがいいジャップ。このハワイを貴様らの墓場にしてやろう）パイは後方に控えるインディアナ、マサチューセツツ以下の一列に列んだ戦艦群を見ながら、大きく煙りを吐き出した。

サウス・ダコタ級三隻ならば、18 in 砲搭載のあのモンスターを仕留められるとの自負もあつた。いかな対18 in 砲防御であろうとも、16 in 砲九門三隻、計二十七門を相手にして、勝てる道理はあるまいとの考えであつたが、ニミツツからは不利が決定的ならば、迷わず後退せよとの命令が下っていた。

ハワイ防衛が最重要ではあつたのだが、可能な限り戦力の温存を図りたいのも、また事実であり、戦艦は単なる消耗品にはできない程、高価な代物だった。

不測の事態でこうなってしまったあつたが、欧州戦線の方も野放しにはできず、連合艦隊撃破の暁には、直ちに大西洋方面に戦力を転用し、反攻作戦を開始する予定である。

あくまで予定である。

煙草の火が中程まできたところで、パイはそれを海へと投げ棄てた。火の点いたままの煙草は弧を描いて海へと落ちていき、やがて波間へと沈んでいった。

その様子を最後まで見る事無く、身を翻し艦橋内へと戻っていった。

「偵察に出したスターレットとウィルソン、ベンハムとラングから報告は入ってこないか？」

艦橋内に入るや、南西方面の警戒部隊からの電報を気にしていた。

「いえ、今のところは何も……」

聞かれた通信士は短く答える。

これにパイは複雑な表情を浮かべ、日本艦隊がいるであろう南西方向の水平線を見つめていた。

同時刻

二十哩南西

近藤艦隊

「田中司令、間もなく会敵予想時刻です」

第二艦隊の最前衛を、三十二ノットの高速で突っ走るのは、田中頼三海軍少将率いる第二水雷戦隊。

艦隊型駆逐艦陽炎級で固められた、帝國海軍内最強の雷撃能力を持つ、自他共に認める最精鋭部隊として、第二艦隊を先導している。

「おう、今まで敵に出くわさなかったのは幸先がいいが、足の遅い亀ちゃん達にとっては、厄介かな？」

これから巻き起こる饗宴の舞台を期待してなのか、報告を聞きなが

ら軽口を叩いているのは、田中少将である。

（やはり敵は懐深くおびき寄せるつもりか。やるなあ。……だとすれば）

「報告！前方距離二万より、駆逐艦らしき艦影三から四！艦級不明！相対速度約五十ノット、高速接近中！」

「そら来た！全艦砲撃戦用意！一気に叩くぞ！」

待ってましたとばかりに、号令を飛ばす。

「司令、魚雷は撃たないんですか？」

神通艦長河西虎三大佐が問い掛けたが、田中はうんと言って、更に続ける。

「できれば偵察部隊には使いたくない。確実は確かだけど、今撃つたら敵本隊に突入するまでに、魚雷の再装填が間に合わないからね」

「そうですね。たかが一個駆逐隊ぐらい、砲撃で簡単に潰せるようじゃなくては」

艦長も同意し、七門の十四センチ単装砲が米駆逐艦に向けられる。

「敵駆逐艦隊、回頭。増速しました！」

「魚雷を発射した可能性もある。雷跡に注意せよ！」

主砲撃ち方始めッ！」

河西大佐の指示の下、砲撃戦が開始されるも、つかの間の事。

「敵艦、逃走の模様！こちらより優速です！」

あっけなくその身を翻し、もと来た道を戻り始めたのである。

米駆逐艦隊は戦前に建造されたベンハム級駆逐艦で、四十ノットを越える快速艦であり、第二水雷戦隊の最高速度の三十五ノットを大きく上回り、本隊と合流を果たすべく後退していった。

（これで、奇襲の目は無くなったか……

敵しい戦になりそうだ）

田中にもこれで、準備の整った戦艦多数を含む大艦隊に、正面から殴り込む危険を再認識させた。

戦艦の主砲弾の前では、軽巡の装甲など紙も同然であり、命中率が低いとはいえ、当たれば一撃の下に粉碎されてしまうのは、分かってきた。

それでも、第二艦隊は敵本隊へ向けて、決死の突入を図ろうとしていた。

「ウイルソンより入電！

敵艦隊発見、軽巡一、駆逐艦八以上、戦艦ないし重巡五！

現在第37駆逐隊は後退中！ 以上です」

サウス・ダコタ艦橋内に通信士の報告の音が響く。

「来たか。迎撃態勢、守りを固める！

前列に駆逐艦、巡洋艦を散開して配置、戦艦戦隊は後方より援護する！

艦長、艦内放送を」

「どうぞ」

艦長がインカムをおもむろに手渡す。

「艦隊司令より全艦艇へ。偵察部隊が敵艦隊と接触した。

敵艦隊の戦力は、我が艦隊と比べるべくもない程強大であるが、恐れる事はない！

我々の目的は、夜明けまで耐え抜く事であり、敵を撃破する事ではない！

つまりは諸君らが生き残る事こそが我々の勝利である！

なんとしても生き残ろうではないか！」

圧倒的に不利な状況に置かれ、不安に怯える乗員達にしてみれば、パイの激励は十分な鼓舞につながった。

第1任務群は、駆逐艦から戦艦までの主砲が、同一射程範囲に入るように陣形を変更した。

そして……

「レーダーに感！方位230、距離18マイル、接近中！」

サウス・ダコタに搭載されている艦載射撃制御レーダーFD-mark5が接近中の近藤艦隊の姿を捉える。

しかし、レーダーの精度はまだ悪く、およその方位と距離が分かる程度で、正確なものではなかった。

「左舷砲戦用意！」

艦長の命令の下、サウス・ダコタのmark6-16in主砲塔がゆっくりと旋回し、砲身も最大射程となるように仰角30度に持ち上げられる。射程は後続艦も一斉に射撃態勢へと移行していった。

一方、近藤艦隊も米艦隊の姿を視認する。

「敵主力部隊より距離二万！」

第二水雷戦隊旗艦神通も、米艦隊を射程内に収める。

「主砲撃ち方始めッ！」

全艦雷撃戦用意！回避運動をとりつつ、距離一万二千で魚雷を発射する！

僚艦に発光信号、我に続け」

第二艦隊は神通を先頭にして、一本槍となって米艦隊へと突撃を開始する。

回避行動をしながらの突入であるため、上から見ればさながら蛇がゆくが如くである。

「二水戦、砲撃開始しました！」

第二艦隊旗艦愛宕の艦橋、近藤中将以下の参謀達も、神通以下の駆逐艦からの発砲炎を確認したが、

「米艦隊より発砲炎！」

報告とともに前方海面より、一気に閃光がほとばしった。

「これは……！？」

艦橋内に驚きの声が上がると、わずかな時間をおいて空気を切り裂く音と共に、多数の地獄の使者が凄まじい速度で迫る。

それらが海面に到達した瞬間、大小の水柱が一気に林立し前をゆく二水戦を覆い隠した。

徐々に砲撃を開始していく日本艦隊に対し、一斉砲撃が可能な米艦隊は、先頭から叩き潰すべく猛烈な砲撃を加える。

「チイツ！まさかこれほどとは……！」

田中は舌打ちとともに呻いた。

この事態に二水戦旗艦神通の艦橋内は騒然となる。その騒ぎを消し去る程の衝撃と爆音が絶え間無く響いた。周囲は巻き上がる水煙に覆われてしまう。

戦艦の大口径弾が至近距離に落着いたのである。

乗員にしては堪ったものではない。

「司令、このままでは目標の視認すら困難です！」

針路の変更もやむなしかと……」

河西大佐が意見を具申する。

「……いや、可能な限り突撃を継続する。我が二水戦は退かぬ、これしきで退いては笑いにされるだけだ。

米艦隊も必死。こちら覚悟を決めてかからねばならぬ。

なあに、やってみれば何とかなるもんだ」

田中は諭すような笑みを最後に浮かべた。

「……分かりました。ならば私も本艦を無事目標地点に運ぶ事に全力をあげましょう」

河西大佐も自らの考えを納得してくれたようなので、田中はあらためて命令を下した。

「突撃を継続する！全艦速度まま、機関最大で突っ走れ！」

後方に続く第三戦隊第二小队、戦艦比叡。

「二水戦、なおも突入を続けます！」

戦艦比叡艦橋。

姉妹艦霧島と共に快速を活かし、水雷戦隊を援護するために第二艦隊に編入されていたが、その役目を果たす時が来たのである。

「二水戦に続け！」

主砲照準、敵重巡ニューオーリンズ型！撃ち方始めッ！」

比叡の35・6センチ主砲もついに咆哮を上げる。

あくまで、水雷戦隊の行く手を妨害するであろう、敵重巡の撃破が最優先目標となる。

戦艦とまともにやりあう程の余裕はない。

天空に佇む満月の月光の下、鋼の巨獣がその歯牙を突き立て合つ、熾烈なる戦闘の序幕であつた……。

激突海域

時刻 一三七

オアフ島北東海域

太平洋艦隊第一任務群と、連合艦隊第二艦隊が戦闘を開始した頃、オアフ島最北端に位置するカフク岬の東に、空母ワスプ、レンジャーを基幹とする第六任務群が展開していた。

「前線の主力部隊より入電です。日本艦隊と接触、交戦を開始しました」

旗艦空母レンジャーの艦橋に通信士の声が響く。

「おもしろくないな」

「は……？」

報告した士官は返ってきた声に耳を疑い、司令席に座り戦闘中ではないにしろ、臨戦態勢の艦内とは思えないほどに落ち着き払い、手にしているコーヒを啜るこの人物の顔を凝視してしまった。

「私の顔に、何か付いてるのかね？」

自分の顔をまじまじと見ている士官をからかうように、少し笑いながら聞いてみる。

「い、いえッ！なんでもありません！失礼しました！」

聞かれた士官は慌てて持ち場へと戻って行く。

「色んな意味でね……」

士官が去った後、飲みかけのカップを覗きながら一人言を呟き、考えを巡らす。

第六任務群司令官兼太平洋艦隊参謀長、それが彼の肩書である。

（敵は戦力を分散させた。夜戦に備え空母を切り離すのは分かる。しかし、このハワイに接近し過ぎれば、直掩機援護の喪失を意味する。

戦艦に期待するのは分からなくもないが、沈まずとも戦闘不能では意味がない。突撃一辺倒では……）

ここまで考えたところで、彼はある人物の顔を思い浮かべ苦笑する。

（違うな、何かある……）

突撃、突撃とは言ってみてもブルハルゼーは、無謀な訳じゃない。

この突入の裏に隠された真意、私が暴いてみせようじゃないか。

インペリアルネイビー、いやアドミラルヤマモト）

そして、彼はある事実に気がついた。

それは奇をてらい過ぎて、無理と無謀を重ね合わせた、馬鹿げた事だった。

オアフ島の裏側で、一人の提督が冷静に思考を巡らすのとは対象的に、交戦中の日米両艦隊の状況は、白熱したものとなり始めた。

第二水雷戦隊旗艦神通

「第三戦隊、砲撃開始しました！本艦は回避行動を継続中！」

相変わらずの轟音が響く中、その轟音に負けぬような大声が艦橋に広がる。

「やっと来たか！敵艦隊との距離は！？」

待ち兼ねた後続艦の突入に、安堵のため息を漏らす余裕はない。

田中は怒鳴り返した。

「現在距離一万四千を切りました！」

もう間もなくである。

「魚雷発射用意！」

艦長の指示も俄然力が入る。

その間も両艦隊の距離は縮まり続く、米艦隊の砲撃も正確さを増して行く。

しかし、最前例を進む二水戦を中心に林立していた水柱の数が、急速に減少し始めたのである。

「……どうしたんだ？」

この様子に被弾轟沈の可能性に、戦々恐々としていた乗員からは、安堵と疑問のため息が漏れた。

それもそのはずである。

米艦隊の射程内に進入した二隻の戦艦の姿が、どうしても目立ってしまった為だった。

第三戦隊

戦艦比叡

二水戦の突入を援護し、それを阻止せんとする米巡洋艦を、その主砲を持つて蹴散らす本来の運用方法に乗っ取って、米艦隊に接近した比叡であつたのだが……。

「右舷三番及び、五番副砲被弾！火災発生！」

「第三主砲塔付近に敵弾命中、旋回不能！」

相次ぐ予想外の報告に、艦橋にて指揮を執る西田正雄海軍大佐は、思わず唇を噛んだ。

「敵は本艦と霧島に狙いを定めて来た。

囹の役目は十分に果たしているが、このままでは持たんぞ……」
被弾の度に振動が艦橋に伝わってくる。

大口径弾命中はただの一度であるが、サウス・ダコタ級戦艦の16インチ（40・6センチ）砲弾の直撃は、元巡洋戦艦の比叡と霧島からすれば、非常に効く。

身がちぎれる程に……である。

しかし駆逐艦や巡洋艦の主砲である5インチ（12・7センチ）、8インチ（20・3センチ）砲が戦艦の重防御を貫けないのが常識とは言え、完全防御が施されている訳ではないため、数をぶち込まれればただでは済まない。

「右舷副砲、接近中の雑魚共（駆逐艦）を黙らせる！主砲は後方の巡洋艦を叩け！」

二水戦が雷撃に移れば活路が開けるはずだ！」

西田大佐の指示が飛ぶ。

すでに比叡の上甲板は多数の小口径弾の命中により、あちこちで火の手が上がり、派手な黒煙を噴き上げている。

幸いにして重要区画にダメージは無く、まだまだ戦闘は可能であった。

後続の霧島にも命中弾が多数あり、比叡と似たような状況に陥っているが、比叡が被害担当となっているため、まだマシと言えた。

比叡の上甲板、特に米艦隊側へ晒している右舷側の被害は特にひどいもので、七門ある五十口径十五・二センチ副砲の内、前側四基が薙ぎ払われ接近する米駆逐艦群に対応するのが、困難となり始めた。

悠々と日本艦隊に砲弾を雨の如く、送り続けている戦艦戦隊の一番前に位置する、旗艦戦艦サウス・ダコタの艦橋で、司令席に座り戦況をパイ中將は注視していた。

「今来た敵はコンゴークラスか。あの足の早さは目障りだ。

本隊に合流されて、後々面倒になるのは避けたいところではあるな

……」

パイ中將も戦艦戦力を多少重要視する向きがあった。

いや、彼だけに留まらず世界の海軍の軍人が共通に認識している事であるのだが、その見方が彼の判断を誤らせる事となる。

「駆逐艦などどうとでもなる！」

あのコンゴークラスを海の藻屑に変えてやれ！」

この指示により、米艦隊は目標を二隻の戦艦に絞って集中砲火を浴びせる事となり、陣形に綻びが生じる事となるが、今は気付く事はなかった。

弾雨から解放された第二水雷戦隊は、回避行動の遅れた分を取り戻すべく、再び一本槍となって突撃を開始した。

「済まないな……」

後方でなぶりものにされる比叡と霧島を思いながら、田中は静かに目を閉じた。
後は行くのみ。

「距離一万二千！」

「転舵、取舵一杯！魚雷発射！」

「撃ええい！」

艦体中央に搭載されている四連装魚雷発射管二基、八門から一斉に、九三式六十一センチ酸素魚雷が滑り出した。炸薬量四百八十キロ、全重量二・七トン、九メートルに達する巨大な魚雷が、米艦隊へ向け疾走を開始する。

最大雷速四十八ノット、射程二万を誇る、敵にとっては凶悪な代物だった。

しかも、推進剤が九十九パーセントの純酸素が使用されている為、他国の魚雷が走行する際に航跡が残る窒素と違い、酸素が水に溶けるために航跡が残らず、視認は困難であった。

しかし調整が難しいと言う弱点もあった。

後続艦も神通に続き一斉回頭し、順次魚雷を発射していった。

第二水雷戦隊、軽巡一、駆逐艦十二、魚雷数は計百十四本の鉄鯨が、ヤンキー娘達に喰らい付くべく、まさに鯨のように静かに忍ぶ寄る。

「全艦魚雷発射完了！戦闘海域より離脱！」

撃つ物は撃った。後は被害をいかに少なくするかである。

「着弾まで残り二分！」

最大雷速で一万四千彼方の最後方に構える戦艦群に、槍が突き刺さるまで六分強。

途中の米艦艇を巻き添えにできる。幸い敵は第三戦隊に釘付けになっている。

そして、その時はやってくる。

前衛を航行していた米重巡洋艦サンフランシスコから二本の水柱が上がり、火災が発生したのである。

戦艦比叡の砲撃を受けて回避行動中だった事も災いし、発見が遅れた。

更に不幸だったのは、行き足が止まったところで、満身創痍の比叡が放った砲弾の内の一発が被雷カ所近くの第二主砲塔に命中、弾薬庫誘爆、轟沈したのである。

これにより前衛を担当している第4任務群司令ダニエル・J・キアラガン海軍少将が戦死。

統制がきかなくなった艦隊は回避行動を開始したが、悪夢は終わら

ない。

百十四本の内、艦艇に命中したものは七本。

駆逐艦グウィン、ヘルム、ハワードに命中、大破航行不能。

そして、偶然にも過敏な信管の誤作動も、他艦に命中せずに米艦隊内を走り抜けた一本が、サウス・ダコタ級三番艦マサチューセッツの艦首付近に命中し、大破口を穿ったのであった。

元々衝撃吸収力に劣る本型の弱点が浮き彫りとなる事となった。

「艦首より浸水拡大中！」

「ダメージコントロール！索敵員は魚雷の接近に注意せよ！」

突然にして予想外の事態に、第二戦艦戦隊司令ウィリス・A・リー海軍少将は、舌打ちする。

かなりの浸水のために、主砲射撃に大きな障害となるのは避けられない。

「主力艦隊戦の前に、何と言う事だ！」

特徴のある丸眼鏡の奥には怒りの色が浮かぶ。

射撃の名手である自分の腕が傷つけられたも同然である。

実際、マサチューセッツは彼の指揮の下、数発の命中弾を霧島に与えていた。

「当たり所が悪いとはこの事が……」

ウィリスは盛大なため息を漏らした。

マサチューセッツは砲撃を停止し、復旧作業に追われる事となる。

第三戦隊

戦艦比叡

「敵重巡一撃沈、撃沈です！」

艦橋内は歓声に包まれる。米艦隊が群がり損害は拡大していたが、やはり敵艦の撃沈には心踊るものがあつた。

「敵は浮足立っている。近藤中将の主隊も……」

西田大佐は左舷を米艦隊へと向かう第四戦隊以下の重巡を中核とする第二艦隊主力部隊を見つめた。

しかし、相変わらず敵の戦艦部隊はこちらを撃ち続け、さすがに命中率が上がってきている。

霧島と共に大破判定が出ているのは確実な損害であり、引き上げる潮時だったが、速力が低下した足では、簡単には逃がしてはくれないだろう。

「やむを得んな…、最期まで付き合ってやる。年寄りだからって嘗めるなよ、ヤンキー共」

そう言つと西田は新たな命令を発した。

「目標、敵新型戦艦一番艦に変更！戦闘を継続する！」

砲撃可能な一番と四番主砲が再び咆哮を上げる。

金剛級の三十五・六センチ砲弾では、サウス・ダコタの装甲は貫けないが、こうなつてはもう意地でしかない。

すでに霧島はマサチューセッツとコロラド、そしてメリーランドの集中砲火を浴びせられ、浮いているのが不思議な程の損傷だった。すでに退艦命令が出ているのだろう、行き足は止まっている。

前にいたのにここまでいられたのは、単純に運が良かっただけだった。

それでももう駄目だろうと西田は確信していた。

霧島が沈黙した事により、比叡を狙って飛来する砲弾の数が倍増した。

全て40センチ砲弾……。いや、後方の二隻のテネシー級も砲撃を開始した。

（二水戦の雷撃に驚いたようだが、敵の立ち直りが予想以上に早い。どうやら本艦の役目も……。）

それでも比叡は砲撃をやめなかった。

ただただ撃ち続けた。

その身が朽ちるまで……。

第二艦隊

旗艦重巡愛宕

「霧島より発光信号、（我航行不能、全主砲射撃不能により総員退艦す）」

艦橋に索敵員から報告が入る。

「比叡の状況はどうか？」

前を向いたまま問い返したのは、第二艦隊司令長官近藤信竹海軍中将である。

「は、大破炎上中なれどいまだ戦闘中です……」

索敵員は沈痛な面持ちで答える。

瞑目した後、近藤は

「直ちに離脱するよう発光信号。無理ならば退艦せよ、と」

「ハッ！」敬礼して索敵員は出て行った。

「敵巡洋艦群接近して来ます！右舷二 距離四千！」
新たな報告が入る。

「右砲雷戦！突撃せよ！」

第四戦隊愛宕を先頭に鳥海、高雄、第五戦隊那智、妙高、羽黒、足柄、第七戦隊最上、三隈、熊野、鈴谷と十隻の重巡が突入し、迎撃して来た米巡洋艦群と激しい乱打戦に突入した。

この巡洋艦主体の第3任務群司令はウィリアム・W・スミス海軍中将。

重巡チェスター、アストリア、クインシー、ミネアポリス、ポートランド。

軽巡ボイス、ヘレナ、サンディエゴ、ジュノーであった。

彼は第二水雷戦隊の魚雷発射後の混乱を最小限に押さえ、キャラガン少将の部隊をまとめる豪腕を発揮し、近藤部隊に向かった。

駆逐艦は全てまでは指示が回らず、どのみち重巡相手では荷が重いと判断もあり、突破した艦を狙わせるため後方に送った。

第二艦隊は戦艦群に打撃を与えるべく突破を図ったが、スミスの巧みな妨害に遭い、敵味方共に損傷する艦が続出した。

「手強い……」

近藤は唸った。マリアナの時とは明らかに違う。

劣勢にも関わらず果敢な相手であると、内心で称賛した。

この部隊を潰して置かねば、主力部隊がてこずり、離脱が遅れる事となるのだが。

すでに愛宕、鳥海、高雄、那智、妙高と半数が被弾し、敵にも同程度の損害を与えている。

しかし、必殺の魚雷も警戒されているらしく、タイミングが掴めない。

決定打を撃てぬまま、ズルズルと激しい砲撃戦は続いていった。

そんな状況下で

「比叡爆沈！」

突然の悲報が届くと共に

「第三主砲付近に敵弾命中！射撃不能！」

愛宕の艦橋に更なる被弾の報告が入る。元々、弾片防御程度の薄い砲塔、攻撃力のみを重視した設計であるため、被弾してしまえば使い物にならなくなるのは明白だった。

「これで前部主砲は撃てなくなってしまったか……」

前に三基ある主砲が沈黙した事により、諦めがついたのか、ついに近藤は魚雷発射の命令を下した。

「魚雷発射の後に直ちに離脱、二水戦と合流する」

歯痒い限りである。まさか格下相手に、これほど苦戦するとは予想だにしていなかった。

まさに痛恨事である。こうして発射された九三式魚雷は、高雄型（第四戦隊）、妙高型（第五戦隊）が各八本の五十六本と、最上型（第七戦隊）が各六本の十八本の計七十四本であった。

が、魚雷の航跡に反応して夜光虫が光ってしまうという、とんだ厄病神のせいで魚雷を見つけられてしまう不運にみまわれ、その多くを回避され、過敏な信管による自爆や誘爆したものによって、命中本数は至近距離にも関わらず二本と言う惨憺たる結果となり、近藤の自信を大きく傷付ける事となった。

もともと、命中したボイスとミネアポリスは、後に自沈処分となるほどの損傷を与えたものではあったが。

彼にとっては不運続きだった。

一方、近藤部隊がスミス部隊と乱戦を繰り返している間、比叡は孤獨な戦いに挑んでいた。

砲撃可能なのは三十五・六センチ連装主砲二基四門に対し、サウス・ダコタ、インディアナ、マサチューセッツの40・6センチ三連装主砲三基九門計二十七門、コロラド、メリーランドの同連装四基八門計十六門、カリフォルニアとテネシーの35・6センチ三連装主砲四基十二門計二十四門、合計六十七門を相手に挑んでいる。

絶望的な状況に置かれているにも関わらず、艦長西田大佐以下の士気は異常な程に高かった。第二艦隊旗艦からの発光信号も届いていなかった。

しかし、数の不利は否めず一分間に百発以上の敵弾を、撃ち込まれればどうしようもない……。

長い死闘の果てにサウス・ダコタに命中弾二発を与えたところで、40・6センチ砲弾が多数命中、比叡は艦体が第二主砲塔と第三主砲塔が断裂し、三つに折れながら、派手な火柱を上げて数秒と掛からずに水上から姿を消したのであった……。

国産初の超弩級戦艦のあまりに壮絶な最期だった……。

これを見た近藤は突破を諦め、魚雷の発射に踏み切るが、結果は先の通りとなる。

こうして第二艦隊の戦いは一応の終息を見せ、第二次ハワイ沖海戦は次の段階へと進んでいく。

真打登場

時刻 二二五

雷撃を敢行した近藤部隊が、西へと避退した事によりハワイ沖の喧騒は、静まりつつあった。

この第二艦隊の攻撃により、米艦隊の被害を列举すれば、以下の通りとなる。

沈没

重巡 サンフランシスコ、駆逐艦 グウィン、ヘルム、ハワード

大破

重巡 ミネアポリス、軽巡 ボイス航行不能

駆逐艦 ベンソン級ベンソン、ボールドウィン、ラフィー、ファールホルト

中破

戦艦 マサチューセッツ

重巡 チェスター、アストリア、クインシー

軽巡 ヘレナ、サンディエゴ

駆逐艦 ベンハム級、スターレット、ウィルソン

シムス級オ布莱エン、ハムマン、ウェインライト

ベンソン級ボイル、パーカー

サマーズ級サンプソン、デイヴィス

小破

重巡 ポートランド

軽巡 ジュノー

駆逐艦 ベンソン級メイヨー、マディソン、ウッドワース、ベイリー、バートン、コグラン、カーク、ローブ、マッケンジー
グリーブス級エリクソン、ニコルソン、イングラハム

対して第二艦隊の損害は、第三戦隊戦艦比叡、霧島が戦没。
第二水雷戦隊、陽炎級駆逐艦早潮沈没。

旗艦軽巡神通、親潮、夏潮、初風が大破。

朝潮、満潮、大潮、天津風中破。

黒潮、荒潮、時津風小破。

唯一、第十六駆逐隊（風で編成）所属雪風のみ被害無し。

魚雷が命中したものの不発と言う強運を発揮。

近藤部隊、重巡愛宕、鳥海、妙高、足柄、中破。重巡高雄、那智、羽黒、三隈、鈴谷小破。

日本側

沈没戦艦二、駆逐艦一

大破軽巡一、駆逐艦三

アメリカ側

沈没重巡一、駆逐艦三

大破重巡一、軽巡一、駆逐艦四

両軍共に、損害は非常に拮抗したものとなった。

日本側は雪風以外全て損傷を受けたが、当初の目的である敵艦隊を漸減し、混乱を誘発、主力部隊の突入を容易ならしめると言う内容を、完全に果たした。

戦艦比叡と霧島の喪失と言う、代償があつての事ではあるが……
米艦隊も戦艦群こそ、ほぼ無傷ではあったが、敵艦隊の突入を阻止せねばならない巡洋艦はほぼ全て被弾し、駆逐艦も半数以上が行動に何かしらの不具合を生じている。

ハワイ

オアフ島パールハーバー

太平洋艦隊司令部

「報告、日本艦隊と主力部隊が交戦、先程これを撃退いたしました」
地下にある作戦室に歓声が上がる。

「それで、戦果はどうだ？」

更なる報告を求めるのは、第14管区司令、ウォルター・K・ヒュース海軍少将。

ハワイ近海での哨戒、監視、救助任務を担当する沿岸警備隊司令官である。

陸海軍、海兵隊より地位は低い、第四の軍として一般に認識されており、開戦以後は太平洋方面の第14管区は太平洋艦隊司令部の指揮の下に置かれていた。

海軍艦隊の影に隠れてしまっていたが、太平洋艦隊の動向を探るために、オアフ島に接近した日本軍潜水艦、伊二八を発見するなどの活躍をひそかに見せていた。

「は、戦艦二、駆逐艦一撃沈、軽巡一大破確実、重巡三ないし四が中破です。」

対して我が方の被害は、重巡一沈没、重巡一軽巡一大破となっております」

「初戦で戦艦を撃沈するとは幸先がいい。このまま日本艦隊を撃退できれば、言う事はないな」

報告を聞いて、ヒューズは楽観的な見方をしていた。

大きな戦果を上げたパイ中將の活躍に称賛を送りつつも、司令長官ニミッツは複雑な心境であった。

（前衛の快速部隊に追従できるのは、日本戦艦の中ではコンゴのみ。

確かに小回りの利く厄介な艦が沈んでくれたのは、ラッキーだが、例のモンスター戦艦がいる主力部隊が控えている以上、簡単には…、いかんだろうな。

しかし、五分まで持ち込めれば、後は航空戦力で遙かに上回る我々の勝利は確定する）

ニミッツの勝算は航空機の圧倒的數量の差、であった。
現在のオアフ島に展開する航空戦力は以下。

海軍

戦闘機

F2Aバッファロー86機、F4Fワイルドキャット124機

攻撃機

TBDデバスター92機、TBFアベンジャー126機

爆撃機

SBDドーントレス88機

陸軍

戦闘機

P38 ライトニング 126機、P39 エアラコブラ 78機、P40
ウォーホーク 124機

爆撃機

B17 フライングフォートレス 72機、B24 リベレーター 63機、
B25 ミッチェル 124機、B26 マローダー 68機

海軍 516機、陸軍 656機、計 1172機を数える戦力が控える。
第6任務群の空母二隻を含めれば、1300機を超過する。
連合艦隊、第一航空艦隊主力空母十一隻の、保用機含めた全艦載機
590機の倍以上。

太平洋艦隊の本拠地を守る最後の砦であるとともに、切り札であつた。

戦法としては、優勢な戦闘機の数に物を言わせ、上空からの一航過による敵直掩機の殲滅、そして広く展開した一方向からの一斉雷爆撃による飽和攻撃で日本艦隊を殲滅しようとしていた。加えて、命中率を更に高めるべく新たに考案されたのが、スキップホッピングである。超低空から高速で侵入した爆撃機より、尾羽根を外した1000ポンド爆弾を、海面に投下。投下された爆弾は表明張力により、海面上を跳躍しながら目標へと高速で向かっていく。

魚雷より遙かに優速、かつ船体吃水線下に損傷を与える為、浸水により容易に撃沈にいたらしめる事が可能。

恐るべきはその命中率であり、放射線状に広がりかつ高速で接近するのは、非常に困難であり、標的艦ユタを用いた実験では、命中率63パーセントに達している。もっとも、回避運動はとっていないため、幾分か命中率が悪化するであろうが、従来の雷撃15パーセント、急降下爆撃25パーセント、水平爆撃10パーセントを上

回る、50パーセント程の確率であろうと試算されていた。

これらの機体はオアフ島に集中的に配備されている。地上撃破を避けるため、夜明けから直ちに空中避退を開始するし、島内各所には早期警戒レーダーSCR-270（改修型）の配備も進められており、死角らしき死角も存在はしていない。（史実において、真珠湾奇襲を探知するも味方機と誤認している）

まさしく世界最大の要塞と化していた。

同時刻

第二艦隊を撃退した米艦隊司令官パイ中將は、艦隊の再編に大慌てであつた。

何しろ無傷の艦艇は全体の四分の一程度まで低下しており、これらの傷ついた艦隊で戦力が倍近い、連合艦隊主力を迎撃せねばならないのだから。

「かなりやられたな。予想はしていたが、苦しい戦いだ……」

サウス・ダコタの艦橋で、パイは誰に言うでもなく、呟く。

「しかし司令。ニミッツ長官からは不利であれば後退せよ、との命令もありますので状況いかんでは……」

それを聞いていた参謀長ロバート・C・ギッフェン海軍少将が進言する。

「確かに言う通りだ。しかしだなロバート、更に敵戦艦の撃沈スコアは稼いでおかねば……」。

わざわざ新型戦艦三隻も配備されながら、何もせずに逃げ帰っては

軍法会議にかけられかねん」

（あの人間爆薬に、何をされるか分かったものではない……）
先程の言っている事とは違うが、どちらも本音である。

苛烈過ぎる性格から海軍内部で、ニトログリセリンと畏れられている、合衆国艦隊司令長官兼海軍作戦部長アーネスト・J・キング海軍大将の事であり、失敗する者には容赦なく更迭と言う名の制裁が振り下ろされる、温情と言った物とは無縁と思われる、まさしく海軍の悪魔のようなボスである。

できる限りの事をやるしかない。

奴に叱責される自分の姿が脳裏に浮かんだ。

「と、とにかくスミスの部隊を前衛に向かわせ、敵水雷戦隊を迎撃。我が戦艦戦隊は敵戦艦と反航戦に持ち込んで、一航過後に北東方向に離脱する。待ちの戦法は使えん」

「は、各部隊に通達いたします」

ギッフェンは、パイの離脱の言葉に多少の安堵感を抱きつつ、通信士官に内容を伝えた。

「旗艦サウス・ダコタより入電。第三部隊は敵艦隊に突入し、敵水雷戦隊の行動を妨害せよ。指揮は司令官の判断に一任する」

第3任務群旗艦ポートランド。

近藤艦隊を撃退したスミス中將は、旗艦をチェスターから損傷の少ないポートランドへと移していた。

第4群旗艦撃沈の為、指揮下には重巡四、軽巡四、駆逐艦二二と言う大所帯になっている。

電文を一瞥するとスミスは、それを丸めて投げ棄てた。

「簡単に言ってくれる。ボロボロの艦隊で、切り刻まれに行くようなもんだ！」

大声を上げると司令席の椅子を蹴り上げる。

「しかし司令……」

参謀長エドワード・P・サファ―海軍大佐が不安げに声を掛ける。

「ああ、分かっている。どうにもならなくなったら、すぐに後退するしかない。後は航空屋に任せるしかあるまい」

投げやりに現状を吐き出すスミスの気分は鬱屈していた。

そして、その時はやってくる。

「レーダーに感！艦隊接近中！」

圧倒的存在

時刻 二四五

第二艦隊の突入に遅れる事一時間。
ついに連合艦隊の主力部隊である、第一艦隊が到着した。
艦隊の陣容は極めて強力なものだった。

旗艦戦艦大和以下、第一戦隊戦艦武蔵、常陸（米戦艦ワシントン）
が山本五十六連合艦隊司令長官直卒であり、第一艦隊司令長官高須
四郎海軍中将の下に第二戦隊戦艦長門、陸奥、山城、日向と続く。
周囲には大森仙太郎海軍少将指揮の第一水雷戦隊軽巡阿武隈、四個
駆逐隊駆逐艦十三。

橋本信太郎海軍少将指揮、第三水雷戦隊軽巡川内、三個駆逐隊、駆
逐艦十一。

西村祥治海軍少将指揮、第四水雷戦隊四個駆逐隊、駆逐艦十四。

これに第六戦隊重巡古鷹、加古、衣笠、第九戦隊軽巡北上、大井が
加わる。

戦艦七、重巡三、軽巡五、駆逐艦三八。

対して米艦隊は戦艦サウス・ダコタ級二、コロラド級二、テネシー
級二。

重巡チェスター、ポートルランド、ニューオーリンズ級二

軽巡アトランタ級二

駆逐艦サマーズ級四、ベンハム級四、シムス級四、グリーブス級五、
ベンソン級八

戦艦六、重巡四、軽巡二、駆逐艦二十五。

現在の戦力比であるが、比較すると数の上では一応互角ではある。

連合艦隊

旗艦戦艦大和

第一艦橋で山本は腕時計を気にしていた。装甲に守られた夜戦艦橋ではなく、司令塔の最上部に位置する、この第一艦橋にいる事を山本は望んだ。

「残された時間は短い。決着を着けよう……」

山本はそう言うのと腕時計から目を離し、正面を向き直る。

第一艦橋は吃水線より四十メートル程あり、周囲を見渡すには良い場所であった。

「敵艦隊視認！重巡二、駆逐艦十以上、高速接近中！」
見張りより報告が入る。

「第三、第四水雷戦隊は突撃開始！敵部隊を迎撃、粉碎せよ！」
第一水雷戦隊は戦艦戦隊に続け！」

山本が指示を飛ばし、両水雷戦隊に発光信号が送られる。

第三水雷戦隊旗艦川内

「大和より発光信号！突撃せよ」

「いよいよ、我が腕の見せ所だ。四水戦に遅れはとらん！」

艦橋では橋本信太郎海軍少将が意気軒昂、やる気を漲らせた。

「機関最大！面舵！」

戦艦部隊の右を固めていた三水戦は、右に舵をきり前へと踊り出た。左にいた四水戦も遅れる事無く、戦艦部隊を挟んで同様の針路をとった。

まるで巨鳥が翼を広げるが如く、両翼に展開していく。

更に後方に控える第一水雷戦隊が戦艦部隊の右へ並び、第六戦隊重巡古鷹、加古、衣笠、第九戦隊軽巡大井、北上が左へと並び、三列縦隊を形成して一直線に米艦隊への突撃を開始した。

「敵巡洋艦隊の更に後方に敵戦艦を視認！常陸に酷似していますが煙突が一本。新型と認む！数は二、後方にコロラド型、テネシー型各二を確認！右二十、距離二万七千！」

「砲術長、諸元入力開始！第一、第二主砲交互撃ち方用意！」
艦長高柳儀八海軍少将が怒号の如く指示を出した。

一方、米戦艦部隊も敵戦艦の姿を捉えた。

「敵戦艦を視認、最前には例のモンスター……！！？」

後ろに同型艦一を確認！」

「な……、何？」

サウス・ダコタの艦橋司令席で報告を聞いたパイは狼狽した。

（馬鹿な、あのような巨艦をジャップ如きが、二隻もだと……）

「み、見間違いじゃないのかね？」

信じたくない。何かの間違いだとかパイは思いたかった。しかし、

「間違いありません！モンスタークラスの後ろに……、ノースカロラ

イナー！！

ナガトクラスを確認！」

パイは絶句した。まさに悪夢である。

（馬鹿な……）

事前の想定が完全に破綻した。46センチ砲搭載のモンスターにサウス・ダコタ級三隻を当てて、手数でこれを沈めようとしたが、マサチューセッツは浸水拡大により戦闘困難につき後退。

二対一ならば辛うじて勝負になるかと分析していたが、よもや二隻、しかもサウス・ダコタの準同型艦ノースカロライナまであるとは……。

質どころか量でまで遅れをとったパイは思考停止に陥った。

「司令、落ち着いて下さい！まだスミス中将の部隊が戦闘中です！我々が及び腰ではありません」

参謀長ギッフェンは放心状態のパイを鼓舞する。

「あ、ああ、済まない……、全艦砲戦用意！取舵20、機関最大！」

サウス・ダコタ以下の戦艦六隻と駆逐艦三隻は、前衛で戦闘中の艦隊を避けるべく、南へと向かう。

上空から見れば南西より連合艦隊が突入し、スミスの第3群がそれを迎撃、連合艦隊から二個水雷戦隊が両翼展開して戦闘中となっている。

二個水雷戦隊と戦闘中の第3任務群。
旗艦ポートランド

「このまま包囲するつもりか……」

日本艦隊の意図を、その艦隊運動から読み取ったスミスは、この不利な状況を打開するべく次の行動に移る。

「敵右翼が比較的火力が薄い。これを突破する！
このままでは集中砲火を浴びて壊滅だ！」

「予想通り、損な役回りですな司令」

参謀長サファア大佐が、今の置かれている状況に苦笑いを浮かべて話し掛ける。

「まったく、な……」

これで生き残れたら、長期休暇でももらいたいくらいだな」

「そうですなあ……」

艦橋ではそんなやり取りがあつた。

第3群は包囲攻撃を避けるべく、第三水雷戦隊の突破を決意する。

第三水雷戦隊旗艦川内

「敵部隊変針！こちらに突入して来ます！」

この動きを見て取った橋本は、わずかにほくそ笑んだ。

「あれほどボロボロで何ができる。飛んで火に入る夏の虫、だな。

西村さん、勝負は私の勝ちですね。

雷撃戦用意！目標、敵先頭艦に標準！」

彼方にいる四水戦を見ながら、橋本が指示を出した。

「は、雷撃戦！距離五千、敵速三十ノット、先頭艦アトランタ型！
全艦魚雷発射！」

艦長森下信衛大佐の指示の下、八本の九三式酸素魚雷が発射管より滑り出す。

後続する東雲、白雲、吹雪、白雪、初雪、磯波、浦波、綾波、天霧、朝霧、狭霧の十一隻から各九本、計百七本の魚雷がスミスの艦隊に

襲い掛かる。

「命中まで三百、二百……、弾着今！」

突如、先頭を進むジュノーの艦首に水柱が上がり、船体が大きく振動した。

第二艦隊の時と違い、遠距離からの雷撃でもなく、乱戦による発射航跡の発生もなく、敵の方からの接近であるため、今回の雷撃は高い命中率を誇った。

「ジュノー艦首付近に魚雷命中！」

ポートランドの艦橋からもその様子は見て取れた。

「やはり、例の魚雷か！」

回避行動を……」

スミスは指示を出したが、それは一転突破を狙ったスミス部隊に更なる悲劇をもたらした。

ジュノーの被雷したのを見た各艦長は各個に回避運動を展開したが、密集していたため、各艦艇の衝突が相次いだ。

そして衝突によって停止した艦に、魚雷が次々と命中。瞬く間に周囲は阿鼻叫喚の嵐となる。

「ジュノー艦首切断、航行不能！クインシーとイングラハム衝突、クインシー速力低下、イングラハム沈没！スターレット、ウィルソン衝突、スターレットに魚雷命中！」

悲報が続々とスミスの下に届く。

「行動可能な艦はどいつだ！？」

（まだだ、まだやれる！）

スミスはまだ諦めてはいなかった。

「本艦以外で戦闘行動に支障が無いのは、アストリア（重巡）、サンディエゴ（軽巡）、エレット、メイラント、アンダーソン、マス

ティン、ラッセル、ロウ、ウィルクス、フォレスト、マーフィー！
他艦は全て大破、戦闘不能！」

目を覆う惨状であったが、スミスの闘志は失われてはいなかった。

「やむを得ない、救助は諦めるしかあるまい……」

苦渋の決断を下す。

「司令……」

サファアはそれ以上を口に出す事はなかった。

「もう魚雷は来ない、敵右翼中央を突破する…、本艦に続け」

ポートランド以下、十二隻の残存艦は引き続き第三水雷戦隊へと突撃していった。

対して左翼に展開している第四水雷戦隊。

旗艦軽巡那珂

「橋本の大殊勲だ。出し抜かれちゃったな」

米艦隊が魚雷を受け、のたうちまわっている様子を見て、司令西村祥治海軍少将は苦笑いを浮かべる。

「あの位置からでは、同士討ちの可能性もある。取舵、やり過ぎした後、敵艦隊を追撃する」

慎重な策を西村はとった。

一方、右翼側では

「敵艦隊、なおも突入して来ます！距離二千！」

川内の艦橋に絶叫が響く。

「し損じたか！取舵一杯！撃て！なんとしても止めるお！」

スミスの第3群は、単縦陣をとっていた第三水雷戦隊の左側から、真横に突っ込んできたのである。

それを阻止するべく、川内は左へと舵を切り、主砲をポートランドへと向けた。

しかし、それも空しく中列に位置していた駆逐艦は、その突撃の餌食となる。

駆逐艦初雪

「敵ポートランド型、本艦左40°、距離：二百！」
血相を変えた見張り員の声が木霊する。

「回避！面舵！」

艦長神浦中佐が指示を出す直前に、アストリアが放った8インチ砲弾が艦橋と艦尾を吹き飛ばした。
炎と黒煙を上げて、初雪は急激に速度を落としていった。

目の前で速度が落ちた初雪にポートランドが衝突。艦尾をえぐり取られた初雪は、総員退艦も令されぬまま艦首を持ち上げて、波間へと没した。

更に第3群は死に物狂いとなって、周囲の駆逐艦に向けて発砲を続け、白雪、磯波、浦波、綾波が相次いで被弾。

一度に各艦に火柱が上がった。とくに浦波には重巡の砲弾が命中したのであるう、他艦よりも被害が大きかった。

だが、第三水雷戦隊も多数の命中弾を叩き込んでおり、すでに損傷艦が出ていた第3群の被害も、すでに甚大なものとなりつつある。

被害が少ない艦をまとめた部隊ではあったが、それもいよいよ息切れが見えている。

連合艦隊

旗艦戦艦大和

「敵戦艦戦隊、取舵。戦闘海域を避けつつ、南へ向かいます」

見張りより報告が入る。

「いかん…、このままでは三水戦が挟撃される」

黒島先任参謀が呻く。

「長官、第六戦隊と第九戦隊を応援に回しましょう。我が部隊は敵戦艦の頭を押さえます」

表情を変えないまま、宇垣参謀長が進言する。

「そうしよう。後は任せる」

山本は頷くと、戦況のみを注視していた。

「は、高柳艦長！」

「了解しました。速度まま、面舵二十！」

そのやり取りを聞いていた高柳儀八艦長は、針路を東へと向ける。

そして、左舷に展開していた重巡古鷹、加古、衣笠、軽巡北上、大井の五隻が三水戦への援護へと向かった。

砲炎の先に……

時刻 三四

「撃ち方始めッ！」

「ファイアッ！」

ついに日米主力戦艦部隊による砲撃戦が開始された。

FD-Mark5 射撃制御レーダーと、それに連動したMark1 射撃管制コンピューターを装備した、サウス・ダコタではあったが、途中に入り乱れて交戦している、日米両軽快部隊が邪魔になり、その優位を発揮できずにいた。

逆に、夜戦を御家芸としている大和以下の戦艦部隊としては、目視による測距に重きを置いているし、しかも満月下の砲撃戦であるため、その利点を最大限に活かす舞台が仕立てあげられていたのである。連合艦隊旗艦大和のマストには、（皇国ノ興廃ハ此ノ一戦ニアリ各員奮励努力セヨ）を意味するZ旗が……

掲げられていない……

米太平洋艦隊の殲滅を目的とする本海戦においては、実に不可解な事であった。

このZ旗が先頭を行く、連合艦隊旗艦に掲げられる時、帝國海軍の人間の士気は爆発的に高められるのであるのだが、それがされていないのは最高指揮官である山本の意味が働いているからに他ならない。

「敵戦艦戦隊、針路二四七、速度約二十ノット。速度同じく本艦針路 八七、針路交差後一七」

「第一射、右にそれた。左に2°、仰角16°に修正」

「射撃盤よし！」

「第二射、撃てえい！」

再び大和の主砲が唸りをあげ、九一式徹甲弾がサウス・ダコタへと撃ち出された。

第一戦隊二番艦武蔵

「大和砲撃開始です！」

「始まったな。砲術長、敵先頭艦に照準！大和に遅れるんじゃないぞ！」

夜戦艦橋で艦長有馬馨海軍大佐が命じた。伝声管を通して了解の威勢のいい応答があった。

「武蔵の初陣だ！ド派手な一撃を叩き込んでやれ！」

有馬もこの一戦に血がたぎっていた。下士官、兵に至るまで全てである。

「各主砲射撃準備よし！」

「射撃方位盤よし！」

「撃ち方始めッ！」

武蔵からも主砲が発射された。

戦艦武蔵は、陽炎作戦発動直前の八月五日に就役し、完熟訓練もほとんどする事無く本海戦に参加しているが、マリアナ沖海戦で撃沈

された扶桑乗員と、大破し修理と共に改装中の伊勢乗員と大和から、各課若干名の乗員の移乗により、どうにかこうにかやり繰りしているのが内情であり、常陸ワシントンに関しても、使用方法、表記、その他云々の違いにより、まともな運用などこのような短期間でできようはずもなく、現段階においては、無いよりはマシではあるが、決定的な役割を果たすには到底至らないとの認識であり、頭数以外の何物でも無かった。艦長以下も伊勢の乗員が宛てられており、指揮も非常な困難を伴っていた。

米軍側に見れば、そのような事まで考えられる状況などではなく、そこに存在していると言うだけで、見た目通り巨大な精神的圧力を加え続けるのであるが、艦長池田勇海軍大佐にしてみれば、至極厄介な事であった。

「砲術長、諸元入力はまだ終わらんか？」

池田艦長が催促するが、

「ハッ、申し訳ありません。何分手間取っております……」
しかたない、と内心ため息をつきながら、前方の大和と武蔵に視線を送る。

「長門、続いて陸奥、砲撃開始です！」

艦長は歯ぎしりをしながら、苛立ちを募らせていた。

「諸元入力完了！ 射撃準備よし！」

「全門斉発でいくぞ！ 撃ち方始めッ！」

本来初撃は、各砲塔が一門ずつ射撃して、発射間隔を狭め修正していく、交互射撃を繰り返し、挟叉弾きょうご弾着が敵艦を挟んだ状態になった時点から、全門一斉射撃へと移行する形式を帝國海軍は重視していた。

砲弾の着弾には散布界と言うものがあり、そう範囲内に砲弾が落着く。挟叉弾が出れば、その散布界内に敵艦を捉えた事になり、必然的にその中に撃ち込める砲弾が集中され、命中率が向上する、と

言った具合であり、最初から闇雲に撃ったところで命中弾は望むべくもないはず…、であつた。

日米戦艦同士の砲撃戦が開始された頃、第三水雷戦隊を突破した第3任務群を率いるスミス中将は状況の変化に愕然とする。
右舷からは戦艦部隊から分離した巡洋艦五隻が接近しつつあつた。

「まさかこれほど敵戦艦が近くにいたとは……」
さすがのスミスにも焦りが出ていた。

眼前の水雷戦隊に気を取られ過ぎて、その後方に連合艦隊主力部隊が回り込んで来ている事に気付くのが遅れた。
すでに潰滅に近い第3任務群にしてみれば、この状況で重巡を含む増援に対処するのはもはや不可能となっていた。

「司令、これ以上の戦闘は無意味です。引き時では……」
参謀長サファアが力無く進言する。

「やむをえんな。これほどの敵を相手によくやった…、と言えば言い訳に過ぎんが、参謀長の言う通りだ。これ以上は自殺行為、務めは十分果たした……」

スミスは艦橋の風防に歩み寄り、周囲を見渡した後、ようやく命令を下した。

「現状を鑑み、継戦はもはや不可能と判断…、我が第3群は本海域を離脱、撤退する！」

司令部以下の乗員にとっては、待ちに待った命令だつた。
ポートランド以下、アストリア、サンディエゴ、駆逐艦六隻は戦場から離脱を図つたのであつた。

この脱出行は日米両艦隊に新たな局面へと誘う。
逃げ遅れた重巡チェスター、クインシー、艦首を切断されたジュノー、そして駆逐艦八隻は必死の抵抗を試みたが、第三、第四水雷戦隊に包囲され、四方からめった撃ちにされていたのである。

連合艦隊戦艦部隊と砲撃戦を演じている第1任務群。

旗艦戦艦サウス・ダコタ

「第3群、…壊滅！残存艦後退します！」

悲鳴に似た上擦った声で索敵員が報告する。

「スミスの部隊がこうも簡単に敗れるとは……」

思わずパイは呟く。

砲撃戦開始からわずかな時間で、戦況は目まぐるしく変化していた。

「この状況はまずいです！敵艦の足止めする艦がいなくては、我が艦隊は孤立します！」

参謀長ギッフェンが進言した。

「分かっている！針路変更、取り舵だ！後退する！」

サウス・ダコタ、インディアナ、コロラド、メリーランド、テネシー、カリフォルニアの六隻の戦艦も、戦闘開始早々に撤退行動に入った。

奇しくも米戦艦部隊が取り舵を切った事により、一時的にはあったが、日米両戦艦部隊が同航戦に移行、砲撃戦は佳境に入る。

そして、ここに至り大和の砲撃が十一射目にしてサウス・ダコタを挟み込んだ。

連合艦隊
旗艦戦艦大和

「敵先頭艦に挟まりました！」

前二門のみの交互射撃の為、挟又弾を出すのが遅れたが、同航戦に移行した事により、第三砲塔も射撃可能となった事により、その砲撃は一気に苛烈なものとなった。

「第三砲塔、射撃用意よし！」

「全門斉発！撃てえい！」

今までと桁の違う衝撃と爆炎が大和の艦体を覆った。大和の斉発は余りの衝撃の為、一砲塔三門中左右二門が先に発射、タイミングをずらして中砲を発射していた。その衝撃波は至近ならば、人を圧死させるにたる殺傷力を持っていた。

撃ち出される砲弾は口径46センチ、長さ2メートル、重量1.4トンに及び、命中すれば、大和以外に耐えうる艦は現時点では存在しない。他の米英仏独伊列国、新鋭戦艦の装甲を一撃で貫通する攻撃力と防御力は、まさしく化け物と呼ばれるに相応しい。

マリアナ沖海戦において、ワシントンの40.6センチ砲弾を弾き返し、逆にノースカロライナを爆沈させている。米海軍にとっては恐怖の対象であった。

「敵巡洋艦艦隊、潰走の模様！残存艦を三水戦、四水戦包围中！」

砲撃の轟音の中、大和の艦橋にもこの報告が入る。

「戦況は我が方が圧倒的に有利！一気に叩き潰しましょう！」

黒島先任が興奮気味に話す。

「包囲中の艦の殲滅も時間の問題です。一水戦も投入しては？」

宇垣参謀長が無表情のまま進言する。傲慢で滅多に表情を変えない宇垣を、人は陰では黄金仮面と揶揄していたが、相変わらず淡々としている。

もはや敵快速部隊の脅威は無くなった事で、戦艦部隊の護衛についていた、大森仙太郎少将の第一水雷戦隊が予備戦力として浮いていたのである。

「よからう。深追いはさせるなよ」

宇垣参謀長と黒島先任の進言を受け、山本は釘を刺しつつもこれを認め、米戦艦へ向け一水戦を突撃させた。

その間、山本の意識は別の場所にあった。もちろん参謀長、先任の両名も承知していたが、目の前の戦いにだけ固執している向きがあった。

大和の主砲が一斉射撃に移行したのを機に、武蔵よりも先に練度で勝る長門が、第五射で挟叉弾を出した。

「敵二番艦に挟叉しました！距離約二万！」

「全門斉発！」

まあまあ、だな。三射以内で出したかったが、まだ向上の余地がありそうだ」

長門の艦橋で艦長矢野英雄海軍大佐は一応、合格点としていたが、まだ満足のいくものではなかった。

長門は41センチ連装主砲塔を八基搭載した戦艦であり、大正時代に計画されていた、八八艦隊構想の計画一番艦であり、すでに艦齢二十年に達し、旧式艦となりつつはあったが、数々の改修を重ね新鋭戦艦に引けをとらない性能を維持しており、日本戦艦内の中では一、二を争う乗員の練度を誇っていた。

そして、矢野の目には前に行く武蔵と常陸が、ていたらくに見えてしまっていた。

「一体何をしている…、いくら強力でも、当てられなければ意味はないぞ」

前の二艦に苛立ちつつ、悪態をついていた。

その後も長門は、二番艦インディアナに向けて、多数の至近弾を送り続けた。

長門の同型艦陸奥も状況は同じであり、更に後方に続いている日向、山城は口径が35・6センチであるため、40センチ砲搭載艦サウス・ダコタ級、コロラド級に有効打にならないとの判断から、最後方に位置するテネシー級テネシー、カリフォルニアに対して砲撃戦を展開していたが、敵もその点は同様であり、砲数も山城、日向がそれぞれ35・6センチ連装六基十二門に対して、テネシー級35・6センチ三連装四基十二門と、砲の数は同等である。いまだ命中弾は出せずにいたのではあったが、初弾は意外な艦が出した。

正確さを欠いていた常陸の砲撃が、目標を大きく逸れ、二番艦インディアナに命中した。

常陸の砲撃は異常な程、散布界が広く、予期せぬ二度と起こらぬラッキーヒットを叩き込んだのであるが、同時に常陸にとってありがたい事態を迎えていた。

戦艦サウス・ダコタ

「インディアナに敵弾命中！損害は軽微の模様！」

「……目標を変更する。三番艦ワシントンに照準！針路0-4-5」
パイは標的を、大和から武蔵の更に後ろの常陸に変えた。

当然、大和、武蔵両艦に致命傷を与えるには至らない、との判断によるものだった。

ノースカロライナ級は当初、第二次ロンドン海軍軍縮条約の締結を

見越して設計されていたため、当初35・6センチ砲の搭載が予定されていたが、日本が軍縮条約を批准しなかったことから、急遽35・6センチ四連装砲塔を40・6センチ三連装砲塔に換装した経歴から、装甲は薄いと言う弱点が存在していた。

これにより常陸はサウス・ダコタ、インディアナ、コロラド、メリーランドの四艦からの集中砲火を浴びせられる事となる。

しかも、レーダー射撃の利点が活かされ始めた事により、砲撃は激しいものとなりつつあった。

戦艦常陸

「至近弾四！初弾より挟叉！」

今まで弾着がほとんどなかった常陸の周囲に、いきなり水柱が多数上がった事に、池田は驚きを隠し切れないでいた。

「本艦に狙いを定めてきたようだな…、レーダー射撃ってやつか」
「やたらと正確な射撃に、これはまずい、と心中穏やかじゃない事態である。」

やや程度は下がるが、同様の装備を搭載されているはずなのだが、悲しいかな、まだ使いこなせていないどころか、通常の砲撃もいまだ正確ではなかった。

「もう少し耐えれば、奴らは変針して、前の主砲は撃てなくなる。それまではどうしようもない、な」

米戦艦は離脱を図るべく、緩やかな弧を描いて、北東に向かっていくため、東へと針路をとっている第一、第二戦隊と同航戦を行っていたが、間もなく敵艦隊は背を向けようとしていた。常陸にとって今が堪え時であった。

「敵艦、砲撃目標変更！三番艦常陸！」

今まで砲撃目標となっていた、大和への砲撃がぱたりと止んだ。

今のところ、サウス・ダコタ、インディアナの砲弾が、各二発ずつ命中、一発は左舷中央に命中したが、四一ミリの分厚い装甲に弾かれ、損害無し。

一発は第一砲搭付近に命中したが、こちらもたいしたことない被害だった。

もう二発は非装甲部の艦首及び艦尾に命中、艦尾は水上機射出機が薙ぎ払われ火災が発生、艦首付近は外板に亀裂が入り、浸水が発生し、最大速度の二七ノットは出せなくなったが、戦闘行動に支障は無い。

だが、やられてばかりではなかった。

ようやく大和の主砲もサウス・ダコタを捉え、命中弾をその身に叩き込む。その数は二。

大和の主砲弾はサウス・ダコタの右舷中央の装甲を貫いて、内部で運動信管が作動。缶室の一部を破損させ、凄まじい火柱を上げさせた。

もう一発は後部上位構造物に命中し、これを倒壊させたのであった。

「敵艦に命中弾有り！火災発生中！」

大和の艦橋内はようやくの命中弾に沸き立った。

「敵艦隊、尚も取舵を切ります！」

これを聞いた高柳は

「なんだ、ケツを向けて逃げ出しよった。これからって時に……」

悪態が零れ出した。

「敵艦隊に動き、敵四番艦以降直進します！」

新たな驚く内容だった。

三番艦メリーランドの艦長は、司令部の後退命令を跳ね退けた。この状況では全艦の後退は不可能と判断し、敵の動きを止める行動に出たのであった。

コロラドは命令に従ってサウス・ダコタ、インディアナに続いて後

退していた。

テネシーとカリフォルニアもメリーランドに続き、同様の行動に出たため、戦艦同士の間航戦は続けられる事となった。

この間に、第一水雷戦隊は迂回して後退している戦艦三隻の後を追っていた。

戦艦部隊の右舷を並走していたため、大きく迂回する事を余儀なくされていた。

米戦艦部隊が分離した事により、砲口はメリーランド以下の三隻へと向けられる。

「目標コロラド型二番艦、撃ち方始め！」

大和以下、全戦艦の主砲がメリーランドに向け発射される。

周囲に上がる水柱は比叡、霧島の時の比ではないくらい巨大であった。

メリーランドは水柱に覆われ、視認が不可能な状態だったが、容赦の無い砲撃が続けられ、たちまちのうちに命中弾を叩き出す。

命中弾一号はやはりと言うべきか、長門であり、陸奥も続いて命中弾を出した。

かつて、ネイバルホリデー（海軍休日）に、日本の長門、陸奥、アメリカのコロラド、ウェストヴァージニア、メリーランド、イギリスのネルソン、ロドネイの七艦を、最強の戦艦、ビッグセブンと呼んでいたが、すでにウェストヴァージニアは深淵なる海底へと没し、そして今、メリーランドも海の藻屑となろうとしていた。

そして数分後、水柱の中から巨大な炎と黒煙が上がり、水柱がおさまった時には、メリーランドの姿は海上にはなかった。

本海戦における、アメリカ側の戦艦喪失の第一号だった。

「コロラド型爆沈！」

「次、後方テネシー型に照準！」

メリーランドを撃沈し、各艦は次の獲物に砲口を向ける。

狙われたのは、テネシーである。

テネシーとカリフォルニアも回避行動を各個に行い、砲撃戦を展開していたが、最旧式であるテネシー級が集中砲火を浴びせられては、言わずもがなである。

回避行動をとっていたため、多少は時間がかかったが、戦艦部隊以外にも追撃から戻った第六、第九戦隊、離脱した戦艦部隊を追撃中の一水戦の砲撃を加えられたテネシーとカリフォルニアは、為す術無く撃沈される。

これによって、オアフ島南海域の戦闘は終息となる。追撃を敢行しようと言う意見が、参謀達から上がったが、山本はこれを退け後退命令を出したのであった。

時刻 三四五

連合艦隊主力第一艦隊は、艦隊を取り纏め、先に離脱した第二艦隊と合流すべく、北西へと針路をとっていた。

米太平洋艦隊の覆滅と言う目標の大半は達成している以上、敵地に留まるのは得策とは言えない。

第一、在ハワイ航空戦力は未だ健在であり、もしもに備え可能な限り離れなければならなかった。

艦内は大戦果に沸き立っていたが、山本は一人別の場所に向かっていった。

大和電信室

「邪魔するぞ」

突然、扉が開いた事にヘッドホンを着けた若い通信士が、怪訝な表情を見せたが、その人物の顔を見て、血相を変えて立ち上がり慌て

て敬礼する。

「長官！無線封鎖中なのに、どうしてこちらに？」

連合艦隊司令長官…、こんな場所に来るような人物では無い。
通信士の素直な感想である。

「ああ、気にせんで続けてくれ。間もなく無線封鎖は解かれる。しばらく待たせてもらうぞ」

通信士にしてみれば、その命令を下すのはあなたではないのか？と言いたくなったりしてみるが、当然言えるはずもなく、山本が幕僚を一人も連れずにやって来たのは、異常であった。

何かを言う訳でもなく、ただいるだけなのだが、重苦しい時が流れる。

………

そして、その重圧は突如として終わりを迎える。

通信機が無線の発信を傍受したのである。

「長官！電信入りました！」

第五艦隊より本艦宛で、トラトラトラ、我奇襲二成功セリ……！？

続いてタカタカタカ……」

これを聞いた山本は小さく

「勝ったな……」

とだけ呟いた。

太平洋に翻る旭日、凱歌高らかに

一九四二年八月二十七日

現地時間 四二

オアフ島

パールハーバー

米太平洋艦隊司令部

「先程、カリフォルニアからの通信が途絶えました。パイ中将の前線部隊は壊滅、敵艦隊は戦闘を停止し離脱した模様」

数枚の電文を持った情報参謀が地下の作戦室に、沈痛な面持ちで報告しに来た。

「…ご苦労。損害はどの程度になっている？」

司令長官ニミッツは作戦室中央の巨大な机に広げられていた、ハワイ周辺が描かれた地図を見つめたまま、尋ねてきた。

その表情は険しい。

「現在、我が軍の被害は戦艦サウス・ダコタ、インディアナ、マサチューセッツが中破、コロラド小破、メリーランド、テネシー、カリフォルニア沈没、巡洋艦ミネアポリス、サンフランシスコ、チェスター、クインシー、ジュノー、ヘレナ、ボイス沈没、ポートランド、アストリア、サンディエゴ大破、駆逐艦十八隻沈没、六隻大破、三隻中破……」

報告している参謀の声も暗くなる。

「無事なのはレイの第6任務群だけか……」

空母部隊は無事であったが、主力部隊は、まさに壊滅に近い打撃を受けていたのである。

「敵は追撃しなかったのは、不幸中の幸いと言うしかないな」
初老の作戦参謀が呟く。

「何を言われます！幸いなどとは言えません、これでは戦闘不能ではないですか！」

階級は同じだが、若い航空参謀が声を荒げる。

「そう言うなトーマス、敵の方が圧倒的に有利だったのだ。仕方ないさ……」

司令部内が陰鬱な空気に包まれる中、ニミッツはその空気を振り払うべく、そう話す。

「もう間もなく夜が明ける。そうすれば、我が航空戦力の全てを持って、日本艦隊にこちら以上の出血を強い事ができる。我々は、この程度で膝を折る訳にはいかない」

海上戦力を喪失してもなお、ニミッツの闘志が衰えはしなかった。まだ奥の手がある。

（ここまでは予測の範囲内だ。後は……）

ニミッツが思考している最中、突如、作戦室の扉が乱暴に開け放たれ、若い士官が飛び込んで来た。

「何事だ！？騒々しい！」ショート少将がそれを怒鳴り付けたが、この様子はただ事では無い。

「第11管区司令部より入電です！敵航空部隊が侵攻中！」
息も絶え絶えに士官が報告する。

「馬鹿な！？11管区だと！」
作戦室内の空気が凍りついた。

「間違いでは、ないのだな？」
ニミッツはあらためて確認したが、士官は間違いを否定した。

「平文で二回繰り返しました。間違いありません」

「長官、これが事実だとすれば……」
ショートが恐る恐る尋ねる。

「見事に我々は嵌められた訳だ。奴らは陽動だ」

（だが戦力の分散は各個撃破を招き兼ねない。戦術的には下策、主

力が生きて戻れねば意味は無い……！？だから空母を切り離したのか！）

「いかん！オアフ島の全軍に警戒体制！」

ニミッツの判断は早かったが、その命令は無意味なものとなる。

現地時間 六三

西経百三十度、北緯三十八度地点

第五艦隊

旗艦空母瑞鶴

「よもやここまで無事辿り着けるなど、奇跡ではないでしょうか…

…」

若い参謀が感嘆の声を漏らす。

「死んで来いと言われたような任務だったが、これで山本長官の悲願は達成される」

その隣で人間離れの体格を誇る、第五航空戦隊司令原忠一海軍少将も同様であった。

「山本長官に聞いた時には、わしも耳を疑ったがね……」

同じく発言しているのは、第五艦隊司令長官細萱茂四郎海軍中将だった。

史実において第五艦隊は北方担当であったが、その地域が重要では

なかったため、さしたる活躍もないまま終戦を迎えていたが、今作戦最大の榮譽を手にする事となった。

「まあ、疑いたくもありませんわな。たったこれだけで米本土を叩けなどと、正気の沙汰ではありません」

周囲の艦を見ながら原が言った。

瑞鶴以外の艦は片手の指の数に収まるのである。

第五艦隊

第五航空戦隊

空母瑞鶴、翔鶴

第八戦隊

重巡利根、筑摩

第三八駆逐隊

駆逐艦秋月、照月

……

これだけである。

そして、第五艦隊が展開しているのは、アメリカ西海岸最大の海軍工廠を誇り、中核都市であるサンフランシスコの沖、三百哩の海域であり、すでに攻撃隊は目標に到達していた。

約十分前、サンフランシスコ三十哩沖の洋上

「総隊長、現在のところ敵影は確認できませんが、本当に大丈夫な

んでしょうか？」

先頭に行く、九七式艦上攻撃機の操縦士澤田義雄大尉が、中央偵察席に座る嶋崎重和海軍中佐に問い掛ける。

「ここまで来ないと言う事は、敵の目は完全にハワイに向いている。そしてこの規模ならば、ハワイからの編隊だと誤認してもおかしくない」

嶋崎はそう話す。

「そのようですね。おっと、見えました…、米国本土です」

嶋崎は澤田の報告を聞いて、前方を確認すると水平線域に大陸の陵線がかすかに見えてきた。

感慨無量…、一言で言い表すならそうなのだろうが、緊張と興奮が体を支配していく。

さすがに敵の本土であるだけに、どれだけの敵機の襲来があるか、想像もつかない。

もし敵が十分な警戒をしていたならば、たかが空母二隻など、あっという間に、海の藻屑になるのは明白であった。

そうこうする内に、陵線はどんどん大きくなり、目の前に迫ってくる。

「もうそろそろ見えるはずだな……」

嶋崎はある物の姿を探した。昔、話しに聞いていたそれを目に焼き付けておこうと考えていた。今のところ敵機の襲来も無く、物見遊山気分が湧く順調な飛行であるが、それも終わりを迎えようとしていた。

「総隊長、見えました！
金門橋です！」

「おう、カメラを持って来てないのが残念だな」

そう言うの後部座席の柳田一飛曹に短く、

「ト連送」と命じる。

全軍突撃せよの意である。

「目標、サンフランシスコ海軍工廠！周囲に敵影無し、我奇襲に成功せり！」

嶋崎は意を決して命令を下した。

五航戦攻撃隊八十機は、九九式艦上爆撃機五機が、ゴールデンゲートブリッジ金門橋の破壊に向かい、残り七十五機はサンフランシスコ南東に位置するハンターズポイント海軍基地付属造船所を叩くべく、市街地の上空を突破する。

サンフランシスコ市街地

夜が明けたばかりのこの大都市は、まだ目覚めてはいなかった。

人の動きはほとんど無く、出歩いているのは、新聞配達の少年ぐらいなもので、まだ市民は家で朝食の支度をしている時間だろう。これが昼間であれば、ケールカーと自動車が坂の道を往来し、金融街として知られるここでは、ビジネスマン達が忙しく歩き回り、仕事に精を出しているはずである。

戦時中のピリピリした空気以外は、戦場から遠く離れたこの地では、普段と変わらない平穏な一日が始まるうとしていたのだが、状況は一変する。

市民の耳に入ったのは、朝に似つかわしくない、エンジンの轟音だった。

当初、軍の演習でも始まったのかとみんな思ったのか、とりたてて混乱はおこらなかったが、後から手の付けられない事態に陥る事となる。

ハンターズポイント海軍基地

天然の良港、サンフランシスコ湾に面した、西海岸随一の規模を誇るベツレヘム造船所を敷地内に持つ、広大な施設は、まさに海軍基地の中でも重要度が極めて高いと言える場所であつたのだが、その割には些か甘い警戒体制と言わざるをえなかつた。

攻撃を受けるその時まで、自分達が襲われるなどと夢にも思つていなかったのだから……

「レーダーに北西方向より反応があります」

基地内のレーダー施設で若い監視員が、上司に報告している。

「ああ？北西つつつたら市街地じゃねえか？」

だるそうに上司は対応する。面倒事が嫌いそうな若い中尉である。

「ですから変ではありませんか？こんな早朝からの訓練飛行の連絡は、陸軍からはありませんでした」

心配した監視員は上司に確認してみた。

「今日は何も無かつたはずだな。レーダーの故障かもしれんが、一応上に報告しておく。ちゃんと点検しておけよ」

中尉が出て行つた後、配線の確認やら内部の確認やらなんやらいろいろやってみたが、スクリーンの反応は消えなかつた。

そして気付いた時には全てが手遅れとなつていた。

「水平爆撃針路固定。目標米海軍基地施設内、建造中艦艇、距離二千！」

嶋崎隊長機が目標を定め、突入を開始。

列機もこれに倣い各々の目標に向け、攻撃態勢に入つた。

嶋崎は爆撃窓を覗き込み照準を修正していく。

「ちよい右、行き過ぎ、戻し、ちよいちよい、はゝい、よーそろー」

「距離五百、三百……、今！」

「投下！」

搭載されていた八十番（八百キロ爆弾）が機体から離れ、重量物から解放された事により浮遊感が生まれる。

巨大な爆弾はサンフランシスコ湾に突き出た、埋め立て地の先端部にある、一際大きな乾ドッグに停泊している戦艦ペンシルベニアに吸い込まれ、巨大な爆炎を噴き上げ、船体がへし折れた。第三主砲弾薬庫誘爆、搁座であり、近代化改修を受けていたペンシルベニアは、そのまま廃棄処分されるに至る。

他にも数ヶ所の乾ドッグで建造中の駆逐艦であろう艦艇に向け、九式艦爆が急降下爆撃を敢行する。

さすがに基地内の対空火器が撃ち上げ始めたが、まばらな対空砲火で止められるはずも無く、停止したしかも妨害もない目標に命中させるなど、搭乗員の技量を持ってすれば、造作もないことであった。駆逐艦の船体に、二十五番（二五キロ爆弾）の急降下爆撃はあまりにも強力であり、全ての艦艇がキール（竜骨）を叩き折られ、ドッグの中で搁座した。

ドッグで建造中の艦艇のみならず、警備艦艇である駆逐艦五隻も攻撃対象となる。

乗員はまだ乗り込みが終わっておらず、当直の兵士が、機銃に飛び付き必死の形相で対空射撃を続けていた。

「急降下爆撃隊は俺に続け！あいつらを喰うぞ！」

艦爆五機がまだ動き出していない駆逐艦に襲い掛かり、ドッグで搁座した艦艇達と同じ運命を辿る事となる。
据え物斬りである。

水平爆撃隊の九七式艦上攻撃機三十三機は基地施設、燃料タンクの破壊へと向かい、八十番、五十番を目標へと投下する。

三平方キロにも及ぶ敷地は、瞬く間に炎と黒煙に包まれる。内一機が投下した一発が倉庫らしき建物の屋根を突き破り、内部で炸裂。直後、凄まじい衝撃波と閃光を放ち、巨大な火球が上空へと舞い上がった。

数百トンに及ぶ弾薬の誘爆であった。そして倉庫や周囲の建物を薙ぎ払い、爆発によって巻き上げられた鉄骨や破片が、周辺地帯数キロに鉄の雨となって降り注いだのである。

幸いしたのは、早朝で人がいなかった事であったが、ハンターズポイント海軍基地は、文字通り壊滅し、再建までに相当の時間を費やす事となる。

余談ではあるが、史実において広島、長崎に投下された原爆リトルボーイとファットマンが、巡洋艦インディアナポリスに搭載されたのは、このハンターズポイントであり、核防衛研究所が置かれた最大の核開発研究施設であったのだが、そんな事など知るよしもなかったのであるが。

攻撃を受けるに至り、ようやく空襲警報が発令、サンフランシスコの市街にサイレンが、鳴り響いた。

そこで市民が目にしたのは、サンフランシスコの象徴であるゴールデンゲートブリッジが無惨に寸断された姿と、ハンターズポイント海軍基地より高々と上がる黒煙と、そして上空を悠々と飛行してい

く、鮮やかな日の丸を描いた銀翼の鳥達であつた。

そして市街は混乱の渦に堕ちた。いや、サンフランシスコだけでなくどまらなかつた。カリフォルニア、西海岸、アメリカ全土へとその波は広がっていった……

そして、前線のハワイにおいても予想だにしていな事態が発生するのだつた……

忍び寄る影、姿無き荒鷲

時刻 四三

オアフ島北西

ハレイワ飛行場

決戦前夜、まさしくその言葉が当て嵌まる状況の基地内では、夜明けの出撃に向けての準備が着々と進められていた。

駐機場には重爆機群が並べられ、各機に爆弾、魚雷が積み込まれていく。

ハレイワ飛行場は開戦時は、比較的小規模な基地施設しか持っていなかったが、ハワイ防衛策として、航空機の大増派に対応するために、拡張が進められた事により、かなりの機体を駐留させえる機能を備える。

ハレイワ飛行場配備機

爆撃機

B17フライングフォートレス22機、B24リベレーター17機、
B25ミッチェル35機

戦闘機

P38ライトニング38機、P39エアラコブラ36機、P40ウ
ォーホーク35機

計183機が展開していた。陸軍機の約三分の一である。

陸軍機はハレイワの他に、オアフ島中央部のホイラー、南岸パールハーバーの沿岸ヒッカム、東部ペローズ、カネオヘに展開していた。

海軍機は真珠湾に浮かぶフォード島、南西部バーバースポイント、エワに集結していた。

各基地でも、準備に追われ整備員達は大忙しだった。

搭乗員達は出撃に備え、駐機場の近くの待機所でポーカーに興じるなどして、待つ時間を潰していた。

出撃前の景気付けに、いつもより豪華な夜食が出されたりもして、意気は上がっていた。

「聞いたか？海軍の奴ら、ジャップにのめされて逃げて来たらしいぜ」

外に出されたひとつの円卓で、小さなランプの明かりの周りで、四人でポーカーをしている内の一人が、おもむろに口を開いた。

「マジか、ハッ情けねえ。猿共に負けるなんざ、恥だぜ恥」

一番若い機長がそう吐き捨てる。

「これじゃ海軍なんていらねえな。奴らの予算をこっちの給料に回してほしいもんだぜ、まったく」

散々な言いようだが、海軍の人間がいたら、間違い無く流血沙汰になりそうな事を、平気で話し笑い声を上げているのは、第8航空軍の爆撃部隊のパイロット達であった。

当初、第8航空軍は、ナチスと戦うために編成され、英国に派遣されるはずだったのだが、太平洋の戦局が著しく悪化している理由から、急遽派遣は取りやめとなり、本土で錬成されていた経緯を持つ、技量の高い集団だった。

「無理無理、海軍はなんせ大統領のお気に入りだぜ。艦隊の一つや二つ潰されたって、すぐに元通りだ」

最初に言い出した男が、ないないと手振りで表現する。

「それはそうと、お前はどいつを喰うんだ？
俺はナガトかムツをいただく」

「俺は例の上玉だな。海軍の奴らが騒いでる化け物女を殺る。ダイヤのフラッシュ、俺の勝ちだ」

若いパイロットがそう言って手札をオープンする。

「チッ、ついてんなあ。そのつきが実戦で約に立つといいんだがな」
負けた三人が賭け金を払って席を立った。

「勝つさ。ジャップの戦艦を沈めて、世界で最初の栄誉を掴んでやる」

戦闘航行中の戦艦を撃沈すると言うのは、未だ成し遂げられていない快拳であり、航空関係者の悲願である。

この若いパイロットも、その快拳を達成し名を上げたいと願っていた。

彼は軍人として最高の栄誉、ジェネラルを目指していた。戦果を挙げる事こそが、それに近づく道だと信じていた。

今回のハワイ進出が、又とない千載一遇のチャンスが訪れた、と内心でほくそ笑んでいたが、現実是非情である事を思い知らされる。

オアフ島北部

カフク岬レーダーサイト

この地には陸上対空早期警戒レーダーSCR-270が設置されている。

真珠湾奇襲攻撃時、南雲機動部隊の空母から出撃した第一次攻撃隊を、二百キロ手前で発見した実績が買われ、より信頼性を高めるために改修が行われ、三百六十キロの範囲が探知可能となっている。

カフク岬は真珠湾奇襲の前例から、複数機設置され、誤作動、誤探

知があつても対処できるよう、万全のバックアップが為されていた。カフク岬の他に、日本軍の進攻が予想される南西部バーバースにもレーダーサイトが構築され、こちらも同様である。

「反応はあるか？」

責任者であるケインズ少佐が、レーダーのスクリーンを見ている兵士に問い掛けた。

「今のところは何も…、静かなものです」

返つて来たのは聞きなれた答えだった。

「予測通り夜明けが勝負時か。敵を撃退できるか否かは我々に掛かっている。どんな些細な事でも見逃すなよ」

ケインズは命じた。実際、夜間で頼みとなるのはレーダーとなる。夜間索敵の為、PBYカタリナが二機、北方と南西部を偵察したが、日本機動部隊の発見には至っていない。南西部では日米主力艦隊戦が終結し、日本艦隊を追跡中との報告が入っている。

てつきり北から接近しているものと踏んでいた、ケインズにしては少々肩透かしであった。

後はカタリナの誘導に沿って、攻撃隊を送り込めば、空母部隊と合流を図る戦艦部隊も、纏めて始末できると考えていた。

でなければ、戦艦部隊が真珠湾への突入を画策しても、なんら不自然ではない。奴らは守りに入ったのだと……

後はどちらが先手を打てるか、時間との勝負となる。その点、三百キロ圏内の探知範囲は貴重だった。

その距離があれば、迎撃機を発進させるに十分である。

発進する機体に限度がある空母に対して、基地の滑走路にはその制限があまりない。

史実においても、基地航空戦力は空母部隊にとっては難敵であり、

空母の敵は空母にしか務まらない訳ではない。それに空母間対決は基地攻略ないしは上陸戦の際に発生しやすい。

ないしは奇襲攻撃の場合に限られていた。珊瑚海しかり、ミッドウェーしかり、マリアナしかり、ガダルカナルの基地を巡っては第二次ソロモン、南太平洋海戦が生起している。

空母の方が自由度は高いが、事前に準備がされている基地を相手にした場合、空母が敗れる公算は大きい。今回に限って言えば、戦力、戦術、技術、あらゆる面を駆使して万全の態勢で挑んでいる以上、敗れるはずがなかった。

真珠湾奇襲撃退の再現を目論んでいた。敵の規模は以前の比ではないが、それはこちらも同様だ。

（やれる事は全てやっている。今日は長い一日になりそうだ）

ケインズは建物の外に出て、海を見つめた。空に雲は無く月の明かりを反射し、輝く海の光景は幻想的だった。

九ヶ月前には、日本軍機がこの空を圧していたなどと、想像がつかない静けさであった。

「ケインズ少佐！」

黄昏れていたケインズの元に、若い通信士がやってきた。

「何かあったのか？」

訝しげにケインズは問い掛けた。

「艦隊司令部より、全軍に第一警戒態勢が発令されました！」

「何だつて！？レーダーには何の反応も……。まさか……」

これを聞いた時、とんでもない事が起こる嫌な感じが、頭の中から離れなかった。

「少佐！」

今度は建物の中から、監視員が飛び出して来た。

「早くスクリーンを見て下さい！」

慌ててレーダーの表示されている画面を覗くと、信じられない反応があった。

「誤作動ではないな？」

ケインズは監視員に問い掛けたが、

「正常に作動していました……」

と否定した。

「他のレーダーも確認しろ。周波数を変えて確認を急げ！」

そう命じながら、電話の受話器を取る。

「私だ。そちらの状況は？……そうか、わかった……」

間違いではなかった。

もう一度、受話器を取ったケインズは別の場所に電話をかける。

「対空警戒班です。日本軍機の接近を探知。すでに基地上空に達しつつあります……」

してやられました。今からではとても……」

その時、ケインズは本土が奇襲攻撃を受けた事を知らされた。

そして、オアフ島には空襲警報のサイレンが鳴り響いた。

このサイレンが、第一航空艦隊によるオアフ島航空撃滅戦の始まりだった。

奇襲再び

一時間前

第二航空戦隊

空母飛龍 飛行甲板

艦橋下に攻撃隊搭乗員が整列し、司令官山口多聞海軍少将が出撃前の訓示を行っていた。

「これまで激しい訓練によく堪えて来た。全てはこの時のためである。

前代未聞の作戦であるが、これが成った時、諸君らは最高の飛行機乗りである事を、世界が知るだろう！

敵は！？」

「一刀両断！！」

搭乗員は一斉に答える。

「その通りだ！もはや何も言う事は無い…、貴君らの健闘を祈る！」

山口は搭乗員達に敬礼し、搭乗員達も答礼する。

「総員かれッ！」

搭乗員は一斉に愛機に乗り込み、飛龍は加速を始める。赤城、加賀、蒼龍、龍驤、飛鷹も同じく加速していく。

「風上に向け機関全速！発艦用意！」

そして旗艦赤城より発艦の発光信号が送られ、各空母から攻撃隊が出撃していった。

.....

時刻 四三

オアフ島

ハレイワ北西

満月の月明かりに照らされながら、発動機の爆音を辺りに撒き散らして、ひたすら一直線に飛行する一団がそこにいた。

第一航空艦隊を出撃した、第一次攻撃隊だった。

第一航空戦隊

空母赤城

零式艦戦九機、九九式艦爆二機、九七式艦攻一二機

計三三機

空母加賀

零式艦戦九機、九九式艦爆二三機、九七式艦攻一四機

計三六機

第二航空戦隊

空母蒼龍、飛龍

零式艦戦、九九式艦爆、九七式艦攻各九機

計五四機

第四航空戦隊

空母龍驤

零式艦戦八機、九七式艦攻十機

計一八機

空母隼鷹

零式艦戦六機、九九式艦爆九機、九七式艦攻九機

計二四機

総計一六五機

真珠湾奇襲攻撃第一次攻撃時（一八三機）より、若干数は少ない。第五航空戦隊の新鋭主力空母翔鶴、瑞鶴が米本土奇襲攻撃に回されているために、搭載数の少ない龍驤と改装空母である隼鷹が代わりの主力である理由から、機数の減少は避けられなかった。

他にも隼鷹の同型艦飛鷹、第三航空戦隊の軽空母鳳翔、祥鳳、瑞鳳も加えれば、二百機を超える編隊も組めるのであるが、今回に限ったの第一次攻撃隊は、帝國海軍最高の練度を誇る搭乗員が充てられているが故であつた。

第一次攻撃隊

総隊長淵田機

淵田美津雄海軍大佐……

真珠湾奇襲攻撃時、第一次攻撃隊の隊長を勤めていたが、山本五十六と同じく、十二月八日に運命を狂わせられた一人。

今作戦の前に大佐に昇格、一時盲腸炎を患い、療養を兼ねて、内地勤務である海軍大学教官の辞令を受けていたが、第一航空艦隊司令部、特に同期である源田実海軍大佐（同時に昇格）からの要望と、本人たつての意思によりこれを辞退し、人事部もこれを了承、赤城航空部隊隊長のまま現在に至る。

山本だけでなく、淵田にとっても、ハワイは因縁浅からぬ地であり、多数の部下を失ったこの場所を、自らの手で叩き潰さねば、収まりがつかなかった。

「全機、ちゃんと付いて来ているな？」

淵田は後部席の電信員、水木一飛曹に聞いた。

「見える範囲内での脱落はありません。他は判りかねます…、皆の技量を信じましょう」

時刻は夜明け一時間前、まだ西の空に傾いてはいるが、満月の輝きは失われてはいない。

月明かりと、前に行く護衛零戦隊の隊長機である、板谷茂海軍少佐の零戦三二型の垂直尾翼下に取り付けられた、赤いランプの光を目印に編隊は飛行している。

そして、零戦のすぐ下には波高くうねる海面が横たわっている。急旋回すれば、翼端が触れてしまう程に…、高度は二十メートルと言った所であろうか？

（前回とは比較にならないな）と、淵田は回想する。

盲腸炎の手術と療養で、淵田が現場に復帰したのは六月の終盤だったが、その頃には、トラックとリンガ、タウイタウイ泊地に別れ、各航空戦隊が夜間発着艦と超低空飛行の訓練が、昼と夜の区別無く交代で行われ、月に一度の満月の夜は、パラオ近海に集結し、合同演習を行う徹底した不眠不休の努力が為された。

一カ所に固まっていれば、防諜上の理由から敵に察知されかねない。

航空燃料の消費の観点からも、補給の作業短縮に一役買っている。それでも燃料消費は莫大な物であり、海軍が動員できる給油艦は全

て動員し、来るべきハワイ決戦へと向けて準備が為されてきた。

全ては十二月八日真珠湾奇襲と、五月二十七日ドゥーリットル日本本土奇襲の雪辱を晴らさんが為、血の一滴と言われる石油を、まさに血が滲む努力を持って訓練し、神業と言える程の技量を搭乗員に能えたのである。

「板谷機バンクを振りました！ 奇襲成功、上昇開始！」

操縦士が前方の様子を伝える。

「一航艦、連合艦隊司令部にタカタカタカ打電」

淵田は電信員に命じる。

水木一飛曹は通信機のキーを叩き始める。

臃げだったオアフ島の稜線が一気に近付き、海岸のわずか手前で、一番乗りの板谷機が急上昇を始めたのを機に、全機がこれに続いた。高度二千まで一気に翔け上がる

海面との激突と言う、息の詰まるような、極限の緊張から解放された搭乗員達は、冷や汗をかきながら安堵のため息を漏らした。

（ハワイよ、我々は戻って来た……！）

「突撃開始！目標ハレイワ、ホイラー、カネオヘ、ベローズ、ヒツカム、フォード、エヴァ、バーバース各航空基地！祭の始まりや！」

淵田が大声を上げる。水木は了解と無線機のキーを叩く。

ト・ト・ト……

全軍突撃せよ、を表すト連送だ。

（今回も頼りにしてんね、シゲさん）

先頭を切って突入する零戦を淵田は頼もしく見つめる。

オアフの鷹……

板谷茂少佐の通り名であり、オアフ島上空の航空戦において、迎撃に上がった戦闘機を圧倒的劣勢の中にあって、旧式P26ピーシユーター、P36ホークを含むとは言え（P40ウォーホーク主体約一五機からなる編隊だった）四機を撃墜する驚異的な活躍を見せつけ、その後のマリアナ沖海戦においても、第一次攻撃隊に随伴護衛零戦隊を率いて暴れ回り、直掩のF4Fワイルドキャットを一方的に撃破し、その勇名を更に轟かせた。オアフ島上空の戦闘で淵田が生き延びたのも、板谷が率いていた零戦隊の獅子奮迅の働きに救われていたからに外ならない。板谷はそれ以来、その呼ばれ方で航空部隊の尊敬を集める撃墜王として、赤城の制空隊を率いてきたのであった。

第一航空艦隊
旗艦空母赤城

左舷中央にそびえる島型艦橋。マストには中将旗がハワイの強風に靡いている。

小さな艦橋内には、第一航空艦隊司令長官小沢治三郎海軍中将、同

参謀長草鹿龍之介海軍少将以下、司令部参謀、艦長青木泰二郎海軍大佐以下、艦橋要員も詰めているため、さながらすし詰めの状態を示している。

時期は八月であるため、普段から温暖なハワイだったが、中は異様な暑さとなっている。

第一次攻撃隊が赤城の飛行甲板から飛び立つて、小一時間経つ。

艦橋内は奇襲成功の打電を待つ間、ジリジリと、期待と苛立ちを含んだ、張り詰めた空気が支配している。

前司令官、南雲忠一海軍中将が、年功序列に固執した人事により、慣れぬ機動部隊指揮官を拝命して、開戦早々の失態を演じたにより、山本はこれ幸いと、機動部隊指揮官最有力候補であった、南遣艦隊司令官小沢中将と交代させる強行策を海軍省に申し出た。

南雲本人も初めての作戦失敗により、空母機動部隊の指揮にすっかり自信を無くし、予備役編入まで口にするほど弱気になっていたが、山本はそれを認めず、南遣艦隊司令長官として汚名を注ぐ機会を与えた。

おりしも、時は太平洋艦隊の来襲に平行して、蘭印領インドシナでは、米英蘭豪連合艦隊（いわゆるABDA艦隊）が活発な動きを見せ、これを廃除せねば、南方資源帯の確保もおぼつかない事態だった。

だが急遽の人事であったが、半ば偶発的であったが、この人事は極めて有効に作用し、太平洋艦隊とABDA艦隊双方の撃滅を果たした。

それにより、軍令部を中心とした一派から、作戦と人事に絡む一連の出来事に対して、山本の責任問題を問う声が上がっていたが、この成功により立ち消えとなった経緯があった。軍令部と連合艦隊の確執は、裏で修復不可能なまで悪化していた。

しかも、山本の半ば独断に振り回されて、今作戦を承認するに至った軍令部内の焦りと、蔑ろにされている恨みは相当根深いものがあった。

……

南雲から小沢に司令官が変わっていたが、司令部内は変更されておらず、史実では航空参謀源田中佐らの意見を、採用するのみに終始していた南雲に代わって、小沢が機動部隊の主として、赤城に腰を据えている。

小沢としても、今回の件に関しては、相当な無茶をしていると考えていた。

（満月の夜を利用した、母艦からの発艦と超低空大規模編隊飛行、か。

奇襲を成功させるのに、陽動しながら奇襲をくわえるなどと、これならば真つ向からぶち当たった方が、よほど楽じゃあねえか山本さん……）

暑さで滴り落ちる汗を、手の甲で拭う参謀達を尻目に、小沢は送り出した攻撃隊搭乗員達の身を案じた。

確かに正面から正攻法で攻めれば、甚大な被害を被るのは理解している。が、リスクがあまりにも高すぎるのも、また事実である。

当初、この無謀と言える作戦を発案した山本に、若い頃から数々の無茶をやらかして来た小沢も、反対を唱えたが、山本は

（対米戦を始める事自体がそもそも無謀である。今以外、ハワイと米本土を叩く好機はありえない。しかし、ハワイの防備は連合艦隊を壊滅させるに足るであろう事は、容易に想像できる。

ハワイと共倒れでは、アメリカは絶対に講和には応じないだろう。無理は承知の上である。若い者達だけに無駄死にはさせぬ）

米本土奇襲攻撃は、絶対に秘匿せねばならぬ事情から、当事者である第五艦隊の人間以外、詳細を知らされたのは小沢唯一人である。山本はその事を、海軍の作戦を統括する軍令部に、ハワイ作戦の

みの発動を要求し、米本土奇襲については一言の断りも無く、ハワイ作戦に投入するとしていた第五艦隊を、独断で東へと向かわせていた。

頑迷な軍令部が、投棄的作戦であると反対するのは、火を見るよりも明らかであった。例えば本作戦が成功しようが、山本は海軍史上の汚点となるのは確実だった。その汚名をかぶり、全てをなげうつ覚悟をもって、対米講和を成さんとしていた。

米軍による帝都奇襲を許してから、最初に小沢が山本に会った時、その覚悟を山本は小沢に打ち明けた。この戦、絶対に長引かせてはならぬと……

「攻撃隊よりタカタカ力受電！奇襲成功です！」
待ちに待った報告が、赤城の艦橋にもたらされた。

「おつし！これならば鎧袖一触殲滅じゃ！よくやってくれた！」
航空参謀の源田実海軍大佐が、跳ね上がりばかりに喜びの声を上げる。

「米軍よ、我が航空戦隊の力、思い知るがいい……」
参謀長草鹿龍之介海軍少将も、感極まり涙を浮かべながら、上を見上げそう呟いた。

参謀達も歓声を上げる中、小沢だけはただ舞い上がる訳にはいかなかった。

「第二次攻撃隊、準備が整い次第直ちに発艦、オアフ島を完全に叩く！」

水偵射出、全周索敵警戒実施！空母の行方を搜索せよ！ 今からが正念場じゃ！ここで米軍と決着を着ける！」

鬼瓦とあだ名される小沢らしい大声で、艦橋内の空気を一掃する。油断するのはまだ早い。帝都を奇襲した敵機動部隊と、在ハワイ航空戦力を完全殲滅しないままでは、この戦いは終わらない。これが成った時、初めてアメリカ、いや現政権を牛耳るルーズベルトが

交渉に応じる可能性が見えて来る。

いや、日本人をイエローモンキーと蔑視している、ルーズベルトを始めとした、白人優越主義を抱く者達は、簡単には屈服させるのはできないであろう……

この一戦において、それらの考えを打ち砕かねばならない。その為にも完全なる一方的勝利を収める必要がある。

海上戦力の殲滅は山本が自ら主力部隊を率いて、太平洋艦隊の戦力の大半を叩き潰しており、作戦は小沢率いる機動部隊の活躍に、委ねられる事となったのであった……

オアフ島航空撃滅戦

小沢率いる第一航空艦隊は、前日の日没後、オアフ島の南西に集結していた、連合艦隊から分離、ひそかに北上。

オアフ島と、その西に浮かぶカウアイ島の間位置する、幅百キロ程のカウアイ海峡を突破して、オアフ島の北西海域に移動した。南西海域に留まっていれば、夜間索敵に掛かる可能性が十分にあった。

実際米軍の偵察機カタリナは、南西から突入した山本の艦隊に釘付けになり、北方索敵機が飛び去った背後から、小沢機動部隊が北上する構図となった。

まさか目の前を敵艦隊が横切るなどと、予想してはならず、海岸からの視認は出来なかったため、完全な奇襲が成立した。敵の側面を擦り抜ける、意豹を突いた大胆な行動だった。

奇襲は寡兵がするものであつて、大艦隊が行うような事ではない。全ての行動が極めて異質と言えた…。

「そろそろホイーラー上空だな。しっかり受け取れよ…、照明弾投下！」

オアフ島の中央付近まで到達した編隊先頭の、零戦に搭乗する板谷少佐が、投下索を引いた。機体下部に取り付けられていた照明弾が、機体から切り離され落下を始める。

数秒後、照明弾は炸裂。基地周辺をまばゆい光で覆った。

「ジャップの奇襲だ！ 対空砲、機銃は迎撃！ 戦闘機は上げられ

る機は全て上げる！むざむざやらせるな！」

基地司令は命令を出した。

「一体どうなっているんだ！こんな話しは聞いていないぞ！このままじゃ全滅だ！」

第8航空軍司令カール・スパーツ陸軍少将ががり立てた。夜間奇襲などと寝耳に水である。

「レーダーがあつたはずだろう、索敵員は居眠りしていたのか！？」

（こんなはずではなかった、何故気付かなかったのだ！？）
照明弾の輝きに導かれて、日本軍機が降下してくるのが、スパーツの目に映った。夜の明かりに群がる虫のように……

「おい、見えるか…？
すげえ数やで……」

九七式艦上攻撃機の偵察席から、攻撃隊指揮官淵田大佐が、同乗している二人に問い掛けた。

滑走路の一端には、胴体が二つに分かれた、双発単座戦闘機P38ライトニング、単発単座戦闘機、恐らくP40ウォーホークであるような機体が、四十機余り、プロペラを回して、今にも飛び立たんとしていた。

そして駐機場には、四発重爆撃機B17フライングフォートレス、同じく四発重爆、双尾翼が特徴のB24リベレーター、双発双尾翼のB25ミッチェル、双発単尾翼B26マローダーが、ズラツと並んでいるのが見えた。

「冗談じゃあらへんな。爆撃機の展覧会なんて洒落にもならんな。叩ききれんぞ……」

淵田は悪態をついた。

見る限り概算で三百は越えている。味方であるならば、まさに壮

観なのだろうが、敵の戦力である。

現在淵田が率いているのは、赤城と龍驤の攻撃隊、零戦一七機、九九式艦爆一二機、九七式艦攻二二機、計五一機であり、攻撃隊全体の約三分の一が、このホイーラー飛行場に集結、攻撃を加えんとしていた。

「緩降下。奴らに上がられたら前の二の舞や！ここで引導渡しちやる！
行くで！」

淵田の搭乗する艦攻は降下しながら、滑走路を叩くべく照準を合わせる。

「戦艦用のおつておき、地べたに使うにゃあ勿体ねえが、大奮発だ！
喰らえや」

滑走路破壊用に淵田機に取り付けられていた、戦艦の装甲をもぶち抜く八百キロ徹甲爆弾が、高度千五百で九七艦攻の細い胴体から切り離され、空を裂く音と共に落下していった。

「糞ツタレが！ 舐めた真似しくさりやがつて！ 行くぞ！」

P40戦闘機隊の一番機が、滑走路を滑るように加速し、飛び立つ瞬間…

重い金属音と共に、風防の外に金属の破片が飛び散り、視界が傾いた。

パイロットには、一体何が起こったのか理解出来なかった。その直後、機体は横転し、目の前には愛機の見馴れた翼が迫って来た。

（何で……？）

コマ送りのようなスローモーションで迫るそれを、ただ見ながらパイロットは、自分の運命が終わりを迎えた事を理解出来ずにいた。

照明弾の白い輝きの中で、閃光と共に、オレンジ色の爆炎が吹き上がる。

先頭の単発機が巻き添えとなって、火の纏った鉄屑と化し四散した。後方に続いていた戦闘機群は前で起こった爆発に混乱し、避けようとして滑走路から飛び出す機や、隣の機と衝突する機、あさつての方向を向いて停止してしまう機が続出し、離陸が困難な状態に陥った。滑走路には十メートル程の大穴が開き、周囲には、コンクリートの破片が飛び散っていた。

「命中、命中です！ 奴らダンゴになっています！ これでしばらくは離陸不能です！」

後部座席で水木一飛曹が、後ろを振り返りながら、大声で報告する。

「よっしゃ！ 間一髪やな……」

淵田も風防から、燃えカスとなった米軍機を見ながら、（俺もいずれあなるかしらんなあ……）と思い、小さく胸で十字を切った。

淵田機に続いて、艦攻隊艦爆隊も次々と突入を開始、突撃開始時に淵田が言ったように、派手な祭の比喻に当て嵌まる、焰と阿鼻叫喚が巻き上がる攻勢となった。

「滑走路の機体は零戦に任せて、艦爆は駐機場の大型爆撃機を叩く！ 続け！」

九九艦爆隊は、整然と並ぶ重爆撃機群に狙いを定める。

九九式艦爆隊を率いるのは、千早猛彦海軍大尉である。

真珠湾奇襲攻撃では、第二次攻撃隊にいたため、辛くも難を逃れられた。赤城艦爆隊隊長の江草隆繁海軍少佐は、敵戦闘機の餌食と

なり、オアフの空に散った。

千早にとつて復讐戦であり、普段は温厚な表情の彼も、この時は違っていた。

今回の作戦で、彼は攻撃隊誘導の任務を買ってでたが、一航艦司令部は、千早の支那戦線重慶爆撃における、敵地単独偵察と戦闘機誘導の実績を高く評価しつつも、奇襲である第一波攻撃の打撃力を可能な限り高めたい意図から、板谷少佐にその任を譲る事となった。打撃力を更に高めるため、零戦も全て爆装（六十キロ爆弾）となっており、空戦の可能性は考慮されていない。夜間戦闘では同士討ちの危険が大であるため、突入時に敵機が離陸していた場合のみ、と考えられた……

「動いている機を優先、急降下！ 一機も上がらせねえ！」

千早機は駐機場から、滑走路へ向かう爆撃機に向けて、一気に角度をつけて降下を始めた。

（四発機だが要塞じゃない、新型か……。性能は未知数だが、ま、飛べなければ動く鉄屑だが、な）

心の中でほくそ笑んだ。飛び立つ前ならば、飛行機は役に立たんむしろ……

「対空砲火確認！ 周囲にかなりの数がいる模様！」

脅威はこっちの方だ。航空基地は最重要施設、海岸なら艦砲射撃で叩く事も可能だが、島の中央に位置するこのホイラー基地は、地上侵攻以外では、航空攻撃しか叩く方法が無い。

当然、敵もそれに対応した防衛態勢を整えている事は、想像できていた。奇襲で対応が遅れたのであろうが、それも最初の一時のみ。それらの発射された砲弾が、先頭を切って急降下する、千早の操縦する九九式艦爆の周囲で炸裂する。機体に振動が伝わり、砲弾の小さな破片が当たってくるのが分かる。完璧な奇襲であるにも関わらず、濃密な弾幕に千早は舌を巻いた。

しかし、その弾幕を気にする余裕など無い。千早は操縦桿を倒し

続ける。

「高度八百！」

後部座席の榊添二飛曹が高度を知らせる。

「投下用意！」

そう言いながら、千早は左手で投下レバーを握った。

「……高度四百！」

「撃つ！」

レバーを引いた直後、二十五キロ爆弾が機体から離れ、滑走路へ向かうB24目掛け、一直線に落下を始める。

爆弾が無くなった事で機体が浮き上がる。そして、機を引き起こし高度を上げると、後部座席から「命中！」の音が響いた。

「なんて事だ…、私の部隊が……」

目の前で繰り広げられる光景に、スパーツは絶句していた。

第8航空軍は紛れも無い、爆撃における最精鋭重爆部隊である。

それが動く間も無く、一方的に撃破されている状況は、まさに悪夢である。

だが悪夢の次に飛来したのは、憎悪と怒りであった。

「おのれええ！」

基地の司令室から飛び出したスパーツは、右往左往している歩兵達に近付くと、「寄越せ！」と、一人の歩兵からM1ガーラントを奪うと、攻撃を続ける九九式艦爆に向かって発砲した。

「司令、危険です！ お下がってください！」

参謀が止めようとしたが、逆にスパーツに殴り倒された。

「邪魔をするな！ 奴ら、生かしては返さん！ 撃って撃って撃ちまくれ！」

スパーツの激が効いたのか、歩兵達は手にした武器を手に応戦を

始めた。もつとも自動小銃で狙っても、当たるものでもないし、ましてや墜ちるなど、パイロットに偶然命中するぐらいではあったのだが……

司令塔の近くで銃撃しているこの一団を、照明弾を投下し終え、敵航空機の出撃を可能な限り遅らせる目的で、かなりの低高度まで降下して、機銃掃射をおこなっていた、零戦に搭乗する板谷少佐が発見していた。

「人間相手に機銃をぶつ放すのは、多少気は引けるが……、これも戦場の運命や。往生せいッ！」

二十ミリ機銃弾は、既に滑走路で身動きの取れない戦闘機に向けて、全弾撃ち尽くしており、機首の七・七ミリ機銃は残弾が残っていた。七・七ミリ機銃弾では、航空機に対しての打撃力は望めないが、人間ならば話しは別である。板谷としては、堂々とした空戦を希望するところではあったが、まともにやり合うには、あまりにも数の差がありすぎた。不本意だが仕方ない。

板谷は、操縦桿に付いている発射レバーを握った。機首の銃口から、スパーツに目掛け、弾丸が発射された。

「敵機、接近して来ます！ あれは……、ジーク（零戦二一型）！ 兵の一人が板谷機を見ながら叫んだ。

「違う！ 翼の形状が違う、新型だ！ 司令、退避を……」

違う兵士が叫んだが、スパーツが気付いた時には、数人の兵士が、血飛沫を上げて倒れ伏し、その光景が一瞬停止した写真のように見えたが、次の瞬間、右胸部に違和感が走った。

何がどうなったか、分からぬまま、視界はそのままゆっくりと上に上がって行き、その視界の中を銀色の翼が飛び去る姿が映った。

彼の意識は、そこで闇へと沈んだ……

先に攻撃が始まったハレイワ飛行場は、加賀攻撃隊、零戦九機、艦爆一三機、艦攻一四機の計三六機が、滑走路及び格納庫、駐機場を叩き潰し、稼動可能な機もまだかなりあったが、一応行動不可能な状況に追い込む事に成功する。

陸軍航空隊は、現時点で戦闘力の大半を喪失した。あくまで現時点で…、あるが。

南岸フォード、ヒツカム、バーバース、エヴァに向かった二航戦の蒼龍隊、飛龍隊と、東岸ベローズ、カネオヘに向かった隼鷹隊の行く手には、距離の関係から、数機の戦闘機が舞い上がっていたのであった。

現時点での損害

日本側

零戦三二型一二機

九九式艦爆九機

九七式艦攻七機

計二八機

アメリカ側

P38ライトニング28機

P40ウォーホーク36機

B17フライングフォートレス24機

B24リベレーター18機

B 2 5 ミツチエル 2 4 機

B 2 6 マローダー 1 7 機

計 1 4 7 機

全て地上撃破である。

機数の上では、いまだ全体の二割にも満たない打撃だった。

しかし、機銃掃射によりパイロットを殺傷した事も含めれば、多少なりとも戦果の上乗せとなり、稼動機も落ちるはずだった。

いまだ予断の許さぬ厳しい戦いが続いている中で、戦場から姿を消した一団がいた事に、気付く者は皆無だった……。

海軍の闇（前書き）

短いです。

海軍の闇

現地時間二三四五

内地

帝都東京

霞ヶ関海軍省

ハワイと約二十時間の時差がある為、日付は間もなく二十八日を迎えようとしていた。霞ヶ関の官庁街は、時間も時間であるため明かりが点いている建物は、まばらなのに対し、通称赤レンガからは煌々と明かりが零れ、壁面の色を浮かび上がらせていた。

その海軍省内では、昼過ぎに連合艦隊より打電された、ニイタカヤマノボレに、軍令部は情報の収集に躍起になっていた。敵前で無意味な打電をしようものならば、自らを曝す利敵行為が成立する。

しかし、連合艦隊は無線封鎖により、別働隊の第五艦隊共々、ハワイ近海から行方不明の状態であり、これが表沙汰となれば、海軍の立場が非常に危うくなる事を意味する。陸軍に知られるなど、以つての外である。

事実上、日本国内における政策を掌握する、帝國宰相東條英機と彼に組みする一派の専横に歯止めをかけなければならぬ立場である、海軍としては、容易ならざる立場に立たされる。

そして、その連合艦隊より伝えられてきたのは、米本土奇襲成功の打電である。

「由々しき事態となりましたな。軍務局を預かるあなたとしても、立場を決めておかねば、後々面倒な事になりかねません」

海軍省二階に位置する各局の部屋が列ぶ、廊下の一番端の、人が

わざわざ行かない場所で、二人の人物が人目を憚るように話している。

「貴様、一体誰の指示で動いている？ いや、どこまで知っているのだ？」

末次大將か、山本大將か？まさか、殿下じゃあるまいな？」

この問い掛けに、まさかと手を振って答える。

「あのお二方はまだ何もご存知ありません。かく言う私も、知っているのは岡さんと大して変わりませんし、南方艦参謀副長の私がここに來たのも、南雲さんの指示でたまたま、ここにいただけの話です。」

言うならば、天佑でありましょう。我々にとっても、日本にとっても。一部の方々には、泥を被ってもらう事になるでしょうがね」
あっけらかんと笑うこの男を見て、軍務局長岡敬純海軍少將は、内心冷や汗をかいた。

軍務局は海軍内における軍備、編成、政策、制度に関する全てを管理する部門であり、局長は海軍省内において大臣、次官に次ぐナンバー3の位置付けとされている。

ちなみに、南方艦とは臨時編成だった南遣艦隊が、発展的解消したものであり、史実では南西方面艦隊と南東方面艦隊が、編成されたが、南東方面が存在しないため、南方方面艦隊の総称でよばれる、シンガポールセレーターを母港とする、一大組織となっている。

司令長官は南雲忠一海軍中将である。

「何を企んでいる？」

岡はいつになく凄んだ態度で、ここにいる不遜な男に問い掛けた。
「今は何も…、ただ恩人であるあなたには、泥を被っていたさきたくない、と言う事です。今の海軍首脳陣は、あまりに頼りない」
最後に吐き捨てるようにそう呟いた。

「貴様！だい……」

「岡さん、あまりうるさくすると人目につきます。ああ、これから嵐が来ます。嵐の時は戸を固く閉じ、大人しくしているのが、利口ですよ。飛ばされたければ別ですが、ね……」

あまりに厚顔無恥な物言いではあるが、実績と人物がそれを相手に許させた。

「ぬう、貴様が中央に戻れねば、意味はあるまい。戻れると思っているのか？」

岡のこの言葉に、フツツと鼻で笑うと、

「戻れますよお、あなたは反対しない。それに私以上の大物の相手をしなければならない。今はそっちの方が大事ですよ」

流石にこの男は、と岡は思った。人事局が危険視しただけの事はある。

「狙いは東條か？」

「そのうちに分かります。綺麗事を並べ立てるだけじゃ、道は開けませんよ。合法的となればなおの事です」

同郷と言う事もあり、軍令部参謀時代に、内閣官房より海軍予算をせしめるなど、逸脱行為が多いとして、危うく予備役編入されそうになったり、二年前に軍務局第二課が創設された時も、人事局が反対する中、岡が課長に無理無理就任させているなど、様々な場面で骨を折って来た。そして、日米開戦までの道筋を決定付けた、海軍国防政策第一委員会のメンバーの一人である。想定の違いはあるものの、開戦後は比較的順調な推移を見せていた。

そして、予想外の連合艦隊による米本土奇襲成功の一報は、彼にとってはまさしく天佑であった。このまま対米講和が成れば、しめたものであるが、これが不首尾に終わっても、また別の扉を開く選択肢が浮上してきた。

上層部は大慌てであろうが、（実際上の階では対応に追われ、大騒ぎになっていた）彼にしてみればこの混乱こそが、自らの描く理想への第一歩となる好機と捉えた。

「まあ、差し当たっては、連合艦隊の無事を願う事です。山本大將には泥を被っていただかなければ、先に進めません。

名譽の戦死などされたのでは、せつかくの好機がふいにされてしまいます」

こんな物言いをする男ではなかった。確かに対外交渉に関わる事を極端に避ける海軍内にあって、良かれ悪しかれ一級の政治通である彼は、かなり異色の存在だった。故に海軍も、この男に頼っていた部分があつた事は、否定できない。

（甘やかし過ぎたか…）

岡にもある程度の予測がついて来た。

しかし、ただ政治に精通しているだけでなく、部下の信望も厚く、積極果敢な人物でもある。少佐時代には戦艦扶桑の副砲で、火災が発生した際、真つ先に飛び込んで消火作業に当たったりしている事からも分かる。

「とにかく余計な事だけはしてくれるな…。内容が内容なだけに公にしてはまずい」

一応、釘は刺しておく。今のこの男に、何を言っても無駄であるうが……

「そのような下手は打ちません。それに、便利な魔法があるではないですか？軍機という名のね。外には内密に知らぬ存ぜぬで貫き通せますよ」

後の岡の回想録には、これがきっかけだったと述べている。しかし、それは関係者のみが知る明かされぬ秘録だった。

この時、海軍の迷走が始まった……

砲火交えぬ戦いの火種が燈されたのである。

三十六計逃げるにせず、中枢震撼す

サンフランシスコ西方沖

三百二十哩洋上

第五艦隊

旗艦空母瑞鶴を中心とする六隻の艦隊は、毎時八ノットの微速で西へと移動を開始した。

上空には、すでに直掩の零戦二一型が、翔鶴と瑞鶴から六機ずつ発進し、上空警戒に当たっている。

護衛に当たる第八戦隊重巡洋艦利根、筑摩の両艦からは、零式三座水上偵察機四機が、射出機により発艦し、西方へ扇状索敵を実施させ、利根、筑摩は十四ノットまで増速し、五航戦の進路を確保するべく前進を開始する。

防空駆逐艦秋月、照月は五航戦にびったり張り付くように、進行方向に翔鶴、瑞鶴の順に縦に並ぶ、その右後方に秋月、左後方に照月が配置されている。

第五艦隊は、発見されずに行動する事が第一義とされ、必要最低限に抑えられた陣容であり、敵との交戦は想定してはいない。

敵に遭遇すれば、一個駆逐隊ですら脅威となる、極めて危険な航海を続けて来たが、往路より復路の方が遥かに危険であった。

第八戦隊

重巡洋艦利根

艦橋では、戦隊司令官阿部弘毅海軍少将が、惘然とした態度で、目の前に広がる海原に視線を送っていた。

（生還を期さぬ、特攻作戦か…、まさにその通りだな。しかし、本隊も大変と言えは言えるがな……）

敵主力が、ハワイで連合艦隊に釘付けにされているとはいえ、米本土が空になっているはずも無く、西海岸に展開する艦艇及び航空機が、一斉に動き出すのも時間の問題である。

空母は間違いなくハワイ近海で、連合艦隊と交戦に入るはずであり、第一航空艦隊、小沢機動部隊からはハワイへの奇襲成功の打電が、奇しくもこちらの打電と同時に届いた。以上の状況からすれば、小沢艦隊が圧倒的優位に立った事を意味する。

（これならば、劣勢の敵機動部隊の撃滅など、簡単にやってのけるはずだ）

との期待感が、第五艦隊の大部分を占めていた。

それに、連合艦隊が大名行列よろしく、中部太平洋をド派手に荒らし回った事により、潜水艦はハワイ近海と、トラックとハワイの線上に大半が誘引されている。心配するとすれば、ハワイ襲撃に戦力が振り向けられ、ウェーク、ミッドウェー攻略部隊輸送艦隊の護衛戦力が、著しく低下しており、その艦隊が襲撃されるであろう事が挙げられる。

だが、この一戦で勝負を決める覚悟である以上、やむを得ない犠牲であると言う事は、皆が承知している。海軍内においては、戦力第一優先主義であるため、輸送艦護衛は未だに軽視されたままだった。だが……

「他所の心配よりも、我が身を心配せねば、な」

阿部は小さく呟いた。今すぐにでも全速力で、離脱したい気持ちにさせるほど、焦る気持ちが湧いてくる自分が、恨めしく思えてくる。

米本土からは怒りに震える空を圧する大編隊が、我々を屠らんと殺到してくる姿が浮かぶ。

一刻も早く虎口を脱せねば、一飲みにされてしまう。しかし、攻撃隊の収容が終わるまでは、逃げる事はできないのである。

第五艦隊

旗艦空母瑞鶴

こちらにも状況は変わらず前方の翔鶴越しに、遠ざかりつつある第八戦隊の利根と筑摩を見送る。

艦橋内は緊張と焦燥、そして恐怖が入り混じる複雑な空気に包まれている。

「待つ身が、こつも辛いとは思わなんだ」

第五艦隊司令長官、細萱戊子朗海軍中将がたまり兼ねたように、小さく呟く。

たくわえられた口髭には、うつすら汗が浮かび、首筋にも汗が流れ落ちる。

「まったく、ですな……。船と飛行機の競争、兎と亀のようですが、いくら快速の本艦と言えども、逃げ切るのは困難ですなあ」

第五艦隊参謀長中澤佑海軍大佐が、それに同意しつつ、現状の危険性を口にする。

「敵の出発地点が離れているのと、準備に時間がかかるのがせめてもの救いです。攻撃は成功した訳ですし、後は焦らず急いで待ちましょう。急がば回れ、です」

通称キングコングと呼ばれる巨軀で、一際高い位置から声を発するのは、第五航空戦隊司令官原忠一海軍少将である。今の瑞鶴の艦橋内では、一番落ち着き払っている印象を受ける。

彼の言った通り、艦隊の進路は最短距離となる北西方向ではなく、

真西へと向かっている。これは、艦隊の位置を知られぬ為の行動であり、攻撃隊は電探を警戒して、二百哩付近まで北西へと偽装航路で飛行させ、その後に南下して三百五十哩で会合着艦させた後、三十四ノットの高速で離脱を図る予定となる。

これもまた、非常に困難な事である。直進であるならば、母艦を見失う可能性は低いのだが、数百哩を迂回して目標の無い、広大な洋上に浮かぶ母艦を見つけ出すのは、難しい。

航法に僅かなズレが生じれば、二度と母艦に辿り着く事は叶わない。こちらにも、小沢機動部隊に負けず劣らず、危険な飛行を課せられていた。

しかし、作戦発動前に原が搭乗員と話した時には、

「やってやります。我々を鼻垂れ扱いする一航戦、二航戦の連中を見返してやります」

「こんな栄誉に預かる機会、滅多にありませんや。成功したら二階級特進で頼みます」

と全員がやる気をみなぎらせていた。英雄として故郷に錦を飾れるのを、若い勇士達は願ひ、この瑞鶴より発艦していった。

そして彼らは見事任務を果たし、追われる恐怖と母艦に辿り着けぬ恐怖を抱えながら、敵地を飛行している。我らが信じて待たねばならぬ、と原は思い、その時一人の人物の顔が浮かんだ。

（南雲さんは運が悪かったただけだ。今回は全て上手くいっている……）

と自分に言い聞かせていた。あれがために無謀と慎重の両立と言う、矛盾した作戦をとらざるをえなくなった。最初が上手くいってれば、こんな事をせずに、堅実に戦っていたはずだった。

一方の米国本土では、サンフランシスコが奇襲攻撃された事が、この方面を管轄とする海軍第11管区司令部より、海軍作戦本部に

報告すると同時に、西海岸のシアトル北部第10管区、及びサンディエゴ南部第13管区に対し、警戒行動発令を通過したのである。サンフランシスコ北東に位置する、陸軍フェアフィールド航空基地からも、足の長いB24リベレーターが偵察飛行の為に、出撃せんとしていた。

サンディエゴとシアトルからも、警戒部隊である駆逐艦二個駆逐隊、計九隻が出撃していったのは、後三十分後の事である。

現地時間 九五

米国東海岸

首都ワシントンDC

「悪い冗談かね？今日はエイプリルフルじゃないぞ？」

「エイプリルフルでも、そのような冗談は言いません。全て事実であります」

ここはアメリカで最も有名な住所（ペンシルベニア通り1600番地）、現時点において最も権勢を持つ者が住まう場所、最も陽の当たる白壁の館、通称ホワイトハウスのウエストウイング（西棟）の中央南側に位置する、オーバルオフィス。真上から見るとその形状から、楕円の間とも言われる大統領執務室である。

会話しているのは、この館の主、第32代合衆国大統領フランクリン・D・ルーズベルトと、合衆国海軍艦隊司令長官兼、海軍作戦部長アーネスト・J・キング海軍大将である。

その他にも、副大統領ヘンリー・ウォレス、ルーズベルトの側近でもあり、友人でもある、ヘンリー・モーゲン

ソー財務長官、

陸軍長官ヘンリー・スティムソン、

海軍長官フランク・ノックス、

そして、報道官ステイブ・アーリーと言った、軍政におけるトッ
プが集まり、今後についての話し合いが行われていた。

内容は勿論、ハワイで日本艦隊を殲滅せしめ、その大戦果を国民
に向け、大々的に発表する予定についてであった。

当初、キングはいなかったが、突然やってきたキングを見て、ル
ーズベルトは最初、日本艦隊を返り討ちにした報告だと思い、顔を
喜びの色で染め両手を上げて歓迎したのであったが、キングの報告
を聞き、先程の会話に至る。

ルーズベルトは啞然とした。冗談にしか聞こえなかった。

キングの報告を聞いた一同は、ソファアから立ち上がって、キン
グに質問を一気に浴びせ掛けた。

楯円の間は、楽観的なムードが一気に崩壊し、喧々囂々たる舞台
に早変わりしたのである。

二度目の屈辱

時刻 五四

ハワイ、オアフ島

パールハーバー

米太平洋艦隊司令部

「報告、敵航空隊第一波は後退、各方面からの情報を集計中ですが、飛行場は全て滑走路が破壊され、離発着不能。復旧まで最低でも一時間は掛かります……」

「第8航空軍司令官スパーツ少将、負傷。ルメイ大佐に指揮権継承されました。航空機の損害は現時点で150機を超過、対し敵機の撃墜は40機程度です……」

「偵察飛行中のカタリナより、オアフ島北西海域に、空母四隻以上からなる機動部隊を発見。報告途絶えました。南西域の日本艦隊主力は一部が分離、本隊は北西へと移動中……」

地下の司令部作戦室には、入れ代わり立ち代わりで通信兵、参謀の報告が入って来る。

「復旧まで一時間だと……、それでは間に合わない！ 敵の第二波がすぐに来るぞ！ もっと急がせろ！」

航空参謀トーマス・ホワイトヘッド海軍中佐が、報告を聞いて慌てていた。

「北西から接近する艦隊は、事前の偵察では確認されませんでした。日本軍の別働隊警戒の為、潜水艦を配置していながら、四隻以上の空母がいる大艦隊を、見落とすなどとは考えられません……」

ハワイ警戒部隊指揮官、潜水艦隊司令官チャールズ・ロックウツド海軍少将がうなだれながら、これまでの経過を考察していた。当初彼は南西太平洋方面の最前線ラバウルにあって、潜水艦による日本と南方を結ぶ通商破壊と、フィリピンで日本軍に包囲され、死闘

を演じている、ダグラス・マッカーサー陸軍大将率いる、極東軍の物資補給の任に当たっていたが、日本軍による中部太平洋方面への、大規模な進攻作戦の兆候が見られた為、ハワイに帰投していた。

この時点では米軍の潜水艦の数も少なく、太平洋全域を警戒するにはいかにせん数が足りていなかった。彼の指揮下には新鋭潜水艦ガトー級四隻、タンバー級五隻、サーゴ級六隻、サーモン級六隻、ポープス級四隻の合計二十五隻であり、この内十四隻がトラックを監視しており、連合艦隊の出撃後はその追撃に当たっていた。

サーモン級とサーゴ級各二隻は、ルソン島南西のバターン半島で孤立している、極東軍に対して物資のモグラ輸送を行っており、残り七隻はハワイ近海域に展開、内五隻が連合艦隊主力以外の艦隊の出現に備えていた。

これを聞いていたニミッツは無言で、地図に視線を落としていた。その表情には苦悶の色が浮かぶ。

「……対空警戒班から報告は入っているのか？」

ニミッツの沈んだ声が、作戦室内に響く。この問い情報参謀レントンが、

「先程報告が入りました。北西方面より離脱する編隊以外に、新たな機影を確認、規模は第一波とほぼ同規模、なおも接近中……」と答える。

「万事休す、か……」

スプルーアンスの第6任務群に至急通達！ オアフ島近海より後退せよ！ ここで失う訳にはいかん！」

ニミッツは戦力が無事な第6任務群の保全を図った。壊滅状態の太平洋艦隊にとって、空母二隻は余りにも貴重であった。

（レンジャーとワスプが健在ならば、帝國海軍にとって、牽制にはなる……）

とニミッツは考えた。事実、二隻は日本本土空襲の殊勲艦であり、

これがある以上、常に警戒しておく必要が生じ、精神的圧力を加えられる。

（もつとも、それはこちらと同じだがな。むしろ、こっちの方が気にしなければならん……）

ニミッツの苦悩は続く。こうなる事が予見できていれば、昨日に無理をしても連合艦隊に、攻撃を加えるべきだった。所在不明であつても、いるであろう事は分かっていたのだから、数を頼みとした飽和攻撃による殲滅に固執しすぎず、相手の戦力を擦り潰していけばよかった。

技術による慢心も祟った。絶対たる信頼を寄せていたレーダーを、とんでもない飛行でかい潜る日本軍パイロットに、ニミッツは正直に賞賛した。技術を技量が上回ったのである。

ニミッツは席を立つと、慌たしい雰囲気の出で、階段を上がる。

白壁の司令部施設から外に出ると、東の空は朝日でオレンジ色に輝き、爽やかな風が吹き抜けていく。地下に鮎詰めだったニミッツには、心地良いものだった。

しかし、地上の光景は予想以上の有様だった。

目の前のヒツカム飛行場と、真珠湾に浮かぶフォード島からは、黒煙が空に向かって上がり、滑走路、駐機場、格納庫は全て破壊され、兵士が復旧作業に追われる様子が、見てとれた。

目を西に向けると、離れた場所からも、黒煙が上がっているのが見えた。

海兵隊バーバースポイントとエヴァ飛行場であらう。フォードとヒツカムの惨状を見れば、似たようなものであることは、想像に難くない。

（これだけやられるとは、な。パールハーバーは無事でも、艦隊と基地は壊滅、事実上我々の手詰まり。私はキンメル長官と同じ愚

を犯したか)

前任の太平洋艦隊司令長官ハズバンド・E・キンメル海軍大將は、本国から日米交渉の決裂を知らされていなかったが、さらに前任者のリチャードソン海軍大將からの忠告を重視し、独力で見事真珠湾奇襲を撃退しえた。

しかし、フィリピンで日本陸軍第一四軍、一六軍の足を止める事に成功したが、日本軍はビルマ攻略の第一五軍を、蘭領インドシナ攻略に投入するため、マレー攻略に当たる第二五軍と共に南下させた事により、史実以上の早さで、イギリス極東支配の牙城シンガポールを陥落せしめた。

焦った英首相ウィンストン・チャーチルは、ルーズベルトに対し、健在である太平洋艦隊を投入して、日本軍の進撃を阻止するように依頼。

ルーズベルトもこれを了承し、太平洋艦隊の一大進攻作戦が発動される。真珠湾奇襲の日本軍の機動部隊の構想と、搭乗員の技量を目の当たりにしたキンメルは、現状では戦力不足であるとして、新鋭戦艦ノースカロライナ、ワシントン、空母ホーネットを始めとする大西洋艦隊からの戦力の引き抜きをキンメルは要望し、それが要られれ意気揚々とキンメルは出撃していったが、結果は未曾有の大敗北を喫した……

キンメルは決して相手を侮った訳ではなく、十分な戦力を準備したのに敗北した。そしてニミッツは、堅実な方法で、守備を固め、隙を見せぬよう慎重な采配を執ったが、奇策によって撃ち破られた。事前の情報収集も念入りに行われ、連合艦隊がトラックに集結しており、次の最終攻撃目標がハワイであることも掴んでいた。奇しくも軍令部が承認した、第五艦隊が背後より奇襲をかける当初の作戦は、ニミッツにもの見事に看破されており、山本の独断が無ければ、第五艦隊が壊滅させられるのは、目に見えていた。(当初の第五艦隊には新鋭駆逐艦夕雲型、夕雲、巻雲、風雲、長波が配備、航続距離の問題から、第五艦隊補給部隊護衛に当たっている。)

ニミッツの予測は極めて的確であり、道を違えれば、ハワイが連合艦隊の巨大な墓標となっていたであろう。天候が悪かったり、敵前を突破して発見されれば、全てが破綻する余りに無謀な、いや、始まりの時点で航空戦力で劣勢でありながら、戦力を分散させるなど常軌を逸している。

リスクを回避しなければならない立場であれば、このような方法をとる事はできない。運を天に任せると言うが、本当に天を頼みとした山本に翻弄されたニミッツの衝撃は、尋常ではなかった。

ただ立ち尽くすニミッツの耳に、空襲警報のサイレンが響いてくる。

「……来たか」

ニミッツは、日本軍機が来るであろう北西の空を見つめた。

「司令、ここは危険です。早く地下へ退避を……」

副官がニミッツに避難を促したが、

「ここでいい。全てをここで見届ける」

と言い、避難させる意見を退けた。ニミッツの目には、見慣れた北に広がるコオラウ、西にあるワイアナエ両山脈が映る。高さは八百メートル前後、さほど高い山並みではなかったが、その中間位置にいつもと違う一点を見つけ、双眼鏡を覗き凝視した。

「見えました！ 真珠湾です！」

オアフ島上空を各基地、及び真珠湾内工廠を目標に、突入する第二次攻撃隊。二航戦艦攻撃隊を率いる楠美正海軍少佐は、操縦員の報告を聞いてその肩越しに前を注視する。

「九ヶ月ぶりか。前は戦闘機の出迎えで遮二無二の突撃だったが……」

真珠湾奇襲のおりに、楠少佐は迎撃を受けながらもそれを潜り抜

け、戦艦メリーランドに魚雷を叩き込み、大破に追い込んだ最大の殊勲者であった。（雷撃の神様と言われた村田重治少佐と協同であったが、村田少佐は帰途敵戦闘機に撃墜されてしまっていた）

今回は魚雷ではなく、対地兵装の五十番（五百キロ爆弾）が最大の違いだった。

与えられた任務は真珠湾海軍工廠の破壊、もしくは、百万トンを超えると言われる、重油タンク群の破壊である。もっとも、敵航空基地も殲滅せねばならないため、攻撃隊の半数はそちらに割かれている。

「第二中隊は飛行場を叩け！ 第二分隊は港湾施設をやる！ 続け！」

楠は手信号で列機に合図を送る。攻撃隊はそれを合図に分離、各々の攻撃目標に向けて突入を開始した。

空母飛龍と蒼龍から九七艦攻三機、九九艦爆三機、計十二機が真珠湾南東岸、ちょうどフォード島とヒツカム基地の中間に位置するドック地区と、重油貯蔵タンクを目掛け攻撃態勢に入る。

しかし、周囲に張り巡らされた対空砲、機銃が一斉に唸りを上げり、周囲は瞬く間に黒い花びらが開き、破片の渦が巻き起こる。

「目標確認！ 投下まで五百、ヨーソロ……」

「用意…… 撃い！」

機体から爆弾が重油貯蔵タンク群の中央に向けて、落下していく。

「マイ、ガッ……」

その様子は太平洋艦隊司令部前で、佇むように観戦していたニミッツ達からも見て取れた。副官はそう叫ぶとニミッツを庇うように、地面へと押し倒した。

爆音が轟く。しかもそれは熱波と破片を伴って、司令部施設へと到達し、窓ガラスを砕き周囲の人間の皮膚を焦がした。

その光景は、周辺の兵士を恐慌に陥らせるには十分過ぎた。紅蓮の焰と共に上がるのは、天に昇る黒龍の如き巨大な黒煙だった。

東にあるホノルル市街からも、否、オアフ島のどこにいても、この黒煙は視認できた。

米軍にとっては、この戦闘における敗北を印象づける結果となった。

同時刻

オアフ島北東沖

「周囲を警戒しろ。絶対に米機動部隊が、この辺にいるはずだ」
蒼龍搭載の偵察隊二番機、二式艦上偵察機、通称二式艦偵は現在開発中の新型艦爆、十三試艦上爆撃機の偵察機仕様であり、爆弾槽に燃料タンクと、偵察用カメラを搭載したものであり、今作戦に試作された二機が搭載され、太平洋艦隊の偵察に、その高速力を活かし敵中を突破して、その動向を掴む活躍を見せている。

現在、オアフ島の北東の海岸に沿って、南東へと高度二千で飛行している。この海域は雲が多い。その操縦席で松野司海軍少尉が、偵察員に注意を促す。

「了解です……とお、早速です！ 左前方に航跡視認！」

「やれやれ、意外に呆気ないな…、位置を打電しろ。マカプー岬の北三十哩付近、直ちに攻撃隊の出撃を要請」

松野は即断した。オアフ島の陰に隠れていたのは、予想していた

為だった。

しかし、この艦隊は別の結果をもたらす事を知る者はいなかった。

陽炎

「スプルーアンスから返電は無いのか？」

イライラした様子で、参謀に聞いているのは、第1任務群司令官パイ中将だった。

山本率いる連合艦隊主力部隊との交戦により、艦隊戦力は二割以下に落ち込んでおり、もはや壊滅状態に陥っている。

パイは大半の艦が損傷を受けている中で、唯一無傷で温存されている第6任務群と合流するべく、戦艦サウス・ダコタ、インディアナを含む、五隻の艦隊を引き連れて、北東へと移動していた。肝心のスプルーアンスからの応答が無いのが、気になるところではあるのだが……

「今のところ何も…、司令部からはオアフ島が敵の奇襲を受け壊滅、我々には後退せよとの命令が出ています。今の状況で無電の使用は、敵に自らの位置を晒すものと、スプルーアンス少将は判断したのかもしれませんが」

参謀長ギツフェンが、それとなく進言するが、こちらからの呼び掛けに反応がないことに、パイは腹を立てる。

「だからこそ、さっさと合流してしまった方がいいだろう。釈にさわるが、サウス・ダコタとインディアナが護衛に付ければ、スプルーアンスにとっては、大してマイナスにはならん」

パイは戦艦主力、空母支援の考えであり、主力である戦艦を空母の護衛に付かせるなど、平時では考えていない。

サウス・ダコタ級戦艦は、速力28ノットと高速であり、空母ワスプの速力29ノットはほぼ同じであるため、航行には何ら支障は無い。

もっとも、サウス・ダコタ級戦艦は上位構造物の設置をコンパクトに抑えたために、全長が207メートルに短縮され、機関の増強により、どうにかその速力を維持している。（艦の全長が長い方が

高速を発揮しやすいが、舵が効きにくいと言うデメリットもある）余談だが、全長を短くし装甲を強化した結果、居住性が恐ろしく低下しており、乗員にとって乗りたくない戦艦に名を挙げらる始末だった。

それはともかくとして、第1任務群は夜間の戦闘海域を離脱してオアフ島の南から東へと迂回し、北東へと出せる最大速力で直進していた。

途中、損傷はほとんど無いが、速力の劣るマサチューセッツ、コロラドの両艦は、他の大量の損傷艦と共にオアフ島南東に位置する、ハワイ諸島内の内海と言うべき、オアフ島とハワイ島間にある、ラナイ島、モロカイ島、マウイ島に囲まれた泊地に避難、連合艦隊の攻撃をやり過ぎ方針であった。連合艦隊は戦闘の終了後、追撃を行わず直ちに離脱を開始したため、この艦隊にとっては幸いであった。しかし、敵情を知らない米海軍将兵にとっては、見えぬ敵の来襲を恐れて、その身を震わせていた。

第1任務群に話しを戻す。

最初に異変に気付いたのは、最後尾を航行する駆逐艦フォレストが、上空を飛行している航空機に気が付いた。

「左後方より接近する機影有り！昼間にあつた奴です！」

この報告を聞いて、艦長モリスン少佐は直ちに対空戦闘を命令した。

「全艦に発光信号！ 敵機動部隊からの接敵を受く！ 全艦対空戦闘！ 敵の大編隊が来るぞ！」

乗員が慌ただしく配置に就いていく。フォレストにとって、これが初の航空機相手の戦闘となった。

第一航空艦隊

現在艦隊は、カウアイ海峡の北、およそ百哩付近にいた。

第一航空戦隊、空母赤城、加賀

第二航空戦隊、空母蒼龍、飛龍

第三航空戦隊、空母鳳翔、祥鳳、瑞鳳、龍鳳

第四航空戦隊、空母龍驤、隼鷹、飛鷹

第三戦隊第一小隊、戦艦金剛、榛名

第十戦隊軽巡洋艦長良、第三、七駆逐隊、駆逐艦六隻

第五水雷戦隊、軽巡洋艦名取、第五、第二二駆逐隊、駆逐艦七隻

第六水雷戦隊、軽巡洋艦由良、第二九、三 駆逐隊、駆逐艦七隻

空母十一、戦艦二、軽巡三、駆逐艦二十の大艦隊が展開している。

それでも、空母の数に比較して、護衛戦力は少ないのであるが、後方部隊の護衛を搾り出しても、これが限界であり、後方部隊は…、推して知るべし……である。

旗艦空母赤城

「蒼龍索敵隊二番機より、敵艦隊発見の報告。攻撃隊出撃の要ありと認む」

二式艦偵から伝えられた内容を、通信士が報告する。

「直ちに攻撃隊を出しましょう。たかが空母二隻など、我が一航艦の敵ではありません！」

報告を聞いて、航空参謀源田実大佐が間髪入れずに、進言する。

「そうは言うがな、源田よ。ちと性急に過ぎるんじゃないか？敵の詳細が全く分らん。第一、今攻撃隊を出せるのは四航戦しか無いが、オアフ島の牽制に出さねば、敵航空部隊が動き出してしまう」参謀長草鹿龍之介少将が、横から口を挟んだ。これを聞いた源田は、一瞬むっとした表情を見せたが、表情をすぐに戻す。

現在、一航戦、二航戦はオアフ島に対し、第二次攻撃隊が猛撃を加えており、第一次攻撃隊は間もなく帰還してくる。ほぼ全ての機体を送り出しており、すっからかんの状態であり、三航戦、四航戦も第一次攻撃隊を送っており、三航戦の戦闘機が直掩に上がっているため、事実上、第一次攻撃隊の帰還を待たねば、十分な戦力の投入は不可能だった。

五百機を上回る搭載機を誇る第一航空艦隊とは言え、在ハワイ航空戦力と機動部隊を相手にしては、荷が重い。とても楽観できる状況ではなかった。

豪胆で知られる司令長官小沢治三郎にとっても、非常に難しい判断となる。

「オアフ島には甚大な被害を与えたと判断するが、一千機を越えるであろう機体を、全て殲滅するのは、無理と断ずる他ない。

初撃で敵は面食らって混乱しているだけで、絶対的数の差はこれからまともに出る。これ以上、オアフ島を相手にするべきでは無い……、我らが敗れたのでは意味が無い」

しばしの沈黙の後、小沢は決断を下した。

「三航戦、四航戦から敵艦隊へ向け攻撃隊を出撃。我が一航艦は、オアフ島基地攻撃圏内より離脱、第五艦隊と合流、撤退する！」

消極的だとの批判が、後に上がるが、この時、オアフ島の航空機はいまだに六百機を上回り、第一航空艦隊の搭載機を越えており、その海域に留まり続けられ、弾薬、燃料が欠乏し、撈り物にされていたであろう事は想像に難くない。

第二次攻撃隊が出撃中であるため、嚮導機の水偵が居残り、第一航空艦隊は北へと移動を開始したのである。

米海軍は、この離脱劇を、あまりに見事な引き際であったと評価している。

離脱しながら攻撃すると言う、矛盾した任務を与えられたのは、第四航空戦隊司令官角田覚治海軍少将。

海兵三九期、元は砲術畑を歩み、航空機とは無縁であったが、第三航空戦隊の司令に収まるに当たり（後に四航戦に異動）、猛勉強により航空機の理解を深める努力家でもある。

開戦時より空母龍驤にあって、南方作戦の支援にあたり、フィリピン、ダバオに空襲を実施。マリアナ海戦では第三航空戦隊と共に主力部隊の直掩と敵艦隊への空襲を行い、小沢機動部隊の支援を行っている。この戦闘で龍驤は大破、長らく戦場から離れる。

今回の小沢司令部の後退指示に、釈然としないまま、敵艦隊への攻撃隊発艦の準備を進める。

空母隼鷹

攻撃隊が飛行甲板に引き出され、整然と並べられる様子を見ながら、角田は難しい顔をしていた。

「角田司令、いかがされました？」

その様子を見て、艦長岡田為次海軍大佐が尋ねる。

「岡田君か。いやなに、小沢長官にしては、珍しく弱気に見えてしまつてなあ。強気の山口が意見具申しないのも、な……」

疑問のような愚痴のような含みのある言い方を聞いて、岡田はわずかに笑いを零した。

「何か変な事を言つたか？」

「いえ、角田さんがそんな言い回しをするなど思わなかったもので、すみません」

この艦長と角田は、何故か馬があつた。経歴が似通う部分が多いのも理由であらう。岡田も砲術科で学び、龍驤副長を経て、隼鷹艦長に就任という奇妙な一致性があつた。

謝る岡田の次に発した言葉に、角田は運命を感じてしまった。

「一つご報告があります。偵察機からの続報で、敵艦隊は戦艦二、駆逐艦五。敵機が存在なし、です」

これを聞いた角田は、ニヤリと笑つた。

「岡田君、勝利の女神は我らに微笑んでいるようだな」
驚が大物をその目に捉えたのである。

一方の小沢司令部では、発見した艦隊が機動部隊でないことに、明らかな焦りが見えた。てつきり機動部隊を発見したものと思つていたのだが、こうなると話が変わってくる。

「他の索敵機からの連絡は無いのか!？」

源田は焦つていた。敵空母の撃沈は、最重要作戦目的の一つである。夜明け前に全周に向け偵察機を放っているが、最悪奇襲を受ける危険性が更に増大した事を、再認識させるには十分だった。

「一体どこに消えたのだ、敵空母は?」

草鹿も驚きを隠せずにいた。当初よりハワイ近海に機動部隊はいる、との認識の元で作戦行動を行ってきた訳であつたのだが、いるはずのものが、いないと言うのは、得体の知れない恐怖が湧いてくる。

艦隊司令部は疑心暗鬼に陥つた。ここは未だ敵地であり、第一航空艦隊は敵中に孤立した点に過ぎない。航空機と潜水艦が跋扈する海域に、味方はいない。

優勢であつたはずの戦局は、ゆらゆらと揺らめく、まさしく陽炎の如く、危うい色を帯び始めた。

米本土奇襲（天一号）作戦秘匿の陽動作戦名（陽炎）が撃つ事叶わぬ幻の意味を込めて、付けられたはずだったが、皮肉にも小

沢機動部隊が、その幻に振り回される結果になるなど、誰も予想もしていなかった。

期待は裏切られるモノ？

時刻 七三

空母隼鷹

「攻撃隊発艦準備完了！一番機発進します！」

先頭を進み出す九七艦攻を艦橋から見ながら、敬礼で角田は送った。

この時、米艦隊の攻撃に向かったのは、

隼鷹

零戦三、九七艦攻九、九九艦爆九

飛鷹

零戦三、九七艦攻九、九九艦爆九

祥鳳、瑞鳳、龍鳳

九七艦攻各五

零戦六、九七艦攻三三、九九艦爆一八、合計五七機

護衛戦闘機が少ないが、艦隊直掩が優先である事、敵艦隊に直掩機がない事から、第三航空戦隊からは、艦攻のみの出撃となる。

発艦した攻撃隊は、上空で編隊を組み、敵艦隊へと向かって飛行していった。（航空機による戦艦の撃沈の栄誉、山口には悪いが、我が四航戦が頂く）

角田は前を進む、空母飛龍を見ながら、そんな事を考えた。

空母飛龍

「三航戦、四航戦より攻撃隊出ました。東へ向かいます」

見張りからの報告を聞きながら、二航戦司令官山口多聞海軍少将は、艦橋の風防に歩み寄り、後方に控える空母群に対して、双眼鏡を覗きこんだ。

「随分と多いが、角田さんらしい」

「鶏を割くに牛刀を用いる、ですか」

呟く山口に、艦長加来止男海軍大佐が返す。

「いや、確実に仕留める腹だ。艦長は面白くなさそうだな」

悪戯っ子のように笑いながら、後ろで不機嫌そうにしている艦長を見る。

「多少は…、司令は何も思われたいのですか？」

加来の問い掛けに、山口も

「加来君と同じだよ。だが、今回は角田さんに花道を歩かせてやるうや。」

状況が逆なら、俺も迷わず全機送っただろうさ」

山口は海兵四十期、角田は三九期で先輩に当たるが、少将への進級は後輩の山口の方が一年早い。海軍兵学校の席次は、海軍の出世に直接響く。先輩後輩の関係が絶対とも言える海軍内にあつては、珍しいとも言えなくもない。（指揮継承順位は山口が上である）

出世は角田の方が遅れているが、山口の力量を、角田は高く評価しており、山口の下で働く事は、角田も望むところである。攻撃精神旺盛、見敵必戦、両人は海軍切つての猛将に数えられる。

小沢、山口、角田の三人を、海軍内では期待を込めて、機動部隊三羽鳥と呼んでいた。帝國海軍空母機動部隊の、最盛期を象徴していたと言える。

その角田の放った渾身の一撃は、狙い誤らず米第1任務群を捉える。

時刻 八四五

「左前方航跡、対空砲火視認！ 見つけたぞ、米艦隊！ 報告通り敵機はいない、存分に殺るぞ！」

第1任務群の上空を、二式艦偵が旋回しながら接敵を続けていた。この様子を攻撃隊も見つけ、戦闘機を除く五一機は突撃態勢に入る。

「右方から攻撃隊が来ました！」

対して、艦偵も攻撃隊が近付くのを見つけ、バンクを振る。

「来てくれたか。これでお役御免だな……。当海域を離脱、帰艦するぞ」

機長松野は旋回を止め、編隊が来た方向に向かっていく。

「後は頼むぜえ。でっけえ戦果をあげてくれよ」

すれ違い様に軽い敬礼で送りながら、そういった。

米第1任務群

「来た……！」

乗員達にとつて、恐れていた時がやってくる。

雲の合間から近付いてくるのは、胡麻粒のような小さな固まり、しかし、それは徐々に大きくなり、朝の陽光を反射し鈍い輝きを放つ。

上空を蠅の如く、煩く跳び回る偵察機が離れていく。蠅の替わりにやってきたのは、五十に上る死の運び手達……

「本番だぜ……」

「ああ、やべえぜありゃあ」

戦艦サウス・ダコタの機銃座で、二式艦偵に向かい、機銃を撃ちまくっていた二人組が、近づく編隊を見て恐々としていた。

たったの一機も墜とせないのに、あんな数を相手にするなど冗談じゃない。正直な感想だった。

そして、その反応は、戦闘機による防空の傘を持たない第1任務群の乗員が、皆等しく見せるものだった。

「取舵一杯！ 左舷対空戦闘！」

艦長の号令の下、サウス・ダコタは左へと舵を切る。先の艦隊戦において、連合艦隊による砲撃によって、サウス・ダコタとインディアナは、右舷に被弾していたために、対空火力は低下している。右舷を曝さぬための操艦だった。

「各艦、独自に戦闘指揮を執れ！ 無理かもしれないが、オアフ島基地航空隊に支援要請！」

艦長、期待している……」

司令席に座るパイは、静かに激励した。

「どこまでやれるかわかりませんが、全力を尽くします」

振り向いた艦長はそう返すと、顔をしかめながら、接近しつつある攻撃隊を見つめる。

北東へ向かう第1任務群を、西から追撃してきた攻撃隊が襲い掛かる。

「戦艦にしては小さいな。籠マストじゃないところを見ると、新型か。どれほどのもんか、試させてもらおう……」。

第二分隊は左、第三分隊は後方から、飛鷹隊は後ろの奴を潰せ！

全機突入！」

隼鷹隊指揮官岡嶋平太海軍大尉が、各分隊長機に向けて手信号を送る。

今作戦における、最初の航空機による艦隊攻撃となる東ハワイ沖海戦の幕開けである。

同時刻

アメリカ合衆国

ワシントンDC

「……それで現状はどうなっているのだ、キング？」

ホワイトハウス、オーバルオフィスにルーズベルトの声が響く。

「現在、西海岸に展開する全艦艇、及び部隊に対し、シスコを襲った日本機動部隊の搜索を命じました。網に掛かるのは時間の問題です。」

対して、ハワイの状況はよろしくありません。日本艦隊は夜襲を仕掛け、太平洋艦隊は潰滅、オアフ島航空基地も奇襲により、戦力を喪失し立て直しの時間がかかります……」

キングは状況を一通り説明すると、視線を下に落とす。ルーズベルトの眼鏡の奥にある、冷たい視線に耐えられなかった。

「これは海軍の失態だ。分かっているのか、キング。我が政府は国民と議会から槍玉に上げられ、信用を失墜する。どう責任をとるつもりだ？」

ルーズベルトの側近中の側近、財務長官モーゲンソーが静かにキングをなじる。

「しかし、この期に乗じて、日本政府が何かしらの接触を図って来た際には、どのような対応を？」

白髪混じりの初老の人物、もう一人のルーズベルトの友人、日米開戦の立役者、國務長官コーデル・ハルが質問する。

「決まっているだろう、ハル。我が政府はいかなる妥協も、選択

肢には存在しない。全て…、撥ね退ける」

ルーズベルトに焦りは全く見られない。状況的には、追い詰められているはずなのに、である。

日本艦隊の行動を止めるべき太平洋艦隊は、事実上消滅したと言っても過言ではない。にも関わらず、ルーズベルトの、日本に対する対応が、変わる様子はなかった。

東ハワイ沖海戦

時刻 八五

戦艦サウス・ダコタ

「ファイアッ!!」

士官の声がこだまし、その声を上回る砲声が響き渡る。

左舷にある四門の5インチ連装両用砲が、魚雷を抱えて突っ込んでくる攻撃機を、近付けぬよう弾幕を張っていく。

「左舷弾幕薄い! 何をやっている! 突破されるぞ!」

艦長は怒声を上げる。対空砲、機銃群も必死に弾幕を張っているが、攻撃隊の阻止には至らない。

対して、迎撃を受ける攻撃隊は、その火線の中を、果敢に突破していく。

「予想以上に激しい迎撃だ! 各機散開、包囲して魚雷を叩き込め!」

サウス・ダコタの左前方から接近していた第二分隊三機は、進行方向を塞ぐように前に回り込み、一斉に魚雷を投下した。

「敵機、魚雷投下! 被弾コース!」

「面舵一杯! どのみち避けられん! 装甲の厚いバイタルパートにぶちあてて、持ちこたえさせる」

サウス・ダコタは右へ舵を切り、右前方と左前方から迫る魚雷の回避は成功したが、正面やや左から投下された魚雷は、艦長の操艦により、左舷中央部付近に命中し、衝撃が艦を震わした。

「被害状況知らせ!」

艦長が報告を求める。

「敵魚雷、左舷二番副砲付近に命中! 損害は軽微、戦闘行動に

支障無し！」

これに艦長は安堵のため息を漏らす、

「敵機、降下接近中！」

「右舷より、ケイト！ 四機接近、阻止攻撃不能！」

嫌な報告が同時に入った。

（雷爆同時攻撃、厄介だ……。爆弾は致命傷にならんが、右舷、そこらは死角だ。艦隊戦の痛手がもろに出た）

「迎撃が薄い。これならば、いける！」

右に迂回して後方から接近した攻撃隊に対して、最初の前方からの攻撃を避けるために面舵を切った事で、右舷側をさらけ出してしまった。

「限界まで接近！ 魚雷投下用意！ 距離一五！」

魚雷を抱えたまま、なおも接近する攻撃機を見て、艦内の乗員は戦慄した。

「どこまで接近するつもりだ！？」

もう逃げようがない。

「機関一杯！ 面舵一杯！」

艦長も血相を変えながら命じている。操舵手も、舵が折れんばかりに、力を込めて倒し続ける。

「ヨウソロ、用意……。撃ッ！」

四機は距離五百と言う超近距離で、魚雷を投下した。高度十メートルという、超低空で放たれた鉄鮫は、獲物を捉えて放さない。

「敵機、魚雷投下！ 全弾、被弾コース！」

見張りも機体から離れたそれを見落とす事はない。魚雷は九一式、雷速四二ノット、約二十秒で目標へ到達する。

数秒後、魚雷を投下し終えた九七艦攻は、高度を上げて身を翻していくなか、一機がサウス・ダコタの艦橋の前を通過していく。

「やってくれたな…、ジャップ……」

司令席に座るパイも、飛び去る機体を見ながら呟く。

「総員衝撃に備えッ！ ダメージコントロールスタンバイ！」
乗員はその時に備える。

そして

轟音を響かせながら、四本の水柱が、サウス・ダコタのマストを越える高さまで高々と上がった。

艦首から艦尾まで、等間隔に命中した魚雷は、装甲部、非装甲部を問わず、甚大な被害をサウス・ダコタに齎した。

しかし、悲劇はまだ終わらず、上空でタイミングを待っていた艦爆隊が、待っていましたとばかりに、急降下爆撃を敢行する。

護衛の駆逐艦も戦艦を守るため、必死に主砲と機銃を撃っているが、阻止するには至らず、一本槍に艦爆隊は突入し二五番を投下した。

艦中央から爆炎が立て続けに上がった。投下された爆弾は全弾命中し、煙突と後部艦橋を原形がわからないほどに破壊した。

「被害状況！ ダメージコントロール！」

艦長は怒声を上げる。

「右舷側前部の被弾箇所は破口、及びバイタルパート装甲板に亀裂発生！ 浸水拡大中！ 機関は煙突よりの海水流入と倒壊により、一部機関停止！ 現在艦傾斜5°……」

士官の報告に、艦長は目を覆いたくなった。最新鋭戦艦がたかが一度の航空攻撃で、戦闘能力を喪失したのである。

「司令、このまま浸水が拡大すれば、水蒸気爆発の可能性も……」

艦長は遠回しに退艦を促した。徐々に傾斜が拡大していくのが分かる。

パイは躊躇したが、退艦を認めた。

総員退艦命令が発令され、艦内から乗員が飛び出していき、手近なカッターに乗り込んだり、舷側から海に飛び込む者も見られた。

サウス・ダコタに退艦命令が発令される中、姉妹艦インディアナは悲惨な運命を迎える。

左舷の対空火器を振りかざし、雷撃機を二機撃墜し、四機を撃退したが、（訓練量の少ない三航戦が主軸の為、被害が大きい）急降下爆撃隊の一弾が艦橋に命中、艦長以下要員全員戦死により、状況は一変する。

左右両舷から挟みこむように突入した攻撃機十四機が、五月雨式に魚雷を投下、内左舷に二本、右舷に四本の魚雷が命中し、艦首部を切断。

大量の海水が破口より侵入し、往き足が止まり、前のめりになると、間を置かずに浮力を失ったインディアナは、艦尾を持ち上げて、波高きハワイ北東沖へと没していった。

「敵戦艦沈みます！ やりました！ もう一艦からは乗員が脱出中、沈没は確実でしょう」

魚雷を投下し終え、上空で旋回している、指揮官機岡嶋機内で操縦員が、沈み逝くサウス・ダコタとインディアナを見つめながら叫ぶ。

「新型戦艦と言ってもこの程度か……。意外に呆気ないものだ。通信士、艦隊宛てに打電、（敵戦艦二隻撃沈確実、これより帰投す）以上だ」

岡嶋は打電を命じて、攻撃隊全機が引き上げたのを確認すると、離脱を開始する。旋回を続ける間に、艦爆隊が駆逐艦二隻を爆沈させ、戦果を拡大させていた。

（戦艦の時代は終わろうとしている。もっとも、艦隊戦の損害もかなり影響を与えていたのも確実だから、上層部は認めてくれないだろうがな……）

岡嶋は帰途、そのような考えを巡らしたが、戦闘航行中の戦艦を航空機が撃沈した、史上初の事例となる。

意気揚々と引き上げていく、日本軍攻撃隊をサウス・ダコタの乗員はただ茫然と見上げるだけだった。

その二十分後、サウス・ダコタは浸水に耐え切れず、右に横転し沈没した。

わずか三十分足らずの第一波攻撃のみで、本海戦は終結し、攻撃隊損失は五機に収まり、帝國海軍航空隊の技量の高さを知らしめる結果となった。雷撃の命中率は三割に達し、爆撃に至っては九割に上る、驚異的な命中率を叩き出したのである。

現地時間一一二

サンフランシスコ沖

三百五十哩洋上

第五艦隊

旗艦空母瑞鶴

「お疲れ様でした！ 嶋崎中佐は至急、艦橋へおいで下さい！」
最後に着艦した隊長機に、整備員が駆け寄ると、労いとともに報告に上がるように促した。

「おう、すぐに上がる。後の整備頼む」

嶋崎は艦攻から飛び降りると、艦橋へと駆け足で向かう。

「攻撃隊全機着艦完了！」

「本海域を離脱！ 機関両舷全速、面舵一杯！ 針路二七！」

飛行甲板上で収容が開始されたのを確認すると、艦長野元為輝海軍大佐が命じた。

「ここからが正念場である！ 各員これまで以上に気を引き締めてかれ！」

艦長は注意を促す。

敵勢力圏内から抜け出さなければ、無事帰還できなければ、真の作戦成功とは言えないのである。

撤退戦

戦場において最も困難を極める戦闘を、第五艦隊は経験する事となる。

日本本土まで長駆五千裡、果てしなく長い海原の路が続く……

動の大地と静の海

一九四二年八月二八日

時刻 八

内地、帝都東京

「臨時ニュースをお伝えします。臨時ニュースをお伝えします」
街頭の放送ラジオから、アナウンスの声が響く。通勤する人々は足を停め、その放送に耳を傾ける。

アナウンサーに引き続き戦果を報告するのは、海軍報道官である。
「大本営海軍部発表。本二八日未明、我が帝國海軍連合艦隊はハワイ及び米国本土に対し奇襲攻撃を敢行。

米国太平洋艦隊を撃滅、ハワイ基地、及びサンフランシスコを灰燼にせしめたり。

戦艦七隻撃沈破、航空機五百機を撃破、赫々たる大戦果を上げるに至れり……」

これを聞いた人々は、この内容に狂喜乱舞した。

そして、日米戦争の勝利を確信したのである。白露戦争、日本海海戦の再現であり、しかも、敵本拠地を叩き潰したのであるから、至極当然の反応であつた。

市ヶ谷台

陸軍参謀本部

海軍軍令部と共に、大本営を構成する陸軍の最高統帥機関。

陸軍の作戦の全てを司るこの場所にも、この重大な情報は伝わる。

「我が陸軍は、海軍のダシに使われたのではないのか？」

参謀本部第一部、第二課の作戦室では、カーキ色の軍服に身を包み、参謀飾緒を付けた参謀達が集まり、連合艦隊による米本土奇襲に対しての論議が繰り広げられていた。

集まっているのはいずれも高級参謀、陸大甲種卒のエリート達である。一部の陸軍士官が意図的にはぶかれていたのは、大きな汚点であるのだが、それは後にわかることである。

恐らくは帝國最高峰の頭脳集団であつたはずなのだが、優秀ではあるが柔軟性が欠落してしまっていたのは、痛恨の極みと言える。しかし、それは海軍の中枢部も、似たりよつたりでもあるだろうが、批判がどうあると、否定しようとも、間違いなく今の日本を動かしているのは、彼らである……

しかし、彼らをして今回の件は寝耳に水であり、曲がりなりにもミッドウェー攻略のために、陸軍は協力の姿勢を示した訳であるのだが、海軍は情報を開示しないと言う、背徳行為に捉えてしまったのである。

陸軍にも、海軍側からハワイ強襲の通達が行われていたのだが、味方であるはずの自分達を謀るなど、

言語道断であるとの空気が流れる事となるが、もつとも、大本営の一翼を担う、軍令部としては甚だ迷惑な話であり、参謀本部第一部長田中新一陸軍中將から抗議が行われ、軍令部第一部長福留繁海軍中將が、応対するハメに陥るのは後の話である。

現地時間二七日一五三

第五艦隊

日本本土が戦勝モードに沸き立ち、軍中枢で激震する中で、第五艦隊は孤独な航行を続けていた。

攻撃隊が着艦してから約四時間、全速の航行である。幸いにして、敵航空機からの接触はない。しかし、本土防衛部隊の追撃を避けようと、機関最大で突っ走っているため、燃費の効率が恐ろしく悪くなってしまうている。

「日没まで後四時間、それまではこのまま走り抜くしかありませんな」

艦長野元が背後で佇む、第五艦隊司令長官細萱戊子朗中将と、第五航空戦隊司令官原忠一少将に、振り返りながら言った。

「仕方あるまい。燃料は深刻であるのは理解しているが、気にするなと山本長官はおっしゃっておられた。闇夜に紛れれば、脱出の公算も大きい……」

細萱が歩み寄り、その声を掛ける。

「しかし、会合海域までの燃料は、相当に厳しい物があります。

翔鶴、瑞鶴は問題ありませんが、他の四艦はぎりぎりでしょう。

加えて、海流も艦に負担をかけます……」

燃料事情に精通する、第五艦隊参謀長中澤佑海軍大佐が、苦言を口にする。

本作戦の発動にあたり、最もヤキモキしたであろう人物である。

そして、彼の言う海流とは、日本海流所謂黒潮から延びる、太平洋を西から東へと流れる大水流、北太平洋海流の存在も、第五艦隊にとって大きな足枷となる。

しかも、この時期は強力な高気圧がハワイ北方域に発生するため、晴天が続いてしまうと言う、航空戦隊にとっては有り難いような、艦隊にとっては迷惑なような、逃避行には不似合いな気象条件が整う危険な海域が、行く先一千里に渡って横たわっている。

「まあ、中澤参謀長の心配はもっともな話ではあるが、どうせ米艦に出くわしたところで、駆逐艦主体の弱小戦隊。」

我が五航戦にかかれば、離脱しながらの反復攻撃で始末できる。索敵もしっかりしておるし、どつしり構えていればよい」

と見た目もどつしりしている巨漢、原も余裕を持って答える。

「……原司令の言う通りだ、中澤君。行くと違って存在は敵にばれておるから、出会い頭の遭遇戦は発生しない。

それに今まで、敵からの接触が無いと言う事は、敵の目は北…、大圏航路に向いている。最短航路で離脱するのは当然の選択であるし、そのように偽装もした。

まさかハワイ方面に向かうとは、夢にも思わんだろう。急がば回れ、じゃよ」

細萱は、中澤を諭すように言った。事実、敵と接触、あるいはリーダーの影に写る事すら許されない、隠密行動だったが、帰りはそこまで神経質になる必要はない。

そして、細萱が示唆したように、この時点でバンクーバーを出撃した、第10管区所属の駆逐艦隊が、大圏航路を封鎖し、厳重な警戒体制が敷かれていたのである。

慌てて最短ルートを通れば、艦隊と航空機のダブルパンチを喰らい、一瞬にして壊滅させらる事態に陥っていたのであるが、そうはならなかった。

これも偏に、迂回飛行により、敵の目を引き付けた、攻撃隊員達の功績によるものであり、攻撃成功と二重の活躍をした事となる。

その攻撃を成功させた殊勲者である、指揮官嶋崎は、飛行甲板の縁に腰掛け、もはや見る事はない北米大陸のある東の空を、感慨深げに眺めながら、煙草を燻らしていた。

「嶋崎さん、待機所にも姿が見えないんで、心配しましたよ」

「おう？……ああなんだ、ゴリさんか」

背後から声を掛けられ、少し訝しげに振り返ると、近付いてくる人物に返事をする。

ゴリさんこと戦闘機隊長の佐藤正夫大尉である。兵学校時代から

万能とも言えるスポーツマンで、精悍な風貌からそんな仇名で呼ばれている。

「いやあ、分隊長連中が総隊長はどこに消えたと捜してしましてね。攻撃成功を祝して、祝杯をあげようと騒いでましたよ」

やれやれと言った風に、嶋崎は苦笑いを零した。暢気なものだが、息の詰まる思いをひたすら堪えたのだから、一杯ぐらいならばかわんだらうと、嶋崎は腰を上げる。

「原司令は何と言っていたんだ？」

一応は確認しておかんと、エライ目に遭いかねんと心配して、佐藤に問い掛ける。

「日没を迎えたら、好きにしていって言うておりました。中澤参謀長はご機嫌斜めと言った感じてしたが……」

やっぱり、な

相当神経を擦り減らしているであろう事は、周囲に撒き散らしている空気で分かる。

「まあ、真面目な人だからな…、そんなに根詰めてやっていたら、身が持たんよ」

嶋崎と佐藤は苦笑いした。二人は艦橋へ向けて歩き出す。

嶋崎を始め、五航戦の人間がそんな余裕を持てるのも、艦隊直掩に上がる零戦隊の技量を信じての事である。

翔鶴戦闘機隊長、兼子正大尉率いる零戦隊と、最近の模擬空戦で常勝無敗を誇るようになっていて、後に最強の撃墜王と称される、岩本徹三の姿もあった。

日は西に傾きつつあり、第五艦隊は、つかの間の安息の時間を得る。

そして、その夜は何事も無く過ぎ、艦内ではささやかな祝宴が開かれ、乗員達は英気を養ったのである。

画龍点睛を欠く

現地時間一六四

ハワイ北方二百七十哩

「敵戦爆連合三十、迎撃を突破！ 突入してきます！」

「全艦対空戦闘用意！」

ハワイより全力を挙げて避退行動中の第一航空艦隊も、ついに在
ハワイ航空部隊の網にかかってしまう。

しかし、これが最初ではなく、現在に至るまで二度の襲撃を受け
たが、極度の混乱の中でなし崩しに出撃して来た敵編隊は、全ての
戦闘機を直掩に回した、第一航空艦隊の分厚い防空の傘に阻まれ、
散々に叩きのめされ逃げ帰る。

すでに、述べ百機以上の敵機を撃破し、辛うじて艦隊を危険に曝
す接近を、許さなかった訳だったのだが、敵は三度目の正直と言わ
んばかりに、これまでの二度を越える、一五 機規模の大編隊で襲
い掛かってきたのである。

「流石は太平洋最大の拠点、まだこれほどの機体を繰り出してく
るとは……」

旗艦赤城の艦橋から、双眼鏡で接近する機体群を眺めながら、参
謀長草鹿は声を上げる。

この赤城から敵機の接近を見るのも、彼にとっては二度目の事と
なる。しかし、今度は前の時とは違い、十分な戦力が整っている。

「奇襲を成功させても屈服しないとは、やはり侮り難し…、アメ
さんの敢闘精神は旺盛のようだ。」

が、この攻撃を掀伏せれば、我々の勝ちだ。

時間的に、更なる攻撃は不可能。夜間に動目標に攻撃を仕掛ける
のは、無謀であろう」

司令長官小沢もそのように判断し、目の前で繰り広げられる空戦の様子を注視する。

敵編隊の七割に上る直掩に捉えられ、敵機はバタバタと墜ちていく。

P38ライトニング、P40ウォーホーク、F4Fワイルドキャットと言った米戦闘機群は、攻撃隊の護衛に固執するあまり、零戦隊に格闘戦を挑む状況に追い込まれ、持ち前の高速性を活かし切れず、神業レベルの技量を誇る零戦のパイロットの手玉に取られ、その数を急速に減じていった。

空母隼鷹

「陸海、戦爆、ごちゃ混ぜで統制がとれていない。大した事はあるまい、叩き墜とせ！」

最後方に位置していた、四航戦と三航戦に接近している攻撃隊を見ながら、司令官角田は、その陣容を見抜き攻撃開始を命じた。

「対空戦闘！ 取舵二十、左舷高角砲撃ち方始めッ！」

艦長岡田が復唱し、片舷の対空火器が全て使用可能なように、左へと舵を切る。

この時、艦隊の陣形は、最前列に第三戦隊戦艦金剛、榛名

第十戦隊軽巡長良を中央に挟み、艦隊中央に第一航空戦隊赤城、加賀、第二航空戦隊蒼龍、飛龍が並走、周囲に駆逐艦七隻を配した第一群。

そして、やや後方に第四航空戦隊龍驤、隼鷹、飛鷹が中央左列、第三航空戦隊鳳翔、龍鳳、瑞鳳、祥鳳が右列に配置、第五水雷戦隊が最右列から、第六水雷戦隊が最左列に航空戦隊を包むように配置された第二群に別れていた。

第五、第六水雷戦隊も対空砲火を撃ち上げるが、いかんせん旧式

駆逐艦峯風型、睦月型を主体としているため、その火力では新型重爆撃機B24リベレーターを中核とする、編隊攻撃を阻止するには至らない。

瞬く間に接近した敵編隊は、第二空母群の中で特に巨大な艦体で、速力の劣る四航戦に向けて殺到してきたのである。

隼鷹と飛鷹は共に大型客船檀原丸（隼鷹）と出雲丸（飛鷹）を改装したもので、民間の日本郵船より海軍が接収していた。

他の空母に比べ、三ノット〜八ノット劣速の二五・五ノットであり、最後尾の大型艦と言う事もあり、格好の標的になってしまったのである。

攻撃は飛鷹に集中した。

「ジャップの腰抜け共め！ 逃がさん！」

B24の機長が、北へ向かう空母群を見据えながら、吐き捨てる。

「第三中隊、第四中隊各機へ。後方左のデカブツを目標に全機突入。ケツにでけえ玉をぶち込んでやるぞ！」

機上無線を通し、列機に指示を送るのは、第二爆撃飛行大隊指揮官エドワード・マイルズ中佐。

指揮下には、B24六機、B17八機、それとは別に海軍SBDドントレス艦爆七機、TBFアベンジャー艦攻四機の二五機が存在した。

「全機高度下げ、訓練通りにやる」

「水平爆撃じゃない……？ 雷撃か？ いやそれにしては……」

隼鷹の艦橋で、接近する爆撃機の動向を見ていた、角田は違和感を覚える。

重爆群は飛鷹に向けて接近を続け、機銃掃射を始める。角田のこめかみを汗が伝う。

「いかん、面舵を切れ！ 飛鷹もだ！ 急速転舵！」

角田の急な命令に、岡田は躊躇する。

「司令……、一体？」

「航本で噂に聞いた反跳爆撃だ！ 現在研究中の回避困難、厄介な攻撃方法だ……」

攻撃方法があるとすれば、それが一番効果的だ。

包囲されて爆弾を叩き込まれれば、飛鷹は……

角田の予測は的中した。突入したB17、B24は、進路を固定したことにより、それぞれ三機が至近距離で炸裂した、5インチ砲弾に巻き込まれ脱落したが、残り六機が飛鷹を、二機が隼鷹を襲った。

「爆弾槽開放よし！」

B24の操縦席でサブパイロットが、機体下部の爆弾投下用扉を開けた事を伝える。

「距離2000フィート……シュート！」

エドワードが投下スイッチを押し、500ポンド爆弾が、超低高度で飛行する機体から落下し、跳躍しながら海面を走り出す。

他の機体も続けて、爆弾を海面にほうり出し、飛鷹に向けて放射状に広がっていく。

「面舵一杯！ 避けさせえい！」

迎撃のために左舷を編隊に向けていた、飛鷹の反応は遅れてしまった。

そして、飛鷹を十六発の爆弾が襲った。内三発が波の影響で、船体を飛び越え反対側で爆発、八発が目標を外れる。

だが、五発の爆弾は狙い通りに飛鷹の体を食べ破る。

船体上部装甲板を貫き、外側に位置する兵員室を貫通した爆弾が、中心の格納庫まで到達、機体を炎と爆風で薙ぎ払った。

商船改装空母ながら、正規空母飛龍に匹敵する装甲を持っていた飛鷹であったが、一度に数力所高速で爆弾が命中すれば、耐える事に些か無理があった。

三発は格納庫、二発は奥まで入らず、装甲板の内側で爆発し大穴を穿つ。幸いなのは、喫水線より大分高い位置に命中したため、浸水がそれほどではない事だが、せめてもの救いだった。

しかし、艦の被害は甚大なものとなる。格納庫で炸裂した爆弾は、内部を吹き飛ばすだけに留まらず、衝撃と炎は上へと逃げ、防御を施されていない飛行甲板を突き破り、紅蓮の咆哮を周囲の者が見落とす事がないように、高々と上げた。

空母赤城

「飛鷹被弾！」

突然の悲報に、草鹿参謀長、源田航空参謀以下の司令部要員は、風防に駆け寄って、舞い上がる黒煙に釘付けとなる。

「死に損ない共が、やってくれる……」

源田は握る拳を、悔しげに肩を震わしながら、叩き付ける。

小沢は静かに瞑目し、草鹿は口をへの字に結んで、無言で飛鷹を睨む。

小沢司令部としては、予期せぬ損害だったのである。誰の目から見ても、良くて大破、沈没の可能性も十分にある。

「隼鷹被弾！」

二度目の悲報に、艦橋内は沈鬱な空気が支配していく。

彼らの思惑と現実とは、大きく掛け離れる事を、痛感させられる戦いとなった。

空母隼鷹

「被害は？」

角田の問い掛けに、岡田は振り返り

「艦尾損傷、損害は軽微。航行に支障無しです」

と答える。

隼鷹に接近した敵機も、やはり同じように爆弾を投下してきたが、全弾の回避は不可能と判断した角田は、被弾面積を小さくするため、爆撃機の針路に合わせたのである。

場当たりのな行動であったが、一発の命中弾で済み、事無きを得た。もつとも毎回うまくいく保障は無いのだが……

この攻撃により、艦尾と飛行甲板の一部が破損した事により、隼鷹は着艦作業に不具合が生じるが、航行及び戦闘そのものに影響は無い。

「各員は消火作業に当たれ」

岡田が命じる隣で、角田は後方で火だるまになっている、飛鷹に目を向ける。

飛鷹の周囲には、駆逐艦睦月、如月、弥生の三艦が、消火ポンプを稼働させ、燃え上がる甲板に海水を浴びせ、必死の消火が行われていた。

飛鷹からは、しきりに発光信号が送られてくる。格納庫は全滅したようだが、機関区に異常は見られず全速航行は可能、との内容である。

格納庫の爆弾や魚雷は、大半を消耗しており、機体も燃料の無くなりかけた、九九艦爆や九七艦攻のみだったため、誘爆が抑えられていた。

もし、出撃直前で攻撃を受けていれば、手の施しようがなくなり、廃棄処分が確定するところだったが、消火さえ済めば、本土まで帰

還は十分可能であつた。

「あああ！ 俺の寢床があ！」

部屋をメタメタにされた乗員から、そんな声が後から聞かれた。消火作業に二時間が費やされ、飛鷹は再び勢いよく海上を走り出し、喪失艦を出す事無く第一航空艦隊は、ハワイ近海域よりの離脱を完了させる。

この一連の戦闘での損害は、空母隼鷹小破、祥鳳中破、飛鷹が大破。

喪失機は、零戦四四機、飛鷹搭載機九九艦爆一五機、九七艦攻一四機が失われた。

対して米軍の被害は、三波述ベ二四 機が襲い、半数である一二機あまりを撃墜破し、帰還後廃棄を含めれば八割近い損害を与え、第8航空軍は事実上壊滅した。

本来、英国に派遣されるべきだった第8航空軍の喪失は、欧州戦線にも多大な影響を与えていくこととなる。

危機の兆候

時刻一九

ハワイ北西海域

連合艦隊

旗艦戦艦武蔵

「報告いたします。第一航空艦隊小沢長官より入電。」

一六四 米軍機の襲撃を受け飛鷹大破、祥鳳中破。しかし、両艦とも航行に支障無し。

対して米軍編隊に多大なる犠牲を強い、撃退に成功。目下避退行動中であります」

武蔵内の長官室に通信参謀和田雄四郎海軍中佐が、執務用の席に座り、何かしらの記帳を開き筆をすすめている、この世界最大の艦隊を率いる司令長官、山本五十六に報告をする。

現在、主力第一、第二両艦隊を合わせ、総計で五十隻を優に上回る大艦隊が、五列縦隊を形成し、北西方向へ移動している。

（この作戦の成功で、山本長官の声望は更に高まる。これで我が連合艦隊は……）

和田はそう考えながら、姿勢を正した。実に誇らしい事である。

「ご苦労さん。ま、座んなよ」

と山本は応接用の席に和田を促す。

「は、失礼します……」

言われるがまま、和田は長椅子に腰を下ろす。さすがに通常置かれていたような、豪華な調度品は撤去されており、簡素な物に変わっている。

先のハワイ南の海戦で、旗艦大和が損傷してしまったために、より通信機能が強化されている武蔵に、司令部が移乗したのは、つい

一時間程前の事である。

腰を下ろした和田の鼻を、スパイスの効いた香ばしい臭いが刺激する。卓上に置かれていたのは、夕食のカレーライスとカツ、野菜のスープがあつた。まだ用意されたばかりなのか、湯気が立ち上っている。

（そういえば内地は金曜か。勝つに掛けてカツカレーとは粋な計らいだな）

海軍の伝統として、金曜日にはカレーが食卓に並ぶ。長い海上勤務、洋上にあつては曜日の感覚を失う事を避ける目的もある。

現代においても、この習慣は海軍カレーとして受け継がれている。

「長官、せっかくのカレーが冷めてしまいましたが……」

和田は不思議そうに尋ね、山本は進めていた筆を止めると、「そうだねえ」と言つて立ち上がつて、応接用の机の和田の対面の椅子に腰掛ける。

しかし、山本が食事に手を付けようとはしなかった。

「和田君、第五艦隊からの返電は今のところはないのだね？」

目の前に広げられた夕食のカレーに視線を落しながら、山本は問い掛ける。

「現在無電の発信はありません。作戦は順調に推移しているものと思われます」

第五艦隊は無線封鎖により、その足取りはかなり不透明なものなっている。

「ふむ…、何も言つてこないと言う事は、無事な証明だと思いたいところであるが…な。」

そして、気になるのは米機動部隊の行方についてだ…。こいつのせいでせっかくのカレーも、喉を通りそうもない。

小沢君のとも、未だ見つけ出せないでいる。あるとすれば単独

航行中の第五艦隊か、あるいは直掩のいないこの本隊に追撃を掛けるか、無いとは思うが別ルートへの補給船団を叩くか……

敵信の情報解析で分かった事はないかね？」

山本は出されていたコップの水を一気に飲み干した後、和田を期待を含めた目で見つめる。

「残念ながら、暗号解析が完了していないため、直接敵情に繋がる有力な情報はありません。しかし、気になる点が一つ……」

「ほう…、聞こうか」

興味津々に身を乗り出す山本。

「実は……」

「非常に興味深い話だ。使いようによっては、切り札になりうる可能性もあるな」

和田の報告を聞き、山本は満足げな表情を見せる。

「しかし、敵機動部隊の動向につきましては、未だ何も…。敵が発信すれば、ある程度の位置特定も可能なのですが……」

和田の声は沈む。

「捕り逃した魚はあまりにもでかかったが、こうなってはやむを得まい。」

完璧とは中々いかないものだ……」

戦力を集中させれば、敵も同じく集中せざるをえないであろう、との予測に基づき連合艦隊は行動し、太平洋艦隊もそのように行動していた。

しかし、双方にとってのイレギュラーは存在していた。

「ところで長官、先程より書かれていたのは？」

和田は気になっていた事を聞いてみた。

「今度の作戦が無事終わったら、俺は海軍を辞めようと思っている」

唐突な山本の告白に、和田は耳を疑った。

二八日時刻一四

内地帝都東京

「どういう事か、ご説明願おう！ 陸軍と一致協力の作戦を、内容を秘匿するなどと、あつてはならんことである！」

霞ヶ関の赤煉瓦に、甲高い怒鳴り声が響いている。

カーキ色の軍服と白色の軍服を着た人間が、応接間の机を挟み、三人ずつ対峙している。

「誠に遺憾ではありますが、あゝ、作戦上の最重要案件であり、軍機につきお答えできない。それが海軍の回答です」

「何だと！」

最初の問いを発したのは、陸軍参謀本部第一部長田中新一陸軍中将、その問いに答えたのは、軍令部第一部長福留繁海軍中将である。のらりくらりとした福留の答えに、馬鹿にされたといった陸軍参謀の二人が勢いよく立ち上がる。

「座らんか、馬鹿者！」

田中にたしなめられ、福留を睨んだまま、座る二人の参謀。

「福留さん、このような事では我が陸軍としては、海軍に協力はできない。」

態度を改められることを、私としては忠告申し上げます」

口調を一転させ、田中は静かに話す。暗に脅しの意味が込められていた。

何かあっても、自分のケツは自分で拭けと…、陸軍は面倒は見ないと言っているのである。

「熟考いたします」

と福留は短く、当たり障りのないよう答える。

「まあ、いいでしょう。今日の所はこれで退散します」

そういうと、田中は立ち上がる。二人の参謀が複雑な表情でそれにく。

応接間を出る前に田中は立ち止まり、

「くれぐれも変な気を起こされませんように……」

と振り返らずに意味深な言葉を残して退室していった。

この時、嶋田海相、永野総長名で箝口令が敷かれ、作戦についての口外は禁止されていたのである。

「田中部長、よろしかったのですか？」

海軍省の赤煉瓦を出て、構内を歩く三人。すれ違う海軍関係者の視線が痛い。

「ああ、別に構わん。それに何か隠しているのは間違いないが、今聞いても逃げ切られる。時間の無駄だ」

そこで立ち止まり、赤煉瓦の三階を見上げながら、

「ここにも魔物は住んでいるようだ。必ず化けの皮を剥がしてやるさ……」

そう吐き捨てると、車に乗り込む。

「首相官邸に寄る。出せ」

黒塗りの車は海軍省を後にしたのであった。

内地がごたく中、海上は何事も無く一日が過ぎ去る。
索敵も何も発見できずに、三日目の朝を迎える。

現地時間二九日 九

北太平洋

ハワイ北七百哩

第五艦隊

「さて、ここが最大の難関か。ここさえ突破すれば後の障壁は無い」
瑞鶴の艦橋で、司令長官細萱が、左方の海上を見つめながら言った。

「ハワイ…、ですな。太平洋艦隊の残存部隊に発見されれば、厄介な事になります。一気に走り抜けましょう」
参謀長中澤が進言する。艦隊は現在二八ノットで、西へと針路をとっている。

「うむ、長居をする道理は無い。艦長」

「は、針路まま、機関両舷一杯！」

艦長野元の指示の下、瑞鶴は加速を始める。翔鶴以下、利根、筑摩、秋月、照月も順次加速を開始する。

「在ハワイの重爆群がどれほど残っているか、気になる点ですが、ハワイからここまで最低でも、二時間以上は掛かります。
索敵に掛かっても、何とかやり過ごせるでしょう」

五航戦司令、原はそうに判断している。実際、索敵の速度は遅く、索敵機自体が第五艦隊に接触できるのは昼近くのはずだった。あくまで、ハワイの戦力のみと想定した場合であるが……

そして、原の予測通り二時間は何も起こらなかった。ハワイ方面に多数放った索敵機からも、敵機発見の報告がなかったが、思わぬ報告が第五艦隊を揺るがした。

異変に気付いたのは、右後方を航行していた防空駆逐艦照月の見張りだった。

「右後方より接近する機影あり……」

第八戦隊の水偵だろうと、目を細め双眼鏡を覗く見張り員の表情が変わる。

その機にフロートはついておらず、翼に描かれていたのは

……星

「接近する機は日の丸に非ず！ 寸胴、米軍機と認む！」
絶叫が響いた。

後に北太平洋海戦と呼ばれる、史上初の空母対空母による戦いの幕が上がったのである……

北太平洋海戦

現地時間一二三

北太平洋

第五艦隊

米偵察機はTBFアベンジャー、接近してくるのは北東方向であった。

第五艦隊はハワイ方面の警戒に集中していたため、背後に対しては全くと言っていいほど、無防備になっていた事により反応が遅れた。

敵偵察機の発見に伴い、第五艦隊全艦に対空戦闘用意が下令される。

各艦内では蜂の巣を突いたような大騒ぎとなる。

「総員配置に着け！ 対空戦闘！」

指揮官の怒鳴り声が響き、機銃要員が持ち場の機銃に飛び付き、銃口を空へ持ち上げる。

「敵偵察機からの発信を傍受！ 位置を報告されました！」

旗艦瑞鶴の通信室でも、激しいやり取りが繰り広げられていた。

「暗号解読不能ですが、長文の発信です！ ハワイ方面からの発信も確認！」

ヘッドホンを着けた通信兵が、参謀に報告する。参謀は報告を聞かや否や、艦内電話に走り寄り、艦橋にその内容を伝える。

「ハワイの部隊も動くか……」

細萱の首筋を冷たい汗が伝う。あまりに厳しい状況に追い込まれた、司令部の空気はいやがおうでも沈むが、それに浸っている時間の余裕はないのである。

「原君の意見はどうだ？」

と五航戦司令原に意見を求める。聞かれた原は、しばしの沈黙の後に

「攻撃隊を全て偵察機の逆針路上に向かわせましょう」

いつもは見せる事の無い、積極的な意見を口にした原と

「位置特定もできていない目標に攻撃隊を送るなど、投棄的に過ぎます！ それに我が艦隊の直掩に上げる時間の猶予を失います。」

まずは艦隊の保全を図り、無事帰還する事を目標とすべきです！参謀長中澤が待ったを掛ける。第五航空戦隊の二隻の空母、翔鶴と瑞鶴は虎の児の新鋭大型正規空母で、それを失う事は、海軍戦力にとつて大きな痛手であり、アメリカとの講和に悪影響を与えるであろう事を危惧した。

そして、尤もたる理由は恐れ多くも陛下から預かる艦を、無傷で無事に持ち帰りたいとの思惑があつての事である。

原と中澤、内容は正反対な積極論と慎重論が出揃った。

どちらの意見も甲乙つけがたいものであり、攻めか守りか、細萱の裁量に判断を委ねられる事となる。

判断を迫られた細萱は、迷いを見せないようにしたが、躊躇いは隠しおうせるものではなかった……

だが、その迷いを断ち切る報告が見張りより飛び越んでくる。

「翔鶴より発光信号！ 我出撃準備完了せり、許可を求む。本艦は殿を担当せんとす」

後続する僚艦からの催促に、「馬鹿な……」と中澤は呻き、細萱は決断を下した。

「直ちに攻撃隊を出撃させよ！ 全力を挙げ、米機動部隊を撃滅する！」

第五艦隊司令部は、出撃と平行して無理を承知で、ハワイ近海域より避退した小沢艦隊に、緊急支援の要請を出したのである。

「総員整列！ 注目！」 艦橋下の搭乗員待機所前の飛行甲板に、第一次攻撃隊搭乗員が列び、前に立った嶋崎中佐を見つめる。

「時間が無い、手短に話す」

そう切り出した嶋崎の言葉に、乗員は息を飲む。

「今度相手をする連中は我々と同じ、敵の本拠に突入する勇気ある猛者達だ。油断する事無く、敵を叩き潰し、そして生き残れ！」
これを聞いて搭乗員達は、熱いものが沸々と沸き立つのを感じ、咆哮を上げる。

「相手にとって不足無しや！」

「戦果の上乗せじゃ、やってやるけえ！」

いやがおうでも士気が跳ね上がった。

「解散！ 総員がかれ！」

号令とともに、自分の愛機に向け搭乗員は走りだした。

「嶋崎さん、先陣は俺が貰います」

乗機の九七式艦攻に走る嶋崎の隣を、戦闘機隊長の佐藤大尉が声を掛けながら抜き去る。

「血気に逸つて墜とされるなよゴリさん」

そう返した嶋崎に「まさか」とおどける佐藤。

「敵の廃除は任せた。頼りにしてる」

それに笑いながら軽い敬礼で答えながら、佐藤は愛機の零戦二一型に飛び乗る。

（俺も気張るか……）

顔を二回強く叩き、気合いを入れる。

今度は寝起きの据え物斬りなどではなく、戦闘態勢にある宿敵米機動部隊である。容易ならざる敵にこれから挑む訳である。

空母翔鶴

「旗艦より攻撃隊出撃を認む」

司令部が決断を下した事に、艦長有馬正文海軍大佐は一先ず安堵のため息を漏らした。

「艦長も無茶をしますね。バレたら懲罰もんですよ……」

事情を知る副長が、有馬に話し掛ける。

「服務規定違反になりますかね？ 悩むだろう司令部に、ハツパをかけてみただけですよ。時間が惜しいですからね」

と副長に丁寧な有馬は答える。実際に翔鶴攻撃隊の準備は完了しているが、その数は少ない。

飛行甲板に列ぶ零戦四、九九艦爆三、九七艦攻四の計一一機。

瑞鶴が送ろうとしている攻撃隊の半分程度であり、故に異様な程早い訳なのだが、多少心許ないのはやむを得ない。

「しかし、この数での敵防空網の突破は、正直厳しいのでは？」

副長は不安げに考えを述べる。

「もちろん承知していますよ。しかし、機体が母艦と一緒に沈められては、元も子ありませんからね。航空戦は早さが肝心ですから先手必勝な訳ですが、恐らく敵は、てぐすね引いて捜し廻っていたでしょうから、既に攻撃隊が出撃しているのでしょうか……」

艦橋から、一番機が発進する様子を見つめる、有馬の顔は暗い色が浮かぶ。

しかも、自艦を盾にしつつ敵の攻撃を誘引する、被害担当となるべく、自らの身を危険に曝す覚悟は、並大抵の事では無い。

「さあて、どうなりますかね……」

積極策に意図的に誘導した有馬であったが、護衛戦力の不足が、作戦前からの最大の懸念事項であり、阻止攻撃能力に劣りながら、どれだけ敵の攻撃をかい潜る事ができるかが重要となる。

時刻一二三

「偵察機より入電！ 敵艦隊を発見、ハワイ北方800マイル付近。攻撃隊出撃を要請、艦隊陣容は空母2、巡洋艦2、駆逐艦2、北西方向に変針、速力は30ノット超」

時間をさかのぼる事二十分前、第五艦隊の北東海域を移動中の第六任務群。

旗艦空母レンジャーの艦橋に響く。

「捕り逃したかと思ったが、こんな所にいたのか」

司令席に座り、そう言いながら薄い笑みを浮かべるのは、レイモンド・A・スプルーアンス海軍中将。

現在、彼の指揮する第6任務群は、太平洋に存在する米海軍艦隊戦力の中で、最も充実した戦力を保有している部隊である。

第6任務群

第1航空戦隊 空母レンジャー

第2航空戦隊 空母ワスプ

第7巡洋艦戦隊 重巡インディアナポリス、オーガスタ

第3水雷戦隊 軽巡サンファン

第7駆逐隊 駆逐艦8隻

第8駆逐隊 駆逐艦6隻

空母二、重巡二、軽巡一、駆逐艦一四。

空母と重巡の数こそ、第五艦隊と同じであるが、護衛に軽巡アトランタ級と、駆逐艦グリーブス級とベンソン級を主体とする戦力は、相当な脅威である事は言うまでもない。

こんな海域に、第6任務群が移動しているのは、訳があった。

三日前の夜半、連合艦隊主力が夜襲に出るであろう事が、確実にされる中で、ニミッツの指示に従い、日本艦隊別働隊の行動に対処する目的で、ハワイ北東域に展開したスプルーアンスであったが、違和感を覚えた彼は一つの可能性に到達した。

開戦時と同じ打電、真珠湾奇襲、日本本土奇襲、これらの一連の流れの中で、ハワイ強襲が実行される現状に、もし、かつての真珠湾奇襲時にその艦隊戦力を東へ向かわせたなら…？

ハワイは敵主力が抑えれば、僅かではあるが本土を窺うチャンスが訪れるであろうとの考えに至る。

しかし、その時点での根拠は薄く、推論の上に成り立った可能性に、ハワイの主力を混乱させるリスクを犯したくないスプルーアンスは、独自の判断で艦隊を移動させたのである。

太平洋艦隊司令長官チェスター・W・ニミッツ海軍大将の直属の幕僚参謀長として、空母機動部隊指揮官にして最先任のブル（猛牛）ことウィリアム・F・ハルゼー海軍中将の推薦により、幅広い自由な行動を許されていた、彼だからこそできたのであるが、それと対称的に帝國海軍では、実戦部隊を統括する海軍三頭職、連合艦隊司令長官と言えども、上部組織軍令部の許可無く勝手に行動する事は、許されていないのである。

禁忌とも言うべき行動である、独断専行が生み出した海戦である。

「イニシアチブを取らせてもらうぞ、インペリアルネイビー」
攻撃隊出撃の許可をスプルーアンスは出した。

一時間前から、飛行甲板上に繋止されていた攻撃隊の出撃は早かった。一度、北緯45°付近まで北上し、索敵を行っていたため、いつでも出撃準備が整っていた事が大きく影響していた。

空母レンジャー

戦闘機F4Fワイルドキャット一二機

攻撃機TBFアベンジャー一四機

爆撃機SBDドーントレス一四機

空母ワスプも同数の機体を準備、総計八機が第一次攻撃隊として、二隻の空母から飛び立った。

大西洋からワスプと、練習空母であったレンジャーが、たちまちの内に第一線空母として、太平洋に回航して来たのも、マリアナ沖のまさかの敗北後、敗戦の責任を取られ太平洋艦隊司令長官兼合衆国艦隊司令長官ハズバンド・キンメル海軍大将と、海軍作戦部長ハロルド・スターク海軍大将の両大将が更迭され、最高責任者として大西洋艦隊司令長官であったアーネスト・キング海軍大将が両ポ

ストを兼任し、海軍の主攻は太平洋であることとしたのである。

シャープエッジの異名を持つキングは、敗戦の復讐を目的に、厭戦気分に戻る海軍を主導し、連合艦隊の留守を狙い両空母に帝都奇襲を実行させた。

そして彼は、帝都奇襲に際して英国を利用したのである。ルーズベルトに進言し、海軍再建の為に英国東洋艦隊を増強し、時間を稼いでほしいと、尤もらしい理由を添えて……。

キングは、大のイギリス嫌いであり、それ以上に日本が嫌いであった。彼の策略に嵌められ、英国は東洋艦隊を増強、後方から南方を脅かされる事を恐れた、帝國海軍は、連合艦隊主力を遣印艦隊として、インド洋に派遣、インド洋で激突した日英両艦隊だったが、両者共倒れを期待したキングだったが、予想に反して再び軍配が拳がってしまう。

キングにとつては誤算であつたが、目論み通り帝都を叩き、連合艦隊をハワイへおびき寄せる事に成功させ、戦術的、戦略的勝利を収めようと画策したのである。

そして、首都ワシントンにおいて今回の敗戦にうちひしがれながらも、未だその策謀は衰えず、復讐の焰に身を燃やすキングの姿があつた。

戦術的大敗であつたが、彼にとつての目的の一つは、すでに達成されていたのである。例えば太平洋艦隊、ハワイを失つたとしても、戦いようはあるのである……。

現場では、そのような思惑など知るよしもなく、ただひたすらに目の前に迫る事象に、対応するのに終始せねばならない。

攻撃隊が発艦して一時間半…、先に到達したのは、やはり言うべきか、アメリカ側である。

「見つけたぞ！ ジャップ！」

レンジャー攻撃隊指揮官、ハンス・エアハート中佐は第五艦隊の姿を認め、通信機を通して指揮下の機体に、攻撃態勢に入るよう命じた。

しかし、彼の目に飛び込んで来たのは、艦隊直掩の零戦一二機であつた。

「第二分隊は寸胴、第三分隊は艦爆だ！ 第一分隊は俺に続け！」直掩隊を率いて、手信号で合図をしているのは、塚本勇三大尉である。血の気の多い熱血漢であり、ようやくの出撃に腕を鳴らしていた。

「ん！？ あいつらはどこにいきやがった！」

塚本が周囲を見渡すと、三機ばかり数が足りない。

その刹那、米編隊の中を上から下に火戦が走り、白い影が三つ、それに続いて爆発四散した米機が落下していった。

「岩本の野郎、抜け駆けか！？ 遅れをとるな、全機突入！」

塚本は声を張り上げながら、敵の大編隊に斬り込んでいった。

対して、突然の不意打ちに、米軍編隊は混乱に陥った。慌てふためく様子を尻目に、岩本はちよろいちよろいと口笛を吹きながら、機首を再び米編隊に向けたのであつた。

直掩隊が迎撃戦を展開する様子は、空母翔鶴からも伺えた。

「中々、善戦しているようですねえ。さすがは我が軍の精鋭達です」

艦長有馬はその様子を双眼鏡で見ながら、その奮闘ぶりを称賛し

た。

「しかし艦長、いくら精強でも、あの数では突破されてしまいますよ」

またしても、副長が至極真つ当に茶々をいれてみたりする。この艦長は恐ろしく丁寧で腰が低い。

「それは勿論の事です。後は私の職務です。任せて下さい」

敵の一部は持ち直して迎撃を突破し、接近するのを確認した有馬の表情が、真剣なものとなる。

「全艦対空戦闘！ 回避行動に移る！」

こうして、翔鶴の辛い戦いが始まったのである……

海軍の亡霊達

北太平洋で熾烈なる空母機動部隊同士の戦闘が始まる中、内地では不気味な動きが見え隠れし始める。

時を遡る事一日

八月二八日

時刻 九三

内地 熱海

「さすがに避暑地なだけに、東京に比べマシだが、暑い事に変わりはないか」

一台の高級者から一人の第二種軍装に身を包んだ、白髪混じりの人物が車から降り立つなり、小さく呟く。

彼がいるのは、熱海の温泉街から程近い緑地の中に佇む邸宅の前である。

来客の訪問に、応対するべく家人が出てきたので、彼は自らの名と職務を告げ、主人に目通りを願い出た。

「少々お待ち頂けますか？ 確認いたしますので……」

家人はその人物の素性を知っていたのであるう、元内相の彼を門前で待たせたのである。

普通であれば、許されるような行為では無いのだが、このような無礼も彼にとっては想定範囲内である。

しばらくして家人は戻って来たが、その答えは冷徹であった。

「御主人様は、お会いになりたくないと申されております。どうかお引き取り下さい……」

やはり、と言った具合の対応であった訳だが、ここでは引き下が

れない。

「海軍内の一大事につき、至急の案件でありますので、どうかお取り次ぎを」

男の雰囲気にも飲まれ、家人は渋々と引き下がり、今一度確認のためになかへと戻っていき、しばらくして家人は戻って来た。

「失礼しました。こちらでございます」

家人の案内に従い、門内に踏み込むと、手入れの行き届いた邸内は、その空気が澄み涼やかであった。

家人に案内され、落ち着いた雰囲気にも包まれた屋敷内の庭園の見える一室に案内される。

（さすがは皇族の別荘だけはある…、立派なものだ）

案内された応接間で、庭の方を見ながら一人考える。そして、今までの事も……

不意に扉が開け放たれる。姿を現した面長の人物は入るなり、

「久しい、な…。末次よ。お前の方から訪ねてくるなど、どう言った風の吹き回しだ？ 明日は嵐かの？」

「殿下におかれましては、ご機嫌麗しゅう……」

入って来た人物は、言わずと知れた伏見元軍令部総長宮博恭元帥海軍大将。

唯一の海軍元帥であり、海軍大臣、軍令部総長、連合艦隊司令長官の三職は、彼の承認無く務める事はできない。

海軍内の実質的な最高実力者でありながら、表立って行動する事は稀であったが、その影響力は絶大である。

片や、末次と呼ばれた人物は、元連合艦隊司令長官、軍令部次長、

内務大臣、大政翼賛会中央協力会議議長と、数々の政府、統帥部の要職を歴任してきた、末次信正予備役海軍大将である。

末次が歴史の表舞台に姿を現したのは、海軍軍縮時代まで遡る。

当時、末次は軍縮条約に明確な反対姿勢を示し、加藤寛治、高橋三吉らとともに所謂艦隊派を形勢し、加藤友三郎、山梨勝之進ら条約派と激しい論争を演じ、後に統帥権干犯問題を引き起こし、省部互渉規程に基づき、伏見宮と東郷を担ぎ出し、兵力量決定権を海軍省より軍令部に移し、その権限を拡大、海軍戦力の拡張に邁進した。艦隊派の最重鎮にして、裏で操る巨魁…、日本海海戦の英雄、軍神東郷平八郎元帥や、皇族伏見宮元帥、上司である加藤寛治も彼に利用された節が少なからず存在した。

「形式的な挨拶などどうでもよい。どの面下げて余に会いに来たのだ？」

明らかな怒気を含む、相手を威圧する言動。普通の海軍軍人であれば言葉を吐き出す事もおぼつかないだろうが、伏見宮のこのような高圧的な態度も、末次にとっては問題では無い。

「これまでの非礼のお詫びと、ご報告…、であります」
事もなげに言つてのける末次も、普通では無い。

「ほお、面の皮の厚い貴様にしては殊勝な心掛けだが、この重大曲面時の布石であろう？　いくら詫びを入れられても、余は貴様を許す気は更々無いぞ？」

嫌らしい笑いを浮かべながら、長面君は足を組み直し、末次を見遣る。表情とは裏腹に目は笑っていない。心の奥底にあるものを見透かすような、冷たい光が宿っている。

末次はこれまでも、様々な逸脱行為が多く、伏見宮の担ぎ出しにも一枚噛んでおり、海軍官房機密費の政治資金流用など、海軍軍人

としてあるまじき行為を繰り返し、政友会、右翼団体とも独自の関係を構築し、政治の世界に大きく踏み出していた。

サイレント・ネイビー（物言わぬ海軍）を標榜とする帝國海軍にあって、末次のような人物は稀であった。

この事が伏見宮の逆鱗に触れ、長年軍令部総長の地位を望みながら、伏見宮は軍令部総長を、永野修身海軍大将（海兵二八期、末次は二七期）に禅譲してしまう。

その後も、日米開戦が押し迫る中、第三次近衛内閣瓦解後、陸軍省軍務局では、後継首班最有力候補に上げられていたりしたが、伏見宮はもとより、重臣はおろか、昭和天皇にすら不興を買い、首相になれず、東条英機が首相に就任する事となる。

末次の栄達が失敗するには、ことごとく伏見宮の影が付き纏っている。

そして、その影響は海軍内の人事にも、大きく影響している。日米開戦時は、それまで海軍戦力整備を主導していた、艦隊派の中核であるはずの末次閥の人物達は、海軍の中枢から遠ざけられている。結果として、軍令を司っていたはずの艦隊派は姿を消し、若手グループは別として、強力な指導者が中枢に存在しない、組織の弱体化が深刻になっていた。

変わって、強力なリーダーシップを発揮しだしたのが、誰であろう現連合艦隊司令長官山本五十六であった……

軍縮条約時代より、因縁深き間柄である。

「その事につきましては、弁解のしようもございません。しかし、布石以前に大きな問題が生じてございます。殿下はお気づきでありましょうか？」

末次は本題に入る。

「何が問題であるのか？　今までにない大勝を挙げている現状に、貴様が首を突っ込む余地など無い」

何を今更、と言った風に伏見宮は末次を邪険に扱う。

「やはり、殿下と言えども海軍の全てをご存知ではありませんでしたな。ましてや最前線の事は……」

末次の薄く口元を上げ、にやけた表情を見て、伏見宮は激昂する。

「末次よ、図に乗るのも大概にせよ。これ以上は貴様に消えてもらわねばならん」

怒りが頂点に達し、殺気を含むどす黒いオーラが、周囲を包む。

「山本が、第五艦隊を許可無く動かしました」

次の末次の発言に、殺気に包まれていた部屋の空気は硬直する。

「何？」

伏見宮は、事態が見えなかった。

「第五艦隊は永野の発した大海令（大本営海軍部命令）において、深く明記されておりませんが、ハワイ作戦の使用が軍令部の許可した内容であり、米本土への直接攻撃を永野は認めておりません」

突然の機密情報の暴露に、伏見宮は事態をすぐに認める事はできなかった。

「馬鹿な！　今回の件、事前の話しと違つと永野に問い合わせたが、直前に作戦を変更したとの回答が、東京からは届いている。

軍令部が正式に裁可した内容であると、永野は言っておる。部外者である貴様の言を信じると言うのか……」

伏見宮は目の前の信用ならぬ男の言葉に、疑心暗鬼にかられる。

「嘘は申ししておりません。心配ならば、信頼している嶋田（海軍大臣）に問い合わせては？　尤も事態発覚と責任問題に発展するのを恐れ、口を開くとは思えませんが。事が明らかとなれば、海軍、ひいては三名を認めた殿下の名を陥しめる事態となりましょう……」
暗に脅迫めいた言動を末次は口にする。

「ぬう、何を始めるつもりだ？　海軍は貴様の思い通りにはなら

んぞ！？」

「承知しています、と末次は言う。自分に邪ましい考えはなく、どうこうするつもりもない…、と前起きをした上で、末次は言葉を紡ぎ出す。」

「私はそこまで傲慢ではありません。しかし、此度の快勝で一部の者達が、要らぬ動きを見せるかも知れませんが、我が海軍は何者の束縛も許さぬ存在でなくてはなりません」

そう話す末次の双眸には、確かな決意の光が宿っていた。

この日、末次が伏見宮邸を後にしたのは、日が沈んでからの事だった。

後に熱海会談と呼ばれる、史実では決して交わる事の無かった、伏見宮末次の相入れない二人の怪物が、極秘裏に結び付き、海軍の行く末が決定される重要な会話が成されたのである。

そして、その時は間もなく訪れようとしていた……

第五艦隊奮戦す！

現地時間二九日一四

ハワイ北方

八五 湮沖

第五艦隊

「敵艦爆、本艦右上方より降下！ 投弾態勢！」

「右舷後方より、雷撃機接近中！ 数三！」

塚本大尉率いる直掩隊が、果敢に突入して敵編隊に喰らい付いたが、いかんせん八 対一五と言う、圧倒的数の差は、極めて高い技量を誇るパイロットを持ってしても、覆すのは困難であり、攻撃隊は後方に居残る翔鶴に狙いを定め、攻撃を開始。

見張りからは接近してくる敵機の報告が、絶え間無く入って来る。

「面舵一杯！ 右舷高角砲応ぜよ！ 機銃群は艦爆に照準合わせ！」

先程までの口調を一転させ、艦長有馬は的確な指示を飛ばす。

「第二次攻撃隊は発艦準備急げ！ 戦闘機の一部は直掩に回し、間隙を縫って出撃させる！」

艦長の命は、相当な無理があつた。敵の猛烈な航空攻撃、対空射撃、回避行動中にあつて、航空機を発艦させるのは難しい。

翔鶴は、なんとしても第二の矢をつがえようと、両舷の12・7センチ連装高角砲八門、25ミリ三連装機銃一二門を、有らん限りを尽くして抵抗した。

「左舷より雷撃機三機接近！ 二番、三番高角砲、仰角15、旋

回角30から40に照準！」

対空射撃指揮所で、指揮官が指揮棒を敵機に向け、諸元を大声で指示する。

「後方より雷撃機二！三番四番高角砲照準、撃ち方始めッ！」
反対側の右舷も必死に指示を飛ばし、高角砲は雷撃を阻止すべく、砲弾を放つ。

放たれる弾は全て人力による装填であり、砲身に砲弾を詰め、尾栓を閉じ、撃つの動作を繰り返す。屈強な水兵が、入れ代わり立ち代わり、砲弾を運び続ける。

艦全体が、発砲炎の爆音、硝煙の臭い、艦を守るべく奮闘する将兵達の声に包まれていく。

一方の直掩隊も、敵編隊護衛のF4Fワイルドキャットと、空中戦に入っていた。

岩本徹三飛曹長率いる岩本小隊三機が、上空からの逆落としにより、SBDドントレスー、TBFアベンジャー二、F4Fワイルドキャット一の、四機を初撃で撃墜したのを皮切りに、混乱した米編隊に、塚本大尉率いる一二機の零戦が突入。

SBD三、TBF三、F4F二の計八機を、すれ違い様に20ミリ機銃の高威力を持つて爆砕し、引き換えに二機が、敵のブローニング12・7ミリ機銃の洗礼を浴びて、撃破されてしまう。

この時点で日米、航空機数は、

日本側

零戦×一三

アメリカ側

F4F×二一

SBD×二四

少ない時間で、発艦できた直掩隊では、八機の敵はあまりに多かった。

そして、初撃を喰らわした零戦隊に、今度は護衛のF4Fが、攻撃隊の突入を援護すべく果敢に戦闘を挑んでくる。

「やらせんぞ！ ジーク（零戦）」

戦闘機隊指揮官、チャールズ・R・フェイトン少佐が、最初に逆落としを掛けてきた零戦が、再び機首をこちらに向けて、接近してくるのが見えた。

「今日こそ、マリアナの雪辱を晴らす。ゼロファイターの不敗神話を終わらせてやるぞ」

かつて、空母レキシントンの戦闘機隊を率いて、キンメル大将率いる主力部隊の直掩に、従事していたのだが、当時、日本戦闘機のパフォーマンスの技量を舐めてかかり、格闘戦を零戦に挑む無謀な行為をして、自機を撃墜されてしまい、駆逐艦に救助され、命からがら脱出してきた経緯が彼にはあった。

（今度は負けん！）

意を決してフェイトンは、こちらに向けて上昇して来る零戦に狙いを定め、急降下に入る。

（次はどういった？ 敵攻撃の阻止ならば、爆撃機が攻撃機に……）
目標を見定めようとした岩本の視界に、一点の光が目飛び込んでくる。上空のプロペラに反射した、太陽の光である。

「チッ！」

舌打ちと同時に彼の体は反応した。スティック（操縦桿）を右に倒し、左のフットバー（足踏桿）を蹴る。

刹那、機体は右へと横滑りし、岩本機のあった空間を火戦が走り抜けた。

ダイブを掛けていたフェイトンは、突然岩本機の姿が消えた事に、
啞然とした。

攻撃を避けた直後、機体を再び反転させ、フェイトン機を追撃
を掛けようと、岩本は操縦桿を倒し、急降下を始める。

背後に付かれたフェイトンは、駄目元で機体を回転、旋回させな
がら、海面を指し急降下を開始、スパイラルダイブで逃れようと
したのである。

反撃を考える余裕は無く、視界は海面しか映らず、上も下も分か
らず、ただ海面に激突するか、敵弾の餌食となるかしか思い浮かば
ず、極限の恐怖にフェイトンは苛まされていた。

一方、追撃を掛けた岩本であったが、フェイトンの操縦を見て、
追撃を諦める事にした。

「やる、な。あそこまでして逃げられたんじゃ、弾と時間の無駄
だ。こちらが急降下に限界があるのを知っていたのか？ まさかな
…、今度会った時にはしっかり相手をしてやるさ」

岩本は、降下を続けるフェイトン機を見ながらそう言うと、機体
を再び上昇させ、苦戦中の味方機の援護に向かった。

「ぬああ！ 鬱陶しい奴らだ！ さつさと墜ちろ！」

直掩隊指揮官の塚本は苛立っていた。どういう訳か塚本機は、グ
ラマン（F4F）四機に付き纏われていた。

何とかグラマン一機を血祭りに上げたが、周囲から銃撃を浴びせ
られ、回避に専念するのがやっとである。

隙を見て、射線軸に入ったグラマンに、7・7ミリ機銃をぶち込
んでみるが、致命傷にならず、逆に集中砲火を喰らわせられる。

その度に急降下、急上昇、急旋回、横転あらゆる技術を駆使して
回避行動を取るが、命中こそしないものの、塚本機は不気味な震動
と音を放ち始める。

（クソ…、機体が持たんか……）

空中分解

今現在最強と謳われる零戦の、致命的な弱点である、徹底的な軽量化による脆弱性、その機体は急降下の際に掛かる負荷に耐え切れない……

リベットの一本まで、肉抜きを行う細かさ、故に他を圧倒する旋回性と機動性、浮いた重量を攻撃力に振り向けた事に達成された最強の地位である。

塚本は覚悟を決めて、一機でも屠ろうと、狙いをグラマンに指向する。

だが、そう思う塚本を救ったのは、岩本小隊の面々である。塚本機に群がる四機の半数、二機が突如火たるまとなって、落下していったのだ。

三機いた小隊も、一機がグラマンの餌食となり撃墜されてしまい、全体の数も半数ほどに減ってしまっていた。

「ありがたい！ 流石だな……」

塚本機に取り付いていた他の二機は、慌てて離れていき、岩本の部下である児島飛曹機が追撃を掛ける。

岩本は、塚本機の隣に移動すると、風防越しに笑いながら拳を振り上げた。

塚本も拳を突き出し、それに応える。どうにか、九死に一生を得たのである。

塚本と岩本は、再びグラマンの残りに襲い掛かった。20ミリ機銃弾はごく僅かであるため、絶対に命中する時以外は撃てない。

しかも、弾道が安定しないため、至近距離から発砲せねばならないので、敵機を翻弄して背後に回り込むのが、上策となる。いかに弾を少なく命中させるかも、エースの要素である。

岩本も無駄弾はほとんど撃っていない。だからこそ、未だに戦闘は可能であった。

直掩の零戦は、半数に減っていたが、グラマンはそれ以上の出血を強いられ、立場が逆転しつつあった。数が減ってきたことと指揮官機が姿を消した事で、グラマン隊は完全な防戦に入ったのである。

空中戦は、零戦隊が優位に持ち込んでいたが、肝心の攻撃機の阻止は、グラマンに阻まれた事によって、SBDとTBFは、空母翔鶴に殺到した。その数、実に四十機余り……

翔鶴は第二次攻撃隊を準備中であるため、弾幕を張りながら回避行動を展開中で、艦の周囲は赤黒い煙りに包まれている。

駆逐艦秋月

「敵機本艦前方距離二、翔鶴へと向かいます！」
艦橋に見張りの声が届く。

「おい、鉄砲（砲術長）！ 準備はいいか！」

「こつちの準備はバッチリでさあ！ いつでもどうぞ！」

威勢のいいやりとりが木魂する。艦長古賀弥周次海軍中佐が、砲術長の答えを聞いてヨシ！ といい、あらためて命令を発する。

「主砲撃ち方始めツ！ 敵は本艦を馬鹿にして、目もくれず阿呆みたいに突っ込んでいくぞ！ よく狙って叩き落とせ！」

主砲である六十五口径10センチ連装高角砲が、前を進んで行くTBFの編隊に照準を合わせ、発砲を始める。

俗に長10センチ砲と呼ばれるこの砲は、砲弾そのものは小型化しているが、威力は12.7センチ高角砲と遜色無く、旋回速度、俯仰角速度、射程、射高もそれを上回る優秀砲であった。

装填方式は半自動であり、人手をかけなければならぬのは変わ

らないが、砲弾が小型軽量であるため、運搬は楽になっている。

秋月及び照月の射撃は、今までの対空砲火に比べて、遥かに効果的だった。

突如、至近で砲弾が爆発した事に、TBFの編隊は驚いたが構わず突撃を続行したのだが、対空砲火の爆発がついて来る。照準の修正が早い。

これでは敵わんと見た敵機は、魚雷を射点の遙か手前で投げ出し、離脱を開始した。そして、反転際に一機が、弾幕に飛び込んで、TBFは制御不能となって海面に激突、機体はバラバラになった。

「米機の撃墜を確認！ 他の機も離脱します！」

「っしやあ！ 初出撃で撃墜だ！」

戦闘を見ていた乗員からは、歓声と万歳の声が上がる。

これにより、翔鶴右舷より接近した四機のTBFを撃退し、一機を撃墜した。

「目標を変更！ 翔鶴の上でたむろしている連中に照準！ 面舵一杯、翔鶴の動きに合わせる！」

古賀は命令する。左前方で面舵を切る翔鶴と同じ動きをとり、可能な限り射戦を確保するべく行動する。

秋月の主砲は仰角90°まで取る事ができる。搭載されている25ミリ機銃も、援護するには最適との判断である。25ミリ機銃の射程は三千程度、射程内にSBDは入っていない。

一方、艦爆隊の半数は、タイミングを見計らっていた。未だに命中弾を出す事が出来ずに、指揮官ウォレス・C・ショート大尉は焦りを禁じえなかった。八十機もいた編隊は、半数以上が攻撃を失敗し帰投、残りは今攻撃中のTBF八機と、指揮下のSBD一六機を残すのみ……

たった数隻に、ここまでてこずるとは正直思わなかった。あまりにも、空母の撃沈に囚われ過ぎ、翔鶴に攻撃を集中した事が失敗と

言えた。

ウォーレスは、盛大な航跡を曳いて回避し続ける翔鶴を、忌まじまじしながらも複雑な表情で見つめ、無線を通じ、命令を下す。

「全機…、降下開始！」

応酬

現地時間一四二

北太平洋

第五艦隊

「敵艦爆群、一斉に降下！ 翔鶴と…、本艦にも向かってきます！」

駆逐艦秋月の艦橋に、見張りの叫びが轟く。見ると一六機のSBが三群に別れ、内二機が秋月を目掛け急降下に入っている。

「翔鶴にはどれくらい向かっている！？」

艦長古賀は、見張りに大声で問う。

「数一二！ 直も降下中！」

あらまし全部ではないが…、古賀は舌打ちをしながらも、翔鶴を守るべく、新たな指示を飛ばす。

「本艦に向かう敵機は無視、回避運動で敵弾を避わす！ 全主砲を翔鶴に向かう機に照準合わせ！」

秋月は舵を切りながら、八門ある長10センチ砲の砲口を、SBに指向する。

「母艦をやらせるか！」

直掩の零戦四機も、降下を開始した編隊を阻止すべく、後を追って急降下に入った。

もはや、自らの身を案じるよりも、彼らは動いた。ただひたすら、帰るべき場所を守るために……

「敵機本艦直上！ 真っ直ぐ突っ込んで来る！」

「取舵！ 急げ！」

「とおりかあぁじ、いっぱあぁい！」

翔鶴の艦橋で、その叫びを聞きながら、有馬は攻撃隊の発艦中止を発令する。

回避運動をとりながら、辛うじて第二次攻撃隊を送り出した。その数九。

零戦三、艦爆二、艦攻四であり、飛行甲板上には、発艦待機中の機体が、一四機あってすでにいつでも出られるよう、準備が整っていたのだが。

SBD編隊はすでに高度二千を切っている。25ミリ機銃が火を噴き、火線が延びている。

急降下に入ってから、急速転舵であるため、あらかた回避はできるだろうが、包み込むように降下した急降下爆撃を、全弾を回避するのは不可能であろう……

（本艦の役目は十分に果たした。後は……）

有馬は艦橋の天井越しに、迫り来る米機の姿を見据えた。

「敵機投弾！」

機体下部の450キロ爆弾が切り離され、翔鶴目掛け落下を開始する。しかし、落下する爆弾に飛び込む影があった……

「こなくそおお！」

直掩隊の最年少、二十歳の神山稔飛曹が叫びながら、落下していく爆弾に向けて、体当たりを敢行、爆弾二発を巻き添えにして、被弾誘爆、機体が四散し翔鶴を外れ至近の海上へ落下した。

他の機体もなけなしの機銃弾を、派手にぶっ放しながら、艦爆群に突入したのである。

それを上空から降下していたウォーレスは、それを見て、驚愕と感嘆の声をあげた。

「凄まじいな、ここまでやると言うのか……」

サムライと言う誇りのために、死を厭わぬ者達がいることを、話しては聞いていたが、彼らこそが誇り高きサムライなのだ……

「だが、引き下がる訳には……、ここで沈んで頂く！」

最後に残ったウォーレス率いる四機が、投弾体勢に入る。

「神山機、自爆！ 他は全て至近弾！」

飛行甲板上や周囲の者達は、その行為を目の当たりにして、目頭に熱いものが込み上げてくるのを感じた。

翔鶴の艦橋でも、この報告は衝撃だった。

有馬にも若い者を、このような形で死なせてしまった事に、責任を感じずにはいらなかった。

「直も接近中の機体あり、数四！」

しかし、感傷に浸る時間を戦場は与えてくれない。爆撃が全て回避され、今度は失敗しないよう、回避不能とも言える高度二百まで高度を下げ、四機は一斉に爆弾を投下した。全て被弾コースである……

「面舵一杯、右舷推進軸停止、急速転舵！」

「おおおもかあぁじいっぱあぁい！」

有馬の命令を、操舵員が復唱し舵を右に切る。平行して右スクリューを停止させ、左推進により舵の効きを早めようとした。舵もスクリューもすぐに動くものではない。

しかし、有馬の努力も報われず、勇戦していた翔鶴も、ついに被弾してしまう。

450キロ爆弾が四発中二発が命中した。一発が艦首付近、一発が船体中央の飛行甲板に命中し、飛行甲板がめくれ上がり、爆炎が内部から噴き上がった。

飛行甲板及び格納庫に、装甲を施されていない翔鶴にとって、こ

の一撃は大きい被害を与える。

そして、悪い事に雷撃機が二機、空き巣よろしく、警戒が疎かになった低空より接近、速度が低下していた翔鶴の左舷に魚雷を一本を命中させたのである。

「飛行甲板大破！ 艦首部で甲板の一部倒壊！ 格納庫で火災発生！ 左舷破口より浸水発生！」

一瞬にして満身創痍となった翔鶴。甲板、格納庫では消火作業が開始される。

八 機もの編隊の攻撃を一身に受け続け、爆弾二、魚雷一に留めたのは、幸運としか言いようがない。

これにより、米側の第一次攻撃隊は引き上げた。一方的に攻撃を受けた第五艦隊であったが、これから起死回生の反撃が開始されるのである。

米第一次攻撃の終了に遅れる事二五分。第五艦隊が放った第一次攻撃隊が第六任務群を捕捉する。

翔鶴

零戦四

九九艦爆三

九七艦攻四

瑞鶴

零戦八

九九艦爆一

九七艦攻一

計三九機

機数は米攻撃隊の半数に満たない。最初から攻撃隊出撃を前提としていた第6任務群と、偵察と接敵した後の急遽出撃した第五艦隊、差は歴然であった。

しかし、彼らは一騎当千…、は言い過ぎであるが、作戦前の訓練による飛行時間が、七百時間を越えるベテラン揃いであり、ようやくの会敵に喜色の声を上げる。

「空母を含む輪形陣…、間違い無い！ 東京をやった奴らだ！」
攻撃隊指揮官嶋崎中佐は、前方に展開する艦隊を見ると、即座に判断を下し、指揮下の全機に向けてトツレ（突撃隊形つくれ）を打電する。

二十五番を抱えた艦爆隊、魚雷を抱えた艦攻隊が分離、各々が配置についていく。

嶋崎は周囲を確認した後、ト連送を発信する。全機突撃せよの合図である。

先陣を切って真つ先に、上空に展開するF4Fの直掩機群に突入したのは、ゴリさんこと佐藤大尉だった。出撃前の発言通りの行動であり、零戦隊は全機これに従った。

零戦隊はF4F編隊に突入、優勢な戦力と圧倒的な技量、持ち前の軽快な運動性能によって、一方的な展開へと持ち込んだ。

攻撃第一波に、多くの戦力を投入した事により、直掩機が少ないのはやむを得ない事だった。

第6任務群

旗艦空母レンジャー

「うん、いい動きを見せる。報告通り手強いようだなゼロは…。無敵の性能との噂は、あながち嘘ではなかったか」

艦橋から、上空で開始された戦闘を双眼鏡で覗いているのは、スプルーアンスである。

彼は誰に言うともなく口にした。今まで零戦を直接目にする機会は無かったが、その噂だけは耳にしていた。味方の海軍F4F、陸軍のP38、P40、英軍のハリケーンが、全く歯が立たない強力な戦闘機を、日本軍が保有していると……

実際、直掩機は蹴散らされ、攻撃機がその脇を悠々とこちらに向かってきている。

（先制攻撃に全力を投入した事で、艦隊防空が疎かになったか。しかも、あれだけ送った戦果は、空母一大破に留まるとはな…。この際は仕方あるまい）

先手必勝の思いで、行われた第一次攻撃が不発に終わった訳だが、日本艦隊による反撃をスプルーアンスは予測しており、その対応は奇しくも第五艦隊と同じ方法が取られていた。

彼は空母ワスプを北西方向へと移動させ、攻撃に専念させるべく自らを囷とし、攻撃を誘引するべく努めた。一塊で行動して、一度にレンジャー、ワスプの両空母が被弾するリスクを回避したい意思があり、偵察機の針路から位置が特定される事も折り込み済みであった。速度の関係から、移動した所で距離は稼げないとの判断によるもので、日本軍機は全てレンジャーへと向かってきていた。

「こちらの意図に掛かったか…」

All Weapons Free（火器使用自由）！

Control Open（迎撃開始）！」

レンジャーに装備された対空砲が火を噴く。続いて周囲を固める護衛の防空巡洋艦サンファン、重巡インディアナポリスを始め、駆逐艦十隻も順次対空砲火を開始、攻撃隊の周囲は黒煙に包まれていく。

砲弾が爆発し視界を遮り、その破片が機体に叩きつけられていく様子を肌で感じながら、嶋崎は冷静さを失ってはいなかった。

「何としても空母は仕留める。各分隊は散開、敵の砲火を散らせ！」

嶋崎は対空砲が対応できないように、全方位からの攻撃を企図した。

しかし、射点につく前に、行動を予測された、濃密な迎撃によって損傷を受ける機が、艦攻隊を中心に続出した。レンジャーに向かって、魚雷を投下できた機がないうちに、半数にあたる四機が撃破、二機が撃墜されてしまっていた。

だが、残りの八機はレンジャーを捉え、左右両舷から包み込むようにして、突入する。

「距離二、針路まま！ ヨウソロ…」

「距離一八、一六…、投下！」

距離千五百で、攻撃隊は次々と魚雷を投下、同時攻撃とはならず、波状攻撃となった。

その間、急降下爆撃も対空砲火の間隙を縫って開始され、レンジャーは一斉攻撃に曝されたのである。全弾回避は望むべくもなかった。

現地時間一三四
ミッドウェー北東海域
連合艦隊
旗艦戦艦武蔵

「第五艦隊より入電！ 敵機動部隊の攻撃により、空母翔鶴被弾、大破！ 敵部隊は未だ健在、第一航空艦隊は支援のため移動中！」
和田通信参謀の息を切らした報告に、長官公室に居並ぶ幕僚達は騒然となる。

（やはり、無謀だったのでは……）

和田の方を見ながら、渡辺参謀を始めとした参謀が、横目で作戦を強行した山本の様子を伺う。

山本はただ「そうか」と言うだけで、反応は至極薄かった。

作戦は終了せり

米第6任務群

旗艦空母レンジャー

「目標ケイト、右舷より魚雷投下！ 距離5000フィート、数二、雷速40ノット超高速接近中！」

見張り員が双眼鏡を手にしながら、大声を張り上げた。

「面舵一杯、これは回避できる」

「面舵一杯！ アイアイサー！」

艦長ハロルド・C・プリストル海軍大佐が落ち着いた様子で指示を出し、操舵員が指示に従って舵を右に切る。

右舷より接近中だった九七艦攻の搭乗員は、レンジャーの直上を通り過ぎながら舌打ちをした。

「次いで、左前方及び後方よりケイト接近！ 上空よりヴァル、三機降下中！」

見張り員の報告はまだ続く。ハロルドは回避の指示を出し続ける。魚雷が船体の左舷スレスレを走り抜け、三本の水柱が続け様に発生し、飛行甲板を濡らした。

（回避成功：か。本艦の装甲では、一発でももらえばスクラップだ）

ハロルドは内心冷や冷やしながら、そのように考えていた。

そもそもレンジャーは実験的要素が多く、その装甲はアメリカ正規空母中最弱であり、実戦使用に耐えるような物ではなく、代わりにイギリスより、空母ヴィクトリアスの借用が検討されていたが、搭載機数の少なさ、欧州事情の緊迫に伴い没となっている。あえて脆弱なレンジャーを、旗艦にする必要はなかったのではあるのだが

……

「いつ直撃を貰ってもおかしくないな」

艦長の気持ちを知ってか知らずか、司令席に座るスプルーアンスが口に出した。

艦橋要員がそれを聞いて、一斉にスプルーアンスの方を見る。無神経な発言をするこの司令官に、親友でもある参謀長カール・ムーア海軍大佐が、苦笑いしながら苦言を堤する。

「司令、この状況下にマズイのでは？」

カールの発言を聞いても、スプルーアンスは氣にとめずに発言を続ける。

「彼らの技量には凄まじいものがある。投下した爆弾魚雷は、全て至近弾になっている。

被害担当になると覚悟した時から、私も含め、本艦が無事で済むなどとは考えていない。

そして彼らもまた、このように無謀な行動がどのような結果となるか、覚悟ができているだろう。それを敢えて強行した蛮勇に、敬意を表さずにはいられんよ……」

普段面倒臭がりで、執務の大半をカールを始めとした幕僚にぼっぽっておくスプルーアンスであるのだが、情報を総合して判断を下す能力に長けていた。

人材不足に陥っている米海軍の現状では、パーフェクトな結果を出す事は不可能、日本海軍の戦力を削ぎ落とし、後に繋がられればそれでいいと考えていた。

（ここでレンジャーを失っても、ワस्पが日本機動部隊にとどめをさしてくれる）

スプルーアンスは分離させていた、第2群であるワस्पを中核とする部隊を率いる、シャーマンの活躍に期待していたのである。

そのワस्पを中心とした第2群は、主力部隊の北西五十哩を西へと航行している。

空母ワスプと重巡オーガスタ、駆逐艦三隻の小規模部隊であり、ワスプ艦長フォレスト・P・シャーマン海軍大佐がその指揮を執っていた。

スプルーアンスの判断は見事に当たり、第2群に接近する日本軍機はいなかったため、第五艦隊にさらなる一撃を加えるべく、第二次攻撃隊の発艦作業を始める。

簡易サイドエレベーターを備えたワスプの発艦作業はスムーズに行われ、間もなく攻撃隊の出撃準備が完了する。

第二次攻撃隊

F 4 F 六機

S B D 一二機

T B F 一二機

計三機

飛行甲板から攻撃隊が出撃する様子を、艦橋から眺めているのはシャーマンである。不安が無い訳ではない。この攻撃が成功せねば、反撃を受けかねない。

今は大丈夫だが、いつまでも続く保証は無い。シャーマンにも焦りがあったが、それを表面に出す事はできない。

「艦長、後10分で全機発艦完了します」

副官の報告にシャーマンは、「ああ」と短く返すと、再びカタパルトを使用しながら、発艦していく攻撃隊の様子を見つめる。

「第一次攻撃隊に比べれば数は少ないですが、手負いの空母を抱えていますから、次は確実に沈められます」

副官の楽観的観測を聞きながら、シャーマンは「当然だ。そうでなければ送り出してくれたスプルーアンス司令に申し訳がない。」

それに、奴らはシスコをやった報いを受けてもらわねばならん。ここでなんとしても沈める」

そう言いながら、第五艦隊へと向かう攻撃隊に視線を送る。

しかし、自らに危機が迫っている事に、彼は気付いていなかった

……

第6任務群上空

第一次攻撃隊

「第三分隊がしくじった！ 残り全機は降下開始！ 俺に続け！」
瑞鶴艦爆隊長坂本章海軍大尉は、先に仕掛けた部隊の投弾が、至近弾と見るや間髪入れずに、列機とともに急降下を開始する。その数八。

一本槍となつて突入していく九九艦爆を阻止しようと、米艦艇のブローニング12・7ミリ機銃、エリコン20ミリの各対空機銃が唸りを上げ、火線が空を斬る。

「高度一五〇〇、照準に捉えた！」

目標の米空母の飛行甲板が、みるみる内に視界に広がっていく。装甲の施されていない脆弱な飛行甲板に、今機体が抱えている二十五番を命中させれば、間違い無く母艦としての機能を奪える。少なくとも第五艦隊に対しての、差し迫る危機を大きく減じられる…。そう坂本は判断していた。

距離が近付くにつれ、対空砲火は先頭に行く坂本機に集中している。坂本は照準内の甲板だけを凝視していた。視界の端に、銃弾が無数に走り抜ける様子が見て取れたが、その動きはひどくゆっくりした動きだった。

「高度五百！」

「まだだ、二百まで行く」

後部座席に座る薄田飛曹は、戸惑いを見せたが、その指示に従って高度を読み続ける。

「高度二百！」

「撃つ！」

限界：、タイミングを誤れば間違いなく海面に激突し、苦痛を感じる間さえ与えられぬまま、あの世に招待されてしまうだろう。

しかし、それは敵も同じである。機体から爆弾が離れると同時に、スティックを引き右へと機体を傾けながら、レンジャーの船体を掠めるように擦り抜けた。

「総員衝撃に備え！」

艦長ハロルドの絶叫が艦内に伝わる。乗員は周囲の物に捕まり、衝撃対応姿勢を取る。

そんな中にあっても、司令席に佇むスプルーアンスは、慌てる様子を見せなかった。自らの意思で決断し、招いた事態を、最後までただひたすらに凝視していた。

坂本機が海面スレスレで機体を立て直したのと同時に、レンジャーの飛行甲板から、閃光と共に、破片、炎、黒煙が上がった。

「命中確認！ やりました！」

後方を振り返りながら、薄田が大声で報告する。

それに坂本は頷きながら、「よし。さっさと離脱する」と言つと、進路を南西へと向けた。

その間に、坂本に続いた艦爆隊は、三発の爆弾をレンジャーの飛行甲板に叩き込み、全弾至近弾となる。

だが、一列になって投弾した事が災いし、三機が撃墜されてしまっていた。全てアトランタ級軽巡サンファンによる対空砲火によるものだった。

「ダメージコントロール！ 状況を報告せよ！」

艦爆隊が去ると、艦を立て直すべく、慌ただしく乗員が動き出す。

「報告！ 格納庫は全滅、火災発生！ 機関区タービンにも異常、速力16ノットに低下！」

水兵の報告にハロルドは、状況がひどく悪い事を把握した。そして、レンジャーにとっての悪夢は終わらなかった。

「右舷後方よりケイト！ 三機接近中！」

「敵空母速力低下」

回り込んでいた嶋崎中佐率いる三機の九七艦攻が、薄くなった対空砲火をくぐり抜け、レンジャーに突入した。

「さすがは坂本、やってくれんなあ。こつちも負けてはおられんぞ」

黒煙をもうもつと上げるレンジャーに視線を送りながら、嶋崎は、「全弾命中といこうか」と呟いた。

距離一一　まで接近、必殺の九一式魚雷を投下した。列機もこれに続き、三本の魚雷がレンジャーに向かっていく。

「目標魚雷3、距離：100！」

回避行動も速力が低下した状態では、全くの無意味であった。

次の瞬間、レンジャーの右舷に、三つの艦橋の高さを越える水柱が上がる。

艦橋直下に命中した魚雷の爆発の衝撃により、艦橋の風防が砕け散り、破片を周囲にばらまいた。

「艦長、無事か？」

衝撃を受けて倒れ伏したハロルドに声をかけたのは、スプルーア
ンスだった。

「司令、申し訳ありません…、艦を護ることすらできず……」

詫びるハロルドに、

「そんな事はいい。それより本艦は持たん、直ちに退艦するぞ」
とスプルーアンスは返す。ハロルドが見ると床が、少しずつ傾斜し
ていくのが分かった。

命中した魚雷は爆発するとともに、船体に巨大な亀裂を生じさせ、
致命的な損傷を与えた。アメリカ初当初から空母として建造され
たレンジャーにとって、爆弾四発、魚雷三の命中は、余りにも荷が
重かった。

速やかに総員退艦命令が発令され、乗員が反対側左舷より離艦を
開始すると同時に、二度目の大爆発が発生する。航空機用燃料及び
弾薬庫の誘爆である。

避難中の乗員が多数巻き添えとなり、傾斜が一気に拡大、艦全体
が炎に包まれ、手が付けられない火だるま状態となる。

辛うじて脱出したスプルーアンス以下、幕僚達の目の前でレンジ
ャーは右に横転して沈没した。

軍縮条約の制限下で建造されたレンジャーと、条約明けに建造さ
れた翔鶴とでは、質的に劣りながら、それなりの戦果を上げられた、
と米海軍首脳陣は評価している。

北西海域

空母ワスプ

「インディアナポリスより入電！ 旗艦レンジャー、日本軍機の

攻撃により被弾、沈没！」

「何だと！」

通信士の報告に、シャーマンは驚愕する。

「司令部はどうなっている？」

「インディアナポリスに将旗移譲されました。司令部は健在です」
これを聞いて安堵のため息を漏らしたシャーマンは、発艦が間もなく終わろうとしている攻撃隊を見つめる。

（頼むぞ……。本艦の位置を敵は見つけていない今ならば、一方的に叩く事ができる）

シャーマンの焦りの入り混じった、祈りに似た気持ちだった。もし発見されてしまえば、護衛の少ない2群では一たまりもないのは、明白であった。

彼の注意は、第五艦隊の空母の動向の一点にのみ集中していた。しかし、その刹那……

突如、ワスプを衝撃が襲い、シャーマンを含めた艦橋要員が、倒れ伏した。

「な、何が起こったのだ!？」

シャーマンは立ち上がるが、事態が把握出来ずにいた。

「敵空母に少なくとも、四発の命中を確認……、艦長」

「天祐我にあり、だな。メインタンク注水、急速潜航。深度九につけ。対爆雷防御」

聴音兵の報告に、艦長は海軍帽を被り直しながら、下令した。

帝國海軍第六艦隊所属第二潜水隊、伊一九潜。艦長は木梨鷹一海軍少佐である。

潜水艦を主力とする第六艦隊に与えられた任務は、ハワイと米本土間の哨戒、及び米太平洋艦隊の動向の監視、そして、第五艦隊の援護も含まれていた。

山本五十六は、内容を伏せた上で、それとなく自然な形で事前に配備していたのである。第五艦隊に護衛が多く付けられない事を、隠密性と航続力が圧倒的に優れた、潜水艦を活用することにより補おうとしていたのだが……

この時の山本は、尋常ではないほど注意を払っていた。期待ハズレとなってしまったのは不運であった……

第二潜水隊（伊一八、伊一九、伊二〇）はハワイ北方域を担当としており、米艦隊に対しての攻撃のみが命じられていた（輸送船や商船への攻撃は、天一号作戦秘匿の為禁止）。

彼らにしてみれば、当初第五艦隊は、北方からのハワイ奇襲攻撃の為南下していると通達されていたのだが、二八日に第六艦隊司令部からの電信により、詳細を把握。

撤退中の第五艦隊の支援と、姿を暗ました米機動部隊を求めて、周辺海域を搜索していた。

最初から作戦の全容を知らされていれば、第五艦隊と第6任務群が接触する前に、叩く事が可能であったかもしれないが、残念ながらそこまで勝利の女神は、山本に微笑んではくれなかった。

その経緯から、伊一九は潜望鏡深度を維持したまま、海流に乗って西から東へと移動している最中、主力部隊から分離していたワスプに遭遇。無音航行中のまま発艦作業のため、直進していたワスプに忍び寄り、予想進路に向けて魚雷を六発放ち、内四発の命中を示す爆発音が、艦内に轟いた。

乗員は歓声を上げようとしたが、グツとそれを飲み込み、木梨の指示に従って行動した。目的は言うまでもない。

潜航する伊一九の船体に、甲高い金属音が響き渡る。

「探信音来ます。距離一八、駆逐艦三ないし四急速接近中」

「来たぞ……」

魚雷命中から七分後、海上を取り囲んだ米駆逐艦による第一弾が投下され、伊一九の上方で爆発した。続け様に二発、三発と爆発音が響くが、至近弾とはなかった。

まだUボートに対してのノウハウを確立しきれていない、現時点の対潜水艦戦では、ややあてずっぽうな感は否めなかった。しかし、伊一九潜にとっては堪らない。

木梨は深度調整を行いつつ、爆雷を回避続けた。この包囲された状態では、浮上も報告もできないのである。

空母ワスプが伊一九潜の雷撃を受けてのたうちまわっている頃、第五艦隊は空母レンジャーの撃沈を確認していたが、敵第一波の機数の多さから、空母はもう一隻いるとの判断を下し、すでに発艦した第二次攻撃隊に、索敵攻撃を実施させるために無電において、指示を出した。

もはや、満身創痍状態である翔鶴を抱え、位置を特定されてしまっている現状では、残る空母を撃沈しない限り、安全は保証されないのである。

これほどの広範囲の海域において、全ての情報を把握するのは、事実上不可能だった。潜水艦による集団運用等ができれば、ワスプ撃破の情報を伝達する事も可能であったのだが……

第二次攻撃隊指揮官、岡嶋清海軍大尉は、九七艦攻の無線機から命令を聞いた。彼は、第一次攻撃隊の目標以外と接触するべく、隊を二分させた。

この時攻撃隊

翔鶴

零戦×四

九九艦爆×二

九七艦攻×三

瑞鶴

零戦×八

九九艦爆×八

九七艦攻×一

計三五機

内、岡嶋大尉率いる一八機がワスプのいる海域へと移動、三分後に接敵し攻撃が開始される。

機関停止により消火作業中のワスプと、伊一九潜撃沈のために駆逐艦の護衛がなかった事情により、ワスプに魚雷と爆弾を一発ずつ叩き込み、ワスプを撃沈する。

しかし、ワスプを撃沈されたスプルーアンスとシャーマンであったが、送り出した第二次攻撃隊は母艦を失った事から、第五艦隊に苛烈な攻撃を加え、速度が低下していた翔鶴は、魚雷二本、爆弾一発、そして被弾していたドントレスが飛行甲板に落下、を喰らい、航行不能に陥る。

翔鶴と刺し違えとなってしまったのである。他に秋月、照月が至近弾により小破。重巡筑摩が爆弾命中により中破となる。

これにより、スプルーアンスが目指した、米本土奇襲部隊の帰還阻止は、事実上失敗。無傷で帰さなかった、と言う米海軍にとっての体裁だけは、取り繕う事ができた。

ここにようやく、太平洋全域を舞台とした乾坤一擲の作戦は、終

幕を迎える事となった。この戦闘で、戦艦二隻、空母一隻を日本側が失ったのに対して、米海軍が失った主要艦は戦艦五隻、空母二隻を失い、制海権は日本が手中に納めたと言っても過言ではなかった。ここに至り、ようやく対米講和に光明が見出せたのである。

意思は違えて

「翔鶴の姿がないのは、残念ではあるが……」

山本五十六は、戦艦武蔵の第一艦橋に佇み、合流してくる第一航空艦隊、列びに第五艦隊を静かに見つめた。

現在、連合艦隊は補給作業中であり、北太平洋で行われた給油を最後に、日付変更線以東を無補給で往復した第五艦隊、とくに重巡利根、筑摩、駆逐艦秋月、照月は、燃料残量は一割を切っており、非常に過酷な航海を強いた事を物語っていた。

逆に死地から帰還を果たし、迎え容れる連合艦隊第一艦隊の、そびえ立つ戦艦群の威容を、感慨深い目で見つめる第五艦隊の面々は、ようやく安堵のため息を漏らした。

現地時間

三日 時刻一

ミッドウェー北方沖

連合艦隊所属の第一、第二、第三、第四、第五、第六、第一航空艦隊の全艦隊が、この海域に集結していた。

戦艦武蔵以下、戦艦一、空母二、重巡一三、軽巡一、駆逐艦七二と言う膨大な艦艇数である。これに潜水母艦、油槽艦、輸送船各種艦艇は六隻余りが展開していた。

まさに水平線までの視界を覆い尽くす大艦隊、帝国海軍の総力であり、対抗可能な戦力はハワイの米海軍戦力が消滅した以上、太平洋上には存在しない。

それほどの大艦隊である以上、給油作業も並大抵の苦労ではない。本来であればマーシャル諸島クエゼリン、メジューロ環礁などに帰還

して行うのが筋なのだが、燃料不足の艦艇が多数を占め、タンカー、油槽艦だけでは足りず、艦によっては数百本の重油入りドラム缶を受領する姿まであった。戦闘が終わっても、乗員にとっての戦場は続くのである。

「報告します。大本営より入電です」

通信文を手にした、通信参謀和田雄四郎海軍中佐が、艦橋に入るや背筋を伸ばし報告する。

「読んでくれ」

外を見たまま、山本は振り返らずに促した。口調は普段と変わらないが、その表情は窺い知ることとはできない。

「宛連合艦隊司令長官

直ちに揮下の全艦隊を率いて内地に帰還せよ。

なお、山本司令長官には出頭を命ず。

発軍令部総長永野修身」

大本営海軍部、軍令部からの直接の指示。帝國海軍にあつては、何人たりとも逆らう事の許されない大海指である。

「永野さんも忙しい事だ、俺も処罰は免れんだろうな。まあ勝とうが負けようが、縛り首が関の山だと覚悟してたんだ。どうと言う事はない」

この山本の、清々しいまでの物言いを聞いて、和田はどうにかならないものかと、直立したまま思案してしまった。

「しかし、山本長官の功績はもはや動かしたいものではありません。その功績をかんがみれば、免責も可能なではありませんか……？」

山本の人柄に触れて、敬愛の念を抱くようになっていた和田は、声を震わしていた。

「いいんだよ和田君。真珠湾奇襲作戦がどうしても諦め切れなかった……、それだけの話だ。」

それに戦功を盾に責任を逃れるなら、一部の馬鹿共と変わりがな

くなってしまう。悪しき前例を残してはならん」

寂しい表情を浮かべながら、山本は振り返った。

「失礼します。細萱五艦隊長官、原五航戦司令、阿部八戦隊司令到着しました。長官公室に集まっております」

艦橋に首席参謀黒島亀人海軍大佐が入ってくるなり、そう報告する。

「そうか。細萱君達のお陰で、対米戦を何とか終わらせる事ができそうだ。感謝せねばならんな。すぐに向かおう」

山本は黒島に向き直ると、静かに歩きだした。

「……これが、我が日本が有利な条件で講和できる最期のチャンスだ。」

失敗すれば帝國は米国の圧倒的国力に押し潰され、本土が灰燼と化す可能性すらある」

司令塔内に設置されている、エレベーターに乗り込む山本が、和田に向かって話した。

「長官……」

和田は沈痛な面持ちで山本の姿を見送った。

三時間後

八月三一日時刻一 一五

帝都東京

首相官邸

「……このように強硬な姿勢で本当によろしいのですか？」

巨大な円卓を囲むようにして、十一人が席についている。

議長である首相兼陸軍大臣、東条英機陸軍大将。

陸軍参謀総長、杉山元陸軍大将

陸軍次官、木村兵太郎陸軍中将

陸軍参謀次長、田辺盛武陸軍中将

海軍大臣、嶋田繁太郎海軍大将

軍令部総長、永野修身海軍大将

海軍次官、沢本頼雄海軍中将

軍令部次長、伊藤整一海軍中将

外務大臣、東郷茂徳

内務大臣、湯澤三千男

大蔵大臣、賀屋興宣

企画院総裁、鈴木貞一

内閣主要閣僚及び統帥部幕僚が一同にかいする、大本営政府連絡会議である。この会議の決定が、御前会議に上げられ、天皇の裁可を受ける。

事実上の大日本帝國の意思決定を果たす、極めて重要な会議である。

そんな席上で配布された資料を片手に、隣に座る嶋田海軍大臣に耳打ちするのは、沢本次官だった。

「いらん事は言つな。余計な厄介事を増やしたくない」

ぼそぼそと嶋田は沢本に返した。

困惑の表情を浮かべ、同様な反応を永野総長と伊藤次長も見せている。東郷外相と賀屋蔵相も同じであった。

（どうせ、陸軍省軍務局当たりの入れ知恵だろう……）

賀屋は内心で悪態をついていた。こんな内容でわざわざ会議を開く必要などないではないか……

「この内容では外務省としては承服しかねます。これでは恫喝ではありませんか!？」

東郷外相がいてもたってもいられず、声を大きくする。

内容はもちろん、対米戦終結のための講和条件についてであるのだが……

「何を言われるか分かりかねますが、我々は勝っているのですぞ。譲歩する言われはありませんな」

高い声で発言したのは、首相東条英機である。陸軍省内を腹心で固め、反対派を放逐、憲兵を使って異を唱える者を消し去ってきた。人事を掌握されており、多くの者が不遇をかこっていた。

人は、今の体制を陰で東条幕府と揶揄し、批判していた。そんな絶大な権勢を誇る彼が、持ち出した対米講和の条件というのが、甚だ問題だった。

第一、戦闘行動の即時停止

第二、我が国の亜細亜方面に関わる政策及び領土への不干渉

第三、ミッドウェー、ウェークの返還、サイパンの割譲

第四、三国同盟に抵触せざる事

第五、フィリピンからの米軍の撤退、一九四三年に独立を承認する事

第六、蒋介石国民党政権への援助の停止

……

賀屋の予想通り、内容を立案していたのは陸軍省軍務局長佐藤賢了陸軍中将以下、軍政を司る軍務局軍事課を中心として出されたものだった。

これに東郷は、交渉が妥結する可能性は無いと、強い口調で理解を求めた。

「交渉が失敗するなど、外務省はやる前から臆病風に吹かれたか」

陸軍次官木村兵太郎陸軍中将が、東郷を見据え言い放った。

事実、陸軍のみならず右翼からも、外務省に弱腰は許さんといったふうな危険な圧力が加わっており、下手な行動は死に直結するものに等しかった。

「米軍は既に形骸化している。言わばカスだ。そのような連中の言い分を立てる必要は無い」

強気の発言を聞きながら、伊藤整一軍令部次長は閉口していた。

（何を馬鹿な事を…、相変わらず威勢がいいだけか。豊田さんがいたらどんな顔をするか……）

そんな思いが横切りながら、脇目で隣に座る永野修身軍令部総長を見る。

話を聞いているのか、いないのか、永野は目を閉じ微動だにしない。顔色が冴えないようにも見える。

（せめて永野さんが表立って反対してくれれば、私も発言できるのだがな……）

総長を差し置いて発言はまずい、との思考が立つ。伊藤も、東郷の意見は尤もであると同意したかった。

「海軍の…、海軍の意見はどうなのですか？」

東郷は、今回の勝利の立役者である海軍に、期待を込めて意見を求めた。

（海軍が明確な反対の意見を出してくれれば、陸軍もこのような無理難題を引っ込めてくれるはず……）

東郷はそう考えた。

しかし、微妙な立場とも言える海軍は、明確に反対する要素を見出だしていなかった。

（意外になんとかなくなってしまふものだ）

海軍内にも若手の強硬派は存在し、そのような空気が蔓延していた。そのような状況下で、妥協した条件で交渉に臨めば、不満が噴出してくるのは必定だった。

「海軍としては政府の判断に一任したい、と考えている」

そんな事情があつて、嶋田の出した答えは政府への丸投げ、事実上の容認であつた。

しかし、沢本は難しい問題でもあるから、連合艦隊の帰還を待つて、改めて連絡会議を開催する事を提案したが、東条の

「相手が弱っている時に畳み掛ける事が重要であり、早ければ早い程良い」

と一蹴されてしまう。

「永野総長も異論はありませんな？」

陸軍参謀総長杉山が、同じ統帥部幕僚として永野に問い掛ける。

その問い掛けに、居眠りしていたような永野は、いきなり目を開け、

「異論はありません。但し、今後の海軍の予算拡充だけは、確約していただきたい」

と言つてのけたのである。

後の世の人間が彼を批判したが、伊藤は後の事を見据えた判断であつたと、この時評価している。

通称ぐつたりとあだ名されていた永野であつたが、内情を実に考慮していた提督だったと……

この確約によつて、海軍の予算は割増しとなり、各種軍備の整備が成されていくこととなるが、永野は自身の役目が終わりつつある事を予期していた。

海軍首脳陣の反対を期待した東郷であつたが、その期待が崩れ去つたと知り、東郷は、「自分にはこれ以上できる事は何もない」と発言し外相辞任を表明して席を立つた。

討論などは行われず、政府決定を通告する場と化した大本営政府連絡会議は、一時間と立たずに閉幕した。

平行して、重臣会議、陸海軍合同軍事参議官会議も開催されたが、勝利の勢いに乗つた世論の後押しを受けた強硬論に、誰も反対する事ができずに通つてしまつたのであつた。米内や岡田といった海軍の重臣も黙認せざるを得ない状況にあつた（これには木戸の危険であるとの口添えもある）。

即日、東条首相の上奏により御前会議が開催され、沸騰する国民世論を理由に押し切り、陛下の裁可を受ける。

内大臣木戸幸一は、非常に危うい状況であると認識しながらも、軍と国民の暴走を恐れ、陛下を守るため、裁可するよう進言する裏事情があつたのは言うまでもない。

交渉は直接米国との伝達が不可能であるため、外務省から中立条約を結んでいるソ連の駐ソ連特命全権大使佐藤尚武を通じ、米駐ソ連特命全権ウィリアム・H・スタンダードと会談に入つたのである。

風に舞う弾丸

八月三一日時刻一

昭南市

「ただ今戻りました」

参謀飾諸を付けた人物が白壁の部屋に入るなり、敬礼をする。

「ようやく戻ったか。参謀副長の貴様がフラフラしておったのは、いろいろと不具合があつていかん」

席に着いて書類を決裁していた人物が、そう言つて入つて来た人物を一瞥すると、再び視線を落とす。

二人がいる場所はシンガポール島北東部に位置する、セレター軍港を臨める旧英国海軍司令部庁舎であり、席に座る人物は、六月に新設された南方方面艦隊司令長官南雲忠一海軍中将、挨拶をした人物はその参謀副長を務める、石川信吾海軍大佐だった。

「お言葉ではありますが長官、私は決して遊び回っている訳ではありません。私には陸軍との橋渡しと言う、他の者にはできない重要な任務を担つております。本来、このような役目は上層部のお歴々がなさつてしかるべき内容にも関わらず、陸軍は何々だからと綺麗事をおっしゃられ、敬遠なされている。

ですから海軍と陸軍の調整を、私の独自の裁量で行つております。ご不満がございましたら、どうぞご自由になさつていただいても結構であります」

「む……」

一を言つて、十を返された南雲は閉口する。海軍内においてこの男程面倒な相手はいない。

事実、海軍省内を我が物顔で闊歩していようが、咎める者が皆無であつた事から、石川が普段使つていた通路を、人は石川通りと呼

んでいた。

彼の言う通り、犬猿の仲である陸軍と海軍の、ほぼ唯一の窓口的存在として機能しており、海軍内での彼の果たしていた役目は、善くも悪くも計り知れるものではない。

「あの戦争に日本を引っ張ったのは俺だ」

戦後に石川が言った言葉である。

海軍内の最強硬派にして、幅広い人脈と絶対的な政治感覚を持ち合わせた、若手のカリスマであり、海軍省軍令部の課長級を集めた、「海軍海事国防政策委員会第一委員会」（通称第一委員会、石川が主導）が絶大なる権限を発揮し、大臣総長までもがその決定に引きずられる様相を呈していた。

海軍内の真の実力者は彼らであり、その決定を覆す事は当時是不可能であった。現に艦隊整備計画、特に戦艦大和の発案は、石川によるものであるとの話しまで存在している。真偽は定かではないが、海軍の中枢で重きを為した人物である事は、疑いようが無い。

「それは悪かったな……。それで内地の様子はどうだったのだ？」

苦言を述べたらばつさり切り捨てられた南雲は、ばつが悪そうに話題を変えた。

南雲としては、インド洋の英国東洋艦隊が壊滅し、艦艇が引き抜かれ、連合艦隊がハワイに向け出撃した事により、フィリピンはともかくとして、敵の存在しない南方地帯は平穏そのものであるこの時期に、石川が一体どんな目的で内地に戻ったのか、非常に興味深い事だった。

「なかなかおもしろい舞台ができあがっています。予定外の事態で陸軍が勢いづいているようですが、そうそう長続きはしないでし
よう」

「予定外とは米西海岸爆撃か？ 確かに交渉の材料としてはおもしろいが、危険過ぎてわしには絶対に認可できん作戦だ。軍令部がよく許可したものだな。」

しかも、軍令部と昵懇の間柄の貴様にも、事前に漏れて来ない所を見ると、余程の事であらう。

それにしても、海軍の上げた戦果に陸軍が執着したがるのか分かるんが……」

南雲は日米開戦の舞台、真珠湾奇襲攻撃の実施部隊として現地にあり、山本の構想に従って米太平洋艦隊に攻撃を仕掛けたが、迎撃を受け戦艦オクラホマ、ネヴァダを大破させるに留まり、第一次攻撃隊は壊滅、しかし、南雲は動揺する司令部を取り纏め、赤城、加賀の中破に損害を抑え撤収に成功させている。

土台無理だったのだ…、南雲の判断が早かったが故であり、損害を抑えた事により、次の海戦の勝利へと繋がった。

作戦失敗により、本来であれば予備役編入もあったのだが、山本の温情と周囲の同情もあって、南雲は南遣艦隊司令長官へと異動となる。

同時に山本を更迭しようとする動きもあったが、来襲する米太平洋艦隊を迎え撃つ時間的余裕がなかったため、留任となり幸いにして、大勝利の英雄となってしまうたのであった。

しかし、山本以下連合艦隊司令部の作戦指導能力に対して、南雲が疑念を抱くのは当然であったが、南遣艦隊司令長官としては抜群の戦功を上げ、東南アジア全域を範囲とする、巨大組織南方方面艦隊の司令長官におさまっていることにより、その命令系統は微妙な物となりつつあった。

かつては軍令部第一部二課長（教育、演習を担当）、海大教官を務めた彼としても、今回は真珠湾の二の舞に陥るであらうことが、多分に懸念されていた。

艦隊派に属し、水雷戦術の第一人者としても、これだけの艦隊を一度に動かし、敵の警戒嚴重なハワイに突入させ、あまつさえ燃料

不足の小艦隊を分離させ、ハワイの更に奥の本土を攻撃するなど、狂気の沙汰と言える……

南雲は、山本が海軍を破滅に導くのではあるまいか？と不安を覚える。尤もそれは海軍内の多くの者が感じていた。

「陸軍内部では、フィリピン攻略が捗らない事が響いているのか、相当な焦りがあるようです。」

米軍のみならず、フィリピン現地軍が予想以上に抵抗し、敵主力をバターン半島に押し込みましたが、膠着状態に陥っており即時事態解決のめどが立っておりません。

海軍に助力を頼むのも、面子が邪魔をしてできないらしく、戦力の逐次増強により持久戦となっています。この機に乗じて、事態打開の見えない支那とフィリピンを屈服させる腹積もりでしょうな」

「姑息な奴らの考えそうな事だ。人の禪で相撲を取るような真似を平然とする……」

南雲は悪態をついた。確かに対米戦は海軍の戦いと言っても過言ではないが、それにおんぶに抱っこでは話しにもならない。

「しかし、フィリピン攻略が手間取るのは、私としては些か問題ではあります」

石川がそのような言葉を発したが、南雲は訝しんだ。

「何故だ？ 航空戦力を壊滅させ、陸軍がフィリピンを抑えている間は、我々には全く関係はないぞ」

彼の言う通り、輸送ルート、船舶の移動には全くと言って良いほど、影響はない。

「いえ、これにより影響を被る人間が、少なからず存在するからです。それと南雲長官、私の異動の推薦を沢本次官に出して頂きたく……」

これを聞いた南雲は、石川が確実にある意思を持って行動している事を予測した。

「あまり大それた事をするものではないぞ。貴様は一介の大佐に

過ぎなのだ。余計な事をすると、火傷程度では済まんぞ」

やや、声を大きくして南雲は言った。

「長官、私に恫喝は意味はありませんよ」

「違う、これは俺からの忠告だ。全てがうまくいくなど考えるのは、やめたほうがいいぞ」

真剣な眼差しで石川を見る南雲の顔は、やや強張っていた。

「闘将南雲閣下から、そのように弱腰な言い方を聞くとは思いませんでした、欲しくはありませんか？ 海軍最高位の地位が……」

「そんなものはいらん。俺は武人でありさえすればそれでいい。

沢本には言っておく。どこにでも勝手に行くがいい」

手を払うと南雲は書類の決裁を再び始める。

「ありがとうございます、南雲長官。必ず貴方のご希望通りに……」

小さい声で石川は言って南雲に敬礼し、踵を返し長官室を後にした。

石川が退室したのを見届けると、南雲は机に広げた書類を払いのけた。

「俺の周りは面倒な奴しか集まらない。一体何だと言った……。石川といい、井上といい、どうしても厄介事ばかり……」

南雲はかつて、現在第四艦隊司令長官井上成美中将と、派手にやり合った時の事を思い出していた。

昭和九年頃、省部互渉規定において、軍令部の権限拡大に邁進していた頃、それに反発する井上と、伏見宮邸の会食の席で凄まじい口論となり、南雲が

「お前などこれで一刺しだ！ 殺すぞ」

と短剣を抜いて井上を脅したが、

「やれるものならやってみろ！」

と応じられ、喧嘩別れをしていた。

井上と石川、方向性は全く逆だが非常に似通っていた。

（俺も歳をとったもんだ……）

しみじみとその事を痛感していた。

（それにしても、通称不規弾の異名は伊達ではないな……。これが追い風となってどこに飛ぶものか）

石川の特異性を示す不規弾の意は、一つだけあらぬ方向に飛んで行く弾丸である。

自分には御しきれる人物でないことはわかっていたが、予備役編入は不可能な途方もない巨大な力が、石川の周囲に加わっていた。

司令部庁舎内に宛てがわれている副長室に向かいながら、石川は邪悪な笑いを零していた。

「これで全ての用意が整った。後は引き金を引くのみ…、まあ引くのは「海軍の総意」だがな」

礎石は地中海に没す

八月三一日時刻一三

地中海英国領マルタ島

「オハイオが、沈んだ……？」

マルタ島に衝撃の報告が舞い込んだのは、奇しくも日米交渉が開始されたのと同時だった。

地中海のほぼ中央に位置する、要衝マルタは降伏の危機にさらされていた。シチリア島の南にあるマルタは、ドイツ、イタリア枢軸連合軍北アフリカ軍団（現時点ではアフリカ装甲軍）への、補給路を妨害するという、戦略上連合枢軸双方にとって無視する事はできない。

そして、マルタが抱える最大の問題は、燃料だった。孤島のマルタは、必要物資の全てを島外からの輸送に頼っており、何より最も深刻なのは水であり、海水を濾過し飲料水として使用していたのだが、その濾過装置の燃料が欠乏していたのである。

マルタ総督府は、燃料が枯渇する九月七日を、枢軸国側に降伏するXデーと定めた。その期日を過ぎればマルタの住人は乾死する以外、道はなくなるのである。

マルタを失えば、地中海戦線が崩壊する事を恐れた英国は、海軍の総力を挙げてマルタへの輸送作戦ペDESTALを発動した。

イギリスに多大な支援を行っていた、アメリカ海軍大西洋艦隊はハワイ防衛のため、駆逐艦を始めとした大半の戦力を太平洋艦隊へと転出させられていた事により、英国海軍本部は、地中海と大西洋を繋ぐ要衝ジブラルタルに展開するH部隊を増強、英国単独で作戦を強行せざるをえない状況であった。

加えてマルタ島に対して航空機輸送を行っていた、米空母レンジヤーが早い段階で太平洋に移動した事で、マルタ自体の防空能力が低下しているなど、不安要素が多分にあったが、背に腹は替えられず、八月一八日にH部隊はジブラルタルを出撃した。史実より半月程遅れていた。

対して、マルタ島に対して攻撃を行っていたのは、ドイツ空軍^{ルフトヴァッフェ}アルベルト・ケッセルリング元帥の第2航空艦隊と、イタリア王立空^{ウディカ}軍ヴォルツアーノ・バルボ空軍大将の第3航空軍（いずれもシチリア島に展開）である。

英国海軍は制空権を押さえられたマルタ島に、攻撃の合間を縫って補給を行っていたのだが、いずれも満足のいくものではなく、常に飢餓状態に近いものであったが、配備された小数のホーカーハリケーンやスーパーマリンスピットファイアが、航空部隊指揮官ヒュー・P・ロイド空軍少将の巧みな防空体制により、どうにか屈服せずに持ちこたえていた。

しかし、度重なる空爆と、輸送する米空母がいなくなった事により、稼動機はわずか一五機にまで減少し、陥落は時間の問題だった。

完全に孤立したマルタ島には、ユンカースJu88スツーカー、ハインケルHe111が連日空襲を実施し、基地を、街を破壊し続けた。

イタリア空軍も、マッキMC・200サナエッタ、MC・202フォルゴレに護衛された、爆撃機フィアットBR・20Mスコニア、サヴォイアマルケッティSM79スピルビエロが盛んに爆撃を行っていたのである。

そんなマルタ島に輸送作戦を行うために、英国第一海軍卿ダドリー・パウンド海軍元帥の命令の下、H部隊には強力な艦隊が編成される事となる。

戦艦ネルソン、ロドネイ、デューク・オブ・ヨーク

空母ヴィクトリアス、イーグル、アーガス、フューリアス

巡洋艦ファイビ、シリアス、カリブデリスト、ナイジェリア、ケニア、マンチェスター、カイロ

戦艦三、空母四、駆逐艦二六、輸送艦一四の総計四七隻であり、本国艦隊、地中海艦隊からも戦力を抽出した大艦隊である。

対して、枢軸国側はケッセルリンクの第2航空艦隊と、バルボの第3航空軍、戦闘機二、爆撃機三五。

加えてイタリア王立海軍からも、巡洋艦戦隊がこれの阻止に参加する。

巡洋艦ゴリツィア、ヴォルツアーノ、トリエステ、エラジュニオ・デイ・サヴォイア、ライモンド、モンテクッコリ

巡洋艦六、駆逐艦一七である。

二 日午後、ドイツ潜水艦U81が西地中海を東に向かう大艦隊を発見する。

戦艦デューク・オブ・ヨークを旗艦とする、ネヴィル・サイフレッド海軍中将指揮下の前衛部隊であった。

艦隊は強力な前衛と、輸送船団直衛の二つに分離していた。ケッセルリンクは意気揚々と、H部隊に対しての航空攻撃を命じた。自らが率いる航空戦力で、阻止は十分可能であるとの自信があ

ったからである。

他にも彼を後押ししたのが、誰あろう総統アドルフ・ヒトラーであつた。

大島浩駐独大使から、帝國海軍がハワイを襲撃するとの話を聞いた彼は、アメリカの海上戦力が大西洋から太平洋にシフトするであらう事を、海軍総司令官エーリッヒ・レーダー海軍元帥、潜水艦隊司令官カール・デーニッツ海軍大将、国防軍対外情報・防諜部長ウイルヘルム・カナリス海軍大将ら、海軍高官らの纏まつた見解により確信、「戦力が低下している地中海に重点を置き、中東への道を開くべきである」との意見を無視できなくなっていた。

東部戦線において、スターリングラード攻略戦が開始されていたが、開始から二ヶ月が経過しても達成されずにいた事に、苛立ちを覚えたヒトラーは、中東へとその目を向け始める。

このようないきさつがあつて、ケッセルリンクの第2航空艦隊は徐々に増強されていった。そして、それはイタリアも同じであつた。ローマ帝国の再現を夢見るベネト・ムッソリーニも、この動きに便乗するべく陸海空軍の全軍に、エジプトを突破するように命じたのである。

そんな状況下でH部隊は戦々恐々としながら、世界最大のタンカーオハイオを含む艦隊はマルタへと向かつたのだが、この時のH部隊は多くの不運にみまわれていた。

二四日に空母アーガスがU81の魚雷三本を受け大破し、作戦開始早々にドッグ行きにされてしまう。これにより、制空戦闘機の四分の一に低下してしまうが、救援を待つマルタの窮状を考え、困難を承知していながら先に進む事を、サイフレッドは決断する。

二六日にはドイツ・イタリア連合空軍の攻撃圏内に突入したH部隊は、断続的な空襲を受けるようになる。先駆けとなつたのはイタリア空軍のカントZ・1007アルシオーネであつた。主力である

S M・79と比べ先進性のあるデザインの全木製、低翼単葉の三発機であり、速度は四三キロ、航続距離は二八キロ、爆弾搭載量は一・二トンと言う、ユニークな割りに中々の性能を誇る優秀な機体だった。

J u 8 8とともに、前衛部隊に空襲を加えずに連携ではあったが、空母フューリアスを中破、駆逐艦二を大破させる戦果を上げていた。

マルタ島に近付くにつれ襲撃は激しいものとなり、後ろを進む輸送船団にも攻撃が集中。二九日には輸送艦三隻、三日には五隻が沈没或いは引き返した。

そして三一日、早朝からこれまでに無い程の激しい攻撃が加えられた。

ドイツ空軍

メッサーシュミット B f 1 0 9 E 六機

ハインケル H e 1 1 1 三五機

ユンカース J u 8 8 七五機

イタリア空軍

マッキ C・200 サナエッタ 三機

マッキ C・202 フォルゴレ 二機

サヴォイアマルケッティ S M・79 スパルビエロ 三機

フィアット B R・20 チコーニャ 三機

カント Z・1007 アルシオーネ 二機

これらの機体がH部隊を襲い、第一波攻撃で輸送艦全艦が被弾、二隻が沈没。空母イーグル大破、巡洋艦マンチェスター大破と甚大な被害を受けてしまう。

マルタを目前にしながらの悲劇であつたが、強靱な耐久力を發揮しているオハイオを中心に、戦艦三隻を配置しなにとしても燃料を積んだオハイオを送り届けるべく、前進を続けたのだが、第二波は最後まで残っていたオハイオに攻撃が集中、キールが切断されながらも浮かんでいたオハイオは、二時間後、マルタ三十浬手前で船体が断裂し沈没。

これにより、マルタの降伏が決定的なものとなる。目的を失つたH部隊は、被害を抑えるべく、直ちにジブラルタルへ引き返した。

インドと地中海を繋ぐスエズに程近い、地中海艦隊根拠地アレクサンドリアと、大西洋と地中海を結ぶジブラルタルの中間点に位置するマルタ。

地図上ではあまりに小さい点に過ぎないが、イギリスの連絡線が切断された事を意味していた。

ペデスタル（礎石）が地中海に沈んだ事により、大英帝国の土台が崩壊しつつあった……

大英帝国の暗躍

一九四二年九月一日

イギリス

首都ロンドン

ウエストミンスター地区

英国海軍本部

マルタ降伏……。

地中海最大の要衝が陥落した事で、アレクサンドリアまでも、危機が迫っていた。

北アフリカを進撃中の、エルウィン・ロンメル陸軍元帥率いる、アフリカ装甲軍への補給を妨害している、マルタが降伏した事により、輸送船団の実に八割にも上る損害を与えていた航空攻撃が停止した。

加えて、現実的に中東の石油に目が眩んだ、イタリア陸軍もが歩兵戦力を中心に増派され、エジプトの入口エルアラメインへと進撃を開始する。海軍も同様に行動を開始し、イタリアが誇る新鋭戦艦ヴィットリオ・ヴェネト、リットリオがタラント軍港から姿を消した。

「行方不明だと？ わからんじゃわからんよ。何とかしろ」

アドミラルティの執務室で、受話器をとりながら会話しているのは、ダドリー・パウンド海軍元帥だった。

「クソッ！ 状況が悪い時には悪い事しか起こらん。H部隊は何をやっておったんだ？」

パウンドにとっても、非常にまずい事態だと理解でき、悪態を零さずにはいられなかった。

「サーダドリー、間もなく会議のお時間です。トーヴェイ閣下以下お集まりであります」

入って来たスタッフが、会議の召集を伝える。会議とはドイツ海軍が行っている、無限通商破壊の対抗策を検討する大西洋会議の事である。

「ナチの狼の次は、ピザ野郎か。これにモンキーまで入ったら最悪だな……」

ダドリーは立ち上がり、そうつぶやく。英国海軍は現在、五つの艦隊を保有し世界に展開している。英国本土の本国艦隊、ジブラルタルのH部隊、アレクサンドリアの地中海艦隊、マダガスカルの東洋艦隊、ラバウルの太平洋艦隊である。

太平洋艦隊は申し訳程度の艦艇しか保有しないので、問題ではないのだが、本国艦隊はドイツ海軍の通商破壊対応、地中海艦隊は陸上からの根拠地制圧の危険性を孕み、東洋艦隊は日本艦隊の奇襲により壊滅、と事実上の機能不全に陥っている。

唯一H部隊だけが、ある程度の自由が効くのだが、制空権が完全に枢軸側の手中に帰した地中海に進入するのは、至難の業であった。かつては世界の海を統べたロイヤルネイビーの、最も困難な時代を迎えていた。

苦難の英国海軍にあつて、今現在、最も注視すべきは極東の覇者としての地位を、確固たるものとしつつある大日本帝國、連合艦隊の動向である。

（無敵艦隊…か。皆が恐れるのも無理からぬ事だな。あのアメリカのシャープ（キング作戦部長）ですら、手玉に取られたのだからな）

会議室に向かいながら、大西洋会談で相対した強烈な存在感を放つ男を、ダドリーは思い出していた。

敵意を剥き出しにした、鋭利な刃物を思い起こさせる、冷たい眼の奥に宿る輝きを……

（だが、あの男がやられっぱなしで終わるなどとは、とても思えない。SIS「Secret・Intelligence・Service」、秘密情報局」からの連絡では、日本がアメリカと交渉を開始したと聞いたが……）

状況的に充分に考え得る話したが、大西洋憲章がある以上、それを順守する限り米国単独での講和はありえない。しかし、国民世論のいかんによつては、英国との同盟を反故にして、対日講和のうゑで参戦前の孤立路線に傾く可能性も無くはないのである。

ダドリーの不安は、英国の国防に関わる全ての人間が、共通で持ちえる認識であつた。もし米国が離脱するような事になれば、その援助に頼る英国は物資、技術、戦力、全てが破綻し、降伏以外に選択の余地が無くなる事を意味していた。

ダドリーは、ここ数日の間ろくな睡眠をとる事ができなかった。連日に渡る大西洋会議、北大西洋対ソ輸送船団派遣の検討、ペデスタル作戦、各方面の情報収集と海軍最高指導者としての激務についていた。

その激務は、老人の体を蝕んでいた。彼の苦悩に終わりは見えな
い……

トラファルガー広場に程近い、ホワイトホールに面したウェストミンスター宮殿の一室では、英首相ウィンストン・スペンサー・チャーチル、外務大臣アンソニー・イーデン、空軍参謀総長ブルック・ポハム空軍元帥、陸軍参謀総長アラン・ブルック陸軍元帥、合同情報委員会（JIC）議長カヴェンディッシュ・ベンティンゲ、秘密情報局（MI6）長官スチュワート・ミンギス、内務省保安部（MI5）、軍事情報部（陸軍MI2、海軍NID、空軍AID）各責

任者が集い、現状の確認と情報の収集に躍起になっていた。

「アメリカの現状はどうなっておるのだ？」

会議の主催者であるチャーチルが、葉巻に火を点けながらイーデンとミンギスに問い掛けた。

「ハリファックス（駐米大使）からの連絡では、アメリカ政府は一切の反応を示しておりません。議会は今回の件の釈明を求めますが、ルーズベルト大統領は連合国の結束と、大西洋憲章の履行を主張し続けています」とイーデン。

「ここ数日、アメリカ国内はパニックが誘発され、極度の混乱状態に陥っております。軍は相当数の部隊が西海岸、太平洋方面に移動し、防衛体制を構築しております」

それにしたのはミンギスである。M I 6は各国にエージェントを派遣して、情報収集に当たる、人員は二人に上る。エージェントは数年前より現地に潜伏し、任務についている。もちろん同盟国アメリカにも多数存在し、その情報はミンギスを通じ直接内閣に報告される。この点が他の情報部と系統を異にしている。

「さらに悪いのは、この動きと独伊が連動している事です。参謀本部としては、早急にエジプトに増派せねば、膨張するアフリカ軍団に対抗する術を失います」

陸軍参謀総長アランが、進言する。

「マルタを失ったのは痛かった。地中海ルートはイタリアの庭と化し、使い物になりません。ジブラルタルからでは遠すぎ、航空機による援護も不可能です……」

空軍参謀総長ブルックも状況を悲観的に捉えていた。

「ならば中東の戦力を移動すれば良いのではないのか？」

チャーチルはそうにいったが、J I C議長ヴェンディッシュが異を唱えた。

「今中東は非常に不安定な状況に置かれています。内務省保安部

によれば、イラク、サウジアラビアを中心にクーデターが発生する恐れがあります。この地から駐在の部隊が移動すれば、これ幸いと行動を起こすでしょう……」

これを聞いたチャーチルは、目の前が暗くなる思いだった。

「こうなつては、なんとしてもアメリカに舞台から降りないようにせねばならんな。イーデン、ハリファックスにも念を押しておけ、今が大英帝国の正念場であるとな。

ミングス、お前はソ連に飛んで日米交渉の阻止に当たれ。手段は問わぬ」

チャーチルは、ただ危機を座して臨むような真似はしなかった。この危機をいかにして脱するか、全神経をその一点に集中していた。

「だが、どのような状況においても、逃げ道は用意しておくものだ。分かるなイーデン」

チャーチルは別の意味を含めて、外相イーデンに選択肢を与えていた。

（極東の猿共がここまでやるようになるとは思わなかった。だが、勝ち逃げは許さんよ、最終的に勝つのは我々だがな）

狡猾なまでのチャーチルの一面が見え隠れしていた。堕ちたりとは言え、未だ世界第二位の国力を誇る英国の意地は健在だった。

同時刻

北アフリカ戦線

トゥブルク

北アフリカ装甲軍司令部

「マルシャル、出撃準備完了しました」

熱砂の舞うトゥブルク近郊、かつてはエルアラメインと列ぶ英国軍カイロ以西の要衝であったが、現在、そこに腰を据えているのは、ドイツの英雄である。

巨大なテントに参謀の報告の音が響く。

「ふむ、状況が変わったらこの熱の入れようか。やる気がないと
きとは大違いだな……」

ため息を吐きながら、友邦の増援と補給物資が到着し、再び攻勢に転じられる事を表に出さず男は感謝した。

七月に行われた第一次エルアラメインの戦いでは、補給途絶により敗退し辛酸を嘗めたが、今度の攻勢は成功を確信していた。

「出撃するぞ！ エルアラメインへ！」

テントの外に待機していた装甲車に飛び乗ると、高らかにそう命じた。

デザートフォックス（砂漠の狐）エルウィン・ロンメル
の雪辱戦が始まる。

目指すはエルアラメインの更に奥、カイロである。増派されたイタリア陸軍も勇躍し、出撃していく。一度は見る影も無くなっていたアフリカ装甲軍は、半月の間に初期の勇姿を取り戻していた。

大山鳴動

九月五日

アメリカ合衆国

首都ワシントンDC

「これが本当だとすれば、随分と調子に乗ったものだ」

ホワイトハウスオーバルオフィスの執務机に、國務長官ハルが出した一通の書面を一読すると、大統領ルーズベルトは鼻で笑った。

「スタンドリー（ソ連大使）からの直接の連絡につき、間違いはありません」

ハルはルーズベルトの対面に立ち、その様子を見つめていた。

「要求に応じねば更なる爆撃、艦砲射撃も辞さぬ、か……。そのような虚偽威しが本当に通じると考えているならば、愚か者と言いやうがないな」

日本外務省から送られた内容には、攻撃を匂わせる内容が確かに明記されていた。ソ連特命全権佐藤尚武は、この内容を削除しスタンドリーに伝えたのだが、情報部門で世界に先行する英国のミンギスの影があった。

そのような内容が含まれたのも、開戦前、国内事情を踏まえギリギリまで譲歩し、そのあげくハルノート突き付けられた、東条を始めたとした陸軍首脳陣以下、日本政府の憤りが多分に入った事によるものだった。

「それでは大統領……」

「ああ、交渉の余地は無い。これで議會を説得するに足る大義名分が揃った」

不敵な笑いがルーズベルトの顔に浮かんだ。

「私の弾劾を叫ぶ共和党の連中を黙らせ、今日こそキャピタルヒルを制する」

そう言うところルーズベルトは、呼び鈴を鳴らしスタッフを呼んだ。

「失礼します。お呼びでしょうか大統領？」

間を置かずに執務室に入って来たスタッフに、ルーズベルトは

「至急ノックスとフォレストル、それとキングを呼んでくれ。それと車の用意を」

「了解しました」

そう言うところスタッフは素早い動きで、執務室を出て行く。

「しかし大統領、こうなると無条件降伏を通そうとすれば、戦争の長期化は避けられません」

ハルはスタッフが出て行くのを見届けると、ルーズベルトに話しかける。

「それについては、既に解決している。君は連合国内の結束を、強固な物とするよう全力を上げてくれ」

含みのある内容に言い知れぬ不安を抱きながらも、ハルは自らがここにいる理由が失くなった事を悟り、執務室を退室していった。

その十分後、ハルとすれ違う形で海軍長官フランク・ノックス、海軍次官ジェームズ・フォレストル、そして合衆国海軍艦隊司令長官兼海軍作戦部長アーネスト・キングがホワイトハウスに到着する。

「お待たせしました大統領」

執務室に入ると三人は並び、一礼する。

「来たか。まあ掛けたまえ」

ルーズベルトはそう言うて三人をソファーへと促す。

「さて、日本がカードを切った。ノックス、例の計画の青写真は出来上がっているかね？」

ルーズベルトの問いに、

「は、計画案は出来上がっておりますが、これは正直に申し上げて議会の承認が厳しいかと……」

とノックスが渋い顔で答える。

「議会は私が抑える。君らが心配する必要は全くないぞ。さて見せてもらおうか？」

余裕を見せるルーズベルトに押され、ノックスはフォレストルにその計画案の概要を記した「統合二大洋艦隊整備計画」を出させた。

「これが成れば、我が合衆国海軍は世界に冠たる海上戦力を保持し、日英仏独伊の追従を許さぬ存在となります」

フォレストルが誇らしげにそう言った。現在もスタークスプランが進行中であるが、戦前の主力艦が、この半年の間に軒並み喪失したことにより、両洋艦隊の一角が失われたのである。

この現状を踏まえ策定されたのが、この計画だった。

「素晴らしい、これならば満足のいくものだ」

ルーズベルトは一読すると、顔を綻ばせた。更にキングを見ると、

「今回の失態だけは大目に見てやろう。だが、二度目は許さぬ」

鋭い眼差しを向けた。

「心得ております。二度もジャップ如きに遅れはとりません」

その視線に動じる事なく、キングはそう答えた。キンメル、スタークスが簡単に更迭されたのに比べ、寛大な処置であった。

海軍切つての逸材をこれだけで切り捨てるのは、ルーズベルトとしてもあまりに惜しかったのである。

海軍トップとの短い会談の一時間後、ルーズベルトの姿はキャピタルヒル、合衆国連邦議会議事堂の上院議会の壇上にあった。

この日、上院議会では今回の件で大統領を糾弾するために、諮問

会が開かれるはずであつたのだが……

「教書演説を行つなどと、我々を愚弄しているのか？」

壇上のルーズベルトを見ながら、上院議員ロバート・A・タフトは呟いた。

共和党に属する彼は、同じ共和党上院議員アーサー・H・ヴァンデンバーグらと共に、今回の西海岸爆撃を契機に反ルーズベルト勢力を形成し、大統領の弾劾へと持ち込むべく、精力的な活動を行っていた。

真珠湾奇襲攻撃により一度は諦めた、孤立主義、他国への不干渉を軸とした、参戦前の状態へ戻そうとしていた。他国に軍事的に干渉し、合衆国の若者を戦地に送り、あまつさえ本土までを攻撃に曝させるなど、断じて容認できるものではないとの、彼らの主張の下、攻撃を受けたカリフォルニア州を中心とした議員に賛同者が増えていた。

このままいければ、ルーズベルトを首班とする民主党から、政権を奪回することも現実的な可能性が見え始めていたのだが……

「お集まりの議会の方々に、重大なる事実をお伝えせねばなりません」

その切り出しから始まったルーズベルトの言葉に、場内にざわめきが起こった。

「先頃、交戦国大日本帝国より正式な通達がありました。内容は

一、戦闘行為の即時停止

二、三国同盟の堅持

三、アジアに置ける日本の政策への不干渉

四、中華民国政府への援助停止

これに加え、認めぬ場合はさらなる爆撃及び艦砲射撃で応じる、であります」

これに場内は騒然となる。

「そんな、馬鹿な……」

ヴァンデンバーグは啞然とした。とても信じられる内容ではなかった。

「これは全て事実であります。これは我が政府として、絶対に認める訳にはいきません。例え講和したとしても数年の平和の後に、アジアと欧州を席卷した枢軸連合により、我が合衆国はポーランドの如く、地図上から消滅するでしょう。ポーランド、真珠湾の事例を鑑みれば講和が意味を成さないであろう事は明白であります……。我が合衆国政府は、大西洋憲章に則り枢軸国に対し、徹底抗戦を主張するものであります。

それに伴い領土及び国民を守るため、新たに防衛に関する法律を、議員発議の原則に則りカール・ヴィンソン下院議員に発議して頂きます。

私が合衆国大統領である限り、枢軸国にいかなる妥協も存在しえません。

合衆国は自由と正義の執行者たりえねばならないのです」

ルーズベルトの演説は終わった。混乱に沈むアメリカ国民に、ラジオを通じたこの演説はひどく受けがよかった。

上院議会内ではルーズベルトに明確な反対の立場の議員以外から、拍手の嵐が巻き起こった。面食らったのは、タフト以下の面々だった。

弾劾による大統領免職の可能性を、ルーズベルトは払拭したのである。

その後、ルーズベルトの指名により、カール・ヴィンソン下院議員は、航空戦力、海上戦力を中心に陸海軍を増強する〔本土防衛法〕を正式に議会に提出。

内容において、戦力が著しい増強が果たされたのは、海軍である。

あらゆる脅威から本土を防衛する事を目的とする、アメリカの総力を挙げた計画が胎動し始める。

第四次ヴィンソン、フォレストアル案による艦隊整備計画、後に「ルーズベルトの忘れ形見」と呼ばれる、二大洋統合防衛艦隊の出現である。

概要

アイオワ級高速戦艦六隻

モンタナ級戦艦六隻

新鋭超大型戦艦

ユナイテッド・ステイツ級四隻

エセックス級空母一 隻

ミッドウェー級装甲空母六隻

バルティモア級重巡三二隻

クリーブランド級軽巡二四隻

ファーゴ級軽巡一六隻

ギアリング級駆逐艦一一 隻

巡洋艦以下は量産性を高めるため、単一艦種或いはその改良型となっている。

ユナイテッド・ステイツ級戦艦概要

全長302m 全幅40m

満載排水量105000t

主砲18in五十口径三連主砲四基一二門

副砲5in四十口径連装両用砲一六基三二門

ボフォース40mm四連装機銃三六基一四四門

最大装甲厚432mm（舷側）

速力28nt

アメリカ合衆国の名を冠した大和型を凌駕する戦艦である。あらゆる砲戦距離において、大和型を一方的に撃破することを目的としており、長砲身16in砲から一挙に拡大した長砲身18in砲の搭載となっている。アメリカ戦艦は伝統的に徐々に砲身が巨大化長砲身化しているが、この要求項目が出されたのは、大和型に対しての恐怖が表面にあらわれたものに他ならない。史上初の十万吨超の超大型戦艦である。史実においてこの名の艦が完成する事はなかったが……？

一番艦ユナイテッドステイツ

二番艦アメリカ

三番艦ロードアイランド

四番艦バージニア

ミッドウェー級装甲空母概要

全長295m

満載排水量48000t

艦載機130機

5in四十口径単装砲二一基

28mm連装機銃二四基四八門

速力33nt

飛行甲板に装甲を施した大型空母である。搭載機数は現用機の搭載可能の最大数とも言える規模であり、機体の大型化をも視野に入れた、意欲的な設計となっている。

一番艦ミッドウェー

二番艦アリユーション

三番艦ハワイ

四番艦マリアナ

五番艦マーシャル

六番艦フィジー

この計画による総トン数は二百万トン超。両洋艦隊法を遙かに上回る莫大な予算が投じられる結果となる。これにより現在計画中の主要艦だけでも、戦艦二七隻、正規空母二七隻を数え、本土防衛の名の下に、史上最大の艦隊が現出する事が確実となる。

連合艦隊のハワイ作戦の遂行により、ようやく日米艦隊戦力比を五分に持ち込んだかにみえたが、再び戦力比が七割、それ以下に転

落する事を意味していた。

艦隊整備だけに留まらず、陸軍航空隊も本土への侵入を阻止する目的で、戦闘機の大増産と、新型機の開発が促進していく。そして、それは海軍も同じである。

海軍は既に初飛行を終えていたヴォートF4Uコルセアの空母積載を急ぎ、平行してグラマンF6Fヘルキャットの戦力整備を加速させた。

両機は、航空発動機メーカー、プラット&ホイットニー社製の2000馬力級の空冷複列星型R2800ダブルワスプを発動機として搭載しており、前者は逆ガル翼、スポット溶接といった新機軸を採用し、速度は水平飛行で644kmに達している。

後者は、冒険を嫌った海軍の要求により、当初、出力が低いが確実性の高い、1600馬力のR2600が搭載されるはずだったが、性能低下は明らかであり、もとよりダブルワスプをほとんど改修せずに搭載する事を目的とした設計だったため、スムーズにそれに移行している。

性能そのものよりも、堅実性と防弾性能を重視しているために、2000馬力級発動機を搭載している割には、605kmと極々平凡な速度に落ち着いている（それでも零戦の速度は凌駕しているため、強敵である）。

陸軍航空隊も、同様に新型戦闘機の導入に積極的であり、パブリックP47サンダーボルト、まだ本腰ではないため試作名称XP51、イギリスがノースアメリカン社に、P40ウォーホークの性能向上型のライセンス生産を依頼した事から始まった、史実における第二次大戦最優秀戦闘機と呼ばれるP51マスタングである。

P47は、F4U、F6Fと同じくR2800系列の強化版発動機（2300馬力）を搭載し、要求項目は682km以上、強大な火力と防弾性能であり、特筆すべきは、アメリカが開発した優秀銃、ブローニング12.7mm機銃八門を搭載、更に1000ポンド爆弾（後に大和型主砲の砲弾重量を上回る、1.5tを搭載可能）と言う稀に見る強武装に仕上がっている。上記の理由から重量の増加は避けられず、総重量は7t近いヘビー級となってしまったが、その耐久性と急降下性能は驚異的なレベルに達している。

XP51は、P40と同じアリソン社製V1710型発動機を搭載し、当初はイギリスへのレンドリースの都合上、試作機扱いでお蔵入りとなっていたのだが、この半年間のアメリカの劣勢により注目を浴び、改修によって他機を上回る低高度性能を示した事により（上昇力は弱く、6000mまで11分）、攻撃機型として生産されようとした経緯を経て（愛称アパッチ）、イギリスへ送られる事となる。これが後に飛躍的發展を遂げ、史実における第二次大戦最優秀戦闘機の栄誉を授かる事となるのだが、それはまた別の話である。

大山鳴動（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております。

終わりの始まり

アメリカ合衆国が大々的に世界に向けて発表した、本土防衛に伴う軍備の大拡張は、列強各国に凄まじいまでの衝撃を与えていた。艦隊整備計画だけで、年間六十億ドルを超える巨額の予算が投入されるため、隠蔽がもはや不可能なレベルに達しており、枢軸国に対しての牽制の意味が発表には込められていた。

ドイツ第三帝国

首都ベルリン

「面倒な事になりました…。兵器廠の本格稼働、と言ったところでしょうか」

「途中まではいい働きを見せたが、詰めが甘かったようだ……」
ベルリン中央に位置するヴィルヘルム街。外務省、航空省などの中央官庁がひしめく、皇帝の名を冠した街であり、その中にある意味で一際異彩を放つ建物、その会議室に数人の男達が集い、顔を並べていた。

「しかし、アメリカの生産能力は単純比較でも、我が国の三倍以上に上ります。このままの状態が続けば、いずれ英国本土を足掛かりに、米国の本格的な反撃が開始される事が予測されます」

男達の中で一番若い、軍需大臣アルベルト・シュペーアが口を開いた。兵器弾薬の生産を担当する、戦争遂行に最も重要な役職であるが、彼は元建築家であり、兵器に関して門外漢であったのだが、ヒトラーが構想した世界首都ゲルマニア計画を、建築総監として推進してきた事を評価され、若干37歳と言う若さで、今年二月に前任者が急死したことにより、辞退したにも関わらずヒトラーに拝み倒されて、軍需大臣に抜擢された経緯があった。

部外者に等しいシュペーアをして、アメリカの発表は危機感を抱かせるに充分だった。

「シュペーアの言う事は尤もだ。しかし、ソ連への攻勢を止める訳にはいかん。それを踏まえた上で対応を協議したい」

特徴ある低い声の人物、この総統官邸の主が口を開く。

（ソ連への攻撃は諦めぬのか無能め……。いずれ東西からの挟み撃ちにされるぞ）

陸軍参謀総長フランツ・ハルダー上級大將は、心の中で吐き捨てながら苦い表情でヒトラーを見つめた。度々作戦上の意見の相違から、ヒトラーと衝突し更迭は時間の問題だったが、国防軍司令部の要職にあつた事から、やむなく参加しているに過ぎず、いる意味があるのか？と言つた風に不機嫌な態度で、椅子に身を投げ出していた。

「ですが総統閣下。現在発動中のブラウは、第6軍がスターリンググラードで停止、コーカサス攻略作戦エーデルワイスは、燃料の不足により停滞、これ以上の作戦の継続は不可能であると判断致します」

そんなハルダーに助け船を出す如く、国防軍総司令部統帥局長アルフレート・ヨードル砲兵大將が進言する。

ヨードルが言つたブラウ作戦とは、白ロシア南方地帯（現ウクライナ）を制圧した南方軍集団を更に東へと進撃させ、カスピ海沿岸のヴォルガ河河畔のアストラハンまで進出。ソ連本土との後方連絡線を断つて、黒海とカスピ海に挟まれた、世界最大の産油量を誇るバクー油田のあるコーカサス地方を攻略し、ソ連の継戦能力を奪い不足する石油を補い、更には米国と英国の対ソ連援助ルートである中東イランからコーカサスを経てソ連に物資が流入するペルシア回廊を遮断すると言つ、極めて意欲的な作戦だった。

ブラウ作戦は、A B二つの軍集団に分けられ、A軍集団はヴィル

ヘルム・リスト元帥の指揮下に第1装甲軍（六個装甲師団）、第17軍を中核とする歩兵戦力約百万。B軍集団はマクシミリアン・フオン・ヴァイクス上級大将の指揮下に第6軍、第4装甲軍（四個装甲師団）歩兵戦力約三十万。

長砲身50ミリ砲搭載3号戦車、75ミリ砲搭載4号戦車が九百両投入された大作戦であり、黒海沿岸からバクーまでの広範囲を、A軍集団が進撃攻略するのが、エーデルワイスであった。そして、進撃するA軍集団の側面（北側）を防衛する目的で、B軍集団は北東に位置するソ連指導者ヨシフ・スターリンの名を冠した、ヴォルガ河の水運を司る要衝、スターリングラードへと進撃を開始したのだが……

「私の意思が不服だと言うのか、ヨードル？」 明らかに不機嫌な態度を見せたヒトラーを見て、ヨードルの上司である国防軍総司令部参謀総長ヴィルヘルム・カイテル元帥が、必死になだめる。

「ソ連赤軍は去年からの我が軍の攻勢により、甚大な被害を与えております。赤軍の再起はしばらく不可能であり、余力は残っておりません。後一息でスターリングラードとコーカサスは、我がドイツの下に屈服するでしょう」

カイテルの根拠の無い楽観的な見通しに、フランスとヨードルは冷やかな視線を送っていた。この二人は以前、陸軍の東部戦線の兵力運用を巡って火花を散らしたが、事ここに到って奇妙な意見の一致を見せていた。

「私の方から軍需大臣によろしいか？」

険悪な空気が場を支配する中で口を開いた人物。

「なんでしょうか、レーダー閣下……」

そうシュペーアは応じる。ヒトラーを始めとした全員の視線が、海軍総司令官エーリッヒ・レーダー元帥に向けられる。

「海軍としての意見を述べさせて頂くと、今度のアメリカの大艦

隊に対抗するべく、現在滞っている「Z計画」を、デーニッツの案と並行して頂き、かつての大海艦隊の復活を目指したいと考えております」

レーダーは、この機会に史実では幻と消えた、ビスマルク級戦艦四隻、日本の大和型を凌ぐ48センチ連装主砲四基八門搭載の八万吨級戦艦H級戦艦六隻を就役させると言う、陸軍国ドイツとしては、かなり荷の重い内容である計画を進めようと画策したのだった。しかも通商破壊用の潜水艦建造と並行して、と言うものである。

（こんな時に何を無茶な事を言い出すんだ、このボケ爺さんは……）

フ란ツは突然口を開いて、とんでもない内容を喋り出した海軍の最長老に対し、心の中で盛大なため息を吐いた。

「確かに、今回の件に関してはレーダー閣下の言に、一理あるのは事実でしょうが……」

（おいおいおい、若造までが同意してんじゃねえよ。まったくこいつらは……）

シュペーアが賛同するような発言に、フ란ツは内心絶句していた。各戦線を維持しつつその大戦力を整備できる余力が、今のドイツ国内にあるうはずがないと考えていた。

「海軍の戦力整備はシュペーア、お前に任せる。英国本土に対しての良案は何かないのか、ゲーリング？」

そうヒトラーが言うと、空軍総司令官ヘルマン・ゲーリング国家元帥に、質問の矛先を向けた。

「現在空軍で開発中のファイゼラーFi103があります。概存の技術の応用で開発可能ですので、半年もあれば実戦使用に耐えるであろうと予測しております」

ファイゼラーFi103とは、史実においてはV1の名称で呼ばれる戦術兵器である。パルスジェットを推力に用いた、飛行爆弾で

あり開発が容易、コストパフォーマンスに優れていた。信頼性にいくらか難があったが、フランスに展開する第3航空艦隊の爆撃機が、戦果を上げる以上に損失が増大していた事情もあり、次なる攻撃手段の必要性に迫られていた。

「爆撃機を増産しても現状を踏まえると、対英戦においての成果は見込めません。七月末のハンブルク空襲もあります。今後米英連合軍による空襲がある事を考えますと、戦闘機を増産して防空能力を高めておく必要性があります」

シュペーアがさりげなく進言する。事実、七月二六日、二九日にかけて、ハンブルクとベルリンに英空軍の爆撃機デ・ハビラントモスキート、アブロ Lancaster を中心とする延べ六百機による夜間空襲が実施され、数千人の被害が出ていたのである。

攻撃を重視するヒトラーにとつては耳の痛い話であり、あまり聞き入れたくない話だった。お気に入りのシュペーアやヨードルまでが、攻勢に反対の意見を述べるようになっていた事が、彼にはおもしろくはなかったのであるが……。

「ところで、北アフリカ戦線はどうなっている？」

聞きたくない話題から話しを変えるべく、ヒトラーはヨードルに話しかける。

「現在、ロンメル元帥のアフリカ装甲軍が、友軍と共にエルアラメインの前面に到達、対して英陸軍がエジプトの全軍を集結、衝突は時間の問題です」

ヨードルの説明を聞いてヒトラーは

「イタリア軍が使えるとは思えんが？」

友軍に対して不信を口にする。ヒトラーがそう言うのも当然であり、かつてイタリア軍はギリシャとエジプトに進攻して失敗し、とくにエジプトでは英軍三万に、二二万が敗北、リビアに押し戻されると言う大惨敗を喫した前例があった……

「そればかりは何とも言えません。イタリア陸軍参謀本部は、今作戦に絶対の自信があると言っていますし、ロンメル元帥の指揮に期待しましょう」

ヨードルやヒトラーを含め、今までの経緯から友邦であるイタリアを、樂觀的に見れる人間は皆無。現地指揮官であるロンメルまでが、お荷物扱いをしている始末であつた。

始まりの終わり、否、終わりの始まりが、灼熱の大地を舞台に幕が上がるうとしていた。

明けて九月十日

浦賀水道横須賀沖

「左観音崎通過、横須賀まで距離一
見張り員の報告が艦橋に響く。」

「長い航海だった。ようやくこれで肩の荷を降ろせる……」

近付きつつある横須賀の街を見ながら、連合艦隊司令長官山本五十六は、感傷に浸りながらそう言った。

ハワイ沖から十日の行程、足の遅い戦艦群を中核とする主力は、遙か後方を呉へと向けて移動中であり、現在山本が将旗を掲げているのは、武蔵ではなく第六戦隊重巡洋艦衣笠であつた。

周囲を固めるのは、米太平洋艦隊に真っ先に突入した第二艦隊であり、全艦損傷と言う凄まじい被害であり、凱旋者と言うよりはむ

しろ落武者の様相を呈していた。

これにも、それなりの理由がある。

「ようやくのご到着か。このような役目は、本来は受けたくなかつたんだがなあ……」

横須賀鎮守府の岸壁から、接近する第二艦隊を見つめている人物が、ため息を吐きながら愚痴を零す。

「やむを得ないでしような。私達がどここうできる問題ではない」
もう一人の人物が目配せをすると、後ろに控える参謀が、後方に停車しているトラックに向かう。

そして、トラック四台から降りて来たのは、完全武装の陸戦隊約一個中隊であった……

海軍甲事件

横須賀に降り立った連合艦隊司令長官山本五十六と、同参謀長宇垣纏、首席参謀黒島亀人の三人を待っていたのは、思いがけない人物の歓待であつた。

「古賀…、古賀君じゃないか!？」

山本が驚きの声を上げる。棧橋で待っていた人物は、以前より交友関係のある古賀峯一であつた。

「お待ちしていました山本さん。今回の勝利、誠におめでとうございます」

山本に答礼した古賀の表情は、言葉とは裏腹に沈鬱により歪んでいた。

「てつきり支那にいるものばかり思っていた…。一体どうしたと言つんだ？」

山本の問い掛けに古賀は口を濁しながらも、事情を話し始めた。

「九月一日付けで、横鎮（横須賀鎮守府）長官を拝命しました。突然の事で、急いで内地に戻つてみたのですが…。省内の誰も彼もが貝の口、何も話そうとしません……」

古賀が横須賀鎮守府司令長官となるのは、史実では二ヶ月後の十一月であり、現在は支那方面艦隊司令長官だったのだが、本人にとつては当初の異動が早まった、程度に考えていた。

「古賀長官、これ以上はどうか……」

話を遮り、制止を掛ける人物。

「あなたは……?」

見慣れぬ顔に、山本は訝しい表情をしながら聞いた。海軍二種軍装、肩章から中将である事が分かる。

「失礼しました。海軍省法務局長尾畑義純であります。何度かお目にかかりましたが、直接お会いするのは初めてです」

法務局は海軍内の法制度を掌握し、軍法会議等を海軍大臣、各鎮守府、艦隊長官の下で所轄とする部門である。尾畑は現時点での海軍内においては、唯一の法務中将であり、海軍兵学校を出ていない将官は極めて珍しい例である。

「法務官がわざわざ……？」

山本の後ろに着いていた黒島もが、尾畑を見て動揺を隠せないでいた。

「誠に遺憾ではありますが、山本GF長官、貴方を服務規定違反により拘束いたします。海軍省までご同行願います」

古賀の命令に対して、山本は静かに目を閉じた。

「これは正式な手続きを踏まれたものなのですか？ わざわざ陸戦隊まで動員して……」

黒島が後方に控えている物々しい集団を見ながら、古賀と尾畑に聞いた。

「彼らは念のため、と言う体裁だけです。拘束に関して、もし抵抗するならば実力行使も辞さない、などと洒落にもならない事情です。もちろん正式な命令によるもの、山本長官が戦艦に座乗して帰還されたのでは、様々な不都合が生じてしまいます。そのためにひそかに横須賀において頂きました。可能な限り各部、特に陸軍にですが、事情を知られず穏便に事を進めたいとの意向によるものです。海軍内においても今回の事を知るのは、ごく一部の方々しかおられません」

尾畑が話す内容を聞きながら、古賀は（海軍省と言っても官吏、後ろめたい事は公にはできんか）と考えたが、山本と馴染みの深い自分を、支那から呼び出して拘束させるなどと言う、嫌がらせ以外の何物にも捉えようがない事態に、そうさせた人物を頭の中で探し

求めた。

「とにかくご同行願います。詳細に関しては嶋田海相からご説明があります」

尾畑に促されるまま、山本、宇垣、黒島、そして古賀の五人は、用意された三台の黒塗りの乗用車に向かう。

「まあ覚悟はしておりましたが、落ち着かんものですね……」

黒島が両側を一行に列んで、三八式騎兵銃を筒上げの体勢で微動だにしない、特別陸戦隊の姿を歩きながら見渡した。横須賀第一、第三特別陸戦隊は南方作戦の発動に伴い、それぞれセレブスのメナド、オーストラリアに程近いティモールに派遣され、同地を占領、警備の任に当たっている。今いる彼らは、新たに創設された鎮守府警備隊を格上げたものである。彼らの顔も強張った感じがするのが見て取れた。

「まったく、な……。しかし、こうなってもやる価値はあったと、今でも思つとるよ。刑場に消えたとしても、悔いはない。だが、君らには済まんと思つとる、特に宇垣君はとばちりを食らわせる羽目になった。本当に申し訳ない」

宇垣が山本の真の狙いが、サンフランシスコである事を知らされたのは、ハワイに至る直前。ミッドウェー攻略後の事だった。

絶対秘匿の作戦上、敵はおるか味方ですら欺かなければ、本土とハワイを同時に攻撃できようはずがない……。ましてや一度は敗退した場所にある。

山本と黒島の二人が、真珠湾奇襲を上回る秘策を持って臨んだ事を宇垣は気付かなかった。いや、あるであろう事を薄々は感じていたのだが、止めようがなかった。

「もはや、何を言っても始まりません。参謀長として付き従っていた以上、長官とは一蓮托生……。最期までお付き合い致します」

この状況に置かれても、宇垣の表情は些かも変化する気配は無か

った。傲顔不遜で知られる黄金仮面のあだ名は健在だった。傲顔不遜で知られる黄金仮面のあだ名は健在だった。

山本が海軍省に連行されようとしていた時、遠く離れたワシントンでも似たような風景が見られた。

米海軍省内にある、作戦部長室。その部屋の主がこれまでに無い程に、不機嫌な表情でデスクに腰掛けていた。

「今回だけはどうにか事無きを得たが、本来であれば貴様の任を解いて、降格処分の上で最前線送りにしてやっても構わんのだぞ。なあ、ニミッツ」

凄まじい表情で対面に直立不動の体勢で、佇む現太平洋艦隊司令長官チェスター・W・ニミッツ海軍大将を見据えて言い放ったのは、事実上の海軍トップ、海軍作戦部長兼合衆国艦隊司令長官アーネスト・J・キング海軍大将である。

キングは一連の海軍艦隊の大拡張に伴い、本土防衛を管轄とする二大洋統合防衛艦隊（Two Ocean Joint Defense Fleet Atlantic and Pacific）略称JDF司令長官の兼任が確定している。

「陸軍航空隊（AAF）にまで声を掛けて、あれだけの戦力を動員したのに、敗れたのだから当然の判断だ」

そう言つて席を立つと、キングは窓際に向かって歩き出すと、外を見渡せる場所で立ち止まる。

「が、リーヒの奴が、貴様の更迭に反対しおつた……。よほど気

にいられているようだな」

キングは窓から見えるホワイトハウスを見据えた。

彼が言ったリーヒとは、ウィリアム・ダニエル・リーヒ海軍大将。ルーズベルト大統領の最高軍事顧問であり、陸軍参謀総長ジョージ・マーシャル陸軍大将、陸軍航空隊総司令官ヘンリー・アーノルド陸軍大将、そして、海軍のキングを含めた各軍最高指揮官を取り纏め調整を行う、陸海軍総司令官参謀長（統合参謀本部議長の前身）として、ルーズベルトに助言を行っていたのだが、キングがハワイでの失態の責任を取らせ、ニミッツを更迭しようとした事をリーヒが知ると、ニミッツの力量を海軍の次代を担うであろうと、高く評価していた彼は、更迭案に対して猛烈な反対の姿勢を示したのである。

「戦力運用に関してニミッツに落ち度は無く、例えば誰が現状で指揮を執っても、事態は更に悪かったであろう」とリーヒは評した。

普段は陸海軍の調整、連絡役、オブザーバーとしてしか、自らの意見を述べない彼が、珍しい程語気を強めて統合参謀長会議で発言した事を、キングを始め全員が驚いた。

海軍現役最先任のリーヒの発言に、さすがのキングも引き下がるしかなく、ニミッツの代わりにキングの魔の手が向かった先は、主力艦隊を率いて、連合艦隊と交戦、惨敗し逃げ帰って来たウィリアム・パイ海軍中将だった。

通称ニトログリセリンとあだ名されるキングに呼び出された彼は、およそ二時間にも渡ってあらんかぎりの罵声を浴びせ掛けられ、揚げ句の果てに戦意不足を理由に、海軍査問会にかけられた上で軍法会議に付されるという、極めて厳しい処分が待っていたのである。

「私は貴様を許した訳ではないぞ。リーヒの温情に感謝する事だな」

振り返ったキングの表情は、先程の怒りに満ちたものではなく、冷徹な無機質なものだった。

「当初の予定に立ち戻る。ニミッツ、貴様の下にアイオワとエセ

ツクスを送る。

名譽挽回のチャンスを与えてやろう。ハワイに戻ったら、直ちに日本に対しての反攻を開始せよ。どの道、今の奴らは恐れる必要はない」

キングは確信を持って、ニミッツに命じた。

戦艦アイオワと空母エセックスは、史実ではまだ就役していないが、突貫作業により数カ月早まり、現在完熟航行と訓練が行われ、間もなくそれが完了する。アイオワは戦艦としては高速の、33ノットを発揮し、主砲は米海軍初の長砲身16インチ五十口径主砲を九門を搭載しており、単純な打撃力ならば大和型以外の戦艦を撃破可能である。

空母エセックスも同様で、アイオワと就役はほぼ同時で、艦載機の最大搭載機数は実に一〇二機にも達し、史実では三二隻が発注され、戦況の好転もあってキャンセルされたが、それでも二四隻が就役して、帝國海軍を壊滅に追い込んだ……

この世界では、戦艦と空母のいずれもが必要とされ、建造が加速されているのである。

「ハッ、期待に添えられますよう全力を挙げます」

ニミッツはキングの命令にそう答える。他に答えようがない。

現状で太平洋方面で使用可能な海上戦力は、戦艦コロラド、マサチューセッツ、空母はゼロ、巡洋艦インディアナポリス、タスカールーサ、サンファン、駆逐艦二、潜水艦二四と言う、広大な太平洋をカバーしつつ、世界最大の帝國海軍連合艦隊を相手にせよ、などと正気の沙汰ではない。いくら新鋭とは言え、戦艦と空母一隻ずつでは話しにもならない。

正直なところの感想だが、合衆国に停戦の意図が無い以上、けなしの戦力でニミッツは立ち回る必要に迫られていたのである。

東京霞ヶ関、海軍省の敷地内に兵員輸送用のトラック二台と、山本達の乗り込んだ乗用車三台が滑りこんだのは、午後一番の最も暑い時間帯だった。

特徴ある赤煉瓦正面玄関の前に停車した、三台の前後のトラックから、十五名ずつの陸戦隊員が下車し建屋までの左右を固める。

そして、正面玄関で待ち構えていた法務局員の佐官三名が、車のドアをうやうやしく開く。

一番前の車輛からは、横須賀鎮守府司令長官古賀峯一海軍大将。

二輛目からは、連合艦隊司令長官山本五十六海軍大将、法務局局長尾畑良純法務中将。

三輛目からは、連合艦隊参謀長宇垣纏海軍少将、同首席参謀黒島亀人海軍大佐がそれぞれ降りてきた。何も知らない人間が見たら、大袈裟な勝利の帰還と見たであろうが（実際新聞等では山本大將静かに凱旋、と翌日小さな見出しが書かれた）、実際はそんな話などではない。

「ご案内いたします」

と尾畑が局員を引き連れて、前へと歩み出す。

「しかし、法務官。何故、古賀君が省内にまで呼ばれなければならない？ 我々三人だけ連れて行けば良い話ではないのか？」

山本は尾畑に対して、疑問を投げかけた。

「残念ながら、私にはお答えすることはできません」

尾畑は事務的な答えに終始するのみであった。

一行は入口までの階段を上がると、建屋の中へと入る。いずれの

人間も、勝手知ったる場所である。

入口を入ると二階の広間になっており、正面に三階へと続く御影石の階段が途中まで延び、そこから左右にまた階段が別れている。そして、今いるこの広間を左右に、海軍省の軍務局を始めとした各局が軒を連ねている。

広間の中央で、尾畑が局員に小さく指示を出すと、三人の佐官が山本の後ろに続く宇垣、黒島の両名に歩み寄り、二人は広間左手の通路に案内されていった。

「それでは、参りましょうか……」

尾畑は二人が通路の先の一室に姿が消えるのを見届けると、正面の三階へと続く階段へ歩き始める。

「おい、そっちは大臣室ではないぞ。大臣室は……」

山本が思わず口にしたが、海軍省で勤務する尾畑が知らぬはずがない。この時、山本は悪寒が背筋を走つたのを記憶している。

御影石の階段を上った先は、軍令部……

山本にしてみれば、立ち入りたくない場所であり、こんな状況下で向かう先は一つしかありえない。

階段を上った先にある正面の扉に、山本達は引き込まれるようにして進んで行った。

「法務官尾畑です。山本GF長官、列びに古賀横鎮長官お連れいたしました」

尾畑が中に向かって声を掛けると、「入れ」と声が返ってきた。

（嶋はん、か？）

返ってきた声が、山本と同期の嶋田であった事に、わずかばかり安堵した山本であったが、中にいるのが、嶋田と永野の二人であると思い込んだ山本は、入った先でとんでもない扱いを受ける事となる。

「失礼します……！」

山本は部屋に入るなり驚愕する。本来のこの部屋の主である土佐犬のような顔をした、荒々しいイメージの永野の姿はなく、永野の座っていた席の正面に嶋田が立っていたのは予想通りだったが。

「殿下……」

山本は絶句した。その席に座っていたのは能面……。正確に言えば能面と見紛う無表情で鎮座する伏見宮博恭王の姿であった。

この時は、死を覚悟して海軍省に来た山本であったが、その山本ですら恐怖を感じるまでの威圧感が、伏見宮から滲み出ていた。

「尾畑、ご苦労だった。下がれ……」

伏見宮の命に、尾畑は一礼して退出する。

「先頃……」

重々しいまでの口調で伏見宮が話し出した。

「永野が辞表を提出し、余がそれを認めた」

伏見宮の一言一言が山本の胸に突き刺さる。それを聞いている古賀は、自分に山本を拘束させたのが、目の前の人物である事を確信した。山本にとっても伏見宮は、災いをもたらす悪神にしか思えなかった。

「海軍史上、前代未聞である。実戦部隊を統括せしむる連合艦隊の長たる者が、私情にて艦隊の一部を動かすなどと、な……」

連合艦隊長官たる資格を与えた余の不徳でもある訳だが、責任は貴様の命を奪ったところで収められる訳ではない。そんな事となれば海軍の栄光は地に堕ちるのは明らかだ。仮にも貴様は、世間では英雄の扱い。死なれる事の方が、問題だ……。責任は取らせねばな

らなが、その独断専行も国の為であつたとするならば、温情の余地も、ある……」

伏見宮は、山本を刑死させる事による影響について話した。

「だが、予備役編入などという甘い処分などでは済まぬぞ。貴様は常々、海軍を辞めたら博打打ちになる、が口癖だそうだな。士官達から話しは聞いた。そのような自由を、貴様には永久に与える訳にはいかぬ。連合艦隊司令長官の任は剥奪、終生、「軍神」として責任を背負い生き続けるのだな……」

伏見宮が山本に求めた責任の取り方は、汚れ役を背負つてでも海軍に尽くさせる事だった。綺麗な幕引きを伏見宮は許さなかった。

山本にとっては、自らを神格化され人から崇められる窮屈な、最も忌み嫌う存在になろうとしていたが、責任の重さに打ち勝ち事は、できなかった……

「時に嶋田よ。連合艦隊司令長官の責任の所在は何処にある？」

伏見宮は山本から嶋田に質問の矛先を向ける。

「はあ、軍令に関しては軍令部総長の、軍政に関しては海軍大臣の指示を受ける、でしたな……」

嶋田はこの時、自分の海軍軍人としての終焉を感じた。

「分かつておるならば、話しは早い。永野が軍令部総長を辞めた以上は」

わずかばかりの沈黙の後、

「嶋田よ。貴様は海軍大臣を辞めよ」

冷徹な命令であつた。

連合艦隊司令長官独断専行事件、列びに海軍三頭職更迭問題。

そして、陸軍と海軍に等しく与えられた二本の双剣、統帥権と軍部大臣現役武官制度を楯に、海軍が陸軍に対して伝家の宝刀を引き抜いた瞬間である。

隠されし海軍の至宝

一九四二年九月十日

海軍大臣嶋田繁太郎海軍大将、列びに軍令部総長永野修身海軍大将辞任。

山本五十六海軍大将、連合艦隊司令長官解任、軍事参議官に栄転。後任の海軍大臣は未定。

その日の夕刻に大々的な見出しが掲載される事となる。海軍トップが一度に更迭され、各方面ではまことしやかな噂が流れ始めるのは、しばらく後の事である。

その中であつて、唯一後任に名前が上がった役職があつた事が、これからの日本の道筋を決定付けたと言っても過言ではない。

海軍省軍令部総長室

「しかし、そのような事をすれば日米交渉に支障が！ 海相更迭だけは、しばしのご猶予を……！」

嶋田に辞職を命じた伏見宮に、山本は重圧をはねのけ声を上げる。「艦隊を率いる貴様に伝えてはおらなんだが、日米交渉は決裂した……。」

残念だが、貴様の役目は終わったのだ」

冷酷なまでの眼差しを山本に向けると、再び嶋田に目を向ける。

「何をしておる。直ちに辞表を書いて余の下に提出せよ」

さつさとしろ、と言わんばかりの伏見宮の催促に、嶋田は小さく一

礼して総長室を出て行く。

まさかの事態に、おいてきぼりを喰らった形となった古賀は、困惑の表情を浮かべながらも、どうにか平静を保とうと必死であった。政治に干渉せざる事こそが、海軍絶対の原則。今までも伏見宮が陸軍と事を荒立てぬ人事を主眼として、三頭職の推薦或いは認可を行っていたにも関わらず、これまでの流れと全く逆行するものだった。

そして、古賀がこの更迭劇にわざわざ参加させられ、それが終わった後であるのに、退出を命じられる事なく、未だこの場所に自分がいるのが不思議でならなかった。

対して山本は、自らの海軍軍人としての栄光、命までの全てを投げ打って、米国に叩き込んだ乾坤一擲の一撃が、まったくの無駄に終わった事で、茫然自失の状態であり、山本の目に映るのは破滅の焦土と化した日本の未来の姿であった。

（もう止められない……。もはや今回のような一撃は、二度と撃ち放つ事はできない……）

それは海軍の現状を物語っていた。

「わからない、と言った顔をしているな」

唐突に伏見宮に声を掛けられた古賀は、混乱の渦中から引き戻される。が、

「横鎮長官として、貴様には将官会議に出席してもらう」

これを聞いて更に古賀は混乱してしまう。海軍将官会議とは、海軍内の最重要案件を審議、決定する事を目的とした会議であり、海軍大臣を議長とし軍令部総長、次官、次長、軍務局長、艦政本部長、そして、横須賀鎮守府司令長官がメンバーに入れられ、必要に応じて他の将官が加わる場合もある、海軍の最高意思決定機関とも言え

るものである。

「お待ち下さい殿下。大臣、総長共に不在の状況下では、決定する権限を持つ者がおりません。これでは混乱に拍車をかける結果となります」

古賀は伏見宮に異を唱えたが、伏見宮はそれは当然であるとばかりの反応を見せ、

「大臣は決まっておらぬ。が、軍令部総長の後任はすでに決定しておる」

と返した。

（なんだと…。永野さんの後任最有力候補、百武さん（源吾海軍大将、三期）は七月に予備役に編入されたはず。

では、前大臣の及川さん（古志郎海軍大将、海兵三一期）か、台湾総督の長谷川さん（清海軍大将、同期）あたりが妥当だが、呉鎮の豊田さん（副武海軍大将、海兵三三期）も十分資格はあるはずだが、一体誰だ……？）

古賀は自分の知り得る名前を挙げて考察する限り、状況を考えれば才覚と度量の広さを併せ持つ、長谷川清が適任であろうと考えた。

「残念だが、貴様の予測は外れだ」

伏見宮に考えを見透かされた言葉に、古賀がぎょつと驚き、その様子を見て伏見宮は初めてその顔に薄い笑いを浮かべた。

「ま、その反応も当然と言えば当然か。このような事態がなければ、絶対に名が挙がる事は無かったのだからな」

自嘲するように伏見宮は山本の方を見ると、

「貴様にとつては、師匠格と言っても良いくらいか？ よもや忘れるはずはあるまい？」

伏見宮はその名前を挙げた。

「加藤隆義」

古賀にとつては失念していた名前であり、山本にとつては忘れる事のできない名前であつた。

加藤隆義海軍大将、旧姓は船越。海兵三一期を五位の成績で卒業。日露戦争に従軍し、戦艦富士に乗り込み日本海海戦に参加。後、ヴェルサイユ条約派遣随員、軍令部作戦班長を務める。

国際連盟軍事諮問委員会空軍海軍代表、第一航空戦隊司令官、航空本部長、軍令部次長、第二艦隊司令長官、呉鎮守府司令長官を歴任し、一九三八年軍事参議官となる。

略歴は上記の通りである。

海軍内の最強硬派であり、強硬派が強硬派である理由とも言える人物。性格はあまりにも合理的過ぎる冷徹な理論家であり、それは一部の人間から高く評価されていた。

その最たるものが名前にも顕れており、彼の名字が加藤であるのは、婚姻によるありきたりなものではない。

彼の名字の由来は、日本海海戦勝利の立役者、連合艦隊参謀長にして、ワシントン海軍軍縮条約締結へと導き、海軍大臣、内閣総理大臣を務め、その細身の外見からロウソクとあだ名され、世界に軍縮の明かりを点した「偉大なるロウソク」あるいは「アドミラルステイツマン」と呼ばれた英雄、元帥加藤友三郎が彼の力量を見抜き、養子として迎え入れたものであり、軍縮条約時代、艦隊派に属し自らとは反対の姿勢を示す彼を、なんとしても手元に欲した加藤の思惑があつた。（加藤友三郎は、海軍きつての理論派、井上成美をし

て、山本権兵衛と並び一等大将と言わしめた人物である)

山本五十六をして天才と言わしめた堀悌吉がいながら、加藤はあえて敵対派閥である隆義を養子として選んだのである。

だが、加藤の思いも家督、子爵の位を持つてしても隆義の思想を変えざる事はできなかった…。

そして彼は堀と同格、あるいはそれ以上の能力を秘めているのは、経歴がそれを証明している。

第一次世界大戦で実戦投入された航空機の発展性に着目した彼は、後に航空開発の本場である欧州、とくにフランスに渡り、その黎明を体感し、艦隊派に属しながらも航空開発に勤しみ、その発展に多大なる影響を与えた。国際連盟軍事諮問委員会の大日本帝國の海軍空軍代表(空軍は存在しないが、航空分野の第一人者)として各国の空軍関係者と関わりを持った彼は、イタリアのジュリオ・ドゥーエが唱えた、空軍創設の必要性を説いた「制空」をはじめとした各種の書物に接し、独自の理論をいち早く取り入れ、大規模な航空機運用を可能とするため、艦隊派の一員と言う立場を利用して、空母の戦力化を押し進め、自らも整備していた第一航空戦隊司令官として実績を積んだ。

そして、彼の航空本部長としての功績が結実したものが、海軍が世界に誇り、また設計者堀越二郎が自身最高の傑作と言わしめた、海軍初の全金属単葉戦闘機、九六式艦上戦闘機の原型九試単座戦闘機の開発命令にも関与しており、前回の試作機が海軍の過大な要求により失敗した事を鑑み、その要求項目を高速性の一点に絞る事により、海軍航空機開発に輝かしい一步を飾らせる事となる。開発が終了した時は軍令部次長へと出世しており、この時の航空本部長が山本五十六であり、加藤の航空本部長在任期間は四ヶ月と短い、そのわずかな期間に決定的な成果を残している点で、他の海軍軍人とは一線を引いていた。

そして、もうひとつ彼の功績に加味される、奇妙な事実が存在する。

それは一九三三年に計画された第二次海軍軍備補充計画、通称マル二計画に置ける、後の空母の原型とも言える蒼龍、飛龍の両空母の建造にも航空本部長として深く関与しており、様々な設計案があり、しかも軍縮条約の拘束があるなかで、その達成可能な限界性能を引き出したのも、第一航空戦隊を自ら進んで率いた、その指揮経験が活かされている点であり、後の翔鶴型、大鳳型にも影響を与える。

他にも、このマル二計画では空母改装を前提とした剣埼型給油艦二隻、潜水母艦大鯨等が建造されており、日米開戦時の空母比率の優位に立たせているのである。

これを考えるならば、海軍空母運用の実質的な産みの親と言うべき存在であり、彼がいなければ、その相乗効果により海軍の空母戦力化は大幅に遅れ、その後の歴史そのものを大きく変えていた可能性もある。

もちろん、そのような記述は一切存在していない。あたかも、不自然に彼が関わった部分が抹消されているかのよう……

しかし、海軍の航空戦力整備に関する非常に重要な交差点とも言う時期に、彼が影響を確実に与える立ち位置にあったのは、紛れもない事実である。

そして、加藤の部下として、航空畑を歩んでいったのが、真珠湾奇襲を命じた山本五十六である。

加藤がいなければ、真珠湾を奇襲する事は不可能であり、加藤の敷いたレールの上を、山本が走り抜けただけでも捉える事もできる。

海軍、否、日本随一とも言える航空分野の理解者であり、その思考回路は、当時の軍人達から、一步も二歩も先に踏み出していた。

艦隊派でも第二位の実力者であり、艦隊戦力運用も、当時第一位

と目された末次をも、場合によっては凌ぐとさえ言われる逸材であったが、天運は彼に味方せず、呉鎮守府司令長官在任中の昭和十三年、突然軍事参議官に輔職される。

絶望的とされる日米開戦には、その才能が活かされる事はなく、以後、二度と軍務に関わる事はなかった。

そして今、全く先が見えなくなった無明の闇に閉ざされた最悪の状況下で、加藤の海軍最高位である軍令部総長への復帰が果たされる。

後に海軍最高の頭脳と称され、また空軍創設の父と呼ばれる事となる、史実で不遇を託った名将が、遂に歴史の表舞台へと姿を顕したのである。

九・一一事件（前編）

九月十日

午後三時、宮中において軍事参議官加藤隆義が軍令部総長に輔職され、任官の儀が執り行われた。

（ようやく…、ようやくここまで……）

加藤は感慨無量であった。海軍戦力整備に全力を尽くし、自らがその艦隊を率いる事を夢見ながら、ただひたすらに走り続け、史実においてなすことなく艦隊が敗北していく様を、ただ見ている事しかできなかった彼が、どれほど無念だった事かは想像に難くない。

彼が強硬であったのも、連合艦隊を世界一、最強の大艦隊にする事を夢見ていたからに他ならない。子供じみた夢であったが、それに忠実だった。そして、そのためにどうあるべきか、あらゆる努力を振り向けた。

しかし、その性格が余りに冷徹過ぎていたため、周囲に誤解を与え、自らも多くを語らなかつた。故に日本を開戦に導いた海軍強硬派、時代遅れの大艦巨砲主義者の一派と蔑まれながら、無能者としてのレッテルを貼られ、省みられる事はなかつた。

新任式を宮中で終えた加藤は、早速海軍省へ赴こうと足早に宮城を歩いて行くが、途中である人物に出会う。

「伯父上！」

呼ばれた加藤は足を止め、相手の方を見る。

「有光か！ 久しぶりじゃないか。侍従武官を務めていたのだったな、息災のようだな」

そこにいたのはカーキ色の陸軍服に身を包んだ、甥の逞しい姿だった。

「はい、伯父上も…。軍令部総長就任、おめでとうございます！」
丁寧な挨拶をする甥を加藤は頼もしげに見つめた。

彼の名は山縣有光。言わずと知れた明治維新の英雄の一人、元老中の元老、国軍の父と言われた元帥山縣有朋の孫である。

加藤の兄、船越光之丞の妻が山縣有朋の娘であり、様々な経緯を経て山縣家に入り、現在に到る。

「そう喜んでもらえん。対米戦のこれからについて、海軍を取り纏めなければならん。もう二度と、海軍の要職を務める事はあるまいと思っていたが、天は私を見捨てた訳ではなかった……」

加藤は知らなかった。彼を後押しするために、裏で凄まじい駆け引きが行われていた事を。

「しかし伯父上、何分良からぬ噂が立ち始めております。海軍が陸軍に内緒で勝手に予算を啓上するなど、揚句の果てには海軍が反乱を企んでいるなどと、大半が荒唐無稽な話ですが、十分にご注意下さい」

「…宮中でそんな噂が流れているのか」

加藤は内心、憂鬱であった。米国が国を挙げて軍備増強にひた走り、帝國最大の危機を迎えようとしている時に、このような内輪揉めを起こしているような事が、加藤には理解しがたいものだった。

（こんな時に石川がいれば、何かと便利なんだがな）

加藤は同じ派閥に属し、陸軍内に幅広い人脈を有する石川の存在を、こんな時こそ有用であると考えていた。

「いざと言う事もある。海軍に邪ましい私心は無き事を、陛下に

お伝えしておいてくれ」

加藤はそのように、有光に念を押した。加藤本人にしてみれば、裏でいろいろあった事は本当に知らない事であり、軍令部総長就任も席次の上では、軍事参議官最先任である加藤の就任は当然だったはずなのだが、それにも拘わらず史実において加藤は総長になる事ができなかった。年功序列に固執した海軍人事の大きな矛盾である。

「心得ております」

有光の一礼する姿を見て、加藤は歩き出す。

「海軍省に向かう」

短く副官にそう告げると、加藤は宮城を後にするのであった。

同時刻

麹町区永田町二丁目一番

内閣総理大臣官舎

現在で言う所の首相官邸、文字通り首相が執務を行う場所である。その大臣公室に、カーキ色の軍服と飾緒を身につけた、数人の陸軍将官が集い声を上げていた。

「おかしいではありませんか！？　そもそも、先の作戦は海軍が勝手に立て、兵力が足りないからと泣き付いて来たくせに、我が陸軍に内容を秘匿した揚句、手柄を全て立てたの如く風潮し、あまつさえ……」

激昂した様子で大声で叫ぶのは陸軍省人事局長富永恭次陸軍少将。

「大本営政府連絡会議において、日米交渉は自分の意見を言わず人任せにしておいて、交渉が決裂した途端、手の平を返すとは言語道断！」

富永に続いて不満を吐露したのは、陸軍次官木村兵太郎陸軍中將である。先の日米交渉の講和内容を決定する、連絡会議において明確な姿勢を出さず、いや今回に限らず日米開戦のおりにも、態度をはっきりさせない事で、どれほどいらつかせたか分からない。

（あの時、はっきりできないと言ってしまったえば、我が陸軍に統合してこき使う事ができたのだがな）

木村はかつてあった事を振り返った。

開戦時、海軍はアメリカと戦うべきではないと言うのが、本音であつたが、それは絶対に言う事はできなかった。

海軍の予算獲得の理由は、仮想敵国アメリカに対抗するためのもので、そのために巨額の予算が組まれていたが、海軍が戦えぬとなればその予算の元は、国民の血税である。もし、開戦に拒絶しようものならば、国民の怨みが全て海軍に向く事となり、存在意義のほとんどを失った海軍は、より巨大組織である帝國陸軍に、吸収統合される可能性があつたのである。

やむにやまれぬ裏事情があり、簡単に打開できる状況であるならば、負ける戦をおっぱじめ道理はない。

そんなこんなで、自らの邪魔にしなければならないような海軍が、今回の海相更迭により馬脚を現したと踏んだ、木村、富永、そして陸軍省軍務局長佐藤賢了陸軍少将らは、自分達の拠り所であり、海軍の標的にされた主を守ろうと、この事態を逆手に取って文字通り危地を好機に変えようと画策をしていた。

状況からして黒いのは海軍の方であり、戦時中にも関わらず内閣ばかりか陸軍にも非協力的な態度を示し、あろう事か倒閣まで企てるなど、糾弾する理由としては十分だった。

「どうか大臣、ご決断を。正義は我らにあります。大臣が動かれれば全てうまくゆきます。悪しきは海軍であるのは明白」

佐藤が暗に事を起こせと、内務省と陸軍省を掌握する最高権力者に催促をする。

その求めに、内閣総理大臣陸軍大将東条英機は、なかなか首を縦に振らず、執務用の机の上で手を組んだまま、何も言わずに思考していた。

内閣に大臣の任命権はなく、海軍陸軍の両大臣を除いては、首相が兼任する事が可能であり、現在、東条は陸軍、内務、外務の各大臣を兼任している。

しかし、海軍大臣だけは不可能である。

かつて、第十四代首相西園寺公望が組織した第二次西園寺内閣が、陸軍が軍備増強を求めた際、財政難を理由に拒否した事で、陸軍大臣上原勇作陸軍大将が単独辞任して、後継の陸軍大臣を出さなかった事により、西園寺内閣は総辞職に追い込まれている。（二個師団増設問題）

また、第三十七代米内内閣の時も、首相米内光政海軍大将（予備役）が日独伊三国同盟に反対した事により、同盟締結を目指す陸軍が反発し、当時フランスがドイツに敗北したのを機に倒閣を目論み、陸軍三長官会議を経て、陸軍大臣畑俊六陸軍大将が単独辞任して米内内閣は総辞職する事となる（畑本人はそのつもりはなかったが、陸軍の総意として辞任した）。

この事例が、軍部大臣現役武官制度であり、当初の目的は軍が政治のおもちゃにされる事を阻止するためであったのだが、時代の流れとともに変質し、軍部の意見を通すための道具になってしまい、

法的に違法ではないために軍部を抑える存在が消滅した事が、戦前最大とも言える問題点だった。

つまり、今回の事態も海軍内に陸軍内閣を潰し、国内を掌握しようとしている者が、存在している事を意味しているのである。

未だかつて海軍が軍部大臣現役武官制を発動した事例はなく、このまま海軍大臣が出されなければ、東条内閣は総辞職に追い込まれるのは確実だった……

「まあ、待て。しっかり話しをしてみねば、分かる事も分からないままになる……」

いきり立つ腹心達を諭すように東条は話すが、頭に血が上った三人の耳には入らず、皮肉にも更にヒートアップさせる結果になる。

「何を弱腰になっておられますか、閣下！」

「木村さんの言う通りです！ 海軍の暴挙を止めねば、更なる増長を招く事となります！」

木村と富永の二人が、顔を真っ赤にしながらくし立てる。

この様子と対称的に、東条は冷静さは失ってはならず、甲高い大声で一喝した。

「皇軍双撃の愚を犯せと言うのか！！」

この大喝に二人は敵わず押し黙った。逆に東条は今の一喝で血が沸き立つ感じを覚える。

「落ち着け。まずは事態の確認が先決だ。わしは恐れ多くも陛下より陸軍と帝國政府を預かる大命を受けている。賢了、海軍の軍務局の岡少将とは知り合いだったな？」

東条は鼻息を荒くしている二人を制止すると、腹心の中で海軍中

枢との繋がりを持つ、佐藤にそう聞いた。

「は、たしかに岡少将とは暮を打つ間柄ではありますが、恐らく機密事項扱いであろう内容を話してくれるとは、とても思えません……」

以前、国会の質疑応答で、議員に「黙れ！」と言い放つ程強気の佐藤であつたが、さすがに海軍の本拠地に乗り込むとなれば話は違ふ。

「海軍の動向を知るためには、行ってもらうしかない。わしの名前を出して、事態の釈明を求めよ。」

それをも無視するようであるならば、やむを得ない…。陸軍の意思として行動を開始する」

東条は語気を強め、その意思を伝えた。

「分かりました。私は早速海軍省に向かいます」

佐藤がそういつて大臣公室を出て行く。

「では、私は参謀本部へ向かいます」

「私は東部軍、中部軍、各管区に連絡し決行に備えます」

木村、富永の二人は東条に対して敬礼して部屋を出て行く。

一人となつた東条は深いため息をはき、席を立つと日が傾きつつある西の空を見つめる。

（せいぜい師団長止まり、それぐらいがちょうどよかったのかもしれんな……）

東条は自嘲した。事が起これば五・一五、二・二六の両事件を凌ぐ事態に発展するのは必定。

青年將校達の反乱などではなく、正規軍を動員した統帥を二分する陸軍と海軍の全面衝突となれば、双方の被害は計り知る事はできない……

だが、手を拱いてなされるがままと言う訳には、絶対させておく

事はできない。

言葉は軍機と言う名の厚い壁に阻まれてしまう事が、参謀本部第一部長田中中将が軍令部を訪ねた際に、拒否された事により、証明されている以上、実力行使以外に道はない。

東条の心境は恐ろしいまでに不安定だった。まるで開戦をひたすら押し止めようとしていた時と酷似していた。正当性は間違いなく自分達にあり、例え事を起こしても非難される言われはない、だが、これは陛下への不忠となる、強気を装った東条だったが、その一点だけが気掛かりだった。

「差し当たっては、賢了の報告待ちか。できれば穩便に済めば一番良いのだが、そうはなるまい」

東条の重く沈んだ声が室内に響いた……

佐藤が海軍省に到着するわずかに早く、先に省内に入った軍令部総長加藤の召集の下、海軍省内会議室において、海軍将官会議が開かれる事となる。

メンバーは加藤の他に、海軍次官沢本頼雄海軍中将、軍令部次長伊藤整一海軍中将、軍務局長岡敬純海軍少将、艦政本部長岩村清一海軍中将、加藤の求めにより航空本部長片桐英吉海軍中将、そして横須賀鎮守府司令長官古賀峯一海軍大將が出席する。

重苦しい緊張感が漂う議場に、海相不在の中、議長である加藤が、開口一番で放った言葉が、参加者全員の度肝を抜く事となる。

「まずは、私が今ここにいる意味を理解してもらいたい」

覇気の漲る他を圧倒する一言である。何故今まで、海軍を率いるべき要職に彼がつけなかったのか、一同がその理由を知った。

それは加藤があまりにも危険な、「劇薬」であるからに他ならない。

歴代連合艦隊司令長官で東郷元帥に次いで、人気のある海軍強攻派の総大将と言うべき、末次信正海軍大将の懐刀にして智囊とも言うべき彼が、海軍三頭職のいずれかに就いた場合、その影響は遍く海軍内に浸透する……

表面上は実権を持たない軍事参議官ではあったが、各方面の参謀達の信望を集めていた事が、如実にそれを物語っていた。

言わば枷を付けられた竜の如く、一度解き放たれば歯止めが効かなくなる事を、伏見宮は恐れた。

加藤本人は米国との交渉する術が消滅し、先行きが完全に闇に閉ざされた今こそが、自分の持ちえる全てをぶつける、至上の舞台であると捉えたのである。

そして、加藤が兵力量決定権と海相に代わって将官会議を主導すると言う事実、その見えない影響力により海軍の全てを掌握した事を意味していた。

更に一同を驚かせたのは、次の文句であった。

「米国の大艦隊整備計画に対抗するべく、現在進行中の 五、六計画を抜本的見直しを図り、かつて消滅した「八八艦隊」の創設を目指す」

陸軍軍務局長佐藤賢了陸軍少将が海軍省を訪れたのは、会議室に驚愕の空気が支配した時であった。

刻一刻と事態は進み、陸軍の一部の部隊は動き始めていく……

時刻一七

霞ヶ関海軍省

「いざ行かん中央突破……敢行せん、か」

海軍省の入口で佐藤は、通称赤煉瓦を見上げ一人呟いた。

そんな佐藤の脇を、海軍省から帰ろうとしている白い海軍二種軍装を着た部局員達が、「何しに来やがった」と言いたげに、まるで汚物でも見るかのような視線を投げ掛けるが、佐藤は横柄な態度でずかずかと中に入っていく。

「陸軍省軍務局長の佐藤だ。岡軍務局長に面会したい」

一応内部を知っていた佐藤は、二階にある軍務局と書かれた札が表示されている部屋に入ると、でかい声で名乗り用件を伝える。

まだ残っていた軍務局員二人がお互いに顔を見合わせると、ばつが悪そうに佐藤の方に歩み寄ると、

「局長は今お会いになる事はできません」

そう答える。

「何故だ!？」

わざわざ出向いて来たのに、何と言う態度だ、と佐藤は声を大きくする。

「現在、将官会議が開かれております。非常に重要な内容につき、

いつまでかかるか分からないから、面会者は全て帰ってもらえ、との事です。残念ながら……」

局員がそう答えたが、佐藤の顔はみるみるうちに赤くなり、次に声を発したのは怒鳴り声だった。

「俺は東条首相の名代として、ここに赴いておるんだ！ 分かっ
とるのか貴様！」

いきなりやってきて、「局長を出せ」と言われ、「今は忙しいから後で来てくれ」と答えたら怒鳴られた局員は、（なんなんだコイツは？）と言わんばかりに不機嫌な態度を表に出してしまい、その後エライ事になる。普段から陸軍を馬鹿にする人間が多い海軍、しかもエリートであった事がさらに拍車を懸ける結果となる。

「なんだその態度は！？ ああ！？」

局員のあからさまな態度に激怒した佐藤は、掴み掛かる程の様子で迫る。佐藤自身も陸大卒のエリートであるから、余計に腹立たしい。

一触即発、どちらから先にも手を出してもおかしくない状況で、騒ぎを聞き付けた他の局員達が集まって人だかりができていた。

「一体何を騒いどる！」

そんな背後から、人だかりに向かって声を掛ける人物。いきなりの事に、数人がそちらに振り返ると、その姿を見て慌てて敬礼をする。

「兵備局長！」

その声を聞いてそこにいた全員がバツと振り返り、一様に同じ態度を取った。

彼は保科善四郎海軍少将、兵備局は一九四一年（昭和十五年）に

新設された部局であり、対英米戦を睨み総動員体制、出師準備、動員、生産計画を掌握しており、海軍内総括と言すべき軍務局に次ぐナンバー4と言すべき立ち位置にあり、史実においては保科が大戦中は一貫してその地位にあった。

「はいはい、どいてくれ」

保科は東北訛りが入った言葉で、局員達を押し退けると部屋の中に入っていく。

中に入って保科が見たのは、でかい顔を茹蛸のように真っ赤にして、それこそ頭から湯気が立ちそうな程にしていた佐藤の姿である。

「双方落ち着かんか」

保科が声を掛けると、鬼のような形相で佐藤が振り返り、

「誰だ貴様は！？」

そう言い放つ。

それを聞いて保科は一瞬哑然として、すかさず頭をかく。

「兵備局を預かるホスナゼンスロウだす」

東北訛り全開で名乗る。肩からかかる飾緒がキラリと光る。

（兵備局……）

それを聞いて佐藤は、ようやく話しが通じそうな相手が出て来た事が分かり、冷静さを取り戻した。

「お見苦しい所をお見せした。陸軍省軍務局長佐藤賢了だ。今回の件でのご説明を頂きたい」

佐藤は回りくどい言い回しをする事なく、単刀直入に保科に釈明を求める。

（ふむ、やはり……）

わざわざ陸軍省の高官が訪れる理由は、事態に直接の関わりにな

い保科にも理解できた。

しかも、陸軍省ナンバー3、自らの腹心を送ってよこすなど……

「場所を変えましょう。ここは人目につきますで」

周りを見渡し、保科は佐藤の耳元でぼそぼそと言うが、どうにも聞き取りにくいところが、なんとも言えない。

とりあえず、ここにほっぽらかしにしておいたんでは、また誰ぞと始まって面倒である、と保科は考え、自分の部署である兵備局に佐藤を案内する。

逆に佐藤の方は、どのように保科が答えるのか、期待を込めながら興味津々と言った風に後をついて行く。

保科は野次馬にさつさと帰れと手で合図しながら、軍務局にホールを挟んで相対する兵備局へと向かう。すれ違う全員が、佐藤に向けて冷淡な視線を向ける。直接ではないにせよ、その視線を感じた保科は（こんなのは願い下げだ）と感じずにはおれなかった。

佐藤の方にちらりと視線を向けると、佐藤はそれに気付き「何か？」と聞かれるが「なんでもねえす」と答える。（目立ち過ぎるんだよその服が）と陸軍服を着ている佐藤を思いつつ、心の中で苦笑いしながら保科は前に進む。

同時刻

市ヶ谷台陸軍参謀本部

「どうか、ご協力を頂きたい！ 海軍を今止めねば後々の災いとなります。政府を私せんとする輩がいるのは明白！ どうか！」
陸軍次官木村兵太郎が、目の前の席に腰掛け煙草をふかしている、でっぷりとした体格の男を、必死に拝み倒していた。

「まあ、落ち着かんか木村よ。慌てたところで事態が変わる訳ではあるまい？」

ふうーっと大きく煙りを吐き出すと、木村に視線を合わせぬよう、脇の方を見上げながら男は話し掛ける。

「何を悠長な事を言っておられますか、参謀総長！ これは明らかな海軍からの挑戦であります。このまま東条首相が辞職に追い込まれれば、海軍が海相、総長が辞めさせられた勢いで、統帥部を纏められる閣下の立場すら危ういものとなりますぞ」

いつになく凄んだ表情で詰め寄る木村に、陸軍参謀総長杉山元陸軍大將は一瞬気押されてしまい、二の句に窮する。

「とにかく、東条は何と言っておるんだ？」

木村をここに送り込んだその意図を掴もうと、そう問い掛けた。

「海軍に海相更迭を撤回させます。それと事態の解明です。それが成れば事は全て丸く収まります。」

海軍が何れにも応じない場合には、政府及び陸軍の総意として、戦時内閣に対しての非協力と反逆行為の疑いありとして、帝都に戒厳を布告し海軍省を抑え、関係者を処断すれば終わりです」

とんでもない事を淡々と話す木村に、杉山は絶句する。

「次官の分際で、統帥の権を侵そうと言うのか？」

明らかなる越権行為に杉山は眉をひそめ、咎めようとした。大臣の補佐、各局の取り纏める重要な立場とは言え、軍令に関する一切

に口出しする権限は持っていない。

つまり、指揮命令はできず、参謀本部の指令の下、各軍司令部より隷下の各師団を中心とした部隊に伝達され、軍、或いは師団が指揮を執るのである。

しかも、師団長は親任官、天皇から直接任官された中将であるため、罷免する権限も一切存在しない。省側には立ち入る事のできない、あまりにも大きな一線が横たわっている、はずであった。

「……既に留守第五二師団が演習の名目で、金沢より移動中であり、帝都警備の任に当たるために、宇都宮管区より第八四連隊列びに第一二四連隊を召集致してございます」

「……！」

予想以上に事が進んでいた事に、杉山は衝撃を受けていた。一個師団二個連隊を動員できるなど、到底不可能であつたはず。

「統帥権の干犯だぞ！ 一体誰の許可を経て……」

杉山は怒りを覚え怒鳴つたが、木村は至つて冷静に答える。

「お認め下さい閣下…、それだけ今回の事には賛同者が多い、と言う事です。既成事実が物事を押し進めて来たのは、今の日本を示しております」

尤もらしい文句を並べて、木村は杉山の賛同を得ようとした。実際に杉山が命令を発した時点で、木村の言う既成事実が成立してしまう。

いくら便所の扉などと馬鹿にされる杉山とて、そう簡単に命令を発する事はできない。例えば状況が有利であろうとも、後々を考えれば乗り気にはなれない。それに……

「万が一にも失敗した場合はどうなる!？」

当然予測されるべき事態。もし、海軍に大義名分が立った時には、陸軍の面目は丸潰れ、面目が潰れるだけであればよいが、陸軍としての体裁も立たなくなってしまう。

「それはありません。どこを言い繕おうが、こちらが責められる言われはございません。閣下のご命令無きままであれば、問題があります、それさえあれば正当性は不動のものであります」

木村は確信を持ってそれに答える。

（一体そのような自信はどこから湧いてくる？）

杉山にしてみれば、恐ろしいまでに楽観的な物の見方をする木村が、奇妙な動物のように見えてしまう。

（統帥の複雑さをまるで分かっておらん。言わんとしている事も理解できないがな……）

陸士（陸軍士官学校）一二期、陸大（陸軍大学）二二期、最先任である南方軍総司令官寺内寿一に席次の上で杉山は一期下ではあったが、数々の要職を歴任しており、陸軍三長官（陸軍大臣、参謀総長、教育總監）を務めたのは、杉山を除き元帥上原勇作唯一人。経験は豊富である。

統帥に絡み、参謀本部と軍令部は完全に独立しており、海軍が陸軍と対等であるべきと主張して、参謀本部から海軍軍令部が分離独立した際も、凄まじいまでの軋轢が生じており、この時は日露戦争の勃発に伴い、海軍との綿密かつ円滑なる協力体制が必要不可欠であったことから、大本営条令が改訂され陸海同列に扱う、いわゆる統帥二元となったがために、互いに不干渉の立場が明確となり、それがやがて陸海軍の対立関係に発展、いつの間にか制度が一人歩きを始め、誰の手にも負えない怪物へと成長していった……

誰であろうと触れる事は憚られる、天皇の双剣。海軍がその内の一本を引き抜いた以上は、よほどの理由がある事が容易に想像がつく。しかし、

「悪しき前例は生まぬが最上か……」

杉山は苦悩の表情を浮かべながら、そう呟く。

これが成立してしまった場合、陸軍の発言権が大きく削がれる事が、確実となる。各方面に展開する作戦の立案にも、海軍に一々お伺いを立てる必要が生じる可能性もあり、しかも事前に知らせもせず勝手な動きをされたのでは、たまったものではない。

それこそ統帥権による統帥権の干犯、陸軍の独自性の消失を意味するものであり、陸海対等から海主陸従の関係に転んでしまうなど、絶対に認可できるものではない。

「では閣下……」

杉山が重い腰を上げた事を悟った木村は、喜びの色を含んだ目で相変わらず動作がスローモーションな杉山を見る。

「部隊の動員が完了した時点で、東部軍より戒厳を布告。後詰めとして水戸管区より一個連隊を召集、臨時に師団を編成、指揮は貴様が執れ」

グズ元と言われる杉山だったが、普段の動作が遅い様子からは、想像もつかない決断の早さだった。

「ハッ！」

木村は杉山に対し威勢よく敬礼をする。

「差し当たる問題は近衛師団であるが、それはどうするつもりな

のだ？」

杉山の懸念は、留守近衛師団である。外地に動員し、蘭印に展開する近衛師団とは、訳が違う。

「あくまで近衛は、宮城守護の任から外すべきではない、と東条閣下は申されております。万が一と言う事もございますので、陛下の御身の安全は、絶対に確保しておかねばなりません」

昭和天皇に対して忠誠心の篤い東条は、木村が首相官舎を出る前にそのように言い含めていた。近衛の役目は、文字通り天皇の側近にあって、それを守護するために存在している。

木村としては、真つ先に動員したい戦力ではあったが、やはり自らの庇護者、東条の言葉は無視する事などできない。

「それも問題はありません。目的はあくまで海軍中枢の制圧であり、これだけの部隊が集結すれば、難無く達成する事が可能です。海軍内地航空部隊は少数か、ほとんど訓練中の弱小部隊。

海軍主力艦隊は、帰還するまでに数日は掛かります。陸戦隊は物の数ではございませんし、横須賀にいるのはボロボロの第二艦隊、恐れるものではありません」

どこまでも木村は強気である。

山本五十六が、海軍部隊の大半を投入してハワイに向かった事が、もろに反映されてしまっていた。

そんな強気の木村に、冷やかな視線を杉山は送りつつ、海軍が何故このように行動したのか、思考の闇に陥っていた。

東京府内渋谷区神南

「本当にこれでよかったのでしょうか？」

夕闇に沈もうとしている薄暗い、会社役員といった重役達が使うような、一般人には重たい感じのする応接間。そこで二人の人物が、会談を行っていた。

「フツ、こうでもしなければ、海軍は宮様のご機嫌伺いばかりの、玩具に成り下がってしまう。陸軍もしかし。東条の如き憲兵上がりとその取り巻きが、中枢に居座るなど、陸軍の程度が下がると言うものだ」

やたら物騒な事を口にして、鼻で笑う初老の男をみながら、ヒトラー風のチョビ髭を生やした長身の男が、汗を拭きながら聞いていた。

ここは日本放送協会、総裁室。国内、いや東亜最大の報道機関、後のNHKの本拠地である。

「貴方の言われる通り、海軍中枢の人事情報を大々的に発表しましたが、もし陸軍の矛先が海軍に向いた場合、貴方の部下である加藤大將が犠牲になる可能性も……」

「あれはそうに鈍い男ではない」

長身の男が不安げに意見を述べたが、相対する男は簡単にそれを否定した。

「少し落ち着かれよ。陸軍も、そして海軍も一つではない。動くのは一部でしかないのだ。」

これが済めば、足を引っ張り合う無能共は姿を消し、大きい一步を踏み出す。近衛公、その時の貴方の役目は重要なものとなります

ぞ」

初老の男が話し掛けたのは、前内閣総理大臣、近衛文麿公爵。

日米交渉を投げ出した愚物と評されたりするが、未だに政界に対しての影響力を保持しており、総理経験者として重臣の一翼を担う立場にある。

「それは理解しておりますが、軍事機密を漏洩すると言うのは、いくら末次さんと言えども危険過ぎるのでは……？」

「そのような事は、今までだって踏み越えて来ている。それに、漏洩の追求が始まる頃には、全て闇に葬り去るだけの権限を、我々は掌握しておりますよ。」

私の行く道を、ことごとく邪魔してくれた宮様と、重臣のお歴々には、少し痛い目に遭って頂かれなければ、収まりがつきませんでな」

このように言っているのは、第一次近衛内閣内務大臣、予備役海軍大將末次信正である。統帥権干犯問題を提起し、一部では東条に代わる首相最有力候補として推されていた。

「まさか、貴方を首相に推薦せよと!？」

その言葉に、近衛は驚きの声を上げる。

ちなみに重臣は、重臣会議において次期首相を推薦する役目があり、近衛内閣倒壊した後、東条を推薦したのは、

最高齢九十二歳になる清浦奎吾（二三代首相）

若槻禮次郎（二五、二八代）

岡田啓介（三一代）

廣田弘毅（三二代）

林銑十郎（三三代）

阿部信行（三六代）

米内光政（三七代）

となっている。

この中で唯一人として末次を推挙した人物はおらず、末次にとっては忌ま忌ましい存在であり、とくに米内との関係は凍り付く程冷めきっていた。

「さすがの私でも、そこまで厚顔無恥ではありませんぞ？近衛公」
そう言つて高笑いを上げる末次を、近衛は冷や汗をかきながら見つめる。

「貴方には別の人物を推挙していただきたい。宮様も私が裏で動いているのは承知していて、邪魔をしてくるのは目に見えている。権勢欲の強いあの方は、人に利用される事を極端に嫌う故、逆に利用しやすい……」

恐ろしい事を平気で話す末次に、恐怖を感じる近衛であつたが、末次の構想がまた魅力的なものであつたため、末次に協力しているのである。

「その人物とは一体……？」

てつきり、末次自らが首相の座に就くものと思つていた近衛は、その言葉に驚きを隠せなかった。

「それは………」

「しかし、そのような事は……」

「負け犬根性とでも言うのかな？」

所替わって海軍省会議室。日はすっかり沈み、外は暗闇に覆われていたが、会議室内は全ての電球が点され、煌々とした明かりの中にあつた。

最初に声を出したのは、軍令部次長伊藤整一海軍中将。それに返したのは、軍令部総長加藤である。

「そうは申しておりません。米艦隊の戦力が払底している今こそ、全面的攻勢に出る好機ではないのでしょうか？」

至極真つ当な意見を冷静に口にした伊藤を、加藤は同じく冷ややかな目で見ると、それに答えずに周囲を見渡し、

「伊藤の意見に皆賛同であるのか？」
と問い掛けた。

現在話し合われているのは、次期作戦目標の選定、であつた。

「伊藤の意見に賛成であります」

しばしの沈黙の後、呉鎮長官古賀峯一海軍大將が、助け舟を出すが如く意見を述べた。

「やはり優位な戦力を活かし、先制攻撃による敵戦力の各個撃破が、理想的であろうと考察致します。

私としては、前線であるマーシャルの防衛強化と、連合国軍の最前線拠点ラバウルの攻略が、最優先であると思考します」

合理的で知られる古賀も、そのような意見であり、他の面々もそのような態度を示している中、軍務局長岡敬純海軍少将のみが、態

度不明確で佇んでいた。

「残念だが、そのような意見は却下せざるをえない」

加藤の放ったこの言葉に、一同は驚愕せざるをえなかった。

「何故、などと愚かな質問は受け付けない。そのような愚問を發した者は、即刻この場より出ていってもらう」

あまりに傲慢に聞こえる物言いだったが、反論したところで一刀両断にされてしまう事が目に見えていたので、声を發する者はいなかった。

明確な理由無くば、海軍軍人のトップに立つエリート達に、このような言い方ができようはずがない。

「日米開戦より、連合艦隊と英米艦隊との間に、数度の大規模艦隊戦が生起している。マレー沖、マリアナ、ジャワ海、インド洋、そして今回のハワイ、米西海岸奇襲……」

これら全てにおいて勝利を収め、我が帝國海軍は一つの転換点へと到達した。非常に根本的な問題でもある故に、しっかりと現実を見据えてほしい」

そのように前置きして、加藤は話し始める。

「伊藤、古賀両名の発言は間違っている訳ではない……が、その選択が事実上破綻しているのが、今回の作戦において証明されてしまっている。

国内の燃料は既に枯渇し、警戒活動すらままならぬ状況に置かれてしまっている。山本は、これまでの漸減邀撃作戦に不満を持って、こちらからの積極的攻勢を仕掛け、米艦隊を順次撃破していく方策を採ったようだが、その行き着く先は、延々と拡大された戦線に補給が追い付かず、その先端部分で足の動かぬ部隊が、連合軍の餌食となるのが目に見えている」

加藤の冷静な分析によるものである。実際、南方資源帯の占領は成功したものの、輸送能力が低い事により、日本、とくに海軍であるが、需要量に対して供給量が追いつかず、常に燃料は欠乏していたのである。

連合艦隊が全く作戦活動をしなくても、月に約四万トンの燃料が消費されていく。空母四隻を含む機動艦隊が作戦行動で使用する燃料は、距離にもよるが約二十万トン。燃料消費量の多い、戦艦戦隊の消費量は、倍以上に膨らみ五十万トンに達する…。

開戦時、国内の燃料備蓄量は、航空機潤滑油を含め、五八七万八千トン。

内、艦艇用燃料の重油は約三八万トンであり、日米開戦に向け世論が沸騰する中、時の首相近衛文麿が、連合艦隊司令長官山本五十六に対して、「海軍は戦えるのか？」と問うた時、「半年や一年の間ならば存分に暴れて見せます」と答える理由となっている。

そして、その言葉通り、半年の締め括りとして発動した「陽炎」及び「天一号」作戦において、その備蓄されていた燃料の全てを吐き出したのである。

「言わば我が海軍は半身不随の状態。動きたくとも、満足に動く事すら困難な状況である」

加藤の有無を言わせぬ、冷徹な現実主義者の面を見せる。

「そもそも艦隊整備の根幹は、我が制空制海権下での艦隊決戦である。それ以上でも、それ以下でもありえない」

日露戦争での実戦経験、欧州に置ける航空機に着目する先見性、艦隊及び航空戦隊に関する指揮能力、軍令の中枢を司る卓越した戦術戦略理論、そして、その幅広い人脈……

リベラル派切っての理論家、井上成美をも場合によっては凌ぐ程の理論派である。

そのような人物を相手にして、まともに張り合おうとする人間がいる訳がない。ましてや、海軍最高位である軍令部総長に刃向かうなど、自殺行為に等しい。

「マーシャルを放棄する」

加藤が先程述べた意見である。最初は、さすがに難色を示す意見が続出した。

伊藤と古賀は、当然とりえるべき方策の意見を述べたに過ぎず、状況からして最前線マーシャルを、ただで米軍にくれてやるが如き決定を、そのまますんなり認めるような事はできなかった。

実際問題、この決定を行うには世論が許さないであろうと言う、潜在的な恐怖があった。

現在においても韓国との領土問題に揺れる竹島があるが、日本政府が領有権を主張しないものと同意義であり、そうなった場合、一部の人間が過激な行動に出るであろう事は、想像に難くない。先人達が勝ち取った領土を有利な内に棄てるなど、誰が認めようものか

……

「無論公表はできない。ウェーク、ミッドウェーとともに、マーシャルより可及的速やかに撤収させねばならん。米艦隊には未だ戦艦三隻は活動可能との報告もある。

陸上部隊は戦闘もままならぬまま、壊滅させられるのは必定。とにかく急がねばならん」

加藤は軍事参議官と言う、名誉職とは名ばかりの暇な立場を利用し、情報収集に余念がなかった。

そして、一つの結論に到達する。

「我が連合艦隊は、長距離渡洋作戦が行えるようには整備されていない。そして、漸減邀撃も米艦隊の行動を分析する限り、成功しないと判断できる。」

奴らも我々と同じ、有利か或いは同規模にならない限り、無理をして進攻する理由は存在しない。

漸減すれば即座に後退するし、漸減する戦力を狙い撃ちにされ、近海に米艦隊が到達する頃には前線拠点は全て壊滅し、制空制海権が確保された優位な状況とはならないだろう」

ここで一旦、話を区切る。

「もし、私の予測が正しければ、米国がより早急に勝利を収めようとするならば、超大型重爆を用いた、本土への大規模無差別爆撃によるものであると仮定する」

加藤は正確にその事を予測していた。かつて接した「制空」をそのまま流用したものであるが、史実ではその結果が如実に示していた。

「それが実施可能な拠点は……」

加藤は立ち上がり、会議室の壁面に掲げられている巨大な地図を見上げると、唯一点を見つめる。

「マリアナ以外に存在しない。ここを米艦隊の墓場とする」

東京府内麹町区

海軍内、いや東京全体が不穏な気配に包まれている中であつて、この住宅に住む住人は事態を把握しようと、東奔西走していた。

「夜間防空演習に外出禁止令？ 間違いないのだな？」

電話口で、事態が確実に進行しつつある状況に、嫌な汗がとめどなく吹き出しながら話している老人。

「参謀本部に勤務する私が言っているのです。確実な情報です」
電話口の向こうから、中年とおもしき男の声が響く。

「分かった。貴重な情報をありがとう。また何かあつたら伝えてくれ」

老人はそうに言つと、受話器をそつと置いた。

「一体どうなつておるのだ…、事態が釈然とせん」

この一日の異常な状況に困惑の声を漏らすのは、第三一代内閣総理大臣、元海軍大臣、岡田啓介退役海軍大将である。

重臣の一人であり、かつてロンドン軍縮条約締結に際して、不満を持ちながらも、条約批准に向けて動いた財部海相に批判の声が殺到し、加藤（寛治）海軍軍令部長が批准に抗議するため辞職した。（所謂、統帥権干犯問題）

この時、「財部も責任をとつて即座に辞めるべし」と財部辞任を求めたのは、海軍艦隊派の最高実力者東郷元帥だった。岡田は軍事参議官として、この問題の調整を行ったが、東郷に比して若輩ではあつたが、条約批准まで東郷元帥に抗つて、財部海相を続けさせたのは、岡田の功績と言える。

この時の岡田の活躍を伝え聞いた、「最後の元老」西園寺公望が推薦して、岡田に大命が降下する。

しかし、その在任中に悲劇は訪れる。雪の降りしきる、二月二六日の早朝の出来事であった。

その時、岡田の身代わりとなつて凶弾に倒れた人物がいた。彼の義弟、松尾伝蔵である。

先程、陸軍の情報を岡田に伝えていたのは、松尾の娘婿、瀬島龍三陸軍少佐であり、参謀本部作戦班に所属する彼は、陸軍の内部情報のおとんどを知る事が可能な立場にあつたのである。

瀬島は陸士陸大卒、恩賜の軍刀組であり、初期の大勝利に繋がる南方作戦の多くの作戦立案に関与しており、田中新一作戦部長の覚えもある、岡田にとっては非常に重要な存在であつた。

だが、今回に関しては、あまりにも情報が少な過ぎる。何かしらの兆候があつてしかるべきはずであるのに、そのような動きは見られなかった。

岡田は手にしていた、号外の紙面を改めて見直した。

（日米交渉決裂に対して海軍が抗議、もし、それが本当であるなら、私の下にも何か伝えられるはずだが……）

この時、世論の後押しに乗つた強硬案に、反対の意見を言わなかつた事を岡田は後悔した。いや、この時に限らず、明確に反対の意見を出してさえいれば、このような事になりはしなかつたであろう。

しかし、キジも鳴かずば撃たれまい、目立つような事をすればこの時代は弾が飛んで来る。九死に一生を得た岡田にとっては、そう簡単に言える訳がなかつた。

（事情を知るには、当の本人達、永野、嶋田、山本を問い質すの

が、一番手っ取り早いだろうが、話してはくれないだろうな。もしくは…、宮様か？)

岡田はそもも考えたが、当人達が無理であるのに更に奥に控える人物に疑いを掛けるなど、これまた恐ろしくてできたものではない。

「海軍内で、上部組織に影響を与えられるのは、総長が加藤（隆義）であるならば艦隊派の誰かと言う事になるが、加藤（寛治）、末次、中村らは、宮様の信任を失って失脚している。実力者は宮様お一人で、影響力は既に皆無。だとすると…、条約派の誰かなのか？」

思い当たる人物が出てこない、非常に違和感のある人事が、岡田に疑心暗鬼を生じさせる。

岡田は再び受話器を取ると、別の場所に電話をかける。

「ああ、米内君か？ 岡田だが、今夜か明日の早朝陸軍が動く。あるつてからの情報だが、外出禁止令が間もなく発令される」

相手は同じ海軍出の重臣の一人、米内光政予備役海軍大将であった。

この男には伝えておかねばならないと、岡田は率直に思った。普段は自ら厄介事には首を突っ込まないが、いざと言う時は頼りになる存在だったからであるのは、言うまでもない。

もう、現役を退いて久しい自分達に、何かできるような時間の余裕はない。

岡田と米内……

ともに終戦への道を切り開こうと奮闘した、海軍の指導者である。事態を止められないならば、収集に全力を挙げる以外にない。

だが、彼らの動きもまた、事態を引き起こした人物の予測の範疇である事を、まだ知るよしもなかった。

東京府内麹町区丸ノ内

ここにも、未来の鍵を握る一人の人物が訪れていた。

「夜間外出禁止とは、とんだ迷惑な話ですな。このような大事な時に……」

第一銀行の頭取室に、不満げな声が響く。

「そうは言っても、六月には霞ヶ関が爆撃されましたし、戦争が終わらぬ内は用心に越した事はないでしょう」

落ち着いた様子で話すのは、日産コンツェルン総帥、鮎川義介。

相対しているのは第一銀行頭取、明石照男。

第一銀行は日本史上初の株式会社であり、日本銀行設立まで紙幣を発行していた国立銀行だった。現在、都市銀行第一位である、三井銀行（資本二十億余）との合併話が持ち上がっていた。

日産コンツェルンは、現在において自動車であまりにも有名な日産自動車、久原鉱山を前身とする日立鉱山、現在の総合家電メーカー日立に発展する、日立製作所を傘下に収める、三井、三菱、住友には及ばないまでも、十五大財閥の一角である旧久原財閥を再生、発展させた新進気鋭の一大企業群を形成していた。

久原財閥は、第一次大戦の戦時特需において、大きく躍進したが、その後の金融恐慌の波を受けて、破産寸前まで追い込まれた。第一次大戦の好景気で伸長していた多くの企業、財閥が同時期に倒産し

ていく中、久原財閥の当主、久原房之介はこの状況にさじを投げ、義兄の鮎川に経営を託して政界入りする事となる。

そして、鮎川は一度固辞したのだが、時の首相田中義一陸軍大将の奨めで、やむなく久原財閥の立て直しを始め、見事に復活を果たすのである。

そんな鮎川の下に、同郷のいわくつきの男が尋ねて来たのは、わずか一週間前の出来事であり、最初は「何故、自分の所に？」と言わずにはいられない、妖しい人物に写った。

だが、鮎川に話す内容が単なる与太話などではなく、実現可能な色を帯び始める。

「私は木戸（孝允）、伊藤（博文）、山縣（有朋）ら、維新の元勳達と列ぶ。いや、越えて見せる。対米英戦に勝利してな……」

鮎川はこの言葉を聞いた時は、我が耳を疑った。

明治維新三傑の一人、木戸孝允。

初代内閣総理大臣、伊藤博文。

そして、元帥、総理と、位人臣を究めた山縣有朋。

何れもが、旧き時代を破り、新たな時代を築き上げた偉大なる人物達である。確かにこの男にも、時の政府を動かした実績と実力は持っている。全てが良い意味である訳ではないが、状況いかによっては、その話しが、口から出た嘘八百ではないことが、証明されつつあることに鮎川は戦慄しながら、首筋に一筋の汗がたうのを感じていた。

「では本当にこのお話、下手をすれば三井との関係が、決定的に悪化する事となりますが、それでもお受けいただけでしょうか？」

日産、日本産業が更なる飛躍を目指すべく、鮎川は布石となる一

手を打ち込む。

金融業界に影響力を持たない日産にとっては、本来であれば茅の外の関係ない話であったが、ここに来て流れが急激に変わり始める。

「本々、この合併話しには行内に批判的な意見が数多くありました。このように拘束されない提携であるならば、我が方は喜んでお受けいたします」

明石にとっては渡りに舟、三井銀行の財力に物を言わせた高圧的合併に、不満を持っていたなかで、鮎川の突然の申し出を好意的にとっていた。対して、鮎川も一つの可能性を信じ、大きな賭けに飛び乗ったのである。

「この国に変化をもたらす為に……」

その男が発した言葉の真意を、鮎川は汲み取ったのである。

この秘密協定により、旧渋沢、旧久原、二つの財閥が手を結ぶ事となるが、これはほんの始まりに過ぎない。

巨大なる経済界をも巻き込む、壮大なる意志が静かに胎動を始める。

残暑厳しい夜が過ぎゆく中、闇に響くは数多の軍靴の音。

時刻二三

東部軍戒厳司令部より、戒厳布告。

怒涛の一日の幕が上がる。

九・一一事件（後編）

一九四二年九月一日

時計の針が真上を指し、日付けが変わったことを示す重い音が響き渡る。あまりに重苦しい時間の流れの中にある首相官舎の執務室で、東条は重圧に耐えていた。

ふうつと人気のない部屋に溜息だけが木魂する。二時間前、頼みとしていた佐藤からの報告は、期待からは大きく離れているものだった。東条はできれば平穩無事に事を収め、改めて海軍との協調を図りたいと考えてはいた。

しかし、佐藤からもたらされたのは、海軍内では中枢部内においてすら、事情が全く把握されていない異常な状態であり、その状況下において、海軍政策が決定される海軍将官会議が極秘に開かれているなどというのは、部外者である佐藤にとっても、兵備局長である保科としても理解に苦しむ事である。

「海軍が陸軍に内密で行動しているのは事実であり、叛意の疑いは濃厚」

それが佐藤の出した答えであり、首相官舎に戻った佐藤からこの答えを聞いた東条は、やむなく参謀総長杉山に依頼し、上野に集結中の陸軍二個連隊、約五千名に東京府内、主要部を抑えるよう東部軍司令官中村孝太郎陸軍大将に命じたのである。

中村は半信半疑でありながらも、既に部隊の方が先に動き出した事実から、仕方なく戒厳布告に同意したのだった。

東部軍より戒厳が布告された事は、また多くの人間を突き動かしていく。

市ヶ谷台の参謀本部に程近い、本土防衛軍を総括とする防衛総司令部にも、その情報は伝えられた。

「一体何をしておるのか？ わしに一言の相談もなく……」

いきなりの防空演習、夜間外出禁止に続いて戒厳下に置かれた状況で、つまはじきにされたかのように、存在感がなくなっていた本土及び朝鮮、台湾の防空を司る防衛軍総司令官、東久邇宮稔彦王陸軍大將は、さすがにご機嫌ななめと言ったように、報告に訪れていた中村の言葉を聞いていた。

「申し訳もございません。防総より指令がでたのでは内地全土が対象となり、事態がさらに拡大される事となりますので、殿下のご迷惑にならないように、こういたしました次第です」

中村は、かしこまった様子で東久邇宮に答えていた。実際、皇族である彼から命令が下るのは非常に面倒な事であったのである。

「お前は今回の事を知っていたのか？」

この問いかけに、中村は「直前まで存知あげませんでした」とだけ短くこたえる。

「まったく最近の若いもんは、血気に早って勝手な事ばかりしおってからに」

再び悪態をつく事しかできなかった。皇族が表立って行動する事がどれだけ影響をおよぼす事となるかを理解していた。

ちなみに、防衛軍は天皇に直隸しており、名目上は支那派遣軍、関東軍、南方軍と並ぶ総軍の格付けであったのだが、隷下の部隊を直接動かす事はできない。そのあたりは東条の配慮があったのである。

「こうなってしまうては様子を見るより仕方あるまい。中村よ、

暴走せんように手綱だけはしっかり握って離すんじゃないぞ」

釘だけはしっかり刺しておく。いきなり銃撃戦が始まりでもしたら、目も当てられない。

「さすがにそこまではいたしませんでしょう」

中村もそんな事になるなどとは思ってもせず、簡単にそれに応える。富永や木村の意見を信じるならば、まずは交渉から始まるであろう。我々としても、海軍側としても、交戦は望むべくもない。

「ならばよいが、何が起こるかわからん。変化があればただちに報告せよ」

中村は「承知いたしました」と応える。

「そういえば、近衛の指揮官はついこの間代わったばかりであったな？」

唐突に東久邇宮は話を変えた。

「は、たしか香港攻略戦での功績により、第二三軍参謀長より異動となったはずですが、よりもよって初任務になりかねないのがこのような事態とは、まったくもって不運な事です」

中村は憐れむような口調でそう話した。

「その男にしてみれば難儀な事だ。無論我々にとってもな」

東京府内上野

第四五師団司令部

緊急招集でかき集められた、宇都宮師管区二個連隊と水戸師管区一個連隊を基幹とする臨時師団。史実においては欠番の師団でもあるが、次官兼任で師団長並扱いで指揮を執る事となった木村は、綺麗事を並べたてて今回の事件の原因をつくった、海軍の化けの皮を

剥がしてやるのだと、鼻息を荒くしていた。

この件を利用すれば、海軍の発言権を奪い、予算獲得はもとよりその指揮権をも陸軍の統率下に置く事すら可能となる。今まで統帥二元の下で、様々な衝突をくりかえしてきた陸海の反目を、木村は木村なりに取り除こうと考えていたのであるが、それはあくまで陸軍主導の形でなければならなかった。

「一気に王手といこうか。幸いにして、丸裸の海軍中枢を抑えるなど、これだけの兵力であればなんら問題ではない」

木村は強気であった。彼には師団長も経験済みであり（第三二師団）、急遽の編成であっても連隊規模の指揮であればどうにでもなると、本人はたかをくくっていた。

今は夜間、館山、横須賀の航空隊も動く心配はないし、横須賀鎮守府の陸戦隊も大隊規模に過ぎず、本格的な陸軍部隊とははなから勝負になるはずがない。おまけに、留守第五二師団も明日の午前中には横須賀を封鎖する手筈となっている。

「では、当初の予定通り、二個大隊で海軍省を包囲する。他は麹町区を中心に警戒態勢を敷いて、何人の通行も許すな。外出禁止令下であるなか、出歩いている奴がいるとは思えんが、いたら問答無用で拘束せよ」

木村は、二人の連隊長に命令し、二人は敬礼してから駆け足で架設の司令部から出て行く。臨時師団司令部は、上野恩賜公園内にある、東京国立博物館本館の一部を間借りして設置されている。

上野が司令部として選ばれたのも、上野駅が宇都宮線、常磐線の交わる利便性の高い場所であったからである。

遅れている水戸からの増援一個連隊も、しばらくすれば到着するはず。重火器、野砲装備部隊の到着は遅れているが、そこまでは必要あるまい。

「交戦が目的ではないのだからな」

木村の独り言が幕舎の中に響いた……

「陸軍が戒厳を敷いたか。ここまでは総て予定通り……」

東京府内芝区芝浦に位置する、元内務大臣邸。陸軍、詳しくは一部の部隊を意図的に動かす事に成功させた、この事件を仕組んだ張本人は闇の中で一人呟く。

今回の件で海軍中枢から遠く離れており、自らにその手が及ばない事を確信しているため、緊迫した周囲の状況からは考えられない程の余裕が漂っている。

「罠に掛かった獲物はでかいが、料理をして喰うまでは、糧とせねば意味がない」

暗幕で覆われた一室の、電灯の淡い明かりに照らし出されながら、もう一人の男に末次は話します。

「次は息の根を止めるおつもりか？ あれはあれで良い面もある。まあ、強権的に自らの腹心を中枢に配置し続ける点は、些かに評価しがたいところではありますが……。とか言いながら、私自身もその片棒を担いでいるようなものですがね」

現職の東条内閣の閣僚の一角が、この事件に関与していた事は、秘中の秘であり、本人が亡くなる直前の回顧録において明かされるのは、遙かに先の事である。

後に首相を務める事となるこの男の抱き込みにも、末次が動いていた。

ここ数日の末次の足取りは、まさに妖術を使っているのではある

まいか？と感じさせる程の神出鬼没ぶりであり、これまでに見られないほど精力的に動き回っていた。

かつて、海軍内では鬼とあだ名される程の猛訓練を実施して、部下からも恐れられたが自らも先頭に立って指揮を執るその姿勢は、極めて高く評価されており、未だ海軍内の信奉者の数は極めて多い。

そして、政界が戦時総動員体制に移行するにあたって、大政翼賛会の結成に至る状況下にあつて、かつての立憲政友会との深い関係と、近衛内閣の内務大臣を務めた実績、その近衛自身が迎合する貴族院内の研究会、と枚挙にきりが無い要素が備わり、その影響力は計り知れないものとなっている。

「しかし、陸軍がこの後どう出るかによつては、舵取を変えねば我が身はやはりかわいいものです。その時は覚悟して頂かなくてはなりませんまい」

閣僚の中でも、民間、経済界に大きな影響を及ぼす、商工省を押さえておく事は非常に重要であつた。

しかし、もし末次の目論みが外れた場合、容赦なく告発すると彼は脅したのである。

「それで構わぬ。その方が信用するに値する。それに、この国の権力は軍のみが持つ物ではない」

脅しはこの男に対しての有効な手段とはならず、自身に対して明確な意思表示される方がありがたいものであつた。詭弁をろうする人物より遙かにマシであると……

そして、海軍軍人の枠組みの外に出た事により、政戦両略の一致を成し得る道を模索し、その機会を伺っていたのである。

「陸軍にもすでに手を打つてある。確かに内地は東条の影響下にあるが、もう奴は詰んでいる。」

後は切り札を切つて、奴の首を撥ねれば全ての決着がつく。我々は座して待つのみだ……」

末次は自らの影を表に晒す事なく、事態が一人歩きしていくように仕向けていた。

この事を知るのは、末次に迎合した石川信吾海軍大佐、近衛文麿元首相らのみであり、他に末次の関与を外部で知るのは、海軍元帥伏見宮唯一人であり、他にも陸軍の大物が絡んでいたのである。

現地時間〇一〇〇

昭南市

内地での騒乱が始まろうとしている中、遠く離れたこの地でも策謀は張り巡らされていた。

「そろそろ、か……」

セレター軍港の埠頭の先に立ち、内地のある北東方向を向いて海軍二種軍装を纏い、参謀飾諸を付けた男が呟いた。

南方艦隊参謀副長の石川である。その役職に元が付いたのはつい昨日の事である。

「こんな夜更けにわざわざ行かずともよかったのではないのか？

夜間飛行は危険も多い」

そう言つて歩み寄つて来たのは陸軍服を来た人物であり、肩章は少将である事を示している。

「いいえ、人知れずの門出こそ今の自分には相応しいと思います。このような時間に、青木閣下にわざわざお付き合い頂くなど、恐懼にたえません」

そう言つて石川は、青木と呼んだ陸軍将官に対して、深々と一礼した。彼も陸軍と言う所属ではあったが、同じ南方軍総参謀副長と言う役職を拝命している言わば似た者同士の感があつた。名前は青木重誠。海軍内で陸軍に理解ある石川と交友関係を築く、後の陸軍三長官の一角に就任する人物である。

「いや、構わんさ。賓客を丁重にお送りするように、との司令直々のお達しでもあるわけでもあるし、ようやくこちらも落ち着いてきたところだ。まあ、この時間なら、酒と女が欲しいところではあるがな」

そう言つて笑う青木に、石川は「むさい男のお相手は嫌でございましょうか？」と返し、その後一言二言交わし、二人と陸軍の警護の兵士二人とともに、セレーター軍港の側にあるカラン空港（現シンガポール、チャンギ国際空港）へと移動したのである。

「これは百式司偵…、ですな。わざわざ私のために……」

「早く戻りたいのだろう。陸軍、いや日本最速の機体の速度を体験するのも一興だろう。日本本土までは流石に届かんが、台湾までなら一っ飛びだ」

滑走路に待機している機体をさすりながら、青木はそう言った。航空機に疎い大艦巨砲主義者の石川からしても、その機体が流麗でいかにも高速を発揮しそうな機体に目を細める。闇夜に照明で照らし出された姿は、やや神秘的にも見えた。

百式司偵はこの時点で時速600kmを突破する驚異的な性能を

誇り、その速度は戦闘機の追跡をも容易に振り切る事が可能。連合国軍からは百式司偵があらわれると、日本軍が攻めて来るとの噂から、その速度への畏敬と恐怖から（地獄の天使）との名で呼ばれる機体である。

「では貴君の武運を祈る。我々は我々の役目を果たす」

「は、青木閣下も……」

お互いに敬礼を交わすと、石川は司偵の後部座席に乗り込む。

「海軍の参謀の方をこんな夜中に乗せるなんて、前代未聞ですぞ大佐殿」

操縦士が座席についた石川に話しかける。

「そうか、初めてか！ 夜中に済まん。内地までのエスコートを頼む！」

「了解です。早くきっちり丁寧に送り届けさせていただきます！」
そんなやり取りをしながら、百式司偵は二基の発動機から爆音を轟かせ、闇夜に羽ばたいた。

「まさか、沢本までが一枚噛んでいたとは……。まったく、どこまで立ち回れば気が済むのだ？」

南方艦隊司令部、長官室には明かりが灯っていた。この時間に本来人はいないはずののだが、一連の内地の異様な状況下に加え、石川の異動の辞令が異常な程早い事に、海軍の南方の一切を統括する南雲は、海兵同期にして次官を務める沢本の名を口にして、盛大なため息を吐き出した。

戦場では鬼神のごとき活躍を見せた南雲であつたが、航空機以上に関わりのない政治の門外漢の彼にとって、どうしようもない事態

に陥っていたのである。

霞ヶ関海軍省

会議室では、深夜にも関わらず激論が交わされていた。現在、大まかに話しが纏まっているのは、新たな艦艇建造計画に関する部分であり、米国統合艦隊に対抗可能な艦隊戦力の整備に向けてであり、○四計画に関しては一部を改訂し、建造を続行する事が取り決められた。

一部と言うのは、乙巡（偵察巡洋艦）大淀型二番艦仁淀が、その用途を見出だす事が出来ず、大淀一艦で必要量は十分に足りるとの事により、建造中止が決定される。

もう一つの変更点は、第111号艦、大和型四番艦通称「紀伊」の艦容の変更であり、ハワイ沖で前衛第二艦隊の被害担当艦となつて轟沈した、金剛型高速戦艦、比叡及び霧島の代艦が、可能な限り早く必要であるとの事情により、すでに呉海軍工廠において起工し、ドックを占有していた紀伊が、その代艦候補第一号に選定される事となる。

金剛型代艦として、○五計画において計画は上がっていた超甲巡（甲型は一万t級二〇cm砲搭載の巡洋艦を総称、いわゆる重巡である）B65型を推す声があつたのだが、船体、砲、機関等、完全な新規設計となる事から、早期に建造が不可能であるとの見込みにより、超甲巡の建造は一応の保留とされる事となる。

そして、横須賀海軍工廠で建造が進んでいる第110号艦信濃は、大幅な変更は加えられないまま、電探、通信設備を強化した大和型として建造が続行される。

111号艦も大和型として完成させるべきとの声もあったが、大和型一艦で16in搭載米新型戦艦三隻の相手も可能（パナマックス及び、ノースカロライナ級を基準に策定）として、大和、武蔵、信濃でも必要にして十分であり、状況において立ち回る事が可能な高速戦艦案も魅力のある提案であり、意見が真つ二つに割れたが、結局その多用途性から大和型の攻撃力と防御力を犠牲として速力を上げる改装がおこなわれる事が決定。

主な変更点は、大和型最大の特徴、現時点で世界最強を誇る四六cm砲を長門型と同じ四一cm砲に変更し、同じ三連装砲三基に納め同位置に配置。これには、重量軽減と共に期間短縮、経費削減の目的があった。

大和型に装備されている四六cm砲の砲身は、一本製造するのに約半年の期間を必要とする至極面倒な代物であり、しかも製造可能な工作機は呉にしかいないため、それを信濃に集中させ、すでに製造のノウハウを持つ長門型主砲を使用することにより、両艦の建造に支障が発生しないように留意した（事故等による遅れも考慮にいれる）。重量は大和型の三基九六〇〇tから、三分の二である六五〇〇tを目標とした。

また、必要以上に重防御であるとの指摘が存在していた大和型の装甲も、重量軽減を目的にして四一〇mmの舷側装甲を三九〇mmに抑えられる。元々対四六cm砲防御であるため、金剛型代艦として運用するのであれば十分、主力である戦艦戦隊に加わっても、長門型を上回る能力を保持しているため問題はないものとされる。

そして、主砲と並ぶ改装点として、大和型から全面的変更となるのは機関である。大和型は機関の長期運用上の信頼性向上を目的に低温低圧式ボイラーと、初春型蒸気タービンの出力を抑えたものが搭載されており（九割）、確かに信頼性は向上したが、速力は二七ktという極々平凡な中速戦艦として完成。

高速空母機動部隊に随伴不可能な無用の長物と、史実では評価されたが、負荷をかければ二九ktの発揮は可能であり、改装空母と

の行動は十分可能であつた。事実、戦艦主力の第一艦隊には、本来であれば改装空母主体の第三航空戦隊が組み込まれており、決して運用において支障があつたわけではない。

しかし、機関の換装により大幅な速力の向上は十分に可能として、駆逐艦天津風で試験運用中の新型タービン、後に島風型に搭載されるものと同じ形式のものが採用されるに至る。

アメリカが建造することを既に発表している高速戦艦アイオワ級を強く意識したものであるとともに、攻撃力、防御力、速力で同等である事、が要求項目には入れられていた。不必要に強力な対四六c m防御を削つても対応は可能。長門型の三年式四一c m砲も未だに優秀な打撃力足りえるものとして、大幅な改設計を盛り込んで11号艦は全く別な艦容として完成することとなる……

「では、米国会衆国艦隊には現時点の保有艦艇と〇四計画艦のみで対応、統合艦隊に対しては新規計画をもつて對抗すると言う事でよろしいのでしょうか？」

そう発言したのは艦政本部長岩村清一海軍中将であり、建艦計画の責任者である。かつては海大主席で卒業し、ロンドン海軍軍縮条約随員を務め、その両国の実情を知る対英米非戦派ではあつたが、軍縮条約破棄後は艦隊整備を推進するという複雑な事情があつた。そして今も非常に難しい状況に置かれている。

アメリカの統合艦隊計画は、海軍関係者にとっては雷で身を打たれる程の衝撃であり、両洋艦隊の一翼を打ち破つて、艦隊戦力比を日本優位に持ち込んだとはいえ、未だ計画上対米七割を達成できなかったに過ぎない。本来であればこらへんで手打ちにするべきところであつたのだが、その機会は失われ、残されたのは、倍以上の大艦隊が押し寄せてくる光景が浮かぶ悪夢であつた。

「しかし、戦艦は言つに及ばず、空母、巡洋艦、駆逐艦にいたるまで、米国は新鋭で固められる以上、確かに数量的には七割の達成

が果たされているように見えますが、大半は艦齢十数年になる老朽艦では、質の面での圧倒的劣勢の感否めません」

続けて発言したのは、横鎮長官古賀峯一海軍大将である。彼の言う通り、金剛などは既に艦齢二十八年に達しており、カタログスベックを発揮することは困難を極める状態となっているのである。

駆逐艦に至っても、峯風型などは艦齢二十年を超過しており、金剛のような大型艦とは違い、遠洋渡航に耐えられるものではなく、今ハワイ作戦にも無理に無理を強いての運用であり、性能的な限界を迎えようとしていた。

峯風型、それに続く神風型も更新の必要性が多分にあったのだが、結局、〇四計画において建造が続けられている、陽炎型、夕雲型と共に、第一線で擦り切れるまで運用される事となるのは、幸か不幸か……

〇四計画概要

戦艦二隻 大和型一（信濃）改大和型一（尾張） 当初大和型二隻

航空母艦一隻 大鳳型一（大鳳）

巡洋艦乙四隻 阿賀野型四（阿賀野、能代、矢矧、酒匂）

巡洋艦丙一隻 大淀型一（大淀） 仁淀建造中止

駆逐艦甲一七隻 陽炎型四（嵐、萩風、舞風、秋雲）

夕雲型一二（夕雲、巻雲、風雲、長波、巻波、高波、大波、清波、玉波、涼波、藤波、沖波）

島風型一（島風）

駆逐艦乙六隻 秋月型六（秋月、照月、涼月、初月、新月、若月）

潜水艦甲四隻 伊九型一（伊一一）伊四〇〇型三（伊四〇〇、伊四〇一、伊四〇二） 伊四〇〇型は潜特型と呼ばれるが、ここでは甲型に分類

潜水艦乙一四隻 伊一五型（伊二六、伊二七、伊二八、伊二九、伊三〇、伊三一、伊三二、伊三三、伊三四、伊三五、伊三六、伊三七、伊三八、伊三九）

潜水艦海大一〇隻 伊一七六型（伊一七六、伊一七七、伊一七八、伊一七九、伊一八〇、伊一八一、伊一八二、伊一八三、伊一八四、伊一八五）

練習巡洋艦一隻 香取型一（香椎）

飛行艇母艦一隻 秋津州型一（秋津州）

給油艦一隻 洲埼型一（洲埼）

以下割愛

当初の予定では、伊四〇〇型は含まれていなかったが、一九四二年五月時点で更迭された山本五十六のゴリ押しにより急遽追加されたものであり、どれほどの無茶が押し通っていたのかがうかがわれる。米本土に対しての直接攻撃を目的としており、地球を一周半航行可能な長大な後続距離、水上機の搭載を可能とする性能を有している。主力艦艇群の建造も鋭意続行中である。

「それはやむを得ない。使えるものは、使い倒すしかあるまいよ」
軍令部総長加藤は、古賀の意見に、諦めたような口調で同意した。

「……前線が近いのは、補給と言う面を考えれば良い方に働きそうですね。なにより今回のような無茶をせずに済む。旧式艦まで運用できれば、少なくとも頭数にはなりましょう」

誰に言うともなく発言したのは、存在感が無くなっていた軍務局長岡敬純海軍少将である。軍政、潜水艦畑を歩んで来た岡ではあったが、意外にも冷静な対応を見せる。

大陸事情を背景に圧力を加える陸軍に対抗するべく、親英米派が多い海軍内において、姿勢を明確にするべく軍務局第二課を新設し、多くの反対を押し切って対米強硬派の石川を就任させる。

それ以来、岡、石川が海軍内を主導し、大きな権限を発揮してきたのだが、ここに至って加藤が総長に就任したことによって、自身の立場は微妙なものへと変化する。

（今までのようにはいくまい……）

明確な指導者たりえない、嶋田、永野とは性質が全く異なる上に、手にした権限はあまりにも強大なものであり、下手な行動は自分の首を絞める事になりかねない。

いずれにせよ、海軍艦隊戦力の整備は急務ではあったが、いかな桁外れの生産力を誇るアメリカと言えども、状況から考えれば、潰滅した太平洋艦隊がすぐに動き出す可能性は低い。

どちらかと言えば外よりも内、つまり内部事情が一応の主眼となる。

（今回の一件で親山本派は放逐されるだろう）

そう思いながら、岡は会議に参加しているメンバーの顔を一巡見

回す。

不祥事を起こした山本が更迭され、嶋田と永野はとぼつちりを受けて更迭。この流れを正確に知る自分と、次官沢本は留任は確定であるだろうが、親山本派の次長伊藤と、呉鎮長官古賀は微妙な位置付けとなるだろう。軍令部第一部長の福留（福留繁海軍中将）あたりもその対象に含まれるはず……

「海軍首脳陣の更迭劇は陸軍に飛び火し、一気に炎上する。その時こそが、我々の望みを達成する時」

二週間前、軍令部を訪れていた全ての元凶、石川がその事を漏らした。

（海軍大臣を辞任に追い込み、軍部大臣現役武官制を利用して東条内閣を倒閣させるまでは、貴様の読み通り。見事であると言わざるをえない……。が、一つ忘れているんじゃないのか？ そのような事をすれば、主導権を握っている陸軍統制派が黙っておるまい）
岡は周囲を伺いながら、今海軍が置かれている微妙な立場に、考えを巡らせていた。

そして、その不安は現実のものとなる。

「目標は海軍省だ！ 直ちにこれを封鎖せよ！ 抵抗ある場合は発砲を許可する！」

上野から霞ヶ関へ向けて移動を開始した、第一二四連隊第一大隊を率い、先頭を進む大隊長の宇野少佐が、大声を張り上げながらそのように命じた。

現在、部隊は上野恩賜公園から一路南下、皇居の東側を南へと移動中である。

他に一個大隊がこれに続いており、兵数は千四百名であり、全兵数のおよそ三分の一にあたる。他の部隊は主に皇居近辺警護の名目

で、東側大手町、西側麹町を中心に配備されるために移動中。

命令では、桜田門、半蔵門、大手門、坂下門、和田倉門、馬場先門といった主要門を完全に封鎖し、賊、ここで言えば海軍関係者がそれにあたるが、その侵入を阻止する事となっていた。もつとも、北の丸に駐屯する近衛師団もいる以上、そこまでする必要はないのだが、念には念をいれるという手のこみようである。

すでに先頭をいく、宇野大隊は大手門前、東京駅の真正面を通過、後続部隊は各門封鎖と共に周辺一帯へと散開していった。

「おい、海軍の連中が反乱を企てているって言うのは、本当の事なのか？」

徒歩で進んでいく、第一大隊の若い二等兵が、隣と一緒に歩く別の歩兵に話しかける。

「噂では本当の事らしい。海相を更迭、東条閣下を引きずりおろして、自分達の好き勝手を行うつもりらしい」

「そうになったら、俺達はどうなる？」

それを聞いた兵士は不安そうに聞き返す。

「そうになったら、下手したらおまんまの食い上げになりかねないな。俺ら下っ端はあまり変わらないかもしれないが、上の人らにしてみりゃ死活問題だからな」

したり顔でもうひとりの二等兵が、それに応える。実際彼らは命令に従うしかなく、突然の非常召集により訳も分からず連れて来られた感があつた。

彼らが伝え聞いていたのは、帝都で大規模な防空演習が行われるため、抜き打ちで呼ばれると言う事であつたが（事実、帝都空襲、いわゆるドーリットル奇襲攻撃が六月初旬にあり、既に米空母が存在していないのだが、米国に降伏の意図はないため、と言う尤もらしい理由を付け加えて…である）、移動しているのは歩兵部隊が大

半であり、わずかばかりの軽機関銃装備の分隊が混ざって行軍している。

一連隊に三個は装備されている、砲兵中隊は足がどうしてもおそいため置いてきぼりをくらっているが、威圧行為が目的であるため遙か後方をのろのろと進んでいる。くわえて、二輜しかないが、九五式軽戦車も随伴している。本格的対戦車戦闘などは望むべくもない代物ではあり、短砲身37mm砲搭載、装甲厚はわずか12mmという紙に等しいものであり、純粹に歩兵支援という用途以外の使用に適さないものであるのだが、対人用としての威力は十分である。しかも、相手になる者たちの多くは、武器を携帯していないであろう、軍人と言うよりどちらかといえば官僚に近い存在、もともと全員が軍務を経験しているから、微妙と言えば微妙なものである。障害となるのは警備に当たる憲兵達だろうが、武装などたかがしれている。恐れるほどの事はない。

そうこうしながらも部隊は霞ヶ関へと集結しつつあり、着々と陸軍中枢を支配する東条閥（東条本人は乗り気ではないのだが）の思惑通りに事ははこばれていく。

時刻〇三一五

陸軍臨時第四五師団、第一大隊及び第二大隊は皇居南、内堀に沿って西進、桜田門、警視庁前を通過し左へとその向きを転じる。

警視庁正面玄関に、半分居眠りをしながら歩哨として立っていた警察官は、突然現れた陸軍服を来た一団に一時目を白黒させたが、動揺を隠しつつ通り過ぎる一団を見送る…。つもりであったが、集団の列が途切れないことに驚きを隠せなかった。それもそのはず、二個大隊千四百名が二列になって行軍しているのだから、当然そうなる。もっとも、半数はその一区画前、日比谷公園に沿って拓務省、地方裁判所の前を通過し、海軍省裏手に到達するようになっていく。

しかも、途中から現れたのは戦車、しかも二台もいるのである。防空演習には、明らかに不自然な装備と兵数に、警察官は慌てて中に走り込んだ。

「おかしいぞ連中！ 戦車までいやがる、一体なんだってんだ！」大慌てで声を荒げながら戻ってきた同僚に、当直居残りのもう一人の警察官が、

「陸軍の府内警備の一環だろう、通達も来てたじゃないか。何を慌てとるんだ」

と夕刊を眺めながら応えたが

「あれはそんなんじゃない、警備だけであんなに必要か！？ 五百は軽く超えてる！ とりあえず上に確認を……」

「確認ったって、こんな真夜中に誰がいるって言うんだ！？」

内務省に属する警視庁、府内治安維持も職務であつたが、今回ばかりは事情が異なっていた。

府内を舞台とした騒乱は二二六事件以来、当時は陸軍内に不穏な動きありとして、岡田啓介首相、高橋是清蔵相、渡辺錠太郎教育総監らの邸宅には、憲兵、警察官が警備に当たっており、反乱兵と衝突して銃撃戦が発生したりしている。

また、警視庁は事件の発生直後に反乱兵五百名あまりに襲撃、占拠され、霞ヶ関、永田町、三宅坂一帯は、電光石火瞬く間に制圧されてしまったのである。

だが、今回は二二六事件を遥かに上回る大部隊が、整然と隊列を組んで行動している事実と、真つ先に標的にされるであろう警視庁には目もくれない事から、一部部隊による決起の可能性は薄く、反乱と言つには明らかに雰囲気異なっていた。

警視庁と、その正面に位置する、ドイツの建築家ヘルマン・エン

デ、ヴィルヘルム・ベックマンが共に設計した煉瓦造りのネオバロック様式が特徴的な司法省と、同じ様式の巨大な円形の屋根が印象に残る大審院のある区画の、すぐ南に位置するのが……

通称「赤煉瓦」

ジョサイア・コンドルが設計した海軍の軍政と軍令を司る中枢、海軍省庁舎である。

この一帯だけは、さながら欧州の大都市と見紛うばかりの様相であり、桜田門から延びる大通りは、実に幅二十メートルという、この時代にしてみれば破格の広さであり、戦車も余裕で動き回れるほどである。

真夜中にも拘わらず、海軍省からは煌々と明かりが零れ、多くの人間が中に残っている事を示していた。

最重要案件を取り決める海軍将官会議……海軍のトップが夜を徹して一同に介しているため、省部いずれの署員も帰る訳にもいかず居残っている状態であり、さながら大作戦発動前夜とも言うべき雰囲気醸し出していた。

戒厳令下、明かりが点いているのは不自然であるのだが、戒厳そのものが仕組まれているが故に、意図的に海軍省には届いていなかった。これも裏で握り潰されていたせいなのだが、陸軍と海軍、両軍に内通者がいた事が、事態をより複雑にしていたのである。

その明かりが見える海軍省の正面に到達した陸軍部隊は、海軍省のある区画の南端まで移動し、東側から移動してきた部隊と合流、海軍大臣公邸を含む敷地内は、二重の人垣によって完全に封鎖され、人っ子一人、猫一匹通さぬ完全な包囲が完成し、海軍創設以来の最大の窮地を迎える事となる。

時刻 三三

海軍省に戦慄が走った。

第一声は裏門の警備に当たっていた、憲兵からの報告だった。

「陸軍部隊、本省を包囲！」

続けて正面玄関からも同様の報告が入り、海軍省の中はにわかに喧騒の色を帯び始める。

「一体何事だ？ 騒々しい……」

会議室内にも聞こえてくる騒ぎを耳にして、艦政本部長岩村は討議の主題に上がった、新たな建艦計画（八八艦隊計画）への具現化へ向けて、意見を述べようとした矢先の事であり、露骨に嫌な表情を騒ぎのする方へと向ける。

会議に参加しているメンバーも、同じような仕種を見せる中、列席していた軍令部副官の少佐が「自分が」と席を立ち、様子を見るために会議室から出ようとした時、会議室の扉が勢いよく開け放たれ、参謀飾緒をつけた少佐が走り込むように入って来た。

「何事か！？ 今は会議中である、謹まないか！」

副官は大声で注意したが、息を切らした局員はそれに構う事なく、一同に聞こえるように報告する。

「ほ、報告！ 陸軍部隊蜂起、ここは包囲されています！」

ガタガタと、一斉に席を立つ音が会議室内に響くき、席を立つ全員に狼狽の色が浮かぶ。いや、内二名は「やはり」といった雰囲気が見られたのだが。

「陸軍が何の用があると言うのだ？」

航空本部長片桐中將は、至極まっとうな疑問を口にした。

「それで敵の兵力はいかほどか？」

加藤が更に報告を促す。

「は、戦車を含むおよそ二個大隊。後続部隊がいる可能性がありますので、詳細は不明です」

「少なく見積もっても、二個大隊以上か。かなりの数を集めて来たな……」

加藤が溜め息を吐きながら、そうつぶやく。

（やっと総長になれたかと思えば、この騒ぎか。天に嫌われているようだな、俺は……）
と心の中で自嘲した。

「しかし、この状況下では、周囲広域を抑えられている可能性は大であると予測致します。規模は恐らく師団規模に上るのではなからうかと……」

突然、状況を細かく話したのは、今まであまり口を開かなかった、海軍次官沢本頼雄中將であった。

「ほう…、知っているような口ぶりだな？」

沢本が口にした内容を聞き漏らす事なく、加藤は問い質す。

疑惑の視線が一斉に沢本へと向けられ、口にした本人は一瞬焦りの表情を浮かべたが、それを打ち消し、静かに回答した。

「この程度の兵力だけで事を起こそうとするなど、無謀極まりないという単純な予測、です。」

陸軍の意図は不明ですが、海軍省だけを包囲しただけでは、あまりにも稚拙。近くには一大基地である横須賀鎮守府もあり、これを無視しての蜂起はありえないと判断いたします」

やや、困惑の色が見えたが尤もらしい自分の考えを述べた沢本に對して、次長伊藤整一中將も同意した。

「色々と腑に落ちない点がありますが、ここ以外にも手が回っていると考えるのが自然ですな。」

ところで古賀長官、その横須賀鎮守府で動員可能な陸戦隊はありましたでしょうか？」

伊藤に問い掛けられた横鎮長官古賀峯一大将は、

「南方とマーシャル、ウエークに派遣したばかりで、一個大隊がせいぜいだ。期待はできんぞ。まあ、自衛するぶんにはおいそれとは抜かせんがな」

と答える。

横須賀は先程、沢本次官が述べたように東日本最大の海軍基地であり、陸戦隊及び警備隊が常駐、航空基地も備え、哨戒艦、砲艦も多数在泊する。

「近藤中将の第二艦隊を呼んでは……」

怖ず怖ずと伊藤が進言する。多少なりとも威嚇には使えよう。

「しかし、ドック入りしたばかりの艦がほとんど。使えるとは、とても……」

そう伊藤の同期である岡が反論した。実際、稼動可能な艦は非常に少ない。

連合艦隊が健在であつたならば、このような事にはならなかっただろう。

戦艦が一隻でもあつたならば、と思わずにはいらなかった。単艦でも数個師団に匹敵する火力である。それが射程内に存在しているだけで、心理的影響は計り知れない。

「会議の途中でも言ったと思うが……」

思わせぶりの口調で加藤が再び口を開くと、

「使えるものは使うしかあるまい」

贅沢を言っても、ないものはない以上、虚仮威しでも構わないといった考えが浮かんでいる。

「連合艦隊及び各方面に緊急信。「陸軍に反乱の動きあり、非常事態である」とな。第二艦隊も東京湾に急行させよ」

「ハッ！」

加藤の命に従い、局員は敬礼して会議室を飛び出していく。残された面々は、混乱の渦中にある。当事者でありながら、事態が把握できないままであった。

（嵌められたか……。我々をダシに使いおったな……）

一部の事情を知る岡は、内心でそう吐き捨てた。間違はなく石川が裏で糸を引いている。自らは被害を受ける事のない安全地帯にしながら、全てを仕組み高みの見物を決め込むなど、腹の立つ話であるが、ただなされるがまま、事態は刻一刻と悪化しているようにしか見えない。

（まさか、我々を餌にして、東条一派と共倒れにさせるつもりではあるまいか……）

岡は疑心暗鬼に駆られていた。もし、それが事実であるならば、なんとしても阻止せねばならない。

「どうしたと言っただ、岡軍務局長？」

唐突に声を掛けられ、岡はハッと現実に取り戻される。声の主は古賀大将であった。

「想定外の出来事であるとは言え、思考停止はいかんな」

昼は自分が思考停止状態だったがな、と心の中で一人ごちているのは感づかれないように装っていたのではあったが。

「いえ、そのような事は……」

言葉を濁しながら岡は答える。言えるはずがない、言ってしまう

ば海軍の引責問題に発展し、陸軍に吸収隷属させられてしまう。今ここを囲んでいる陸軍部隊も、その確信を持った中枢の者達の差し金であるのは、疑いようもない。

（これはいかん、これはいかん……）

焦りを隠しきれない岡は、髪の毛のない坊主頭を掻きむしりながら、一人右往左往を始める。

明らかに不審な動きをする岡と、落ち着いた様子の次官沢本の、対比を加藤は興味深い目で見ていた。

時刻〇四〇〇

日本本土の東、五百哩東の洋上。

東の空がほんのうつすらと色を帯びはじめる中、多数の艦艇を従えた巨艦が、波を掻き分けながら西へと進んでいた。

連合艦隊

第一戦隊旗艦武蔵

「海軍省からの緊急信、だと？ 間違いはないのか？」

真夜中に寝ているところを叩き起こされた、現在の連合艦隊の事実上の責任者である、第一艦隊司令長官高須四郎海軍中将は、さすがに機嫌が悪そうに見えたが、第一艦橋に上がるとその表情を消し、通信参謀に再度の報告をうながした。

「は、間違いございません。連合艦隊のみならず、全海軍部隊に通達されている模様。つい先程、横須賀鎮守府より入電があり、第一艦隊が出撃準備中であるとの事です」

相変わらず仕事が早い近藤さん、なんて事を言っている場合ではないな。

「直ちに艦隊を三分する。小沢提督の一航艦は先行させ、井上提督の第四艦隊は輸送船団の護衛に付かせよ。第一、第二戦隊は我に続け。海軍の危機である、各員、全力を挙げ職務を遂行せよ」

高須の号令一下、各艦は一斉に増速を開始する。

武蔵も主機のタービンが唸りを上げ、加速していく。

しばらくすると、その武蔵を追い抜いていく艦艇群がある。一航艦で最も優速の空母蒼龍、飛龍、瑞鶴の三艦が、三四ktの高速を発揮して、護衛の駆逐艦と共に最前列へ躍り出たのである。

時刻〇四一五

横須賀鎮守府

「内地に帰還し、羽根を休めるかと思い乗組員を降ろした矢先にか……」

鎮守府内の高級将官用に宛がわれていた私室で、海軍省が襲われているとの報告を受け、第二艦隊を預かる近藤信竹海軍中将は、急ぎ支度を整え棧橋へと向かっている。

「まったくですな。羽目を外して街に繰り出した乗員もいるはずですから、乗り込みが完了するまでは時間がかかるでしょう」

参謀長白石万隆海軍少将が近藤の脇に付き従いながら、同意する。まさか、帰還したその日の深夜、明け方近くに非常召集がかかるなど、誰が予想できるであろうか。

二人と第二艦隊参謀の二人の四人が、足早に移動している周囲を、バタバタと駆け足で乗員が追い抜いていく。

（慌てるのも当然か。特に藤田君も災難だな、古賀さんが不在である中、責任を負わねばならん立場になるなどと）

名前が挙がったのは、鎮守府参謀長藤田利三郎海軍少将の事であ

り、突然の長官交代に始まり、今日の古賀の不在から反乱騒ぎに巻き込まれ、多忙の極みで最も混乱しているであろう人物を思い浮かべた。

現在も、陸戦隊と警備隊の配備から、航空部隊の配備にいたるまでの全てを、司令長官代行として指揮を執っている。

数分後、慌ただしい様子で係留されている重巡衣笠へと向かう。

山本五十六を護送してきた艦である。

「近藤長官、列びに二艦隊司令部、乗艦されました」

副長宮崎房雄中佐が、艦橋に急いだ様子で報告に上がる。

「了解した。乗員の乗り込みは完了したのか？」

艦長沢正雄大佐が答え、状況を聞き返す。

「まだ若干名遅れておりますが、如何いたしましょうか？」

これだけの状況である。遅れるのもやむなし、ではあったのだが、

「仕方ないか」。遅れた者は罰として、飯三日間抜きだ。軍人たる者はいついかなる時も、対応できねばならん」

とぴしゃりと言つてのける。精神注入棒と鉄拳制裁と、どれがマシなのかよくわからない罰である。とにかく厳しい。まあ、私的制裁を防止する意味も込められていたが。

「艦長、しばらく厄介になるぞ。よろしく頼む」

近藤が艦橋に入ると、敬礼をしながら挨拶をする。

「ハ、光栄であります」

直立不動の姿勢で艦長は敬礼する。副長以下、司令部要員も一斉に敬礼する。

衣笠はやや旧式の重巡であり、艦隊司令部が詰めるには窮屈な艦橋で、今は損傷修理のために入渠している高雄型に比べて、著しい

運用能力不足であるのだが、今現在では最も有力な攻撃力を持つ艦艇である。

正8in砲連装三門、これが現時点において第二艦隊が持つ最大の火炮であり、艦隊編成史上、ここまで火力が落ち込んだ例はない

……

「長波、及び清波より入電！ 二十分後に横須賀沖にて合流可能、我浦賀より出港す〇四一五」

通信兵からの報告が入り、わずかばかり安堵のため息が漏れる。

「少しでも戦力があるのはありがたい事です。まあ、撃たずに越した事はありませんが……」

「そうは言ってもな、艦隊とは名乗っているが、戦力は水雷戦隊より遥かに劣る張り子の虎だ…。重巡一隻と駆逐艦三隻でいかほどになるうか……」

今のところ、出港できる艦は第一艦隊より回されていた衣笠と、第二水雷戦隊唯一の稼働艦、雪風のたったの二艦しかおらず、一個駆逐隊以下の戦力に過ぎない。

浦賀から来てくれる二艦は、夕雲型六番艦長波、八番艦清波であり、浦賀船渠内にあった艦であるのだが、長波はまだ実戦使用に耐えられる配属間近の状態であったが、清波は儀装が完了していない為、とても使いものになる代物ではなかったが、進水はしていたため、急遽の派遣となる。

「しかし、早過ぎる対応だが、一体誰の指示によるものか？」

近藤は不思議に思った。ここまで迅速な判断を下せる者がいたのだろうか？

「は、連絡を受けた堀社長の指示だそうです」

通信参謀がそれに答える。

（堀：、ああ、堀さんであるのならば納得がいく話しだ）
近藤は合点がいった。

大日本兵器と名を変えた浦賀船渠の現在の取締役社長は、山本五十六、嶋田繁太郎と同期である、天才と謳われた堀悌吉予備役海軍中將であり、艦隊派が主導した、いわゆる大角人事の煽りを受けて更迭されたのち、巡り巡ってここに落ち着いたいきさつがあった。

とにもかくにも、増援は第二艦隊にとっては望むところであり、後方支援は心許ないものではあったが、このような思い掛けぬ後押しもあり、衣笠、雪風の二艦は横須賀を出港。

沖合で長波、清波の二艦と会合。一路東京中枢を射程に納めるべく、北上を開始したのであった。

同時刻

「小倉からの回答は？」

「はあ、それがなんとも煮え切らない態度でございまして、向こうも事態を把握していないのではと……」

ダンツと、机を強く殴りつける音が部屋の中に響き渡る。椅子に座った男は、こめかみに青筋を浮かび上がらせて、大声を張り上げる。

「わからんとは何事だ！ 全て糞共の仕業ではないか！ 責任もとれんのか、馬鹿共め……」

呉鎮守府司令長官室

罵声の一人舞台ができあがっていた。声の主は呉鎮守府司令長官、陸軍批判の急先鋒、豊田副武海軍大将である。

海軍随一の陸軍嫌いであり、その発言は苛烈を極めるもので、陸軍側にも承知の事実となっている。

今回の一件の報告を聞き及んだ豊田は激怒し、直ちに確認のために中国、四国、九州の陸軍部隊を統括する西部軍司令部に連絡を入れた。呉鎮守府としては、陸軍の対応次第では一戦交えるのも辞さない覚悟であった。もし一部部隊のみの独断であるならば、協力を要請しこれを鎮圧に向かわねばならない。

しかし、西部軍司令部からの回答は、事態を静観するという実に不明瞭なものであり、逆に呉鎮守府としては身動きが取れない状況へと陥る。

西部軍司令部としても、状況がつかめず判断に苦慮している内情があり、陸軍中枢の海軍との全面衝突を避ける思惑が、奇妙な形で形を成していく。

「しかし、陸戦隊を動員しようにも、このまま派遣した隙を襲われましたら、無抵抗のまま占拠されかねません。加えて、五師管区内に動きがあるとの不明確な情報もございます…」

呉鎮守府参謀長中島寅彦海軍少将が沈鬱な表情で報告を続ける。一応の召集が掛けられるのは、自然な流れだ。問題はどちら側の意思によって動くか？恐らく彼ら自身も分かつてはいながら、動かずにいるのだろう。

疑心に駆られ、焦って事を急いでは取り返しがつかない……。難しい判断になる。

そう考えながら、怒り心頭の丸頭の上司を見つめる。判断を下すのは貴方なのだから……

しばらくの沈黙の後…

「いつもいつも、面倒を起こすのは能無しの陸助ばかりだ！」

悪態をつき、机を再び殴りつけながら、豊田は勢いよく席を立つと、参謀長に背を向けながら

「陸戦隊は即応体制で待機、馬鹿共の動きに注意せよ！」

「は、各部隊に動かぬよう通達いたします」

敬礼し、参謀長は長官室を急いで出て行く。とにかく情報量がありにも少ない、下手に動くべきではないと言う点では、二人は一致する。

一人となった豊田が、部屋の備品に八つ当たりをしていたのに気付く人間は、この時はいなかった。

何もできないのが口惜しい。その思いが体を動かしたただけなのだが、外観に似合わず実は狭量、との陰口が叩かれるようになるものもしばらく後の話である…。

時刻 五

陸軍宇野大隊が、海軍省を包囲してから一時間が経過した。

陸軍側から、海軍大臣更迭による内閣倒閣及び国家転覆の疑いに關しての釈明、そこに至るまでの経緯、海軍大臣更迭の撤回、事態解決までの海軍の機能停止と指揮権の陸軍への移譲、という過酷な要求が提示されるに至る。

「何を馬鹿な事を！ 憲法違反、統帥権干犯だ！」

「話しにならん！ 首相の東条か、総長の杉山を連れてこい！」
伝令が受け取った書面の内容を知った海軍省局員からは、怒りの声があがった。

局員達はそろそろと海軍首脳陣が集まる会議室へと向かっていく。

会議室に集まる海軍首脳陣にも、その内容が伝えられると一斉に憤慨の声があがる。当然の話である。

「しかし、思い切った要求を突き付けてきましたな。まさか、指揮権の剥奪まで言い出すとは……」
と航本片桐中将。

「あれだけ兵を連れて来た以上は、だいたいの予想はついてはいましたが、いやはや予想を超えておりました、な……」
次官沢本が頭をかきながら、独り言に近いような感じに応える。

（これではどちらに転んでも、事態打開には程遠い……。要求を呑むのも、知らぬ存ぜぬを通して突入でもされた日には……）

先程から必死に思考を重ねているのは、軍務局の岡である。
せめて他に気取られぬように、外部と接点が持てれば、あるいは突破口となるかもしれない。このまま座視して突入を許せば、各部隊に対しての統率が不可能となり、万が一戦闘が生起した場合、国を割る血みどろの内戦に発展しかねない。

要求を呑んだとしても、各指揮官が承服するはずもなく、やはり衝突をうみかねない。しかも非があるように見えるのは、明らかにこちら側であるし、事態が明るみとなれば、やはり勝ち目はない……

「赤煉瓦を枕に、全員討ち死にでもするか？」

総長加藤が唐突に口を開く。一同が加藤に対して、一斉に視線を向ける。

「俺は知らぬ事であるが、嶋田が更迭された理由はなんだったのだ。永野さんは体調が思わしくないと聞いていたが、関係はあるのか？」

当然たる疑問。加藤にとって、海相更迭はここに來た半日前に聞いた突然の事であり、誰も理由を知らないとの事であつたため、軍令部副官により、海軍将官会議議長の大役を伏見宮より任された事を伝えられ、それに従い会議を主催したに過ぎない。

加藤の質問に、ほぼ全ての事情を知る古賀、沢本、伊藤、岡の四名は言葉を濁した。

「それは我々も氣になっていた。永野総長が辞表を出したのは三日前、百武大將が予備役になつた以上、最先任の加藤大將が就任するのは当然の流れだ。しかし、嶋田海相は昨日の今日、いきなりの話し。一体何があつたと言うのだ……？」

わずかばかりの沈黙。最初に口を開いたのは、次官沢本であつた。

「事の発端は先のハワイ作戦のおり、山本GF長官の独断による米本土奇襲攻撃が敢行された事です。

元々、大海令によつて発令された作戦は、ハワイを襲撃し太平洋艦隊と在ハワイ航空戦力の撃滅にあり、別働部隊として第五艦隊を北方より派遣し、奇襲を加える事でありましたが、この奇襲部隊を独断で米西海岸サンフランシスコに向かわせたのです。

軍令部はやむなく、作戦内容そのものを修正し、全てを折り込み済みの既成事実であるように装い、箱口令を敷いて握り潰しましたが、その事を伏見宮殿下がお怒りになり、永野総長は責任をとつて即座に辞任。しかし、それで収まりがつかはずもなく、連合艦隊司令長官に軍政面で責任を負うべき立場である嶋田大將に対し、殿下は辞任を命じられ、本人もやむを得ず承服されました。しかし……」

沢本はここで一旦区切りをつける。続いて口を開いたのは古賀で

ある。

「その嶋田大将に命じられ、帰還した山本大将を拘束したのは私ですが、時間は昨日の午後の事。これはまだ公になってはいないため、どのようにして陸軍が知ったのか、しかも、これほど早く部隊の配置を完了させたのか。どう考えても……」

ここまで言いかけて、古賀は口をつぐんだ。憶測で責任ある者が口を開くべきではない。ここまでの全てに伏見宮の影がついてまわる事に、言いようの不安が募る。

だが……

（海軍内で陸軍側を黙らせられるのは、この事態を引き起こした殿下が直接交渉を行う他ない）

他の者では押し切られる公算が高い。元帥であり、皇族である伏見宮の言に抗う不敬な者は、まずいない。

「古賀君は、何か良案があるのか？　あるのであれば言ってもらいたい」

加藤からの催促もあり、古賀は伏見宮を交渉の席に据える案を提案する。

しかし、それは苦肉の策であるとともに最後の切り札である。陸軍最高位の陸軍大臣東条と、部隊の移動を認めた参謀総長杉山を交えた、トップ会談を意味するが、これはこれで難しい。包囲している部隊長は、海軍が何かを企てているものと決めつけており、ここまでの事をした以上は、陸軍側も自分達が不利になる条件を認めるはずがないのである……

「東条よ、それはまことであるのか？」

「はい、疑い無い事は明白、既に部隊を派遣し事態解決を図つて
ございます」

場所は宮城。東条は参内し、今回の一件に關しての奏上を行つて
いた。

相手は言つまでもない事ではあるが、第二百二十四代天皇裕仁その
人である。

「しかし、尚早に過ぎるのではないのか？ 海軍が倒閣を図るな
ど何かの間違いであろう」

そのように注意を促す。海軍が政治に直接の影響を与えるのは、
軍縮条約時代の統帥権干犯問題以来となる。それ以後、問題を引き
起こした側であつたはずの艦隊派も姿を消し、政治的に干渉が行わ
れる事はなかつた。

「いえ、海軍は先の作戦以来全てを軍機の一点張り、加え、戦争
終結しておらぬ状況下で、政府及び陸軍と綿密な連携が必要である
にも拘わらず、海相更迭を行うなど背徳行為に他なりませぬ。更迭
を行うのであれば明確なる理由を示し、政府、統帥部双方が納得が
いくようにするべきと心得ます」

東条は澀む事なく、御下問に応える。こうなつてしまつた以上は、
自らの行動に誤り無しと信じ、陛下に事が及ばぬよう誠心誠意尽く
す他なし…、東条は覚悟を決めていた。

東条の眼には、その覚悟が浮かんでいた。

「汝がそこまで言うのであれば、朕は何も言うまい。本来は君臨すれども統治せず、が憲法上の規定である。しかし、陸海軍が相撃つ事、朕は認可せぬ。熟慮せよ……」

そこまで言つて席を立つ。東条は最敬礼の姿勢をとり、深々と頭を下げる。

あまりにも深い、警告の念が押されていた。

謁見を終えた天皇を三人の人物達が迎える。侍従武官長蓮沼蕃陸軍大将、海軍侍従武官鮫島具重海軍中将、そして、陸軍侍従武官山縣有光陸軍大佐である。侍従武官は天皇の側近として、軍事に関する連絡、奏上の取り纏めを行う役職である。武官長一名、武官陸海軍から一名ずつ任命される。

「蓮沼よ、東条からの奏上、如何するべきと思つ？」

問い掛けられた武官長蓮沼は、畏まって

「奏上が真であるならば、海軍に対し断固たる措置をとるべきであると思考いたします」と応える。

「お待ち下さい。海軍はそのような政治的野心を持たぬ事が鉄則。今回の件は何かの誤りであると信じております……」

と慌てた様子で意見を述べるのは、海軍武官鮫島である。

「鮫島中将、陛下に対し失礼である。慎まれよ」

蓮沼はその様子を見咎め、窘める。

「よい。今はそのような事を論じている場合ではない。時に山縣よ」

陸軍武官有光にその視線を送る。

「ハッ！」

「昨日総長に就任した叔父殿の事、心配であらう」

天皇は加藤の身をあんじた。加藤自身、海軍侍従武官も務めており、何より加藤の義父友三郎には、個人的に大きな思い入れがあった。大正一二年八月二四日、加藤友三郎は首相在任中に病没。それに伴い、摂政宮（当時）は箱根に向かう予定であったが、それを取やめた矢先の九月一日、関東大震災が発生する。箱根は甚大な被害を受け、自身は九死に一生をえる形となり（皇族で死者も出ている）、この偶然を、加藤が守ってくれたと感謝の念を抱いている。

奇しくも、友三郎首相在任から関東大震災を経て一年は、加藤隆義が困難な時期を三年に渡り侍従武官として、天皇を補佐しており、与えた影響は大きい。

「ただただ、無事を願うばかりであります……」

有光は短く答える。何と言えはよいのか分からない。

「……有光よ、一つ頼まれてはくれぬか？」

天皇からの直々の願いに、有光は驚きの表情を浮かべた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1220m/>

混沌たる太平洋 帝國存続への道

2011年11月29日19時58分発行